飯倉D遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第440集

1 9 9 5

福岡市教育委員会

お願い

以下の遺物番号が欠番となります。よろしくご訂正下さい。

92 (図版14-92)

174 (図版20-174)

64.65 (図版13-64.65)

以上の遺物は、別個体と接合他の理由により、遺物番号とともに抹消いたします。

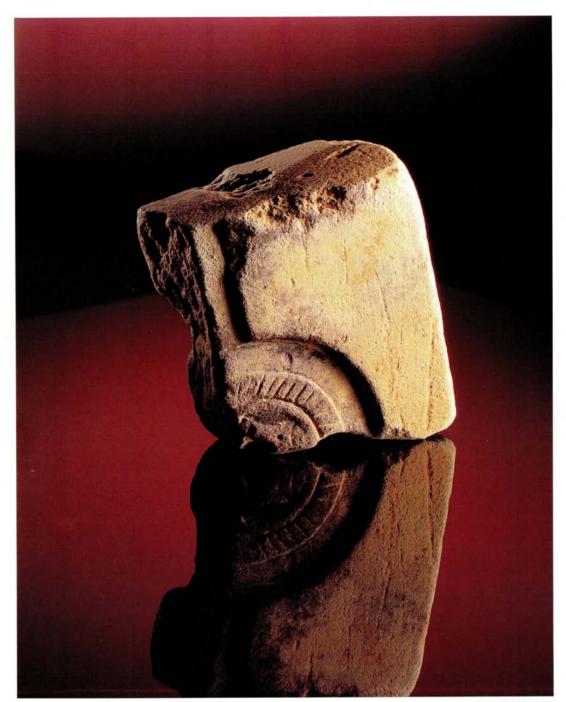
飯倉D遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第440集



1 9 9 5

福岡市教育委員会



銅鏡鋳型



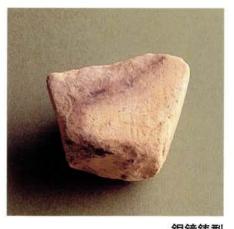
ビーズ玉



SC246竪穴住居跡







銅鏡鋳型

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市には、多くの埋蔵文化財が分布しています。近年、本市では都市基盤整備事業が進み、各種の開発が市内全域で行われていますが、これら各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための事前の発掘調査を行い文化財の保護に努めています。

本書もこうした遺跡の一つで、城南区七隈三丁目844~847の共同住宅建設に伴って発掘調査 を実施しました飯倉D遺跡の調査報告書です。

今回の調査では、弥生時代と古墳時代の竪穴住居跡からなる集落が発見され、銅鏡鋳型が 出土するなど貴重な成果をあげることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理報告書まで費用負担をはじめ多くのご協力を賜りました北野善子氏・橋本郁子氏・アーサーホーム株式会社および株式会社新井組関係者各位、調査から報告書作成まで実施いただきました大谷女子大学の中村浩教授に対して感謝の意を表するものです。

なお本書が文化財理解の一助となるとともに、学術研究をはじめ広く活用されることを願 うものです。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会 教育長 尾 花

剛

例 言

- 1. 本書は福岡県福岡市城南区七隈に所在する、飯倉D遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は、平成4年8月12日に試掘調査を行い、本調査を平成6年2月2日から平成6年4月23日まで実施した。また、整理作業は平成7年3月31日まで行った。
- 3. 調査費用は北野善子氏・橋本郁子氏・アーサーホーム株式会社が負担し、(株)新井組の協力を得た。
- 4. 調査は、福岡市教育委員会が事業主体となり、大谷女子大学教授中村浩を主任調査員とする飯倉遺跡調査会を組織し実施した。調査の参加者は後に記述する。
- 5. 本書の執筆は文末にその名を記した参加者が分担し、中村と池田榮史が編集した。 なお、実測図の作成は、参加調査員・調査補助員各氏により、写真撮影は阿南辰秀・伊藤慎二氏の協力を得た。自然科学分析の調査は(株)夏原技研に委託し行った。
- 6. 調査の実施にあたっては、多くの方々および機関に有形無形のご指導・ご援助を賜った。 記してここに厚く感謝する次第である。

目 次

序、例言
第1章 調査経過
1. 調査に至る経過
2. 調査体制
3. 調査の経過
4. 日 誌 抄
5. 遺物整理の経過
第2章 遺 跡25
1. 調査の方法と区画
2. 遺構の分布と層位
3. 遺 構 各 説
A. 竪穴住居跡
B. 溝 跡
C. その他の遺構
第3章 遺 物
1. 概 観
2. 遺構別出土遺物各説(弥生土器・土師器、須恵器)
3. 石 器
4. 鉄 器
5. その他の鉄関係遺物
第4章 考 察
1. 遺 構
(1) 弥生時代から庄内式平行期の遺構について
(2) 古墳時代後半以降の遺構について
2. 遺 物
(1) 弥生・庄内式平行期の土器について
(2) 須恵器について
(3) 石器について
(4) その他の遺物

付論 1. 飯倉 D遺跡出土の鋳型について

東京国立博物館 井上洋一

付論 2. 飯倉D遺跡出土の遺物岩石

西南学院大学名誉教授 唐木田 芳 文

付論3. 飯倉D遺跡の花粉化石

付論 4. 飯倉D遺跡のプラント・オパール

付論 5. 飯倉D遺跡出土炭化材の樹種同定

付論 6. 飯倉D遺跡の炭化種実

付論 7. 飯倉D遺跡の土壌の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

付論 8. 飯倉 D 遺跡に堆積する粘土の化学特性

奈良教育大学 三 辻 利 一

付論 9. 飯倉 D遺跡出土弥生土器、土師器、須恵器の蛍光 X 線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

付論10. 飯倉D遺跡における考古地磁気年代推定

株式会社 夏 原 技 研

付論11. 飯倉D遺跡出土の銅鏡鋳型をめぐって

西南学院大学文学部 高 倉 洋 彰

図 版 目 次

- カラー図版1 銅鏡鋳型、ビーズ玉
- カラー図版 2 SC246竪穴住居跡、銅鏡鋳型
- 図版 1 遺構実測図 SC060-1、2、3竪穴住居跡遺構実測図
- 図版 2 遺構実測図 SC074-1、2竪穴住居跡 SX842、843遺構実測図
- 図版 3 遺構実測図 SС135、136竪穴住居跡遺構実測図
- 図版 4 遺構実測図 SС144-1、2竪穴住居跡遺構実測図
- 図版 5 遺構実測図 SC708、709、782竪穴住居跡遺構実測図
- 図版 6 遺構実測図 SC935、936、937、938、939竪穴住居跡遺構実測図
- 図版7 遺構実測図 SX121竪穴遺構実測図
- 図版 8 遺構実測図 SX427竪穴遺構実測図
- 図版 9 遺物実測図 SC074、SD016、019、023、SX071、16区出土遺物(弥生・土師器)
- 図版10 遺物実測図 SX121、150、SD122、SC136、144、排土を出土遺物(弥生・土師器)
- 図版11 遺物実測図 SC074出土遺物(弥生・土師器)
- 図版12 遺物実測図 SC060、074、865-4、SD010、SX022出土遺物(弥生・ 土師器)
- 図版13 遺物実測図 SC001、SD010、SX121、427出土遺物(弥生・土師器)
- 図版14 遺物実測図 SC865、935、SX420、423、651、662、748、770、801、837、842、867出土遺物(弥生・土師器)
- 図版15 遺物実測図 SC246、246-1、246-3出土遺物(弥生・土師器)
- 図版16 遺物実測図 SD010出土遺物(弥生・土師器)
- 図版17 遺物実測図 SD010出土遺物(弥生・土師器)
- 図版18 遺物実測図 SD023出土遺物(弥生・土師器)
- 図版19 遺物実測図 SC060、SD016出土遺物(弥生・土師器)
- 図版20 遺物実測図 SC708出土遺物(弥生・土師器)
- 図版21 遺物実測図 SC708出土遺物(弥生・土師器)
- 図版22 遺物実測図 SC931、931-1、2、939出土遺物(弥生・土師器、須恵器)
- 図版23 遺物実測図 SC936、SD940、SX553、874、883、13区出土遺物 (弥生・土師器、須恵器)
- 図版24 遺物実測図 SC144、944、SD942、SX121、427、883、東側斜面出 土遺物(須恵器)
- 図版25 遺物実測図 SC001、060、865-4、SD010、217・218出土遺物(弥生・土師器)
- 図版26 遺物実測図 SC176、244、246、246-3、931、931-1出土遺物(弥生・土師器)

図版27 遺物実測図 SC136、708、SD010、ST270出土遺物(弥生・土師器)

図版28 遺物実測図 SC887、931、931-1、936、SD942、SX401出土遺物 (須恵器)

図版29 遺物実測図 SC001、074、136、SD217、273、SX679、741、9 区出土遺物(石器)

図版30 遺物実測図 SC060、135出土遺物(石器)

図版31 遺物実測図 SC135、246-1、709、SD010、217、SX741出土遺物 (石器)

図版32 遺物実測図 SC001、060、060-2、246-1、708、865-1、SD1 22、SX073、687、793、883、13区出土遺物(石器)

図版33 遺物実測図 SC060-2、136、144-1、246、931、935、SD942、SX054、663、796出土遺物(石器)

図版34 遺物実測図 SC135、136、SX627出土遺物(石器)

図版35 遺構写真 遺跡全景

図版36 遺構写真 遺跡全景西側斜面

図版37 遺構写真 遺跡東側斜面

図版38 遺構写真 14区全景(南から、西から)

図版39 遺構写真 遺跡南西斜面

図版40 遺構写真 SС570竪穴住居跡近景、全景

図版41 遺構写真 SC708、709、782竪穴住居跡

図版42 遺構写真 SC708竪穴住居遺物出土状況

図版43 遺構写真 SC710竪穴住居跡及び遺物出土状態

図版44 遺構写真 SС144竪穴住居跡全景

図版45 遺構写真 SC144竪穴住居跡及び部分

図版46 遺構写真 SC135、136竪穴住居跡及び遺物出土状態

図版47 遺構写真 SC176竪穴住居跡全景

図版48 遺構写真 SX661、663土坑、SU691貯蔵穴

図版49 遺構写真 SX423焼成土坑、たちわり状態

図版50 遺構写真 SX460焼成土坑、たちわり状態

図版51 遺構写真 SB951、952掘立柱建物

図版52 遺構写真 SX121竪穴遺構

図版53 遺構写真 SX121竪穴遺構全景、細部

図版54 遺構写真 SX427竪穴遺構

図版55 遺構写真 SX427竪穴遺構全景、細部

図版56 遺構写真 調查域北側斜面

図版57 遺構写真 SC246竪穴住居跡全景

図版58 遺構写真 SС246竪穴住居跡全景、銅鏡鋳型出土状態

図版59 遺構写真 SC246竪穴住居跡細部

図版60 遺構写真 SC246竪穴住居跡全景及び細部

図版61 遺構写真 SD217、218溝全景及び細部

```
図版62 遺構写真 SD122溝全景及び細部
図版63 遺構写真 調査域北側斜面(SC060、074竪穴住居跡他)
図版64 遺構写真 SC060竪穴住居跡及び上層状態
図版65 遺構写真 SC074竪穴住居跡及びたちわり後の状態
図版66 遺構写真 SX842焼成土坑全景及び細部
図版67 遺構写真 SX071焼成土坑全景及び細部
図版68 遺構写真 SX843 焼成土坑全景及び細部
図版69 遺構写真 SC865、873竪穴住居跡
図版70 遺構写真 SC865竪穴住居跡
図版71 遺構写真 SC001竪穴住居跡及び周辺
図版72 遺構写真 SX864焼成土坑、たちわり後
図版73 遺構写真 SX274焼成土坑、たちわり後
図版74 遺構写真 ST270甕棺全景、細部、甕棺除去後
図版75 遺構写真 SD010溝全景、遺物出土状態
図版76 遺構写真
          SC887竪穴住居跡及び周辺
図版77 遺構写真 調査域東斜面(SC889、SD940、935~9)
図版78 遺構写真
          SC935~9竪穴住居跡及び周辺
図版79 遺構写真 SC935竪穴住居跡全景、炭化材検出状態、遺物出土状況
図版80 遺構写真 SC931竪穴住居跡全景
図版81 遺物写真 4、5、7、13、27(弥生・土師器)
図版82 遺物写真
          29、30、31、46、53、54(弥生・土師器)
図版83 遺物写真 55、58、66、67、69、73(弥生·土師器)
図版84 遺物写真
          81、86、115、124、135(弥生・土師器)
図版85 遺物写真 130、136、151(弥生・土師器)
図版86 遺物写真
          152、164、165、169、175(弥生•土師器)
図版87 遺物写真 177、178、179、180、181(弥生·土師器)
図版88 遺物写真
          182、183、185、186、193、195(弥生・土師器、須恵器)
          206、214、242(土師器、須恵器)
図版89 遺物写真
図版90 遺物写真
          117、250、255、261(弥生・土師器)
          265、266、267、268、269(弥生•土師器、須恵器)
図版91 遺物写真
図版92 遺物写真
           301、302、303、304、305、306、307、308(石器)
         309、310、312(石器)
図版93 遺物写真
図版94 遺物写真
           3 1 3、3 1 4、3 1 5 (石器)
          316、317、340(石器)
図版95 遺物写真
          330, 331, 332, 333, 334, 336, 337, 338, 339
図版96 遺物写真
           (石器)
図版97 遺物写真
           3 4 5 (銅鏡鋳型)
図版98 遺物写真
          3 4 5 、 3 4 6 (銅鏡鋳型)
図版99 遺物写真
          3 4 7、 3 5 2、 3 5 3、 3 5 4、 3 5 6 (鉄滓、鉄鏃、鉄釶)
```

図版100 遺物写真 351、350、349、357(鉄鎌、鋤先、鉄斧)

挿 図 目 次

図1	飯倉D遺跡と周辺の遺構	図39	SC708竪穴住居跡及び遺物出土状態
図2	トレンチの状況	図40	SC710竪穴住居跡遺構実測図
図 3	古墳状盛土の状況	図41	SC865-1、2、3、4竪穴住居跡
図 4	測量状況		遺構実測図
図 5	1 4 区調査状況	$\mathbb{Z}42$	SC865竪穴住居跡遺物出土状態及び
図6	古墳状盛土の調査		細部
図7	北東側斜面調査状況	図 43	SC873竪穴住居跡遺構実測図
図8	SX121竪穴遺構調査状況	図 44	SC935竪穴住居跡遺構実測図
図 9	北側斜面調査状況	図 45	SC931竪穴住居跡遺物出土状態
図10	南西斜面調査状況	図 46	SC936、938、944竪穴住居跡
図11	写真撮影状況		遺構実測図
図12	写真撮影打ち合わせ	図 47	調査域東斜面の状況
図13	実測作業状況	図48	SD010溝遺物出土状態
図14	実測状況	図49	SD016溝全景及び遺物出土状態
図15	ラジコンヘリによる航空写真撮影	図50	SD019溝西側セクション遺構実測図
図16	東部域調査状況	図51	SD083溝遺構実測図
図17	現地説明会の状況	図 52	SD940溝遺物出土状況遺構実測図
図18	1 4 区調査状況	図53	ST270甕棺遺構実測図
図19	古墳状盛土調査状況	図54	SX842焼成土坑遺構実測図
図20	古墳北盛土主体部の状況	図55	SX843焼成土坑遺構実測図
図21	SC246竪穴住居跡調査状況	図56	SX867土坑遺構実測図
図 22	調査状況	図57	SX867土坑及び細部
図23	調査状況	図58	SD273出土石錘300遺物実測図
図24	現地説明会	図59	鉄器実測図
図25	調査状況	図60	ふいご羽口286遺物写真
図26	最終地区トレンチの設定	図61	SD942溝出土陶磁器
図 27	フルイの様子	図62	14区出土遺物拓影
図28	調査対象地域区割り設定図	図63	ビーズ玉遺物実測図
2 9	基本層位模式図	図 64	ビーズ玉写真
図30	SC001竪穴住居跡遺物出土状態	図65	銅鏡鋳型片実測図
図31	SC001竪穴住居跡及び遺物出土状態	図66	春日市須玖出土(熊野神社所蔵)銅矛鋳
図32	SC074竪穴住居跡遺物出土状態		型
図33	SC074竪穴住居跡及び遺物出土状態	図67	銅鏡・矛鋳型の石英長石斑岩顕微鏡写真
3 4	SC176竪穴住居跡及び遺物出土状態	図68	角閃石(オパサイト)単斜輝石かんらん
図35	SC246竪穴住居跡調査状況		石武岩ほか顕微鏡写真
図36	SC570竪穴住居跡遺構実測図	図69	飯倉D遺跡の花粉化石
図37	SC708竪穴住居跡床面土器接合状況	図70	飯倉D遺跡の花粉化石
図38	SC708竪穴住居跡及び遺物出土状態	図71	飯倉D遺跡全体図

図72 飯倉D遺跡のプラント・オパール分布図

図73 飯倉遺跡のプラント・オパール

図74 飯倉D遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡

写真

図75 飯倉D遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡

写真

図76 飯倉D遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡

写真

図77 飯倉D遺跡より出土した炭化種実

図78 土壌のRb-Sェ分布図

図79 土壌のK-Ca分布図

図80 土壌のFe、Naの因子

図81-a 焼土AのCuスペクトル

図81-b 土壌のCuスペクトル

図82 粘土のRb-Sェ分布図

図83 粘土のK-Са分布図

図84 粘土のFe、Naの因子

図85 須恵器のRb-Sェ分布図

図86 須恵器のK-Са分布図

図87 土師器のRb-Sェ分布図

図88 土師器のK-Ca分布図

図89 弥生土器のRb-Sェ分布図

図90 弥生土器のK-Са分布図

図91 Fe因子、Na因子の比較

図92 広岡(1977) により西南日本の考古遺跡 焼土の測定から求められた過去2000年間

の地磁気永年変化曲線

図93 各遺構ごとの各試料の残留磁化方向の等

面積投影図

図94 地磁気永年変化曲線と各遺構の平均磁化

方向(黒丸)楕円は誤差角の範囲を示す。

表 目 次

表1-1 地区別及び時期別遺構区分

表1-2 地区別及び時期別遺構区分

表1-3 地区別及び時期別遺構区分

表 2 - 1 遺構別遺物出土量一覧

表 2 - 2 遺構別遺物出土量一覧

表3 鉄滓の重量

表 4 ビーズ玉計測値一覧

表 5 飯倉 D 遺跡産出花粉化石一覧表

表 6 試料 1 g 当たりのオウラント・オパール 個数

夷

表 7 出土炭化材の樹種

表8 土壌の分析値

表 9 粘土の分析値

表10 飯倉D遺跡出土土器の分析値

表11-1 熱残留磁気測定結果

表11-2 熱残留磁気測定結果

表12 考古地磁気測定結果

表13 考古地磁気年代推定結果

第1章 調査経過

1. 調査に至る経過

城南区七隈三丁目844~847番地内に、アーサーホーム株式会社(以下原因者とする)によって、共同住宅の建設が計画され、建設が具体化した平成5年2月3日に開発計画事前審査願が建築局宅地指導課に再提出された。教育委員会埋蔵文化財課(以下埋文課とする)では、共同住宅計画地は飯倉D遺跡内に位置していること、現在が山林の状態であることから遺跡が良好に遺存している可能性が高いとして、遺構遺存状態を把握するための試掘調査が必要であると開発事前審査会で決定した。この決定をうけ地権者の北野善子氏・橋本郁子氏と原因者および七隈三丁目町内会(以下町内会とする)と埋文課は、協議を重ね試掘調査を8月に行うことを決めた。

試掘調査は現地に7本の試掘溝を設定し、平成4年8月12日におこなった。その結果、東斜面には5~8基の古墳、北から西斜面には竪穴住居跡、南斜面には弥生時代甕棺墓の所在が予想された。

試掘調査の結果を受け、埋文課は、計画地全域に甕棺墓・竪穴住居址・古墳が所在するため、開発にあたり計画変更による現状保存、或は計画地全域の記録保存のための発掘調査が必要であると決定した。以後、原因者と埋文課は協議を行なったが、現状での保存は困難であり、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

以上の調査決定をうけ、埋文課は原因者および町内会と調査費用および調査時期等について協議を重ねた。埋文課は、業務が多いことから平成6年4月調査着手を希望したが、原因者および町内会では早期着手を希望され、調査時期が決定できなかった。

このため原因者は、外部への調査委託を検討され、大谷女子大学の中村浩先生と交渉をもたれた。 これを受け、原因者と中村先生と埋文課は調査方法・遺物や記録類の取扱いなどについて協議を行い、 中村浩氏に調査協力をお願いすることに決定した。

本調査は、調査契約が成立し、調査事務所など条件整備完了後、平成6年2月から弥生時代・古墳 時代の様相把握を目的として実施した。

遺跡調査番号	9 3 6 0	遺跡番号	IKR-D	分布地図番号	73 - A - 4		
調査地地籍 城南区七隈三丁日844~947							
開発面積	7 2 1 2 m²	調査対象面積	7 2 1 2 m²	調査実施面積	6 8 0 0 m²		
調査期間	1994年2月2日~1994年4月23日						

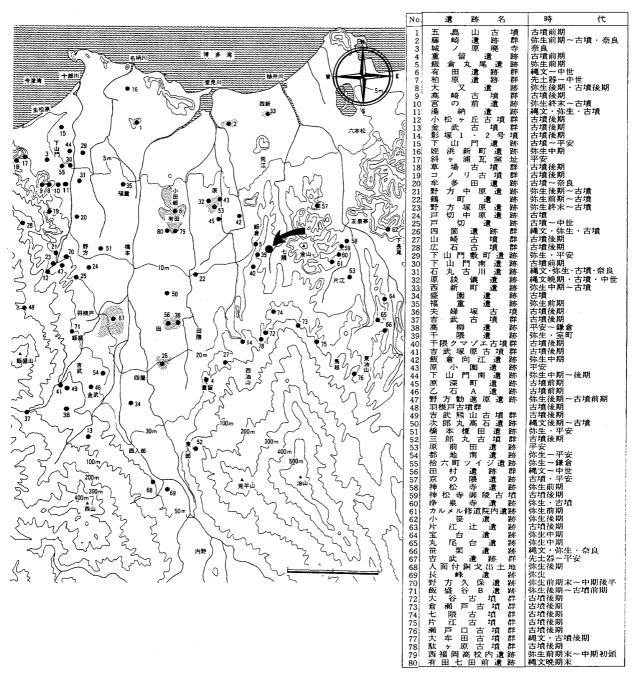


図1 飯倉 D遺跡と周辺の遺跡 (矢印が飯倉 D遺跡)

[『早良王墓とその時代』1986 福岡市立歴史資料館より引用改変]

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

大谷女子大学考古学研究室

福岡市教育委員会 教育長尾花 剛

文化財部長 後藤 直

埋蔵文化財課長 折尾 学

第一係長 横山 邦継

第二係長 山崎純男

埋蔵文化財センター主任文化財主事 二宮忠司

試掘調査担当 山口譲治・菅波正人

調査担当 中村 浩・山口譲行治

池田榮史

調査員 国学院大学大学院 石 木 秀 啓

東京大学大学院 鮫島和大

早稲田大学大学院 余語 琢磨

大阪府立高等学校非常勤講師 寺 嶋 辰 美

調査補助員 琉球大学 出合 宏光・進村 真之・西園 勝彦

宮城 康二•田尻 義了•井上 正隆

金城 健太・大城 徹也

早稲田大学 塚原 潤一・増田 達也・大西 顕

久米 正吾・川端美由紀・宗像 義輝

野口 未幾・藤森 映葉・福本美智子

小幡 早苗・佐野ちひろ

東京大学 米川 裕治

大谷女子大学 田之上裕子•中池佐和子•池端真小子

岡本 未央•石原華留奈•内田 直美

山尾. 葉子•森本佐智子•村上真由美

下条 裕子・今兼 智恵・植山加奈子

土井 教子•平方扶左子•中山千秋

根来希久子•山地 明子

第一経済大学 飯沼 章晃•大口 充洋

 慶星大學校
 李
 映周

 大阪府立高等学校講師
 浦川
 千尋

夏原 淳史

遺物整理 藤野 孝子・重野 真紀

大谷女子大学 古川いづみ・笠原 由香

調査作業 青山佐代子・阿部まゆみ・甘川 綾子・荒尾 史子・石川由美子

井出恵美香・江口 康子・笠原恵知子・加瀬田文子・金田 明子

川辺テル子・川辺美喜子・黒木 麻子・坂本麻里子・作野 征子

佐野久美子・佐藤利恵子・瀬戸口多喜子・戸田 福江・中山チェ子 長沼奈須子・波木田玉恵・萩原 保子・八田美恵子・濱口 京子 浜田 京子•福岡 麗子•藤川 京子•別府 啓子•別府美和子 堀江 満恵・松尾 香織・丸山 幹子・見明さやか・三島 庸子 知見・村田 初子・森口 優子・森田 嘉枝・山下 英美 迎 山下 洋子・山田 裕子・大和 司歩・脇崎由美子・脇田 賀代 入江 東吾・上野 善雄・篠原 正澄・菊竹 隆平・切通 竜太 潤・杉野 友彦・田村 和央・鶴田 哲郎 崎山 潔•白坂 富田 誠司・中野 哲・中村 義嗣・西田 敏治・波木田 孝 橋口 協介·橋本 大輔·広瀬 崇郎·福田 義久·古野 唯賀 村上 耕士・湯沢 富貴・百崎 英嗣・青柳 寿子・青柳美智子 因 ヨシ子・牛尾シキヨ・岡部喜久美・海津 宏子・川嶋ツキエ 倉光アヤ子・栗木 和子・小柳 和子・榊 スミ子・高橋 茂子 辻 節子・鶴田喜美枝・鶴田 佑子・中園登美子・鍋山千鶴子 土生喜代子•平川 英子•平川 土枝•平川富美子•平川 伸子 平川 史子・真名子シズエ・三谷 朗子・満田 雅子・三好 道子 山尾タマエ・山口タツエ・山田ヤス子・結城ノブ子・吉岡 勝野 和田祐見子・牛尾 豊・牛尾興志輔・広瀬 梓・細川 友喜

3、調査の経過

すでに調査に至る経過でも触れられているのでここでは、調査開始以降についての経過について記述することにする。

調査は、すでに記述されたように古墳5~8基、甕棺群、住居跡群などの実に 多彩でかつ大量の遺構が存在する遺跡と考えられており、当初の計画では、これ ら全体の調査は到底不可能であり、一部の調査を分担するという程度で終わるだ ろうという見通しのもと福岡市教育委員会埋蔵文化財課と協議、交渉を行った。 すでに差し迫った事情もあり、可能な限りの範囲でという協議結果をもとに調査 に着手することとなった。

2月2日に最初の人員が入り、まずは地域の片付け、あるいは現状の写真撮影、地表調査という基本的な作業に入った。さらに現状の地形測量を行い、すでに提供されていた地形図の補強を図った。また重機のオペレーターとの打ち合わせも適宜行い、その予定を含めて協議した。とくに機械は他の現場の作業と重複しているため、一時的に使用できない期間があるとのことである。すでに設定されている進入路を用いて機械を移動させ、かつて神社の建物があったといわれる奥の平坦部より表土剥ぎを開始。まもなくまとまりはないが、多数のピットを遺構確認する。



図2 トレンチの状況

北側斜面の現況測量作業を続ける。5日には14区の表土剥ぎ、またピットを中心とする遺構が確認される。この段階で検出が進んだ面積は20m四方に及ぶ。状況確認写真撮影を行いながら丘陵上部の現況測量続行。6日には14区遺構確認作業がほぼ完了する。検出したピットはお互いの関連は余り認められず、建物というよりは臨時的な杭の痕跡とするのが妥当。遺物は近世から現代までのものである。14区の実測全域のS=1/100の略測図作成。全体の調査計画を区画設定を重視して行う。(詳細は第2章参照)

7日には北東部斜面下方(2・8区)の表土除去、遺構確認を行い、甕棺状の 遺物を出土した斜面の部分での遺構の確認作業を行う。14区溝から新しい時期 の瓦が出土。かつて当該場所に瓦葺き建物があったとは考えられない程の量であ る。

測量調査は依然として継続して行っている。古墳状の盛り土は $5\sim6$ か所を数えるが、石室などは未確認。この丘陵は地元の方によると、この森は「天神ノ森」といい、かつて小さなほこらがあったが、大正13年に菊地神社に合祀したという。

10日には北東斜面の古墳状遺構の表土剥ぎ、およびトレンチ試掘を開始する。 各トレンチ共に表土直下から、いずれも地山の土層が続く、あるいは異なる層と しては、新しい時期の積み土の可能性が濃い。なお古墳ではよく見られる石室の



図3 古墳状盛土の状況



図4 測量状況



図 5 1 4 区調査状況



図6 古墳状盛土の調査

石の抜跡、あるいは主体部の盗掘跡も認められず、古墳ではない可能性が濃いことが判明。表土除去に関しては丘陵中央部までを終了する。他の表土除去地域で柱穴、土坑確認。なお関係する地区は、1・2・3・4区である。北東斜面の古墳状遺構に関して、更にトレンチを入れ、写真撮影して古墳ではないことを確認した後、調査を事実上放棄する。石積み部分に関しても、瓦やコンクリートなどを含み破砕した土管を石垣状に積んでいる。これらは性格は不明であるが、時期的には新しく、かつ古墳ではないことが明らかであろう。S=1/200の地形と遺構の分布についての略測図を作成し、今後の調査の進行を協議する材料とする。(第2章参照)

14日には各区の個別の遺構確認状況写真撮影。撮影の終了した北東側から掘り下げを開始。なお表土除去のほぼ完了した北側斜面での住居跡は総数十数個所にのぼる可能性がある。土坑や溝、その他の遺構の状態から、当該遺跡は弥生時代後期から古墳時代あるいは奈良時代に及ぶ集落遺跡という性格を持つものと考えられる。15日降雨あり、現場内部は、雨などによってかなり荒れている状況である。16日も雨で作業が進行せず。かなり狭小な面積ではあったが雨よけのためにテント張り、その下で15区の遺構内部の掘り下げ作業を行う。午後になって天候が回復したが、かなり現場内は荒れている。SK144、136、121土坑の内部土砂の除去と検出を開始。

SK144、136、121、さらにSK122土坑および、その周辺の遺構、15区ほぼ掘り下げ完了。SK001土坑周辺より焼土坑検出。

調査を本来担当する予定であった最大部分の対象範囲の面積は、まもなく表土除去が完了し、調査自体も3月を余り使わずに完了することが明らかとなってきた。したがって福岡市教育委員会と協議し、その担当部分を当初の古墳および約1/2の面積というのを変更し、できるかぎり全面ということとした。



図7 北東側斜面調査状況



図8 SX121竪穴遺構調査状況



図9 北側斜面調査状況



図10 南西斜面調査状況

これは古墳がまったく遺構でなくなったことが大きい。市教育委員会との協議の結果、当初指摘されている甕棺予想地域で甕棺遺構が検出されない場合のおいてのみ可能であると結論する。15区SK144、136、121土坑掘り下げ作業続行。SC176竪穴住居跡掘り下げ開始。当初福岡市の発掘調査予定区であった甕棺予想地域でもある西側斜面に重機を回し、丘陵斜面下方より表土除去を開始する。甕棺は検出されず、遺物を伴わない土坑が多数確認。

すでに表土除去によって多数の排土がでて いたが、外部への搬出が地元との協議が十分 進展せず、今日まで延伸していたがようやく 一部解決。

SK144はSC144、SK136、121はSC136、SX 121にそれぞれ呼称を変更する。いずれも遺 構の性格が推定されることからこのように変 更する。

5 区斜面に横穴状の遺構を確認する。断面では四角形を示し、あまり大きくはないがかなり深くまで掘り込まれている。炭焼窯にも似ているが、まったく火の使用痕跡が見られない。14区の1/2まで遺構の検出作業進展する。

20日にはSC144、176竪穴住居跡内部に設定したセクション清掃、床面精査。SX121遺構セクション清掃。15区南面のセクション清掃写真撮影完了まで進む。なお午後降雨の為、作業中断する。翌日には15区割り付け完了、平面図実測開始。10、16区略測図完了。SC176、144竪穴住居跡セクション実測、写真撮影完了。SC136竪穴住居跡床面精査。SC74竪穴住居跡炉跡確認。SD122溝、SX121遺構掘り下げ続行。SK244土坑より石鏃検出。10、16区平板測量完了。22日にはSC176床面の花粉調査の為のサンプリングを行う。SC144セクション実測、写真撮影完了。

新しいプレハブ建設のため20区、21区

東側の表土除去、ここでも意味不明の土坑が確認された。遺構検出完了部分から順序不同で遺構の平面実測を行う。SD121溝底面まで到るが性格不明。SK244をSC244に変更する。調査区の南端25、26区表土除去、遺構検出などの作業を続行。16、2区表土除去、遺構確認。SC570竪穴住居跡確認作業。SC144、176竪穴住居跡内部に設定したベルト除去、平面図実測。SC136竪穴住居跡セクションの検討。

24日には排土搬出。SC144竪穴住居跡検出状況写真撮影、遺物取り上げ完了。SC136、SC570竪穴住居跡内部設定のセクション実測、写真撮影完了。SC246竪穴住居跡掘り下げ開始。SC074、060竪穴住居跡床面の精査続行。21区東側、25、26区割り付け完了、平面図実測作業開始。25日には21区東側、25、26区実測完了、レベリング。SC144竪穴住居跡平面図ほぼ完了する。SC246竪穴住居跡は2軒の重複の可能性を確認。やがて西側斜面、及び、21区西側の表土除去。SC136竪穴住居跡床面精査。SC074、SC060竪穴住居跡それぞれ上層土器溜まりの検出状況写真撮影。SC246竪穴住居跡の切り合い関係の調査を続行。27日にはSC136竪穴住居跡重複の可能性があるため慎重に検討。SC246竪穴住居跡の床面ほぼ検出。南西部に焼土の堆積を認める。SC074、060竪穴住居跡内部の土器溜まり検出を続行。SX121遺構、SD122溝内部に設定したセクション実測。

3月1日には 調査地域中央部に該当する頂上部分中央に残されていた大量の 排出土砂の排出作業が開始。SX427遺構プラン確認作業。10、16区表土除去 および遺構検出作業を行う。SC074、136、060竪穴住居跡実測作業。翌日にはSC 246竪穴住居跡土器群調査ほかを行う。

3日にはSC246竪穴住居跡床面から銅鏡の鋳型が検出される。ほぼ全体の1/4前後の遺存。実測図の作成及び現状の写真撮影を行う。大谷女子大学中村に連絡し、指示を待つ。なお福岡市教育委員会へは中村から連絡。調査途上のため、しばらくは発表を控えることで一致。SC136、SX121、SX427、SC74、060の各遺構の調査を続行。10、16区の調査を続行。翌4日には SC246竪穴住居跡内部のセクションの実測作業。とくに切り合い関係の確認に重点をおいて検討。SC074、060竪穴住居跡土器取り上げ完了。SX427遺構内から須恵器蓋杯などが



図11 写真撮影状況

出土。SX121遺構セクション除去作業。SC7 09、136ほかの遺構調査続行。

5日、SC246竪穴住居跡A住居のベルト除去。西側部分ピット内部から焼土が流れ込んでいることがわかる。土器の実測、取り上げ作業。SC074竪穴住居跡北側住居から貼床面を検出。SC60、708、SX121、427各遺構調査作業続行。南側斜面から西側に向かっての遺構検出作業を行う。7日には16区地域まで、ほぼ遺構検出作業を終える。SC708竪穴住居跡を検出、内部の検討を開始ほかを行う。



図12 写真撮影打合わせ

16区遺構掘り下げ作業続行。全面的に黄褐色の湿りのある固い覆土をもつ。遺構の存在は可能性として薄いようである。調査は継続させる。SC060、074、246竪穴住居跡検出作業続行。SC708竪穴住居跡確認、調査を行う。SX427遺構セクション実測作業。

9日は西側斜面の掘り下げ作業続行。SX 663遺構精査ののち掘り下げ作業を開始。SX 427遺構は各セクション図面実測、写真撮影、調査を完了する。SC060、074、246竪穴住居跡は遺構内部の検出作業続行。10日に西側斜

面の掘り下げ作業はほぼ完了する。検出遺構は土坑、ピット群などでまとまりの ある遺構とはなっていない。SC060竪穴住居跡掘り下げ、調査続行。SC246-1竪 穴住居跡から鉄鎌を検出。また床面の調査によってベッド状遺構をもつか、ある いは複数の住居跡が重複しているかのいずれかの可能性が出てきた。なお調査を 続行する。SX427遺構の掘り下げ作業。なお内部の土砂について鉄滓が含まれて いることから、フルイにかけることとした。11日には12日予定の写真撮影に備え て全面的な清掃を実施する。とくにSC570、136、137竪穴住居跡は詳細写真に耐 えるように念入りに行う。西側斜面の遺構検出作業続行。SX662、663遺構の検出 があったが木の根の可能性もある。SC074、060、246竪穴住居跡遺構調査実施。な おSC246竪穴住居跡の重複状況の確認と掘り下げ進行させる。木の根による攪乱 が著しい。12日降雨、したがって13日朝から引き続き写真撮影に備え、全員で清 掃作業に当たる。またその後、15区以南の全体写真の撮影も行う。14日には作 業通常に戻し、SC060、074、246竪穴住居跡の遺構内の掘り下げ作業続行。SC2 46-1竪穴住居跡ベット状遺構と同じレベルで甕口縁部を検出。SX460焼成土坑の 検出状況の写真撮影、調査を行う。底までは浅く、内部からは土器の細片が大半 で炭化物も少ない。15日はSC708竪穴住居跡の土器溜まりの実測図の作成開始 する。(1/10)16日から重機作業再開。表土除去及びその後の遺構検出作業 に人員を割く、住居跡および焼成土坑などが確認されている。SC074竪穴住居跡



図13 実測作業状況

内部の焼成土坑SX842土坑の検出、調査。 SD010溝、SC074、060、246-1竪穴住居跡の 各遺構の調査を続行。SC074竪穴住居跡内部 の焼成土坑は2基となる。SX842、SX 843土坑である。いずれも写真撮影、実測作 業を行う。SC060竪穴住居跡は土器出土状態 の写真撮影、実測作業を行う。SC865、SX 002の各遺構の調査掘り下げ開始。SD 122溝土器出土状態実測図の作成。SC708竪 穴住居跡では土器の取り上げ作業を行う。 SC865、SD010の各遺構は掘り下げ及び調査



図14 実測状況



図15 ラジコンヘリによる航空写真撮影

を行う。3区については遺構範囲の確認作業、 検出作業。

19日にはSC708竪穴住居跡時出土状況写真 撮影、および土器取り上げ作業。SC246、 SD122、SX423、460の各遺構は写真撮影 (阿南氏) さらにSC060、074竪穴住居跡セク ションベルト写真撮影。西側斜面全体、SC 246竪穴住居跡については 清掃作業を行い、 写真撮影に備える。写測エンジニアリングに よる航空写真撮影実施。

20日はSC708竪穴住居跡出土土器取り上げ作業続行。土器出土状況、及び完掘写真、 SC246竪穴住居跡銅鏡鋳型出土状況写真撮影はか、SC001竪穴住居跡掘り下げ開始。21日にはSC708竪穴住居跡内部土器溜まり実測、レベル測量、土器上げ後、柱穴のピット調査。 SC246竪穴住居跡平面図実測開始。SD217、218溝掘り下げ開始。SC074竪穴住居跡土器出土状況実測。SC060竪穴住居跡床面調査続行。SD010溝割り付け遺物実測。SC001竪穴住居跡は平面プラン確認。遺跡の東側斜面の遺構確認、マーキング、1/200平板測量、検

出状況写真撮影終了。翌22日から遺跡の南側斜面の各遺構掘り下げ開始。南西部 遺構検出状況写真撮影終了。SC246、SC074竪穴住居跡平面図実測続行、SC060 竪穴住居跡床面調査続行。23日SC882、931竪穴住居跡プラン確認。SC001竪穴 住居跡側壁の検出作業。SD933溝掘り下げ開始 、鉄滓出土。SC709竪穴住居跡 内部の土器上げSD010溝平面図実測終了。SC865竪穴住居跡掘り下げ続行。10、 16区平面図実測をほぼ終了。

24日にはSC001、002、217、218、865、882、931竪穴住居跡掘り下げ続行。SD010溝レベル測量後、土器取り上げ。SD023溝プラン確認。SC246竪穴住居跡平面図実測終了。SC074竪穴住居跡床面調査、西側にベッド状遺構を確認するが柱穴は認められず。SC060竪穴住居跡清掃。25日SC882竪穴住居跡よりフィゴ羽口出土を確認。SC887竪穴住居跡セクション実測、写真終了。SX883遺構掘り下げ、石斧破片出土。SC865竪穴住居跡床面調査続行。SD010土器上げ終了。SC060竪穴住居跡現状写真撮影、掘り下げ続行SD217、218溝セクション実測、写真撮影終了ST270甕棺平面図実測終了。SC246竪穴住居跡についてもレベル、土器上げを行う。SX121横穴状遺構については柵列状の遺構を確認する。

26日SC887竪穴住居跡、SX883遺構ほか完掘状況の順に写真撮影を行う。27日 SC931竪穴住居跡完掘状況、SD015,016,019溝遺物出土状況ほか写真撮影を終 了する。西側斜面については、遺物の取り上げ、及び測量、平面図実測の補測を





図16 東部域調査状況

行う。また、SC246-3竪穴住居跡の覆土より ガラス小玉を新たに検出する。28日西側斜面、 遺物上げ、レベル測量続行。東側斜面につい ては割り付けを開始。SC246-3竪穴住居跡は 銅のサンプリングのため、床面を50cmメッ シュに区画する。SC865竪穴住居跡は三軒の 住居の重複を確認する。29日には SC246-3 竪穴住居跡は50cmメッシュよりさらに10 cmごとにメッシュをいれ個々に銅のサンプ リングを行う。SC865竪穴住居跡の切り合い を調査するSC935竪穴住居跡掘り下げ、大量 の炭化物を検出するが土器は少量。SC931竪 穴住居跡セクションベルト写真撮影後、除去 する。遺物実測、レベル測量して取り上げ。 SC060竪穴住居跡は貼床重層部分のレベル測 量終了。30日 SC865竪穴住居跡完掘状況、 SC060、074竪穴住居跡の両者にかけての全 景個別写真撮影。SX071焼成土坑、SC931竪 穴住居跡それぞれの完掘状況写真撮影。SC

246-3竪穴住居跡については銅のサンプリングを終了。SD010溝については掘り下げを続行、底、北側壁が確認されない。サブトレンチを設定し、掘削を行う。SC001、SC931、938の各竪穴住居跡、およびSD023溝については、掘り下げを続行。SC865竪穴住居跡は写真撮影後、割り付け、平面図実測を開始する。SC935~939竪穴住居跡は清掃、遺構調査を行う。

31日には午前10時半よりTV取材。現地説明会用資料分類、並びに、第一便の 資料搬出を行う。その間、SC931竪穴住居跡平面図実測続行。SC935焼失家屋周 辺写真撮影終了。SD217、218溝平面図実測終了、レベル測量開始。北側斜面は 清掃、マーキングを行う。並行して、東側斜面のSD894構の掘り下げ。午後2時 より福岡市役所にて記者発表。(中村、田尻が同席)、3時半より現地にてTV取



図17 現地説明会の状況

材。九州大学西谷教授来訪。

4月1日には調査地域の北側、及び東側斜面の清掃、マーキング続行。雨天の為作業は中断するが、航空写真撮影は日程の関係上強行する。その間、土のフルイ、プレハブ清掃、図面整理、遺物水洗、現地説明会用資料作成を行う。

翌日は、晴天に恵まれ、午前中は、現地説明会準備。午後1時より説明会を行う。見学者は多く、中村、池田、余語、寺嶋ほかが対応する。その間、調査は平常どおり行い、S

C931竪穴住居跡については、レベル測量、住居炉跡たちわり。 SC935竪穴住居跡、SD019、010、940溝、は、それぞれ1/10平面実測後、レベル測量終了。 SC001竪穴住居跡掘り下げ 続行。SC244竪穴住居跡、1区、8区、14区についても平面図の実測を終了する。SC246-3竪穴住居跡内の西側土坑の掘り下げを行い、焼土部分をたちわり考古地磁気のサンプリングが行われる。(夏原技研)その他、SX842、843、864、144焼成土坑の各遺構についても同様にサンプリング。3日にはSC931竪穴住居跡内部の炉の考古地磁気サンプリング終了。SC935竪穴住居跡は炭化物出土状況。1/10平面図実測、エレベーション図面終了、取り上げを行う。SC865竪穴住居跡は掘り下げ続行。SD023、940溝、SC060竪穴住居跡は、それぞれ1/10平面図実測、レベル測量、遺物の取り上げを終了。SC001竪穴住居跡現況写真撮影後、割り付け、平面図実測開始。SD010溝床面の調査。SC246-3竪穴住居跡床面下層に確認された新たな焼土部分を調査。

4日にはSC931竪穴住居跡完掘写真撮影。SC935竪穴住居跡炭化物取り上げ、清掃。SX833~835遺構にかけて平面図実測、レベル測量終了。SC865竪穴住居跡床面調査続行。SC001竪穴住居跡遺物出土状況写真撮影終了。平面図実測レベル測量、遺物取り上げ終了。SC246-1竪穴住居跡掘り方まで検出する住居のたちわり終了。SC244竪穴住居跡、及び14区北側部分のレベル測量終了。

5日にはそれぞれの完掘写真、及び、たちわり写真撮影。その後、東側斜面全景、北側斜面全景の完掘写真を撮影する。6日SC001、935、937~939竪穴住居跡は、平面図実測終了。SC931竪穴住居跡はたちわりを行う。SC246竪穴住居跡掘り方平面図実測、たちわり設定。7日にSC001、060、246、931、935~939竪穴住居跡のたちわりを行い、写真撮影実測を終了する。並行して、1、6、7、8、12、13区のレベル測量。8日にSC001竪穴住居跡レベル測量後、遺物取り上げを行う。SC931竪穴住居跡貼床をはがし、最終床面の実測を行う。SC935、937~939、887、865、246、060、074の各竪穴住居跡についても同様にたちわり、写真撮影後、貼床をはがし、平面図実測を行う。SC135、136、144、176竪穴住居跡はたちわりを終了する。9日には7区、SC931竪穴住居跡レベル測量終了。SC135、136、144、176竪穴住居跡たちわり平面図実測、写真撮影終了。当該遺跡の全域の調査をほぼ完了。

10日調査器材、遺物搬出。プレハブ清掃を行い、撤収。

4、日誌抄

- 2月 2日 調査開始。全員集合し各自の分担の作業に着手する。すでに開発業者の方で地形 測量を完了している。その図の提供により調査対象地域全体の区画設定が可能と なる。しかし現況の地域を注意深く観察すると、それらの測量結果とは微妙に異 なる部分が多く見られたことから、再度、現地の地形測量を行うこととした。ま ず仮BMを設定し、現況測量を開始する。
 - 3日 東側現況測量完了。東側斜面より盗掘坑と考えられるくぼみ確認。古墳状盛り土 部分と近接関係にあり、それらのくぼみは石室の石材の抜き穴の可能性も考えら れこともあり、慎重に掘り進むことにする。
 - 4日 ユンボ (建設機械)搬入。オペレーターと表土除去作業の進め方について打ち合わせを行う。機械は他の現場の作業と重複しているため、一時的に使用できない期間があるとのことである。すでに設定されている進入路を用いて機械を移動させる。さらに神社の建物があったといわれる奥の平坦部より表土剥ぎを開始。まもなくまとまりはないが、多数のピットを確認する。マーキングを行う。並行して、北側斜面の現況測量続行。
 - 5日 14区の表土剥ぎ、昨日に引き続きピットを中心とする遺構が確認される。ほぼ 検出が進んだ面積は20m四方に及ぶ。それらについてマーキングを行った後、状 況確認写真撮影を行う。丘陵上部の現況測量続行。



図18 14区調査状況

- 6日 14区遺構確認作業ほぼ完了する。検出したピットはお互いの関連は余り求められないようである。建物というよりは臨時的な杭の痕跡とするのが妥当であろう。表面採集の遺物は近世から現代までのものである。14区の割り付け開始。S=1/100の略測図作成。
- 7日 北東部斜面下方(2・8区)の表土除去、遺構確認、マーキングを行う。甕棺状の遺物を出土した斜面の部分での遺構の確認作業を行う。14区については、遺構内の土砂の除去作業を始める。溝から新しい時期の瓦が出土。かつて当該場所に瓦葺き建物があったとは考えられない程の量である。
- 8日 3・9区の表土除去。BMの移動結果が業者から知らされた。仮BMとしていた標高は21.280mである。以下の標高のレベルはこれらの基準から引用する事とす



図19 古墳状盛土調査状況

る。

測量調査は依然として継続して行っている。 古墳状の盛り土は5~6か所を数えるが、石 室などは確認できない。14区の溝SD02 は断面が角ばっている。新しい遺物を含む。 なお地元の方によると、この森は「天神ノ森」 といい、かつて小さなほこらがあったが、大 正13年に菊地神社に合祀したという。

なお甕棺らしき弥生土器の破片の出土は、 依然として範囲の確定ができないほど広がっ ており、調査を続行する。

- 9日 表土除去続行。14区掘り下げ完了。途中吹雪のためやむなく作業を中断。すでに出土している遺物の検討と整理を行う。
- 10日 北東斜面の古墳状遺構の表土剥ぎ、およびトレンチ試掘を開始する。各トレンチ



図20 古墳北盛土主体部の状況

共に表土直下から、いずれも地山の土層が続く、あるいは異なる層としては、新しい時期の積み土の可能性が濃い。なお古墳ではよく見られる石室の石の抜跡、あるいは主体部の盗掘跡も認められず、古墳ではない可能性が濃いことが判明。なお別の埋葬主体の可能性もあり慎重に土砂の除去を続行する。表土除去に関しては丘陵中央部までを終了する。他の表土除去地域で柱穴、土坑確認。なお関係する地区は、1・2・3・4区である。

- 11日 北東斜面の古墳状遺構に関して、更にトレンチを入れ、写真撮影して古墳ではないことを確認した後、調査を事実上放棄する。石積み部分に関しても、瓦やコンクリートなどを含み破砕した土管を石垣状に積んでいる。これらは性格は不明であるが、時期的には新しく、かつ古墳ではないことが明らかに確認される。また、北側斜面については、甕棺の可能性があることからピンポールによって、表土除去が及ぶ前に下層の所在確認の予備調査を行う。
- 12日 遺構の掘り下げ続行。当初数基の甕棺が重複すると考えられたものは甕棺ではなく、多量の土器が出土することから、それらは住居跡の可能性が濃いことが、これらの調査から明らかとなる。すなわち3・4区に住居跡が所在する可能性が濃くなる。
- 13日 遺構確認作業続行、及び、確認状況写真撮影。S=1/200の地形と遺構の分布についての略測図を作成し、今後の調査の進行を協議する材料とする。
- 14日 各区の個別の遺構確認状況写真撮影。撮影の終了した北東側から掘り下げを開始。 なお表土除去のほぼ完了した北側斜面での住居跡は総数十数個所にのぼる可能性 がある。土坑や溝、その他の遺構の状態から、当該遺跡は弥生時代後期から古墳 時代あるいは奈良時代に及ぶ集落遺跡という性格を持つものと考えられる。

- 15日 雨の為、作業中断。調査の進行方法などについて調査員で協議する。図面整理等を行う。ビニール・シートが届く、早速遺跡中心部および遺構確認部分などへかける。なお現場内部は、雨などによってかなり荒れている状況である。
- 16日 雨で作業が進行せず。かなり狭小な面積ではあったが雨よけのためにテントを張り、その下で15区の遺構内部の掘り下げ作業を行う。午後になって天候が回復したが、かなり現場内は荒れている。土坑SK144、136、121の内部土砂の除去と検出を開始。
- 17日 昨日に引き続きSK144、136、121、さらにSK122土坑および、その周辺の遺構掘り下げ作業を続行。15区ほぼ掘り下げ完了。SK001土坑周辺より焼土坑検出、また四面に線状の使用痕跡をもつ特異な石を確認。砥石の可能性があるもかなり大きい。なお調査を本来担当する予定であった最大部分の対象面積は、まもなく表土除去が完了し、調査自体も3月を余り使わずに完了することが明らかとなってきた。したがって福岡市教育委員会と協議し、その担当部分を当初の古墳および約1/2の面積というのを変更し、できるかぎり全面ということとした。これは古墳がまったく遺構でなくなったことが大きいといえる。また全面を対象とするには、今後、当初指摘されている甕棺予想地域で甕棺遺構が検出されない場合のおいてのみ可能であろう。石包丁出土(SC136土坑)。ただし土坑とに切り合い関係から攪乱を受けており住居跡としては残りが悪い。
- 18日 15区SK144、136、121土坑掘り下げ作業続行。SC176竪穴住居跡掘り下げ開始。 当初福岡市の発掘調査予定区であった甕棺予想地域でもある西側斜面に重機を回 し、丘陵斜面下方より表土除去を開始する。甕棺は検出されず、性格不明の土坑 が多数確認されている。内部から遺物の検出も見られないものが多い。すでに表 土除去によって多数の排土がでていたが、外部への搬出が地元との協議が十分進 展せず、今日まで延伸していたがようやく一部解決の模様。調査のやりくりが不 要となりほっとする。

SK144はSC144、SK136、121はSC136、SX121にそれぞれ呼称を変更する。 いずれも遺構の性格が推定されることからこのように変更する。 SC176竪穴住居跡は 2 棟の切り合い関係がが見られる模様。

- 19日 SX121、136遺構内部土砂の掘り下げ続行。SC144、176竪穴住居跡は、それぞれ 2 軒の切り合いを確認。5 区斜面に横穴状の遺構を確認する。断面では四角形を 示し、あまり大きくはないがかなり深くまで掘り込まれている。炭焼き窯にも似ているが、まったく火の使用痕跡が見られない。14区の1/2まで遺構の検出 作業進展する。
- 20日 SC144、176竪穴住居跡内部に設定したセクション清掃、床面精査。SX121遺構 セクション清掃。15区南面のセクション清掃写真撮影完了。午後降雨の為、作 業中断する。
- 21日 15区割り付け完了、平面図実測開始。10、16区略測図完了。SC176、144 竪穴住居跡セクション実測、写真撮影完了。SC136竪穴住居跡床面精査。SC74 竪穴住居跡炉跡確認。SD122溝、SX121遺構掘り下げ続行。SK244土坑より石鏃 検出。10、16区平板測量完了。

- 2 2 日 1 5 区平面図実測続行。SX121遺構掘り下げ完了。SX259焼成遺構確認。SC136、074、083、060竪穴住居跡、SD122溝遺構内部の掘り下げ、いずれもセクションを用いて切り合いを精査。SC176床面の花粉調査の為のサンプリングを行う。SC144セクション実測、写真撮影完了。作業員の増加にともない手狭になって来たためプレハブ増設を要請。なお市教育委員会とは設置場所について協議し、調査の現状に対応することで了承されている。このため20区、21区東側の表土除去、ここでも意味不明の土坑が確認された。遺構検出完了部分から順序不同で遺構の平面実測を行う。SD121溝底面まで到るが性格不明。SK244をSC244に変更。作業員の数が多くなったので募集を中断する。
- 23日 調査区の南端25、26区表土除去、遺構検出。20、21区レベリング、完掘 状況写真撮影を行う。16、22区表土除去、遺構確認。SC570竪穴住居跡遺構 確認作業。SC144、176竪穴住居跡内部に設定したベルト除去、平面図実測。 SC136竪穴住居跡セクションの検討。SC246竪穴住居跡、SD122溝との切り合い を確認。SC074、060竪穴住居跡床面の精査。
- 2 4日 排土搬出。SC144竪穴住居跡検出状況写真撮影、遺物取り上げ完了。SC136、SC 570竪穴住居跡内部設定のセクション実測、写真撮影完了。SC246竪穴住居跡掘り下げ開始。SC074、060竪穴住居跡床面の精査続行。 2 1 区東側、 2 5 、 2 6 区割り付け完了、平面図実測作業開始。
- 25日 21区東側、25、26区実測完了、レベリング。SC144竪穴住居跡平面図実測作業はほぼ完了、あとは写真撮影待ち。SC136竪穴住居跡、ベルトの除去および平面図実測。SC074、060竪穴住居跡掘り下げ続行、周辺の精査行うSD122、246溝掘り下げ続行。SC246竪穴住居跡は2軒の重複の可能性を確認。プレハブ搬入。東側部分の土砂排出なお中央部は明日とする。
- 26日 21区東側、25、26区レベリング完了、あとは写真撮影を残す。西側斜面、 及び、21区西側の表土除去。SC136竪穴住居跡床面精査。SC074、SC060竪穴 住居跡それぞれ上層土器溜まりの検出状況写真撮影。SC246竪穴住居跡の切り合 い関係の精査を続行する。
- 27日 SC136竪穴住居跡は、住居跡が重複の可能性があるため慎重に検討。SC246竪穴住居跡の床面ほぼ検出。南西部に焼土の堆積を認める。SC074、060竪穴住居跡内部の土器溜まり検出を続行。SX121遺構、SD122溝内部に設定したセクション実測。
- 2 8 日 2 1、2 2 区遺構検出状態の写真撮影。 2 1 区 SC708~710竪穴住居跡検出状態。SC074、060竪穴住居跡土器出土状態。1 0、1 6 区ピット、土坑などを確認。SC136竪穴住居跡実測作業。このほかSC246、SX121、SC074、060、の各遺構の調査作業続行。2 1、2 2 区、1/2 0 0 の遺構配置図面作成。
- 3月 1日 調査地域中央部に該当する頂上部分中央に残されていた大量の排出土砂の排出作業が開始される。SX427遺構プラン確認作業。10、16区表土除去、および遺構検出作業を行う。SC074、136、060竪穴住居跡実測作業。SC246切り株を除去。掘り上がった部分の割り付け作業を行う。これらによって、遺構の写真撮影前に実測作業を終えるようにする。

- 2日 10、16区の作業続行。SC136竪穴住居跡若干のピットが確認されたため再調査を行う。実測図を作成。レベル作業。SC246竪穴住居跡土器群精査。SX427遺構の検出作業。SC074、060竪穴住居跡土器の取り上げ作業を行う。SC708、709、SX785各遺構の調査続行。
- 3日 SC246竪穴住居跡床面から銅鏡の鋳型が検出される。ほぼ全体の1/4前後の遺存である。実測図の作成及び現状の写真撮影を行う。大谷女子大学まで連絡し、指示を待つ。なお福岡市教育委員会へは中村から連絡。調査途上のため、しばらくは発表を控えることで一致。SC136、SX121、SX427、SC74、060の各遺構の調査を続行。10、16区の調査を続行。



図21 SC246竪穴住居跡調査状況

- 4日 SC246竪穴住居跡内部のセクションの実測作業。とくに切り合い関係の確認に重点をおいて検討。SC074、060竪穴住居跡土器取り上げ完了。SX427遺構内部から須恵器蓋杯などが出土。SX121遺構セクション除去作業。SC709、136ほかの遺構調査続行。
- 5日 SC246-3竪穴住居跡のベルト除去。西側部分ピット内部から焼土が流れ込んでいる。土器の実測、取り上げ作業。SC074竪穴住居跡北側住居から貼床面を検出。 SC60、708、SX121、427各遺構調査作業続行。
- 6日 SC246竪穴住居跡東側の住居を確認。SC074、060竪穴住居跡の調査作業続行。 SC708竪穴住居跡床面検出作業。SX121遺構は、ベルト除去後、トンネル部分の 掘削を開始する。なおトンネルは人がかろうじてくぐれる程度である。SX427遺 構掘削続行、ほぼ床面を検出。
- 7日 本日から作業員の人数が増加する。現場の調査状況の説明を行い、合流する南側 斜面から西側に向かっての遺構検出作業を行う。16区地域まで、ほぼ遺構検出 作業を終える。SC708竪穴住居跡を検出、内部の検討を開始。SC074セクション ベルトの西側の検討。SC246竪穴住居跡東側壁の立ち上がりの検出作業。
- 8日 22区周辺部地域の実測作業。16区遺構掘り下げ作業続行。全面的に黄褐色の しまりのある固い覆土をもつ。遺構の存在は可能性として薄いようであるなお調 査は継続させる。SC060、074、246竪穴住居跡検出作業続行。SC708竪穴住居跡 確認、精査を行う。SX427遺構セクション実測作業。
 - 9日 西側斜面の掘り下げ作業続行。SX663遺構精査ののち掘り下げ作業を開始。SX4

27遺構は各セクション図面実測、写真撮影、精査を完了する。SC060、074、246 竪穴住居跡は遺構内部の検出作業続行。

- 10日 西側斜面の掘り下げ作業はほぼ完了する。検出遺構は土坑、ピット群などでまとまりのある遺構とはなっていない。SC060竪穴住居跡掘り下げ、精査続行。SC 246-1竪穴住居跡から鉄鎌を検出。また床面の精査によってベッド状遺構をもつか、あるいは複数の住居跡が重複しているかのいずれかの可能性が出てきた。なお精査を続行する。SX427遺構の掘り下げ作業。なお内部の土砂について鉄滓が含まれていることから、フルイにかけることとした。SC708竪穴住居跡セクション実測図の作成と注記作業を行う。SC246竪穴住居跡内部の精査掘り下げ続行。
- 11日 明日予定の写真撮影に備えて全面的な清掃を実施する。とくにSC570、136、137 竪穴住居跡は詳細写真に耐えるように念入りに行う。西側斜面の遺構検出作業続 行。SX662、663遺構の検出があったが木の根の可能性もある。SC074、060、24 6竪穴住居跡遺構精査実施。なおSC246竪穴住居跡の重複状況の確認と掘り下げ 進行させる。木の根による攪乱が著しい。根とともに大量の土器の細片が出土。
- 12日 写真撮影の予定であったが雨天のため延期を余儀なくされた。午前中は、出土遺物の片付けおよび整理作業を分担して行い、午後は水抜き作業を行う。清掃も合わせて行うが土質の関係もあり遅々として進まず。なお完了部分からシートをかけて養生し、明日に備える。また土砂のフルイ作業も行う。
- 13日 朝から引き続き写真撮影に備え、全員で清掃作業に当たる。SC570、708、710、 144、135竪穴住居跡、SX121、427遺構、SC176竪穴住居の順で写真撮影 (個別) を行う。またその後、15区以南の全体写真の撮影も行う。のいずれも白線なし のものと白線を入れたものの両者を撮影した。(阿南氏)
- 14日 SC060、074、246竪穴住居跡の遺構内の掘り下げ作業続行。SC246-1竪穴住居跡内部ベッド状遺構と同じレベルで、甕口縁部を検出。SX460焼成土坑の検出状況の写真撮影、精査を行う。底までは浅く、内部からは土器の細片が大半で炭化物も少ない。
- 15日 SC708竪穴住居跡の土器溜まりの実測図の作成開始する。(1/10)北側に重複して所在するSC782竪穴住居跡についても検出を始める。SC074竪穴住居内部の焼成土坑SX842遺構の検出作業実施。下層に溝を確認。SX460、423焼成土坑の検出作業。セクションベルト実測写真撮影の後除去。SC246竪穴住居跡は精査検討を続行する。SC708竪穴住居跡に設定した東西のセクションベルト内部からガラス小玉出土。
- 16日 本日から重機作業再開。表土除去及びその後の遺構検出作業に人員を割く。住居 跡および焼成土坑などが確認されている。SC074竪穴住居跡内部の焼成土坑SX 842土坑の検出、精査。SD010溝、SC074、060、246-1竪穴住居跡の各遺構の調 査を続行。
- 17日 SC074竪穴住居跡内部の焼成土坑は2基となる。SX842、SX843土坑である。いずれも写真撮影、実測作業を行う。SC060竪穴住居跡は土器出土状態の写真撮影、実測作業を行う。SC865、SX002の各遺構の調査掘り下げ開始。SD122溝は土器出土状態実測図の作成。SC708竪穴住居跡では土器の取り上げ作業を行う。SC

785、SD010の各遺構は掘り下げ及び精査を行う。3区については遺構範囲の確認作業、検出作業を行う。

18日 3区調査範囲の遺構確認作業および検出作業を続行。一部分については掘り下げ



図22 調査状況

作業も平行して行う。SX842、843焼成土坑 実測作業完了。SC074竪穴住居跡床面の検出 作業。SX002、023遺構の掘り下げ、精査を 続行。SC865-1、SD010精査、検出作業続行。 SC060竪穴住居跡は実測作業完了後、土器 の取り上げ、レベルなどの作業を行う。

SC246-3竪穴住居跡は清掃が完了。たたら 研究会(大沢、穴沢、藤沢先生)来訪。

- 19日 SC708竪穴住居跡時出土状況写真撮影、および土器取り上げ作業。SC246、SD 122、SX423、460の各遺構は写真撮影(阿南氏)さらにSC060、074竪穴住居跡セクションベルト写真撮影。西側斜面全体、SC246竪穴住居跡については清掃作業を行い、写真撮影に備える。写測エンジニアリングによる航空写真撮影実施。市教育委員会常松氏来訪。
- 20日 SC708竪穴住居跡出土土器取り上げ作業続行。土器出土状況、及び完掘全景写真、 SC246竪穴住居跡銅鏡鋳型出土状況写真撮影、SD010溝、SC074竪穴住居跡内部 土器出土状況写真撮影終了。SC060竪穴跡は床面精査。SC001竪穴住居跡掘り下 げ開始。
- 2 1日 SC708竪穴住居跡内部土器溜まり実測、レベル測量、土器上げ後、柱穴のピット精査。SC246竪穴住居跡平面図実測開始。SD217、218溝掘り下げ開始SC074竪穴住居跡土器出土状況実測。SC060竪穴住居跡床面精査続行。SD010溝割り付け遺物実測。SC001竪穴住居跡は平面プラン確認。遺跡の東側斜面の遺構確認、マーキング、1/200平板測量、検出状況写真撮影終了。東京国立博物館井上先生来訪。
- 2 2 日 遺跡の南側斜面の各遺構掘り下げ開始。南西部遺構検出状況写真撮影終了SC246、 SC074竪穴住居跡平面図実測続行、SC060竪穴住居跡床面精査続行。午前中から 雨のため、土器の水洗、住居跡内部採集の土砂サンプルのフルイをおこなう。奈 良大学酒井教授、東京国立文化財研究所平尾先生来訪。
- 2 3日 SC882、931竪穴住居跡プラン確認。SC001竪穴住居跡側壁の検出作業を行う。 SD933溝掘り下げ開始、鉄滓出土。SC709竪穴住居跡内部の土器上げSD010溝 平面図実測終了。SC865竪穴住居跡掘り下げ続行。10,16区平面図実測をほぼ終 了する。
- 2 4 日 SC001、002、217、218、865、882、931竪穴住居跡掘り下げ続行。SD010溝レベル測量後、土器取り上げ。SD023溝プラン確認。SC246竪穴住居跡平面図実測終了。SC074竪穴住居跡床面精査、西側にベッド状遺構を確認するが柱穴は認められず。SC060竪穴住居跡清掃。

- 2 5日 SC001、882、931竪穴住居跡およびSD023溝掘り下げ続行。SC882竪穴住居跡よりふいごの羽口出土を確認。SC887竪穴住居跡セクション実測、写真撮影終了。SX883遺構掘り下げ、石斧破片出土。SC865竪穴住居跡床面精査続行。SD010土器上げ終了。SC060竪穴住居跡現状写真撮影、掘り下げ続行SD217、218溝セクション実測、写真撮影終了SX270甕棺平面図実測終了、掘り下げ。SC246竪穴住居跡についてもレベル、土器上げを行う。SX121横穴状遺構については柵列状の遺構を確認する。
- 2 6 日 SC708竪穴住居跡完掘状況、SC708竪穴住居跡北側に位置するSB952掘立柱建物 跡、SC176竪穴住居跡完掘状況、SC246-1竪穴住居跡遺物出土状況、SC246-3竪 穴住居跡の焼土部分、SD217、218溝内部の土器出土状況、SB951建物跡、SC887 竪穴住居跡、SX883遺構完掘状況の順に写真撮影を行う。
- 2 7日 SC708竪穴住居跡完掘状況、SX270甕棺検出状況、SX274、864焼成土坑床面検 出状況、SC931竪穴住居跡完掘状況、SD015,016,019溝遺物出土状況の順に、 写真撮影を終了する。西側斜面については、遺物の取り上げ、及びレベル測量、 平面図実測の補測を行う。また、SC246-1竪穴住居跡の覆土よりガラス小玉を新 たに検出する。福岡大学脇田先生、福岡大学小田先生、井藤徹先生来訪。
- 2 8日 西側斜面は、遺物上げ、レベル測量続行。東側斜面については割り付けを開始する。SC246-3竪穴住居跡は銅のサンプリングのため、床面を50cmメッシュに区画する。SC865竪穴住居跡は三軒の住居の重複を確認する。
- 2 9日 SC246-3竪穴住居跡は50cmメッシュよりさらに10cmごとにメッシュをいれ個々に 銅のサンプリングを行う。SC865竪穴住居跡の切り合いを精査するSC935竪穴住 居跡掘り下げ、大量の炭化物を検出するが土器は少量であった。SC931竪穴住居 跡セクションベルト写真撮影後、除去する。遺物実測後、レベル測量して取り上 げる。SC060竪穴住居跡は貼床重層部分のレベル測量。SC001竪穴住居跡はベル トのセクション写真撮影、実測、土注を終了する。奈良教育大学三辻教授来訪。
- 30日 SC865竪穴住居跡完掘状況、SC060、074竪穴住居跡の両者にかけての全景及び 個別写真撮影。SX071焼成土坑、SC931竪穴住居跡それぞれの完掘状況写真を順 に撮影する。SC234-3竪穴住居跡については銅のサンプリングを終了する。SD 010溝については掘り下げを続行するも、底、北側壁が確認されないことからサ



図23 調査状況

ブトレンチを設定し、掘削を行う。SC001、SC931、938の各竪穴住居跡、およびSD023溝については、掘り下げを続行する。SC865竪穴住居跡は写真撮影後、割り付け、平面図実測を開始する。SC935~939竪穴住居跡は清掃、遺構精査を行う。

3 1日 午前10時半よりTV取材。現地説明会用資料分類、並びに、第一便の資料の搬出を行う。その間、SC931竪穴住居跡平面図実測続行。SC935焼失家屋周辺写真撮影終了。SD217、218溝平面図実測終了、レベル測量開始。北側斜面は清掃、マーキングを行う。並行して、東側斜面のSD894構の掘り下げも進める。午後2時より福岡市役所にて記者発表。(中村、田尻が同席)、3 時半より現地にてTV取材。九州大学西谷教授来訪。

4月1日 調査地域の北側、及び東側斜面の清掃、マーキング続行。雨天の為作業は中断するが、航空写真撮影は強行する。その間、土のフルイ、プレハブ清掃、図面整理、 遺物水洗、現地説明会用資料作成を行う。

2日 晴天に恵まれ、午前中は、現地説明会準備。午後1時より説明会を行う。(とく



に見学者は多く、中村、池田、余語、寺嶋ほかが対応する)その間も調査は平常どおり行い、SC931竪穴住居跡については、レベル測量、住居炉跡たちわり。SC935竪穴住居跡、SD019、010、940溝、は、それぞれ1/10平面実測後、レベル測量終了。SC001竪穴住居跡掘り下げ続行。SC244竪穴住居跡、1区、8区、14区についても平面図の実測を終了する。SC246-3竪穴住居跡内の西側土坑の掘



図24 現地説明会

り下げを行い、焼土部分をたちわり考古地磁気のサンプリングが行われる。(夏原技研)その他、SX842、843864、144焼成土坑の各遺構についても同様にサンプリングが行われる。

3日 SC931竪穴住居跡内部の炉の考古地磁気サンプリング終了。SC935竪穴住居跡は 炭化物出土状況。1/10平面図実測、エレベーション図面終了、取り上げを行う。 SC865竪穴住居跡は掘り下げ続行。SD023、940溝、SC060竪穴住居跡は、それぞ れ1/10平面図実測、レベル測量、遺物の取り上げを終了する。SC001竪穴住居 跡現況写真撮影後、割り付け、平面図実測開始。SD010溝床面の精査。SC246-3 竪穴住居跡床面下層に確認された新たな焼土部分を精査する。

4日 SC931竪穴住居跡完掘写真撮影。SC935竪穴住居跡炭化物取り上げ、清掃。SX 833~835遺構にかけて平面図実測、レベル測量終了。SC865竪穴住居跡床面精査 続行。SC001竪穴住居跡遺物出土状況写真撮影終了。平面図実測レベル測量、遺物取り上げ終了。SC246-1竪穴住居跡掘り方まで検出する住居のたちわり終了。



図25 調査状況

SC244竪穴住居跡、及び14区北側部分のレベル測量終了。

- 5日 SC931、935~938竪穴住居跡、およびSD940溝それぞれ個別の完掘写真、SC865 竪穴住居跡とSX864焼成土坑の周辺の完掘写真、SX842、843、071焼成土坑それ ぞれの完掘写真、及び、たちわり写真撮影。その後、東側斜面全景、北側斜面全景の完掘写真を撮影する。
- 6日 SC001、935、937~939竪穴住居跡は、平面図実測終了。SC931竪穴住居跡はた ちわりを行う。SC246竪穴住居跡掘り方平面図実測、たちわり設定。
- 7日 SC001、060、246、931、935~939竪穴住居跡のたちわりを行い、写真撮影実測を終了する。並行して、1、6、7、8、12、13区のレベル測量を行う。
- 8日 SC001竪穴住居跡レベル測量後、遺物取り上げを行う。SC931竪穴住居跡貼床をはがし、最終床面の実測を行う。SC935、937~939、887、865、246060、074の各竪穴住居跡についても同様にたちわり、写真撮影後、貼床をはがし、平面図実

測を行う。SC135、136、 144、176竪穴住居跡はた ちわりを終了する。

- 9日 7区、SC931竪穴住居跡 レベル測量終了。SC135、 136、144、176竪穴住居 跡たちわり平面図実測、 写真撮影終了。当該遺跡 の全域の調査をほぼ完了 する。
- 10日 調査器材、遺物搬出。プ



図26 最終地区トレンチの設定

レハブ清掃を行い、撤収する。なお、11日から当分の間は地元作業員でSC246、060、074、176竪穴住居跡等の覆土についてフルイを継続し、ガラス小玉等の検出作業を続行することとする。

11日 フルイ作業の最終的な指示を行い、撤収する。

5、遺物整理の経過

現地の調査作業の大半が終了した4月11日の後、中村、池田、夏原は、適宜、本務の合間をぬって、少なくともいずれかが週に一~二度程度は、作業場を訪れ、その作業状況の進展を観察し、かつ指示を行い、相互に連絡を取り合った。なおこれらの作業を通じて若干量のガラス玉などが検出された。またこれらの作業は、調査作業の後ほぼ1か月間にわたった。

遺物整理作業は、主として大谷女子大学資料館において行った。この間、本格的な資料整理について福岡市教育委員会、埋蔵文化財センターのマニュアルに従うべく、その内容の説明及び指導に、福岡市埋蔵文化財センター二宮主任文化財主事ほかの来阪を得た。そこでは従来現地での理解以上に、実際面での問題点の扱いや処理が解決された。さらに時々の疑問点は、電話およびファックスによって連絡を密にして行った。

遺物の水洗いから開始したが、弥生土器および土師器など出土した多くの遺物は、崩壊寸前の土器が占めており、その強化が先決であった。したがってそれらはバインダー処理によって強化し次の段階へと至らせた。注記、接合段階では、できるかぎり実測に耐えるものを選定して作業に当たったが、資料的な価値から、必ずしもその範疇に加えられないものも対象としたものがある。なお市の遺物番号のつけ方にしたがって、進行させることとしたこともあり、余り小さな破片にはとくに見苦しい注記を行わないことにした。

やがて夏休み中に、参加学生のうち大谷女子大学および琉球大学の大半と、早稲田大学余語琢磨、川端、東京大学米川らによって土器、石器の実測作業が集中的に合宿という形態をとって、池田、中村らの指導のもと実施された。またこの時期に実測がもれた遺物については、池田、余語、寺嶋、中村が適宜実測作業を補足しておこなった。

一方、実測図や、膨大な量の写真資料については、寺嶋を中心にして写真資料の整理作業が福岡市のマニュアルにしたがって行われていった。さらに阿南写真工房により、写真の現像引き伸ばし焼き付け作業が順調に進められていった。また報告書用に用いる写真原稿については、中村との打ち合わせを経てレイアウトに至るまで阿南写真工房に依頼し、作成された。これは遺物写真についても同様に行い、とくに実測図での表現不可能な部分の表現および図版の実測図との対応にも注意を払うように指示し、かつそれを順守する形で完成を見たものである。

原稿の作成は、調査参加者全員の参加を得て行った。遺構については、各参加者に依頼し、その提出された原稿について、執筆者の意図を損なわない範囲で文体、用語の統一を図り、かつ一部修正して、池田の意見を得ながら中村が編集し

たものである。内容的には学生原稿については、まだまだ稚拙な部分もまま見られるとは思うが、若き研究者の卵らがせいぜい苦心して仕上げてきたものである ことを考慮いただければ幸いである。

また直接現地の調査に参加されていない研究者の方々からも貴重な原稿をいただいている。これらは、当該遺跡および出土遺物の研究にとって欠くことのできない重要な問題であり、とくにお願いして寄稿願ったものである。さらに調査の内容上必要と判断して、自然科学の分析を依頼したものもある。自然科学の研究者の方々についても可能な限り、現地にお越しいただいたが、その結果いずれも貴重な成果が提示されたと考えている。

以上、遺物整理の経過の報告を主旨である経過という観点からは異なる形では あるが、ここに記述をしてきた。ここに記述できなかった内容も多いが、一応こ の辺りで終えておきたいと思う。

(池田・中村)



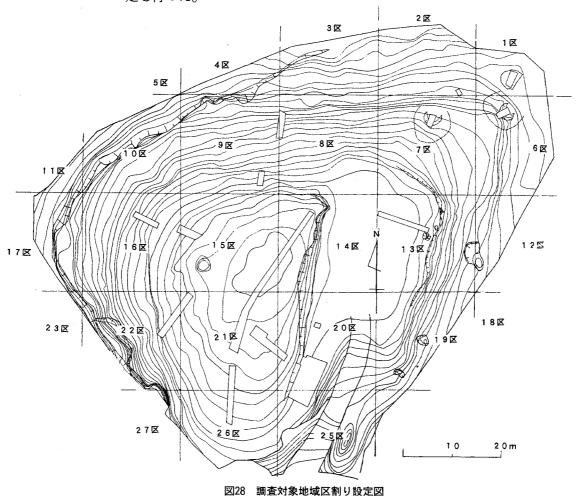
図27 フルイの様子

第2章 遺跡

1. 調査の方法と区画

すでに発掘調査の経過については、第1章で詳細に記述した如くである。ここでは遺構そのものについての内容と、それにいたるまでの調査の基本的な方法などについて記述する。

まず調査は、全体の円滑な進行と混乱を防ぐ必要があった。このためには正確な調査対象地域の測量図の作成が必要とされた。しかしわれわれの調査団がその実測を行っていたとすると、計画策定段階がかなり遅れることになる。したがって当初の計画は、調査開始段階に間に合わせるようにということで、開発業者側に依頼し作成されていた現状実測図をもとに作業を行うことになった。しかし提示された測量図は、実地調査の観察とは種々の部分で遺漏があり、本格的な調査段階までの一時的な用にしか役立たないことが判明した。したがって本格的な測量図は、調査の初期段階に作成するとして、まずはその提示図面によって区画設定を行った。



-25 -

区画

区画は調査地域全域を網羅するように設定する必要があり、また部分的に将来拡張されたとしても、十分に対応が計られるものではなくてはならない。さらに細かくしすぎると遺構の位置関係を細分することができたとしても、遺物整理段階では、より細かくなり、不要な分類となる可能性も考えられた。したがって調査団での協議の結果、一辺20mの正方形の区画を設定することとなった。さらにその区画は、おのおのの境界で明示し、調査団のだれにでも、自分の担当している区画が一体どの部分であり、どこの部分と関連を持っているのかを簡単に理解できるようにした。すなわち区画の境界には、木杭を配置し、それぞれに位置と絶対高(標高)の明示を行った。

この結果、対象となる地域丘陵に配置された区画は、 $1\sim27$ 区までであり、このうち5、11、23、27区は、いずれも対象となった範囲には含まれてはいるが、実際に地域の境界を順守して設定した。トレンチおよび掘削範囲からは除外されている部分である。

このように設定された各区画の配置図は、図28に示した如くである。なおこれらの区画設定に伴い、各地区および各遺構の実測図は、いずれもこれらの細分割した各ラインを用いて実施している。

2. 遺構の分布と層位

次に代表的な遺構の位置は区画ごとに見ると次の表1-1、1-2、1-3の如くとなる。区画はいずれも東西南北の座標にしたがって区画しており、遺構の分布状態が明らかとなってから行った区分でもない。このため複数の区画にまた

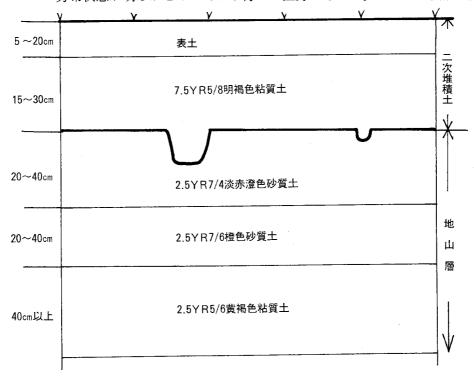


図29 基本層位模式図

がる遺構も少なからず見受けられるが、その状況はやむを得ないと考えている。 なお各遺構の項目でも記述があると思うが、大半の遺構は旧領斜面に位置して いることから、丘陵裾部の遺構部分が削平ないし流出しているということが多く

見られる。

層位

次に層位であるが、地域全体を網羅した形ではセクションなどを設定していない。それはすでに試掘段階でトレンチによって、各部分の層位が確認されているからである。調査当初は各設定されたトレンチのセクション観察を行い、その基本的な層位を観察した。ほぼその状況が全域を覆っており、一部丘陵裾部で体積物の範囲が異なるという程度である。

基本的な層位は、まず表面を覆っている表土層がある。この層は丘陵頂上部分では $5\sim20\,\mathrm{cm}$ をはかり、裾部では $20\sim30\,\mathrm{cm}$ をはかった。次に $2\,\mathrm{次堆積}$ 土の層が続いている場合と、すぐに地山の層になる場合とがある。とくに頂上部分あるいは丘陵の斜面部分では少ないことがわかり、裾部ではこの層がかなり厚いことが分かる。

基本層位

基本層位の図は図29を示した如くである。なお各遺構別には内部に堆積した土砂の状況を確認するためにセクションを設定し、そこでの層位の検討を行っている。

表 1-1 地区別及び時期別遺構区分

調査区	弥生~古墳前期	古墳後期	奈 良 時 代	不明
1区	SX339			
2 🗵	SX012	SX014、SX022	SX021	SD10
	SD19、SX024			
	SX342、SX271			
3⊠	SX039、SX047	SD023		
	SX049、SX062			
	SX063、SX064			
	SX067, SX071			
	SX073、SX075			
	SX078、SX080			
	SD082、SX092	SX098		·
4区	SX093、SX093			
	SX099			
6区	SX320、SX413	SX309	SX401	
	SC001, SX002, SD016	SX864	SX274	·
7区	SC865、SX035		SX361	
'	SX227、SX234、SX404			
	ST270, SX266, SD273			
	SX034, SX037, SC060	SX054	SX248	SD217、218
	SX038, SX055, SD388		SD249	
	SX056、SX058			
	SD059、SX226			
	SX228、SX229			
8区	SX231、SX232			
	SX235、SX237			
	SX239、SX240			·
	SX241、SX246、SX247			
	SX251、SX252			
	SX257、SX258			
	SX259			
	SC074、SX057	SX09、SX120	SD083	·
9区	SC135、SX072		SX121	
	SX081, SX118, SX119		SX843	
	SD122、SX127			
	SX130、SX131			
	SX132、SX147			
	SX261、SX341			
	SX346、SX396			
	SX411、SX867			
	SX842、SX706			

表 1 - 2 地区別及び時期別遺構区分

調査区	弥生~古墳前期	古墳後期	奈 良 時 代	不 明
10区	SX456、SX460		SX420, SX427	SX469
	SX704、SX705			
12区			SX898, SD903, SD942	77.1
	SC873、SX884	SC935、SC936	SX874、SX883	SC937、SC887
10157	SX900、SX910	SD940, SC887	SD894、SX909	SD1066
13区	SX913、SC939	SC938	SC944	
	SX947			
14区	SC244	SD1065		
	SC136、SX013、SB951		SX186, SX194	
:	SC176、SX061			
	SX068、SX133			
•	SX134、SX137			
15区	SX138、SX139、SX142			
1	SC144、SX149、SX150			
	SX151、SX155			
	SX159、SX164、SX850			
	SX868、SX945			
	SX793、SX614	SX675	SX662	SX614、SX625、SX626
	SX625、SX626			SX331, SX423, SX042
	SX331、SX423			SX425、SX426
	SX425、SX426			SX475、SX565
	SX475、SX565			SX663、SU691
	SX627、SX629			
	SX638、SX 641			
	SX645、SX647			
	SX649、SX650			
16区	SX651、SX652			
	SX653、SX661			
	SX658、SX664			
	SX668、SX669、SX670			
	SX672、SX674			
	SX678、SX679			
	SX680、SX685			
	SX686、SX692			
	SX693、SX696			
	SX792			
19区	SX917、SX926	SC931、SX930	SX933	
	SX929、SX946			
20⊠			SX490、491	

表1-3 地区別及び時期別遺構区分

調査区	弥生~古墳前期	古	墳	後	期	奈	良	時 代	不	明
21区	SC708、SC709	SX778								
	SX741、SX786									
	SX591, SX598, SC710									
	SX711, SX712, SX716									
	SX724、SX729									
	SX730、SX731									
	SX770、SX772									
	SX774、SX777									
	SC782、SX784、SX785									
	SX812、SX826									
	SX827、SX834									
	SX837、SX840									
	SX855									
<u>.</u>	SX747、SX748									
	SX794、SX795									
22区	SX796、SX800									
	SX801、SX804									
	SX825、SX831									
25区						SX510、	SX5	511		
						SX812				
26区	SX588					SX524、				
	}	-					SX5	553、SC570		
27区						SX600				

3、遺構各説

竪穴住居跡

A、竪穴住居跡

SC001

• S C 0 0 1 竪穴住居

S C 0 0 1 - A

本遺構は、遺跡の北側斜面の標高15mに位置する。A・B二つの住居跡が検出されている。とくにB住居がA住居を切る形で確認された。A住居は壁溝の存在が確認できたものの、角の一部しか残っておらず、柱穴の存在や住居形態などについては全く不明である。角の残存状況から、おそらく方形を成していたものと考えられる。

SC001-B

B住居は方形を呈し、南壁の高さは55 c mと高い。しかし、斜面のため北側半分が削平のため失われている上に、住居中央に風倒木によると思われる大きな撹乱土壙があるなど、あまり良好な残存状態とはいえない。おそらく長軸は東西方向(5.5m)と推測される。炉跡や壁溝は確認できなかった。西側にはベッド状遺構を配するが、一部に破壊をうけたかのような残存状態であった。柱穴と見られるものは、北西隅のベッド状遺構上(P-9)と、北東隅(P-7)の2か所で検出されており、前者は直径70cm、深さ24cm、後者は直径70cm、深さ26.5cmとなっている。またベッド状遺構上には、もう一か所柱穴らしきものが検出されているものの、深さは10cm前後と非常に浅い。本遺跡にみられる住居址では2本の柱穴が一般的であるが、B住居については明確にすることができない。なお、床には粘土状の土が貼られており、この貼床には、数片の土器片が含まれている。

遺物

遺物は、覆土上部より砥石のような石製品や縄目のある石製品などが出土し、 中央南壁側の床面直上では、特に集中して甕や壷などの土器片が出土している。 これらの土器の年代観をもとに、本住居は弥生時代後期に比定される。(宮城)





図30 SC001竪穴住居跡遺物出土状態

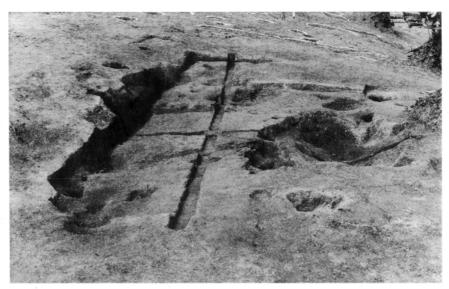


図31 SC001竪穴住居跡及び遺物出土状態

SC060

SC060竪穴住居(図版1)

調査区北部域の 3 区及び 8 区にわたる住居跡である。主軸方向はほぼ南北で 8 C 0 6 0 0 1 、 2 、 3 竪穴住居が三基重複して所在する。当初は周辺に遺物が錯乱していたこともあって、土坑として理解しセクションを残して調査を進めていったが、 $10\sim20$ cm程度掘り下げた段階で住居として確認でき、以後順調に調査は進行した。

SC60-1 竪穴住居は東西方向に7.8m、南北方向の残存長は、0.8mを各々はかる。側溝は、東南方向にわずかに残しているが、西側部分はSC60-2 竪穴住居によって攪乱され、確認できなかった。なお側溝の幅は、 $20\sim30$ cmで、深さは20cm前後をはかる。西側部分には、幅1.8m、長さ1.2mのベッド状遺構がみとめられる。さらに床面中央部には炭、灰の堆積が見られた。炉跡の可能性が濃いものと考えられる。

SC60-2 竪穴住居は、60-1 の東端から90cm部分から、幅10cm前後の溝が穿たれており、当該部分で1、2 の各住居が重複していたことが明らかになる。さらに南側の側溝を、1、2 住居が共有しており、おそらく 60-2 住居の東西長は、6.8m前後、さらに床面の残存長は0.7m前後と見られる。

SC60-3 竪穴住居は、主軸方向からやや西に偏し、60-1 の西端から約20cmの部分を、西端とする。南側壁溝は明瞭に確認されたが、東西方向の壁溝は十分には確認されなかった。なお溝に代わって、わずかに5 cm前後の段差が当該部分に見られるに過ぎない。ところで60-1、2、3 住居内部には、直径20cm前後をはかるピットがいくつか置しているが、明らかに当該60-3 住居に伴うとみられるものは少ない。60-3 に伴うと見られるのは、南側東端部分と南西端部分の2 点のピット、さらに南部中央に位置する 1.1×0.8 m、深さ20 cm前後の土坑が当該住居跡に伴うものと考えられる。このほかにもピットが位置しているが、60-1、2、3 住居跡のいずれに伴うものであるのかは判定できない。また中央部に設定したセクションによると60-3 住居は貼り床がわずかにみとめられている。さらに床の中央部から東に偏って炭灰の散布が見られた。当該住居

跡は北側のすべてを丘陵地形のため流出しており、想定不能である。

出土遺物には、弥生、土師器が大半を占めており、総点数(破片数)6222点を数えこのほか鉄製品1、ビーズ玉10、鉄滓1、石器3点がみられる。なお弥生、土師器の器種、器台、高杯、甕などである。

SC74

SC74竪穴住居(図版2)

S C 7 4 - A

SC246の北側、およびSC60の西側に位置し、2棟の住居址が切りあった状態で検出された。A住居(1棟目)はB住居(2棟目)に切られた形で検出され、北側の多くを消失し、 $1 \, \text{m} \times 1 \, \text{m}$ 程度が残存するのみである。壁下には壁溝がめぐらされ、壁溝内覆土より鉄鏃が出土した。貼り床は検出されていない。

SC74-B

B住居(2棟目)も残存状態が悪く、南側を残して約半分が消失している。西側にはベッド状遺構を配し、さらにベッド状遺構内には貯蔵穴を持つ。貯蔵穴の深さは0.7mで段を有し、覆土より石包丁が出土した。南側には壁溝がめぐらされ、南壁中央付近には0.6×0.8mをはかる土壙があり、この覆土中より炭化物・砥石・土器片が出土した。すぐ近くに炉跡をもつことから、炉の関連施設かと思われる。炉跡は、南向きに開口してコの字状の盛り上がりを持つ。南側が焚き口と推定され、周囲に炭化物がみられる。ピットも検出されたが、直接関連する柱穴を断定するに到らなかったまた、貼り床も検出されているが、厚さ1㎝に満たない部分がほとんどである。

遺物

出土遺物には、小型壷形土器・支脚・鉄滓・砥石・多数の土器片があり、覆土 中と床面付近より出土した。このなかで鉄滓は本住居址の南側に焼成遺構がある

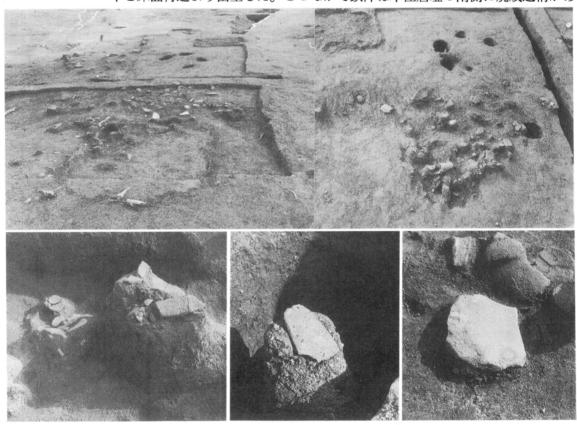


図32 SC074竪穴住居跡遺物出土状態

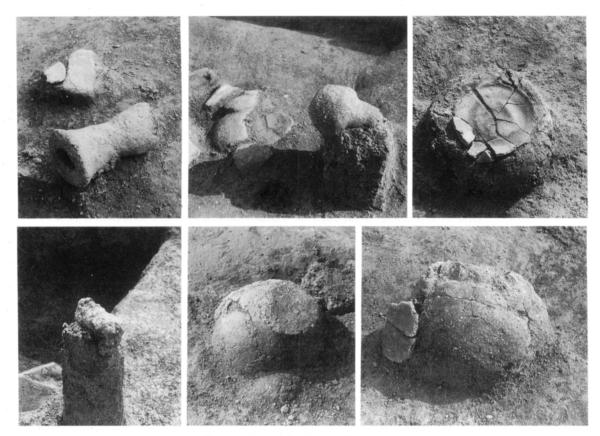


図33 SC074竪穴住居跡及び遺物出土状態

ため、注意を要する。床面付近より平底の底部が出土しており、これが弥生時代後半前葉と推定されることから、本住居址もおおよそこの頃のものと思われる。 (西園)

SC135

• S C 1 3 5 、 6 竪穴住居 (図版 3)

SC135と136竪穴住居跡は、北側斜面の中腹に2棟重複して検出された住居跡でSX121遺構の南東部に位置する。住居跡のうち北側がSC135、南側がSC136である。どちらの住居址とも、等高線と平行に構築され、斜面上にある為、北部は、削平流失している。新旧関係は、SC135がSC136を切って建てられており、SC136より新しい住居である。

SC135住居は、方形の竪穴住居で、主軸方向は、N-39°-Sをはかる。 残存規模は、東西4m、南北1.8m、最深部は20cmであり、全体の4分の1しか 検出されなかった。住居の南側に壁溝が走っており、南側の壁近くで検出された 貯蔵穴から、石包丁の未製品が三枚丁寧に重なって出土した。これらの石製品の 石材は、2枚が砂岩凝灰岩で、1枚は赤紫色凝灰岩で産地は、立岩産であると考 えられる。その他にもう1枚、住居内で石包丁の未製品だと思われるものが出土 した。この住居の南東部で検出された土壙からは、須恵器が出土しており、SC 135より時期が新しいと思われる。なお柱穴は、確認できなかった。時期は、 弥生時代後期だと思われる。

貯蔵穴

SX137

SX137土坑は、SC136竪穴住居跡の南西部にあり、木の根と見られる。 新旧関係は、SC136との切り合いから、SC136より新しいと思われる。

(村上)

SC144-1、2 SC144-1、2竪穴住居(図版4)

調査地域の中央部、15区に位置する竪穴住居である。主軸方向N-8°-Eを はかる。144-1住居は、北部、東部、南部の各々壁溝が検出されているが、 東側の溝は中央部付近が大きく試掘調査によって攪乱されている。なお北側部分 の溝の延長は3.05m、幅16cm、深さ(たちあがり)12cmをはかる。また東側での 一辺の長さが、5.8m、溝の幅は21㎝、深さ(たちあがり)15㎝、さらに南側の 溝の延長3m、幅21cm、深さ18cmを各々はかる。

床面は、幅2.2m残存しており南端溝から1.4mの位置に幅1.1×1.0mの炭灰の 分布する部分があり、当該部分が炉跡である可能性が濃い。ピットは床面から7 個以上検出されているが、これらのうち南北端に位置する30cm前後のピットが柱 穴を形成しているものと見られる。

144-2住居は、主軸方向 $N-12^{\circ}-E$ をはかり、144-1住居の中央部か ら西側部分のさらに南部分を攪乱する形で位置している。壁溝は見られず、わず かにたちあがり段差から推定できるものである。南北の延長4.1m、東西の残存 長は約1.0mでこれにより西側は斜面によって自然流出により失われている。な お床面上のピットは多く、当該住居とどれが関係するのかの判断は困難である。

出土遺物には弥生、土師器が1465点、石器が2点をかぞえる。

SC782 SC782竪穴住居

> SC708竪穴住居の北、東、南に重複してひとまわり大きな竪穴住居である。 主軸方向N-19°-Wをはかり、東側の一辺の延長は7.5mで、東西の残存長4. 2 mをはかる。なお北側には壁溝は全く認められず、東側では中間部分から南側 でSC709竪穴住居の溝を共有するかたちで検出されている。しかしSC70 9の溝と当該住居に伴う溝もある。北側の段差の中位に長さ1.65m、幅1.12m、 深さ42㎝をはかる楕円形のSX784土坑が重複している。床面上のピットにつ いてはSC709、708住居のものと大半が重複すると見られるが、北側のピッ トは当該住居に伴う柱と考えてよいだろう。

SC176-1 SC176-1竪穴住居

> 調査区の中央、丘陵の頂上部に当たり傾斜も緩やかな15区に位置する竪穴住居 跡である。住居の主軸はN-30゜-Wである。北西部をSC176-2竪穴住居 に切られ、北部を木の根の撹乱によって削られており、全体の3分の1程度が残 存するのみで、3.3×1.3mが現存の大きさである。

> 残存する壁の高さは遺構確認面まで 6~12cmである。周壁溝は検出されなかっ た。南東隅から、南壁に沿うような方向で北東に1.3mのびる、幅25~30cm、深 さ11~15㎝の溝がある。溝の機能は判然としないが、住居に伴うものであろう。 床は堅緻な粘土質のもので、南西隅付近に段があり、西側が8cmほど低くなって いる。しかし、土層断面の観察からも貼り床構造は検出されなかった。

> また、南壁際のピットは土層観察より後世の掘り込みであることが確認された。 住居の覆土は赤褐色土である。

> 床面に接して弥生土器が多数検出された。また、床面の土器に接するようにガ ラス製小玉が検出された。 (米川)

周壁溝

SC176-2 • SC176-2竪穴住居

調査区中央、丘陵の頂上部に当たり、傾斜も緩やかな15区に位置する竪穴住居跡である。SCSC176-1竪穴住居跡を切っている。SC176-1竪穴住居とは主軸方向を違え、主軸方向が $N-71^\circ-W$ となっている。後世の削平によって北西にゆくにつれて浅くなっているためと、西側、北側に後世の撹乱があるために、壁は南側と東側で確認されているのみである。全体の3分の1程度が

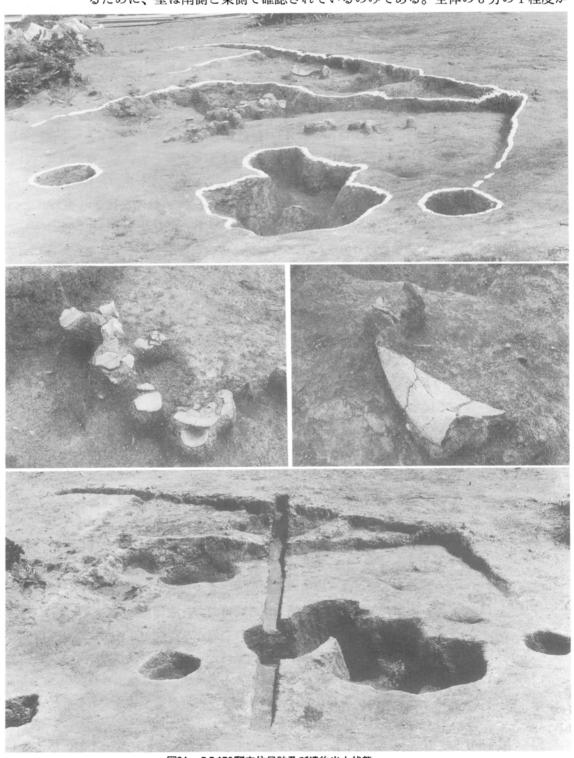


図34 SC176竪穴住局跡及び遺物出土状態

残存しており、 2.9×2.0 mの大きさである。

周壁溝は南壁のみ見られる。幅 $10\sim15$ cm、床面からの深さ $1\sim3$ cmである。残 存する壁の高さは遺構確認面まで3~15㎝である。壁は緩やかに立ち上がってい る。床は堅緻な粘土質である。SC176-1竪穴住居跡と同じく貼り床構造は 検出されなかった。

住居の覆土は上から灰褐色土、にぶい赤褐色土、明褐色土となっている。床面 に接して弥生土器が多数検出された。 (米川)

SC244 SC244竪穴住居

> 調査地域の中央部から北部域の、14区に位置する竪穴住居である。南部と西部 の壁溝の一部および西南隅を残す。東西の長さは1.9m、南北の延長は1.1mをは かり、壁溝の幅は10cm前後、深さは20cm前後である。床面の残存状況はきわめて 悪く、わずかな土質の差から推定せざるを得ない状況であった。ちなみに床の残 存幅は最大0.9m程度であろう。床面上には、土器の破片が確認されており、ピッ ト内部からは炭化物が検出されている。

> 出土遺物には、弥生、土師器が総点数で153点見られたが、他の遺物は確認さ れていない。

SC246 • S C 2 4 6 竪穴住居

> SC246は遺跡の北側斜面の中腹に位置する竪穴式住居である。1、2、3の 3軒からなっており、層序的に1の上に2、3が作られている。さらに3は2を 切って作られている。斜面に位置するため各住居とも半分のみの検出である。

SC246-1SC246-1 は残存部分からして約6 m四方の方形を呈すると推定される。 検出された2つの住居隅には、高さ約10㎝、広さ約140㎝四方のベッド状遺構を 伴う。壁面は最大で約40cm残存する。柱穴は2本検出され、直径45cm、深さ約49 cmをはかる。床面は斜面上方の地山を削平し、斜面下方を版築して固めている。 出土遺物には弥生土器の甕、鉄器などがある。

SC246-2SC246-2は1辺約3.5mの方形住居と思われる。残存する壁はコの字状 を呈し、壁に沿って幅約5 cm、深さ約3 cmの壁溝がめぐっている。遺構としては

残存状態が悪く、出土遺物などについては不明である。 SC246-3SC246-3は

残存部分より1辺約 3.9mの方形住居と 推定される。コの字 状に残存する壁に沿 うように、幅約5cm、 深さ12cmの壁溝がめ ぐっている。柱穴は 2本確認された。直 径約50cm、深さ約50 cmである。この住居 跡からは銅鏡の鋳型



図35 SC246竪穴住居跡調査状況

が床面より出土しており、青銅器生産に関わる遺構として注目される。床面からは焼土や炭化物が検出されている。また、住居内南西側には70×90cmの楕円形状を呈する焼土塊が検出された。その焼土坑は壁面の一部のみが焼けており注目される。

鋳型

出土遺物に銅鏡の鋳型1点、弥生土器十数点などがある。

(田尻)

SC249

SC249竪穴住居

SC249竪穴住居の北部に接する形で検出された小型の竪穴住居である。壁 溝は全く確認されず、わずかに方形の落ち込みから各コーナーを確認することが できたにすぎない。南部での東西の延長は、2.69m、たちあがりは13cmをはかる。 また南北の延長は45cmを測り、東端、西端に大きな自然の穴がみられる。

出土遺物は、弥生、土師器などの確認はされず、わずかに上層面から中世の土 器が採集されている。しかしこの遺物は、当該住居跡の時期を示すものではない と考えられる。

SC570

• S C 5 7 0 竪穴住居

調査区の南、2.6 区に位置する住居址である。西斜面で等高線に沿って構築された住居であるため、遺存状況は良好ではない。元の斜面に対して深く掘り込まれた東壁側が比較的よく遺存しており、元の形状が推測される。遺存部分は5.0 ×1.9mの西側に裾の広がる方形を呈している。住居の主軸方向はN-76° -E である。

周壁溝は幅15~24cm、床からの深さ1~9cmである。周壁溝は住居を全周しな

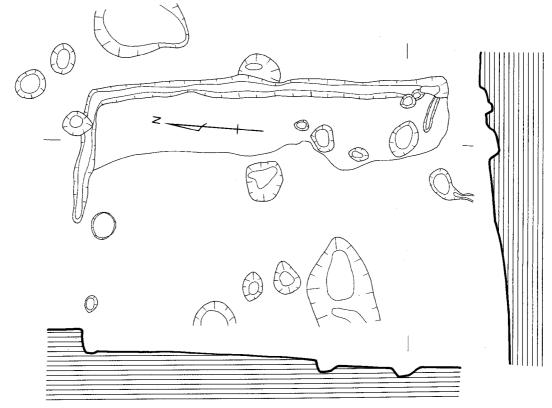


図36 SC570竪穴住居跡遺構実測図

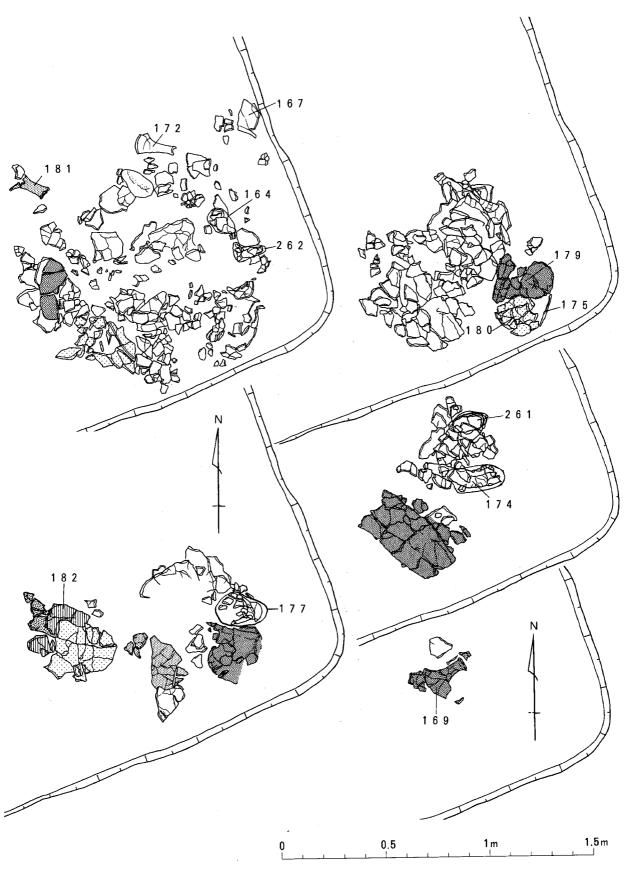


図37 SC708竪穴住居跡床面土器接合状況 (左上から第1面左下第2面右上第3面右中第4面右下第5面) 尚、付してある番号は遺物実測番号である。

いようで、東壁では周壁溝であるのかあるいは別の機能を持ったものであるのか 判然としない幅7~10cmの溝が55cm程西にのびているのがみられえるだけである。

周壁溝底部から遺構確認面までの高さを壁の高さとすると東壁が16~28cm、北壁が3~7cmである。どちらも緩やかに立ち上がっている。床面は堅緻であるが、貼り床構造は認められなかった。柱穴は4箇所と考えられるが、確認できたのは南東隅の1箇所と住居西側のSX578、SX574遺構の3箇所である。径50~70cm、深さ14~28cmである。ただし、柱穴が長方形の頂点上に位置しないことから、柱穴は別の形態をとっていた可能性もある。 覆土は上層が褐色土、下層が暗褐色土となっている。周壁溝には上層から暗褐色土、明黄褐色土が堆積していた。この北壁際明黄褐色土層からは炭化物が少量検出されたが、壁体を支えていた板材が炭化したものであろう。

遺物には土師器片、須恵器片が少量見られる。

(米川)

SC686

S X 5 7 8

S X 5 7 4

SC686竪穴住居

調査地域の西部、16区に位置する竪穴住居である。地形的には西側丘陵斜面中腹にあたる。主軸方向はやや東に偏する東西方向をとる。壁溝はいずれも残存状態が悪く、わずかに南、西、東側の三方向に立ち上がりの痕跡程度の段を認める。特に北側では、SU691貯蔵穴などの土坑およびピットによって攪乱あるいは自然流出より失われている部分が多い。中央部に見られる土坑が炉跡である可能性が濃い。

当該住居跡の南側の一辺の長さは約7.3m前後と考えられる。

出土遺物は、弥生、土師器が66点見られたに過ぎない。

SC708

SC708竪穴住居跡(図版5)

調査区西端から約14.0m、中央やや南よりに位置する。平面は長方形を呈し、主軸はN-18° -Wである。南北は約4.4mをはかる。また東西は、西端が削平を受けているため正確な長さは不明であるが、4.0m前後であると推測される。床面はほぼ平坦で、貼床がなされており、検出面から床面までの深さは0.23m以下である。また壁はほとんど垂直に立ち上がっていた。

周溝は住居跡の残りの良好な北壁と東壁において検出された。幅 $0.10\sim0.18\,\mathrm{m}$ をはかり、床面からの深さは $0.04\sim0.10\,\mathrm{m}$ である。また、北壁においては同様の溝が周溝の $0.20\,\mathrm{m}$ ほど内側に検出している。このことから北壁部分は拡張が行なわれたと考えられる。また、住居跡東側の北から約 $2.7\,\mathrm{m}$ の周溝部分から西へ向かって、住居跡内に床溝が検出された。幅約 $0.10\,\mathrm{m}$ 、深さは $0.03\,\mathrm{m}\sim0.09\,\mathrm{m}$ をはかり、長さは約 $3.6\,\mathrm{m}$ 分が検出しているがさらに西へ続くものと思われる。東壁の周溝部分には、深さ $0.10\,\mathrm{m}$ 、平面が $0.60\times0.50\,\mathrm{m}$ の楕円形を呈するピット(P12)が設けられている。そこにたまった水を床溝により外部へ排水していたものと思われる。

住居跡の覆土はその土層観察から、自然に堆積したものではなく、埋め戻した可能性が高い。全体的に粘土質のかたい土で、赤褐色粘土ブロックのはいりこんだものが多い。

住居跡内中央やや南よりには、長軸(東西軸)約1.0m、短軸約0.8mの、平面

が楕円形を呈するピット(P6)が検出された。覆土における炭化物の割合が高いことから炉跡と思われる。床面からの深さ約0.15mで、擂り鉢状に掘られたものである。またこの炉跡をはさんで北と南に2つのピットが検出された。北側ピット(P2)は北側から約1.4m南に位置する。長軸(東西軸)約0.85m、短軸約0.60mをはかり、平面は楕円形を呈する。深さは $0.08\sim0.15$ mをはかる。ピット内上部の壁面直上から、弥生土器の壺の口縁部~頸部が出土している。南側の0.70m、短軸約0.55mをはかり、平面は不整形な方形を呈する。深さは $0.25\sim0.31$ mをはかり、底部直上から土師器の坩が出土している。この他、床面からは9個のピットが検出されたが、当住居跡に伴うものかは不明である。

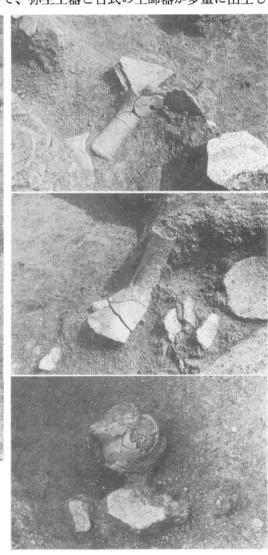
土器だまり

そして、この住居跡の特徴として、南東隅に存在する土器だまりがあげられる。 検出面ですでに土器の存在は認められていたが、南北約1.0m、東西約1.5mの範囲は赤色粘土で被われていた。この粘土は土器の胎土として用いたものとも考えられるが、完成品がその場で廃棄されたといった状況をうかがわせる土器が多数検出された。土器だまりの性格は不明であるが。土器の出土状況から、短期間に形成あれたものであると思われる。

遺物は、土器だまりのものも含めて、弥生土器と古式の土師器が多量に出土し







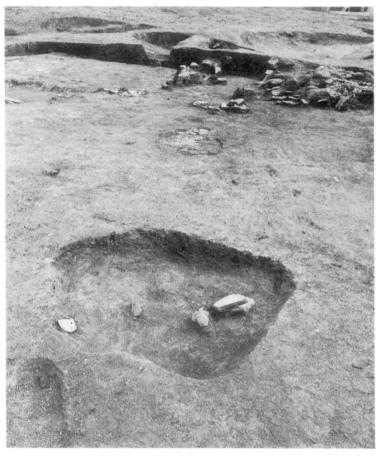






図39 SC708竪穴住居跡及び遺物出土状態

ビーズ玉

SC709

ている。土器の時代は、弥生時代後期から古墳時代はじめごとと考えられる。器種としては、甕・壺・鉢・高坏が出土している。割合に高坏の出土が多く、少なくとも7個の存在が認められる。また、特記すべきものとして、覆土中からライトブルーのビーズ玉が2点検出された。 (川端美由紀)

SC709竪穴住居

SC708竪穴住居の南東に重複して見られる竪穴住居である。主軸方向N-9°-Wで、東側の壁溝の延長3.7m、幅14cm、深さ11cmさらに南側の延長は、1.0m、幅8~1 cm、深さ2 cm以下をはかり、いずれも良好な保存状態ではなかった。SC782竪穴住居と重複し、中央部分をSC708竪穴住居によって攪乱されている。

石器

出土遺物には、弥生、土師器が9点、石器(砥石)が1点みられる。SC70 8、SC709、782竪穴住居はいずれも短期間のうちの重複と見られ、時期 は弥生-古墳時代前半頃と考えられる。

SC782 SC782竪穴住居

SC708竪穴住居の北、東、南に重複してひとまわり大きな竪穴住居である。主軸方向 $N-19^\circ$ —Wをはかり、東側の一辺の延長は7.5mで、東西の残存長4.2mをはかる。なお北側には壁溝は全く認められず、東側では中間部分から南側で SC709竪穴住居の溝を共有するかたちで検出されている。しかしSC709の溝と当該住居に伴う溝もある。北側の段差の中位に長さ1.65m、幅1.12m、深さ42cmをはかる楕円形のSX784土坑が重複している。床面上のピットについ

てはSC709、708住居のものと大半が重複すると見られるが、北側のピットは当該住居に伴う柱と考えてよいだろう。

SC710 SC710竪穴住居跡

調査区の東西側斜面から検出された竪穴住居跡である。主軸方向N-77°-Eを呈し、南北方向は約5.6mをはかる。地山の流出のため全体に遺存状態が悪く、斜面下方の西側半分は失われており、また北東の隅が試掘トレンチにより削平された、南東の隅と北側の一部を検出しただけである。

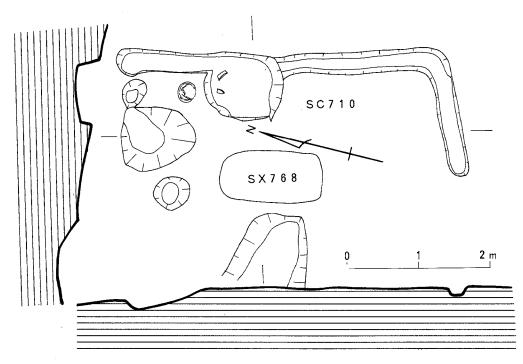


図40 SC710竪穴住居跡遺構実測図

比較的良好な東側でも壁の立ち上がりはほとんど確認できなかったが、壁溝の掘り方によりプランの把握は可能である。掘り方は上面の幅約0.22m、底面は幅約0.11m、検出面からの深さ約0.15m逆台形状を呈する。埋土の状態と位置関係から、住居跡東寄りのSX768が柱穴に相当すると判断した。したがって、南北方向に2柱穴を有する住居跡と考えられるが、西側の柱穴は検出することができなかった。

床面は地山の土に他の対が混入しており、地山の土を利用した貼床であると思われる。この床面に伴うものとして、前述の柱穴の他に、東側の壁に接する位置に一辺約0.7m、深さ0.2mの方形土壙を検出した。土壙内の埋土中から、底面より0.12mほど浮いた状態で朱塗りの土器片(No.1)・土器片(No.2)が出土した。埋土とともに流入したものと考えられる。また、この土壙の北側床面直上から土器片が出土しており、住居跡の廃絶年代を示す可能性が高い。住居内の他の土壙は、埋土から後世のものであると判断した。 (福本美智子)

SC865-1 • SC865-1竪穴住居

調査区北東部の頂上に近い斜面上に位置しSC001竪穴住居跡の南西約12mに位置する。SC865-3、4竪穴住居跡に切られており、残存規模は長さ

 1.2×4.2 m、壁高の最も高いところは16.0 cmであり、北へ行くほど低くなる。北部は斜面のため流失していた。方向は $S-78^\circ$ -W である。形状は方形か長方形か判別がつかない。幅 $22.0 \sim 13.0$ cmの壁溝が確認されたほか、西側に幅1.06 m、高さ7 cmのベット状遺構が検出された。また南東コーナーには落ち込みがあり、ここから鉄鏃が2 個出土した。貼り床は検出されず、柱穴はSC865-3、4 竪穴住居跡に切られて失われたと思われる。

遺物は、鉄鏃の他に土器片、黒曜石などが出土した。時期は特定できなかった。 (中池)

SC865-2 • SC865-2竪穴住居

SC865-4竪穴住居跡とSX864焼成土坑に切られているため、北西コーナーしか検出されなかった。残存規模は長さ 1.12×1.12 m、壁高の最も高いところは14cmであり、SC865-1竪穴住居跡と同じく北へ行くほど低くなる。北部は流失していた。したがって規模、形状は不明である。方向はS-29°-Wであった。

遺物は高杯が床面直上から出土している。時期は古墳時代初頭と思われる。 (中池)

SC865-3 • SC865-3竪穴住居

遺構確認時において、この遺構の存在は確認されなかったが、土層観察によってSC865-1、4 竪穴住居跡と切り合っていることが分かった。新旧関係はSC865-1、3、4 の順に古い。残存規模は長さ 1.1×1.3 m、壁高の最も高いところは8.5cmであった。南西コーナーしか残存しておらず、その規模、形状は不明である。方向はS-78° -Wであった。木の根の撹乱により、遺存状態は悪かったが、壁に沿い幅13.0cmの溝があるので、壁溝があったと思われる。

遺物は土器片が出土し、図化できるものはなかった。時期は特定できなかった。 (中池)

SC865-4 • SC865-4竪穴住居

SC865-1、2、3竪穴住居跡を切って構築されており、方向はS -39° - Wであった。残存規模は長さ $4.2 \times 2.7 \,\mathrm{m}$ 、壁高は最も高いところで $36 \,\mathrm{cm}$ になり、北に行くほど低くなる。北部も流失していた。主柱穴はP-2の可能性があり、この柱穴は柱を抜いた痕跡がみられた。もしP-2が主柱穴とすると、この住居は主柱穴が2本の住居と思われる。また形状は方形か長方形が判別できない。P-2の他にこの住居に伴うピットはP-1である。しかしP-3は上層面で確認できなかったが、2つの遺構からなり、土色が住居の覆土である黄褐色や明黄褐色より黒かったことから後世のものと思われる。また南東コーナー近くに4~8 cmの三角形の地山の高まりが検出されたが、用途などは不明。幅 $12\sim23 \,\mathrm{cm}$ の周溝は確認されたが、貼床は検出されなかった。

遺物は土師器壷、碗などが検出した。時期は古墳時代初頭と思われる。(中池) ・SC873竪穴住屋

SC873 • SC873竪穴住居

本遺構は、東側斜面の最も上方の標高17.6mに位置する。住居跡の北側東側は 斜面のために大きく削られており、僅かに南西隅の壁が確認できる。住居跡の規

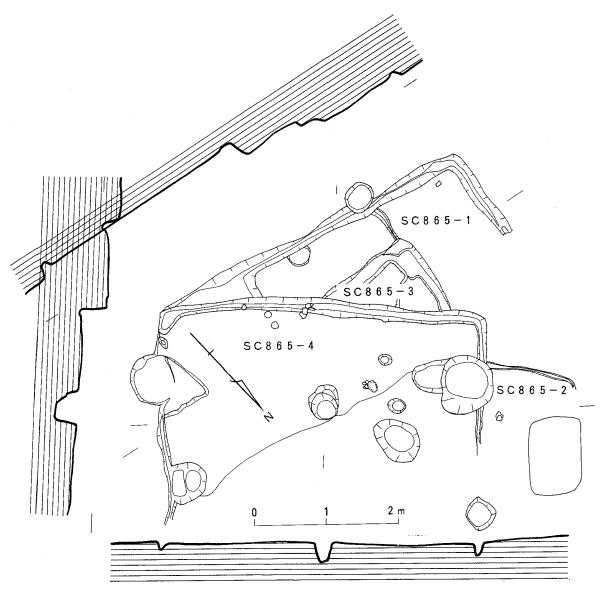


図41 SC865-1、2、3、4竪穴住居跡遺構実測図

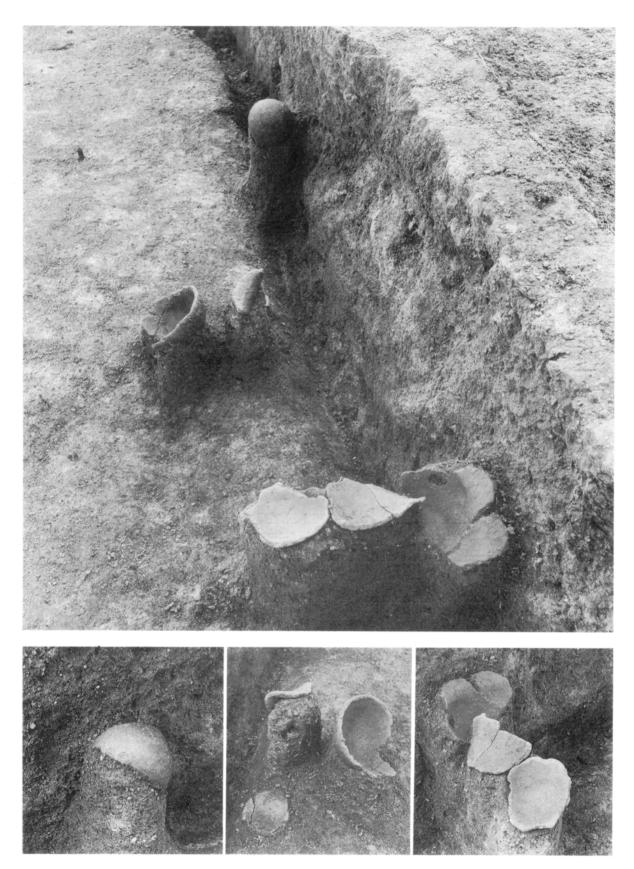


図42 SC865竪穴住居跡遺物出土状態及び細部

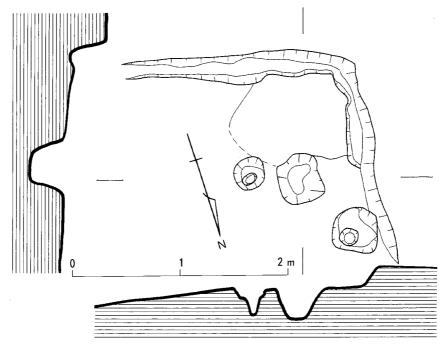


図43 SC873竪穴住居跡遺構実測図

模は、現存部で南北長2.1m、東西長2.1mを測る。壁際には周溝がめぐっており、 周溝には柱痕が認められる。 (出合)

SC887

• S C 8 8 7 竪穴住居

本遺構は、東側斜面の上位、標高16.1mに位置する。住居のプランは方形を呈し、4本の柱をもつものと想定される。住居の規模は、現存部で南北長4.0m、東西長2.1mを測り、西側と南側に周溝がめぐっている。周溝には西側に2ケ所柱痕が認められた。主柱穴は南北方向に2ケ所確認できる。 (出合)

SC931

• S C 9 3 1 竪穴住居

19調査区に位置する、現状で長辺3.6m、短辺3.0m余り、主軸N-71°-Wをはかる方形竪穴住居である。丘陵斜面にあるため、遺構の東側は土砂の流れ落ちによって消失している。確認できる遺構の立ち上がりは50cm程で、主柱は4本である。住居西壁側の中央は直径約80cmの円形状に焼けており、ここが炉跡と考えられる。

出土遺物には須恵器蓋杯、甕、土師器甑などがあり、出土位置は、炉跡周辺と 北西隅の2箇所に大別される。出土した須恵器杯により、本住居の使用年代は6世紀後半に比定される。なおSC931竪穴住居跡の西側の窪みは、SC931 竪穴住居跡に附属する何らかの施設と考えられるが、その用途は不明である。

(井上)

付属施設

SC 9 3 5

• S C 9 3 5 焼失住居(図版 6)

本遺構は、東側斜面の標高17.3mに位置する方形住居跡で、SC939竪穴住居跡を切る斜面に位置するため、住居の東側半分は大きく削られている。床面上には炭灰・焼土が散布しており、特に西側周溝付近、及び中央より北へ約1.2mの辺りに集中してみられる。壁際には幅15~25cmの周溝がコ字状に巡っている。

なお、ベッド状遺構はみられない。住居跡の規模は、現存部で南北長4.4m、東西長1.5mを測る。壁は最も残りのよい西側で0.5mを測り、柱穴の深さは0.4mを測る。床面には貼り床を施す。古墳時代の須恵器・土師器が出土しており、住居跡の時期は、その中の須恵器の年代観から6世紀中頃と考えられる。また、注目すべき遺物として床面より10cm程度上(埋土中)から石錘の出土もみられた。

石鐘岩化材

床面に散在する炭化材は、丸太材の上に板材が直行して重なる形で出土している。板材は壁と平行関係にあり、その距離も20cmと離れていない。板材の木目は南北方向をむいており、西側の壁にはこの板材の一部と思われる炭化材(木目は南北方向をむいている)が張り付いた状態で確認できた。これらのことからすれば、板材は壁に張りつけた状態で使用されていたことが想定される。また周溝には丸太材の柱痕が見られることから、床に垂直に立てられていたものと考えられる。この両者は、板材を壁に張り付けてそれを止めるための丸太材を杭として使用したものと理解される。

焼失の原因

なお、焼失の原因については、突然の火事によるものならば、床面には生活時に使用していたと思われる土器が残っていても不思議ではない。ところが、この住居跡には完形の土器どころか破片の土器もわずかしか見られないことからすれば、焼失する前にすでに土器をはじめとする家財を運び出したことが考えられる。そこには、突然の火事を想定するよりも、廃棄・移動等、計画的な焼失であったことが想定される。 (出合)

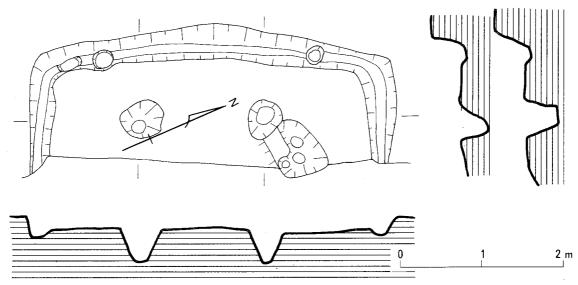


図44 SC935竪穴住居跡遺構実測図

SC936

• S C 9 3 6 竪穴住居(図版 6)

本遺構は、東側斜面に位置する。住居跡の東側半分が斜面に大きく削られているため残りが悪く、西側と南側の高い部分の一部しか残っていない。住居の規模は現存部で南北長2.7m、東西長1.7mを測る。ベッド状遺構はみられない。また床面を精査したが、柱穴は確認できなかった。 (出合)

ベッド状遺構

SC937

• S C 9 3 7 竪穴住居(図版 6)

本遺構は、東側斜面の標高18.2mに位置する方形住居跡で、東側はSC939

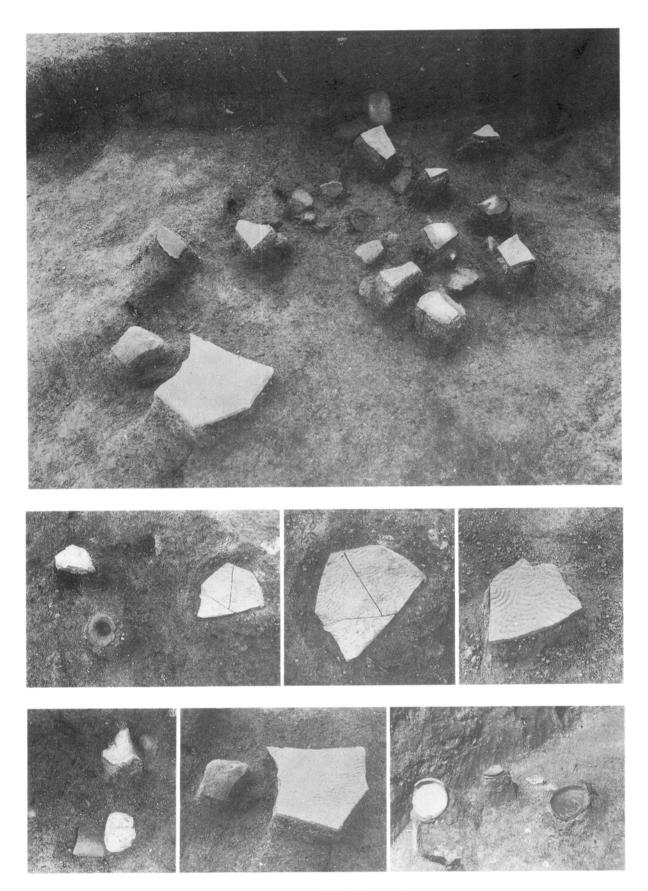


図45 SC931竪穴住居跡遺物出土状態

竪穴住居跡に切られ、さらに斜面によって大きく削られる。そのため、住居の残りは悪く、西側の高い部分の一部しか残っていない。住居の規模は、現存部で南北長3.1m、東西長0.6mを測る。壁の高さは0.2mを測る。ベッド状遺構はみられず、柱穴の位置も判然としない。 (出合)

SC938

SC938竪穴住居(図版6)

本遺構は、東側斜面に位置する。住居跡の東半分は斜面に大きく削られているため残りが悪く、西側の高い部分の一部しか残っていない。他の遺跡との関係では、SC937竪穴住居跡を切り、逆に東側はSC936竪穴住居跡に切られている。但し、SC939竪穴住居跡との切りあい関係は把握できなかった。また、南西隅と北西隅には一段高くなったベッド状遺構が、かろうじて確認できる。住居跡の規模は、現存部で南北長4.8m、東西長0.8mを測る。床面には貼り床を施す。西側の壁際では、床面のみでなく南北のベッド状遺構沿いにも周溝がめぐり、ベッド状遺構の部分では周溝のレベルが一段高くなっている。 (出合)

SC939

• S C 9 3 9 竪穴住居

本遺構は、東側斜面の標高17.9mに位置する方形住居跡で、SC937竪穴住居跡を切っており、東側はSC935竪穴住居跡に切られている。住居跡の東側半分は斜面に大きく削られる。そのため、住居の残りは悪く、西側壁の高い部分の一部と南西隅しか残っていない。また、ベッド状遺構もみられない。住居跡の規模は、現存部で南北長3.2m、東西長0.4mで、壁の高さは0.2mを測る。

(出合)

SC944

• S C 9 4 4 竪穴住居

本遺構は、東側斜面に位置する。遺構の東側半分は斜面に大きく削られる。そのため残りが悪く、西側の高い部分の一部しか残っていない。床面はなだらかに

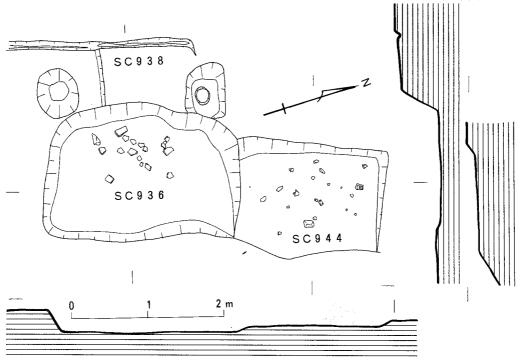


図46 SC936、938、944竪穴住居跡遺構実測図

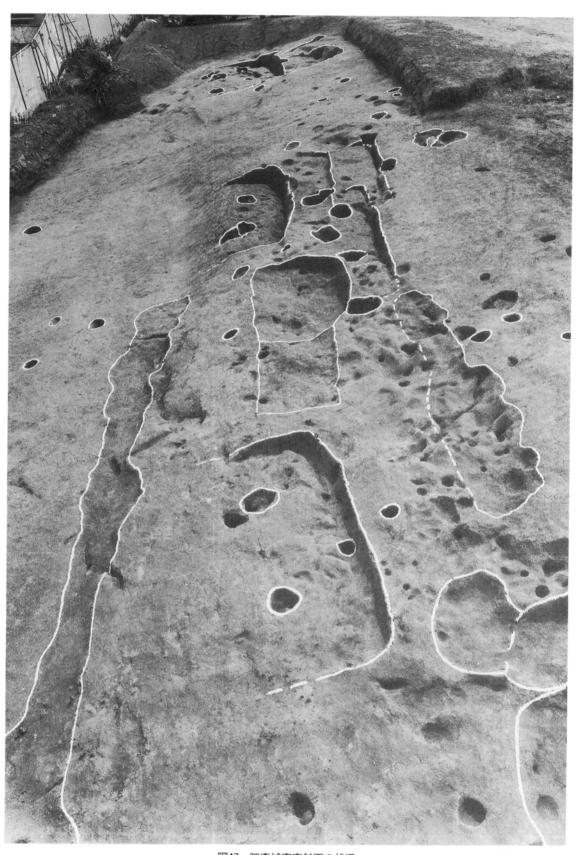


図47 調査域東南斜面の状況 (SC887、SD940、SC935~9、SC941)

傾斜し、柱穴は確認できなかった。住居跡とは考えにくい。遺構の規模は、現存 部で南北長1.9m、東西長1.5mを測る。

鉄生産

遺物は、日常生活に使用したとは考えにくい赤焼けの土器が出土している。遺構の性格は、赤焼けの土器が出土していることから、SD940溝と同様に鉄生産に関連するものと考えられる。 (出合)

溝

B、溝跡

SD10

·SD10溝

SD10溝は、2区の北東部に位置し、ほぼ東西にのびている。この溝は斜面の最下部にあり、斜面の上から流れ込んだ堆積土の上に掘り込まれている。幅2.4m、長さ9.5m深さはおよそ14~50cmをはかる。遺構の全体は検出されておらず、調査地区外の東方にものびていると推察され、西方はSD23溝に続くものと思われる。

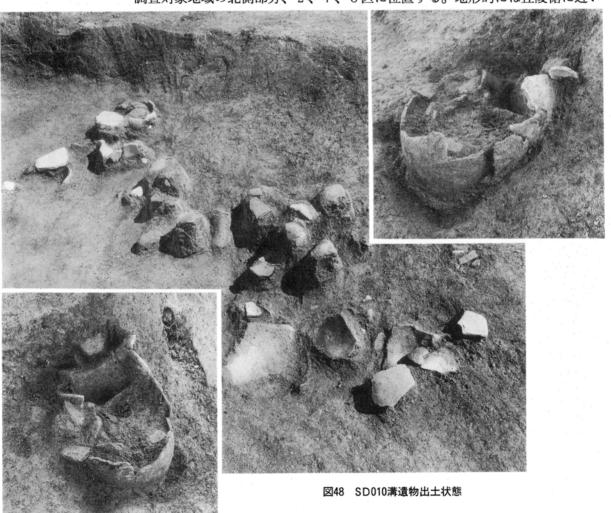
出土遺物

出土遺物は、弥生時代後期と思われる甕、鉢、手捏土器、高杯等、多数見られる。 (内田)

SD16

·SD016溝

調査対象地域の北側部分、2、7、8区に位置する。地形的には丘陵裾に近い



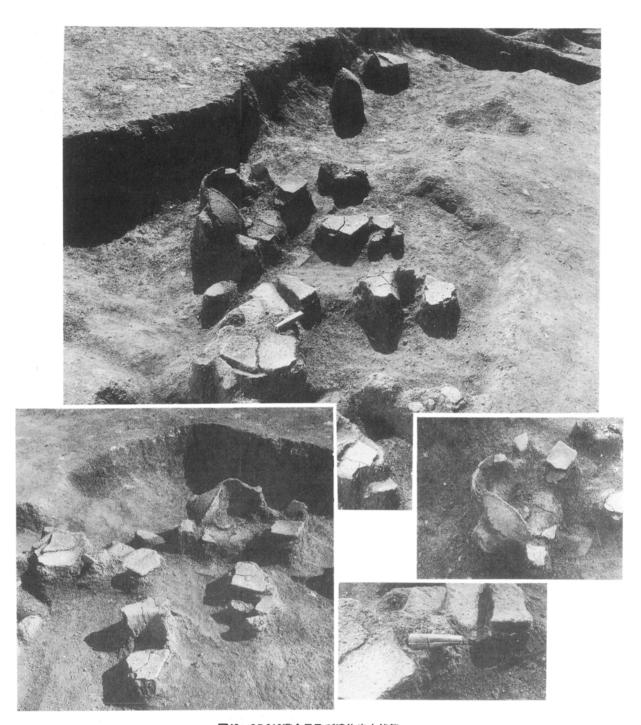


図49 SD016溝全景及び遺物出土状態

斜面部分である。東西方向に走り、延長14.25m、幅36~124cmと一定しない。深 さは3~49cmを測り、東端部分から遺物の出土が多い。

SD19

·SD19溝

調査地域の北側斜面裾部、2区、3区に位置する溝あるいは土坑である。SD 1 6 溝の北側6.4mにあり、ほぼ並行して東西に走るが、下方に向かってL字に曲げられている。延長4.8m、幅 $30\sim70$ cm、深さ $2\sim4$ cmをはかる。

SD23

· SD23溝

遺跡の北側斜面下の調査区境界線沿いに検出された、東西に約11mほど続く溝

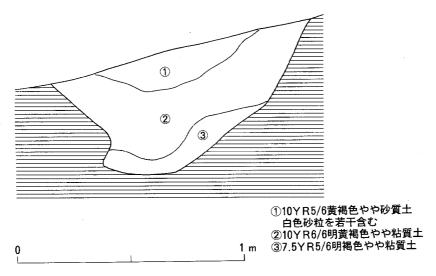


図50 SD019溝西側セクション遺構実測図

状遺構である。本遺構は斜面を利用してなだらかに作られており、高低差は約60 cmほどであった。調査区境界沿いであったために、全体を確認することはできないが、ここよりすぐ東側の斜面で検出されたSD10溝とつながる溝であった可能性も考えられる。

出土遺物の大多数は甕などの土器片で、全て流れ込みによって流入したものと 思われる。 (宮城)

SD82

·SD82溝

調査地域の北側斜面裾部、4区で調査範囲の境界部分に位置する溝あるいは土坑である。検出規模は $5.97m \times 1.65m$ 、深さは $7 \sim 19cm$ をはかる。丘陵裾という地形的な条件もあって、土器などの流入が多くみられるがいずれも細かく割れた破片が多い。

SD83

·SD083溝

SD388溝の西側に引き続き東西に長い溝である。全長 $9.09\,\mathrm{m}$ 、幅 $73\sim114\,\mathrm{cm}$ をはかる素堀の溝であり、SD388溝などと同じく地形的な関連から下位に位置するSC074竪穴住居跡などの遺構の排水施設と考えることができよう。

SD122

SD122溝

SD122溝は8、9区にあり、斜面中腹を東西に通る溝である。西はSX121遺構、東はSC246竪穴住居跡と隣接する。この溝は幅1.6m、長さ19.4m、深さは約10~15cmをはかる。ここからは器台の脚部や高杯、壷の口縁部など弥生時代後期の遺物が出土した。

SD217 218

·SD217、218溝

SD217、218溝は遺跡の北側斜面中腹に位置する溝である。SD217溝を SD218溝が切っている。SD217溝は長さ約11m、幅 $30\sim80cm$ 、深さ30cmである。溝の西側はSC246竪穴住居跡斜面上方の溝とつながっていたと推定されるが東側は撹乱のため消えている。埋土中から流れ込みと思われる弥生土器が数十点出土した。これらの出土土器は流れ込みと考えられる。溝およびピットの機能は不明である。 (田尻)

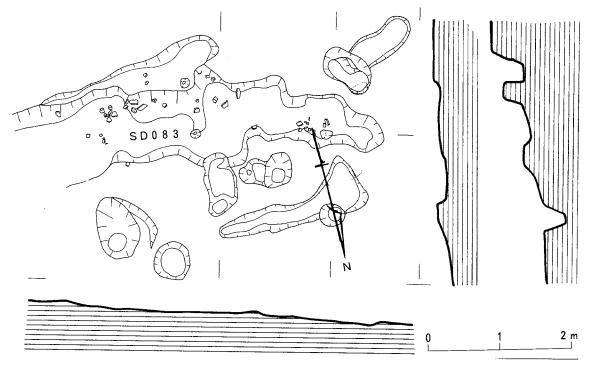


図51 SD083溝遺構実測図

SD388

·SD388溝

調査対象地域の北側斜面裾に近い斜面部分、8区に位置する。SC074竪穴住居跡の南0.9mにあたる。全長6.56m、幅31~82cmをはかる素堀の溝であり、丘陵裾部斜面にあることから、さらに下方のSC074、060竪穴住居跡などの遺構に関連する排水施設と考えるのが最も妥当であろう。なおこの遺構の上層に、SX843焼成土坑が構築されている。

SD894

·SD894溝

本遺構は、東側斜面の中程、標高15m付近を中心に位置し、南北へ約13.9mにわたり、等高線にほぼ平行して掘られている。掘り込みの深さは、平均して30cm程度である。遺物は、鉄滓が出土していることから、SD940溝と同様に鉄生産に関連するものと考えられる。 (出合)

SD903

• SD903溝

埋土

本遺構は、東側斜面の調査区の最も下方、標高14m付近を中心に位置する。南北へ約18.5mにわたり、等高線にほぼ平行して掘られている。近くに位置するSD940溝やSD894溝と比較して、埋土は粘質でしまりがあり、これらと同じ時期に埋まったものとは考えにくい。遺構の掘り込みの深さは、最も深いところで約30cm、平均的には20cm程度である。遺構断面は、ゆるやかなカーブを描いている。 (出合)

SD940

·SD940溝

本遺構は、東側斜面の上位、標高17.1mに位置し、南北へ5.2mにわたり、等高線にほぼ平行して残存する。掘り込みの深さは、約50cmほどである。遺物はフィゴの羽口や把手付き甕が出土しており、これらの遺物から古墳時代の遺構と考えられる。

フイゴ羽口

遺構の性格については、フイゴの羽口が出土していることや、すぐ近くに位置するSC936・SC944竪穴住居跡やSD894溝からも日常生活に用いたとは考えにくい焼けの土器や鉄滓が出土していることから、鉄生産に関係するのではないかと考えられる。

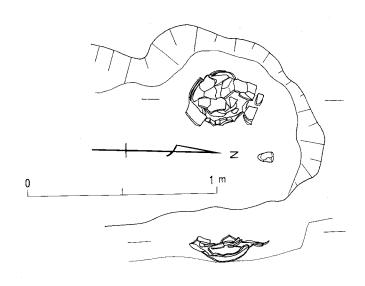


図52 SD940溝遺物出土状況遺構実測図

SD942

·SD942溝

本遺構は、遺跡の北東斜面端部、標高14m付近を中心に、南北へ約22mにわたって等高線に、ほぼ平行して掘られている。北側すぐの位置に同方向のSD903 溝が存在しているが、遺構検出面において連結はしない。遺構の存する掘り込みの深さは、最も深いところで約50cm、平均的には30cm程度である。

須恵器

遺物は須恵器や青磁が出土しているが、上からの流れ込みの可能性が大きいため、作られた時期は不明である。遺構の性格は、検出面における掘り込みが浅いこと、溝の底部のレベルが斜面下方に向かって低くなっていないことなどから、排水溝的な考えは否定され、道路のような役割を果たしていたのではないかと考えられる。 (進村)

SD1065

·SD1065溝

調査対象の中央部分でまず調査を行った遺構群の一つである。14区から8区にわたっており、その延長は19.53m、幅は28~36cmと一定していない。深さは10~20cm前後で、いずれも素堀の定型化していないものである。何らかの排水施設として設置されたものであろうが、直接関連する建物などは見つかっていない。

SD1066

·SD1066溝

調査地域の東側中央部付近、13区から検出された溝である。SD1065の東7mに位置する南北4.2m、幅 $30\sim60$ cmをはかる素堀の溝である。幅なども一定しておらず、先のSD1065溝とは用途も異なるのかも知れない。特に関連する遺構は見られない。

その他の遺構

S X 1 2 1

C、その他の遺構

• S X 1 2 1 竪穴遺構(図版7)

本遺構は、遺跡の北西部斜面の最下部、標高約16~13mに位置し、西側約 6 m 離れた所に同様の遺構SX427遺構が存在する。北北西-南南東を軸に擂り鉢 状の土坑とその下部から下方へ伸びるトンネル、さらにそれに連なる溝状遺構か ら構成されている。擂り鉢状土坑は、南北4.1m×東西4.0mの不整形な円状を呈 しており、遺構上端部から最深部まで約2.1mにわたり、部分的に数段の段差を つけながら掘り込まれている。遺構確認面において、円周の主軸上端部、そこか ら約1.3m離れた円周上の両側および、円周上の東側の位置にそれぞれ半円形状 の掘り込みを持つ。トンネル上部にあたる地表部分には、主軸を中心に約3m、 幅0.5~1mにわたって平坦面が作られている。また、トンネル上部、主軸やや 西よりの部分にはピットが掘り込まれている。トンネルは、擂り鉢状遺構の最深 部から10cm程度高い部分から、幅約60cm、高さ約30~40cm、長さ約140cmにわた り、わずかに傾斜をつけながら下部の溝状遺構へとつながっている。溝状遺構は 最大幅、約1.2mで断面台形状に掘り込まれており、約4.6mにわたり、直線上に 緩やかに傾斜しながら続くが、約3mほど下がった地点から西側に南北約1m、 東西約2mにわたって平坦面が作られている。溝は約0.6mほど極端に細くなり ながら続くが、その先は流失したものと見られる。しかし、傾斜面との差から考 えるとこれもそれほど長いものではなく、すぐに終わるものと考えられる。

遺物には最深部やや上方から出土した甑、鉄滓がある。

遺構の時期は不明であるが、福岡県那珂川町カクチガ浦遺跡群A地点において、 当遺構に極めて類似した遺構が発掘されており、奈良時代から鎌倉期にかけて造 営されたものと考えられていることは参考になろう。カクチガ浦遺跡での調査成 果を踏まえれば、本遺構の形状、傾斜の度合いなどから、液体の貯蔵およびその 使用における何らかの役割を果たしていたと思われる。

(進村)

ST270 合口棺

• ST270甕棺

遺跡北側の斜面の頂部から少し下がったところで検出され、近くにはSC86

5、SC001竪穴住居跡がある。本来は、2個の合口棺であったと想定されるが、確認面では下甕のみが検出されている。墓坑の掘り方は、確認面で南北約95cm、東西約60cmの不整の三角形状をなし、斜面下半の部分が一段深くなっている。甕は斜面と逆にわずかに傾斜をつけ、ほぼ南北を軸に埋められていたものと考えられる。内部には人骨そのほか全くない。残存する甕の形状から時期は、弥生時

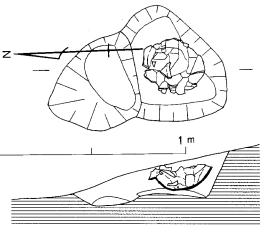


図53 ST270甕棺遺構実測図

代後期後葉のものと考えられる。

(進村)

SX274

• S X 2 7 4 焼成土坑

調査対象地域の北東部、調査区では7区、地形的には丘陵斜面中腹部に位置する焼成土坑である。

最大径1.22m、幅0.78mを測り、周囲には赤色酸化層が巡る。内部には炭、焼土などが堆積しているが、流出が著しい。いずれにしても高温になる施設であることは間違いない。

S X 4 2 7

• S X 4 2 7 竪穴遺構(図版 8)

丘陵の北斜面10区に位置する遺構。径5.4m、深さ1.6mの竪穴と、径3.0、深さ0.6mの竪穴(前庭部)、それをつなぐトンネル部、通路状溝部からなる遺構である。

この遺構のある部分は傾斜が急になる部分である。大きい方の竪穴は斜面上方に掘り込まれている。上面プランは倒卵形に近い不整形を呈し、擂鉢状に落ち込み、中位で緩やかに傾斜するテラスを持つ。南側はなだらかに落ち込みが北側では急である。底部は1.5×1.4mの平行四辺形様の隅丸方形である。北側の壁中位(確認面より0.5m下)付近に焼土がみられた。南壁側でもほぼ同じ深さの部分で焼土が観察された。覆土は上から明黄褐色土、褐色土、黄褐色土、灰黄褐色土、橙色土、黄橙色土、黄褐色土となっている。鉄滓が中位の灰黄褐色土層・橙色土層を中心に検出された。これらは精錬鉄滓である。そのほか須恵器片、土師器片なども検出された。

トンネル部

底部より北に向かってトンネルが掘られている。トンネル部は円筒状で底部に当たる部分が若干広くなっており、高さ25cm、最大幅が50cmである。天井部の崩落の跡はみられない。トンネル部とその北側の通路状溝部は一体となってさらに北側の前庭部とつながっている。長さは全長2.5m、そのうちトンネル部が0.5m、天井部のない通路状溝部が2.0mである。通路状溝部の両面は急な立ち上がりを見せている。北の端は前庭部に切られる形であるが、若干撥形に広がっていて幅は60cmとなっている。

S X 4 6 0

SX460焼成土坑

当該遺構は、北西側の斜面に位置するSX427鉢形土坑の西側に検出され、 地山の上に崩落して再堆積したバイラン土中に形成されている。

平面プランは丸みのある隅丸方形を呈し、南北方向の長軸約1.2m、東西方向の短軸約0.95mをはかる。長軸は等高線に直交する。断面プランは、やや緩やかに立ち上がり、検出された深さは遺存状態の良い南側でも約0.2mほどである。壁面は、南側および北東側の一部が厚さ2~4cmほどの明赤褐色酸化層を呈するのみで、全体にそれほど強く被熱した様子はうかがわれなかった。底面の掘り方はほぼ水平で、その上に炭化物を少量含む3層(灰黄褐色粘質土・10YR4/2)が0.06mほど堆積し、焼成時の底面を形成している。土坑内の南東部底面直上から鉄滓が、また中央やや西寄りの底面直上から土師質の土器片が検出されている。遺構の性格は出土鉄滓から、他の焼成土坑と同様、鉄または鉄器生産の関連遺

構である可能性が指摘できよう。

(余語琢磨)

SX842

SX842焼成土坑(旧SC74内焼成土坑I)

当該遺構は、北側斜面に位置するSC74竪穴住居址の南側をめぐる弥生時代の溝Ⅱの覆土を切り込んで形成されている。標高14m前後に位置し、検出時の斜面は平均約15°で、遺構形成時もやや斜面のきつい北斜面を意識的に選地したものと思われる。

平面プランは、東西方向の長軸約1.3 m、南方方向の短軸約1.05 mをはかる隅丸長方形を呈し、長軸は等高線に平行する。断面プランは、長短軸とも立上がり部分がやや緩やかな箱形で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。検出された深さは、比較的依存状態の良い南側で0.3 mほどである。底部は、上述したように地下に掘り下げて形成されている。壁面は、底部から5 cmほどの部分を除いて非常に良く焼け締まっており、表面は須恵器窯の壁面にみられるような淡黄色(2.5 YR8/3)の硬化面を成し、厚さ2~5 cmの明赤褐色(2.5 YR5/8)酸化層を伴っている。底面は、掘り方の上にほぼ水平に堆積した炭化物を含む黒色粘質土(10 YR2/1)で、ほとんど焼固していない。この底面直上から、土師質の土器片が2点検出されている。小片なため時期を特定することはできないが、東側壁の体中に甕の頸部が埋まっており、少なくとも当該遺構の上限を示すものと考えられる。また、南東隅部のピットは、壁体を壊して後世に形成されたものである。

土坑内の堆積土は、上層($1 \cdot 2$ 層)・下層($3 \cdot 4$ 層)に二分される。炭化物・焼土を多く含む下層は、操業終了時に斜面下方へかき出しを受けたかのような堆積状況を示している。上層は地山(花崗岩バイラン土)のブロックを主体とするものであるが、1 層に炭化物が混じることから短期間で埋没した可能性が指摘できる。2 層中からは、南側壁面中央に接する位置に、底面から $0.1 \sim 0.2$ mほど浮いた状態で2 点の鉄滓が検出されている。

焼成土坑

焼成土坑に関連する作業面・柱穴等は、全く検出されていない。これは、検出 面が遺構形成時よりかなり削平されていることに起因すると思われる。

遺構の性格はにわかに判断しにくいが、極めて高温で焼けていること、鉄滓が検出されていること、形態が土器窯としては特異であること、などを理由として鉄または鉄器生産の関連遺構と考えておきたい。古代の製鉄炉には、大きく長方形箱型炉と半地下式竪型炉の2系統があるという見解が定着しているが、前者と当該遺構の類似点を幾つか指摘することができる。1.2m前後の長辺をもつ隅丸方形のものが多いこと、斜面に立地し一般に等高線に横置すること、また傍証として調査区内から精錬滓が羽口片から出土していること、などである。一方、断定を躊躇せざるをえない点として、送風孔(保土穴)が検出されていないこと、地下に防湿施設を施さないこと、排滓溝・作業平坦面等の付属施設が検出されていないこと、などが指摘できる。いずれにしても、上部構造が失われている現状では遺構面からこれ以上の推論をなしえないため、出土した鉄滓が精錬滓・残留滓等の精錬段階に伴うものか、または鍛冶滓等の鍛冶段階に伴うものなのかによって、当該遺構の性格も大きく左右されることになろう。結論は科学的分析の結果とともに後章に譲りたい。 (余語琢磨)

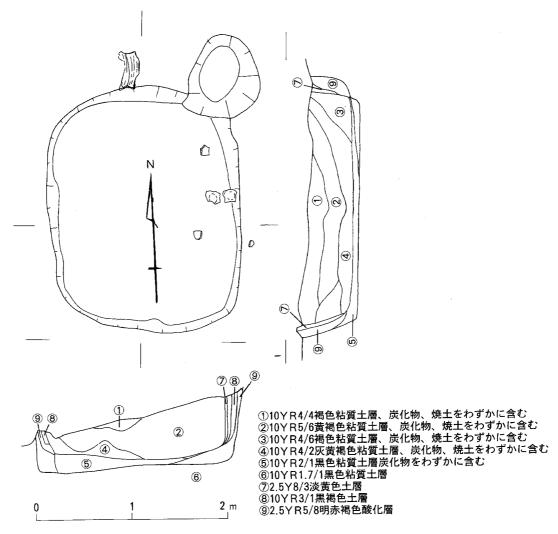


図543 SX842焼成土坑遺構実測図

S X 8 4 3

SX843焼成土坑(旧SC74内焼成土坑Ⅱ)

当該遺構は、北側斜面に位置するSC74竪穴住居址の南側をめぐる弥生時代の溝Iの覆土を切り込んで形成され、SX742焼成土坑とほぼ平行する関係にある。

平面プランは、東西方向の長さ約0.95mをはかる隅丸方形を呈し、長軸は等高線に平行する。南北方向の検出長は約0.7mをはかるが、北側の側面は流出しており、本来の規模は明確にできない。断面プランは、やや緩やかに立ち上がっており、検出された深さは遺存状態の良い南側で0.2mほどである。壁面は、南側中央部で厚さ1~3 cmほどの明赤褐色(5YR5/6)酸化層を呈している。底面の掘り方はやや北側に低く傾斜しており、北側には炭化物を含む薄い3層(暗オリーブ褐色粘質土・2.5Y3/3)が堆積している。ほとんど焼固していない底面直上から、土師質の土器片が2点検出されている。土坑内の堆積土は1・2層で、炭化物・焼土をやや多く含む崩落土と考えられる。

遺構の性格は、その位置や遺構の形状から、SX842焼成土坑と同様に鉄ま

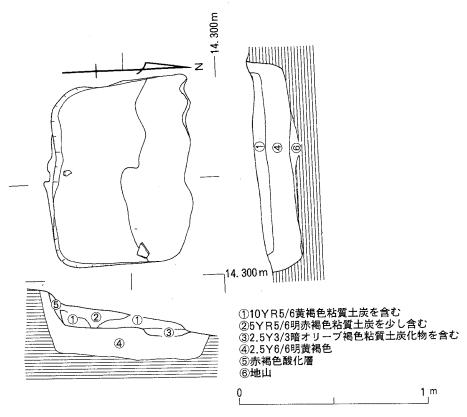


図55 SX843焼成土坑遺構実測図

SX071 SX071 焼成土坑

当該遺構は、北側斜面に位置するSX843焼成土坑の南約2 mに検出された。平面プランは丸みのある隅丸方形を呈し、東西方向の長軸約1.46 m、南北方向の短軸約1.2 mをはかる。長軸は等高線に平行する。断面プランは、やや緩やかに立ち上がる箱形を呈しており、検出された深さは遺存状態の良い南側で約0.4 mをはかる。壁面は、厚さ $1\sim3$ cmほどの明赤褐色酸化層で、ある程度の高温で被熱した様子がうかがわれた。底面の掘り方は南北軸の中央がすり鉢状にやや低くなっており、全体に炭化物を含む薄い7 層(灰褐色粘質土・5 YR5/1)が堆積しているだけで、ほとんど焼固していない。土壙内の堆積土は $1\sim5$ 層で炭化物・焼成を含み、人為的に埋められたような堆積状況を呈している。

遺構の性格は、その位置関係や遺構の形状から、SX843焼成土坑と同様に 鉄または鉄器生産の関連遺構と捉えることもできよう。

SX864

• S X 8 6 4 焼成土坑

SX274焼成土坑と報告的には近似する土坑であり、同じ時期の可能性もある。 $SC865\sim4$ 竪穴住居跡に接して位置するが、その関連は明らかにできない。周囲には赤色酸化層が巡っており、高温になった施設であることをしめしている。 $0.68m\times1.00m$ をはかり、隅丸の楕円形を呈する。など当該遺跡での焼成土坑は、SX071、842、843 の各焼成土坑が、8区、9区に位置する。構造的には近似するが関連は不明である。

SX867

· S X 8 6 7 土坑

SX867はSC246竪穴住居跡の南側の斜面上方に位置する不整形の土坑である。長軸1.8m、短軸0.5mで、掘り込みは浅く20cm程度である。土坑の機能は不明である。埋土中より高杯の脚部、甕の口縁部など弥生土器が20点以上出土した。出土した土器は流れ込みのものと考えられる。 (田尻)

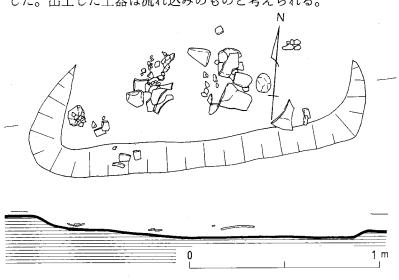


図56 SX867土坑遺構実測図

S X 0 4 2

SX042焼成土坑

調査地域の西部丘陵斜面、16区に位置する焼成土坑である。住居跡とは大きく離れた位置から検出されており、直接の関連は薄いと考えられる。主軸方向 $N-47^{\circ}-E$ 、主軸上の延長 $1.08\,\mathrm{m}$ 、幅 $85\,\mathrm{cm}$ 、深さ $7\,\mathrm{cm}$ をはかるやや不整形な楕円形を呈する。東側側壁はたちあがりが $7\,\mathrm{cm}$ をはかり、 $1\,\mathrm{cm}$ 前後が還元焼固しており、さらに外周部分を $1-2\,\mathrm{cm}$ 赤色酸化層が巡っている。これらの状況から当該遺構内部では少なくとも1000度近い高温に達する何らかの焼成作業が行われていたものと見られる。

内部には炭灰層が前面に広がっており、内部から弥生、土師器が239点が採集されている。なお当該遺構で何を焼成したのかは明らかではない。ちなみに土器もその候補に加えることもできよう。

SX614

SX614土坑

調査地域の西側部分の斜面、16区に位置した不成形な形状を呈する土坑である。 内部には弥生、土師器148点が破片で検出されている。土器溜まりと見られるが、 最も近接する住居跡には、SC176竪穴住居がある。

S X 6 2 6

SX626土坑

調査地域の西側部分の丘陵斜面、16区に位置する円形の土坑である。SX614土坑の南1.3mである。直径75cm、深さ8cmをはかる素掘である。内部からは弥生、土師器が16点破片で検出されている。とくに性格は不明とせざるを得ないが、SX614土坑と同様に土器溜まりと考えられる。

SX663

SX663土坑

調査地域の西側部分の丘陵斜面、16区に位置するほぼ円形を呈する土坑である。

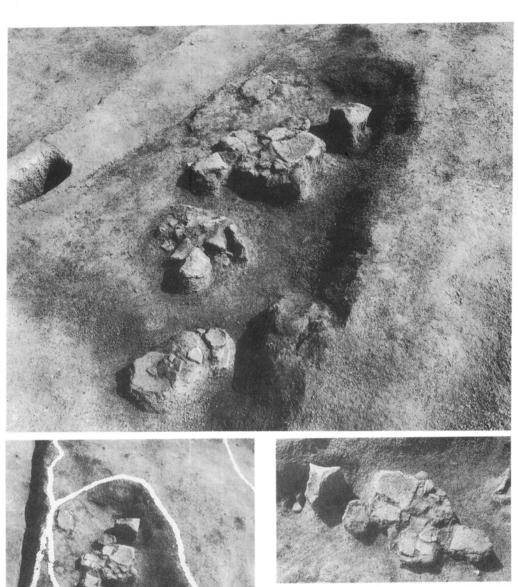






図57 SX867土坑及び細部

SX626土坑の北西部に接している。長径90m、短径(東西)74cm、深さ9cm を各々はかる素掘の土坑である。内部からは弥生、土師器が320点、須恵器6点、石器1点が出土している。SX626、614土坑などと同じく土器溜まりの可能性が濃い。

SU691

SU691貯蔵穴

調査地域の西側丘陵部分、16区に位置する貯蔵穴と考えられる遺構である。主軸方向は主軸方向N-80°-Wをはかる、楕円に近い不整形な形状を示す。主軸

上の延長2.12 m、幅1.25 m、深さ2.3 mを各々はかる。下層の形状は、わずかに北側に偏った形で掘削されており、底部はほぼ平らに近い面をなしている。

内部からはなんら遺物の出土はなく、とくに色調などの変化は見られなかった。しかし周囲の土色から見て、新しい段階のものとは考えられず、ほぼ大半の遺構の時期と平行するものと考えられる。なお近接して位置した土坑などには当該以降と近似する構造を有するものは検出されていない。

SB952

SB952掘立柱建物跡

調査地域のほぼ中央部にあたる、丘陵尾根部からやや北に下がった 8 区中央部から検出された掘立柱建物跡である。 1 間 \times 4 間の柱間構造をもつ建物で、礎石などの施設は伴わない。柱間間隔は、 $1.4\sim1.7$ mで、特に南北の柱間は長く2.12 mをはかる。主軸方向は $N-80^\circ-E$ である。建物を構成する柱の直径は $33\sim55$ cm、深さ $13\sim50$ cm、いずれもほぼ円形をなしている。なおSD217 溝は、当該建物の南に位置し、またSD218 溝は、東に位置し、それぞれ囲んでいるようにも見えるが、両者の関係を明らかにすることはできなかった。

SB951

• SB951掘立柱建物跡

調査地域の中央部からわずかに西に偏した調査区15区から検出された掘立柱建物跡である。1間 $\times 2$ 間の建物で、主軸方向は $N-71^\circ-W$ をはかる。東西の柱間の延長は4.1m、南北は2.4mを各々はかり、柱の直径は $25\sim36$ cm、深さは $10\sim24$ cmをはかる、特に近接して関連するとみられる遺構は認められない。なお方向からの関係を見るとSC176竪穴住居跡と関連があるのかもしれない。

SX1080

SX1080ピット群

SD1065、1066溝を含む地域に位置するピット群である。おそらくはそれらが結びついて建物を構成していたものと考えられるが、今回の調査で確認された状況からはその想定が困難なものである。瓦や陶磁器の出土があり、近世遺構の祠の存在が伝えられており、なんらかの施設が存在したことは疑えないが、その規模などについては全く手がかりがない。おそらくこれらの群をなすピットから推定すべきであろうが、状況からはそれを許さない。

第3章 遺物

1. 概 観

今回の調査では、弥生土器、土師器がもっとも出土量が多く、次いで須恵器、石器、鉄器などがある。それらを遺構別にまとめたものが表2-1、2-2である。

この表 2 によって、どの遺構からどのような遺物が出土しているのか一目瞭然になるだろう。しかしここでの遺構、遺物の関係では、すべてが同じ遺構内部からのものではないという可能性もある。すなわち表土内部からのものが含まれており、遺構そのものの内部からとは必ずしも一致しない物もある。とはいえ大半のものは、各遺構内部からのものと見てよく、その傾向が事実から異なることはない。

遺物の種類は、土師器、弥生土器がもっとも多い。これらは本来土師器と弥生 土器の区分が可能であるはずであるが、当該以降の年代が両者を交差する。ある いは、重複する期間に該当しており、その区分をあえて厳密には示すことを避け ている。

須恵器については、竪穴住居内部から出土したものがもっとも多く見られる。 さらに表面採集の須恵器が比較的多いことは、すでに経過でも触れたが、古墳と 誤解する背景の一つとなったものである。なお須恵器の時期は、古墳時代後半か ら末のものと奈良時代後半のものという大別して 2 時期のものが認められるよう である。

石器については、石庖丁や砥石など集落遺跡ではとくに特異なものではないが、明らかに時期との関連から出土する器種に差が認められるのは当然である。陶磁器および瓦については、14区の調査でもっとも大量に確認されており、ほかの地域からは大半が表面採集に近い状態で出土したものである。玉は石製の1点を除いて、いずれもガラス製のビーズ玉で直径2~8㎜前後の小型のものであり、竪穴住居跡からの出土が大半を占めている。とくにSC060竪穴住居からが多く、SC074、246、708、176竪穴住居が続いている。その用途は明らかではないが、とくに祭祀に用いた痕跡も見られないことから、通常の装飾品の一つであろうと考えられる。

また銅鏡の鋳型の出土が注目されている。これについての詳細は後の部分に譲ることにする。とくに鏡の背面のみならず、全く文様の見られない表面部分も採集されており、あわせて特記に値する。この鋳型は単に遺物単体での出土というよりは、遺構と直接関連して検出されたことである。SC246竪穴住居跡の床面に食い込むかたちで検出されており、あわせて焼土や炭灰などの確認などから当該住居での銅鏡生産が行われていたことが想定される。直接的な証拠はないが、この生産鋳造に関連する土器も出土している。

表 2 - 1 遺構別遺物出土量一覧

遺構名 遺物の種類	弥生•土師器	須恵器	陶•磁器	石	器	鉄	器	玉	瓦	その他の遺物
SC001竪穴住居	909				2		1			
SC060竪穴住居	6 2 2 2			;	3		1	1 0		鉄滓1
SC074竪穴住居	5728			;	3		2	3		鉄滓3
SC135竪穴住居	9 8		-	,	4					
SC136竪穴住居	5 1 1	1		:	2					
SC144竪穴住居	1 4 6 5				2					
SC176竪穴住居	5 4 5	1			1			1		
SC244竪穴住居	153									
SC246竪穴住居	4706	1			3		6	3		鉄滓 6
SC570竪穴住居	2 0	2								
SC708竪穴住居	3 1 4 5				1		1	2		
SC709竪穴住居	9				1					
SC710竪穴住居	1 5									
SC782竪穴住居	3 4									-
SC865竪穴住居	5 6 6				1		1			鉄滓 2
SC873竪穴住居	3 9	1								
SC887竪穴住居		4								
SC931竪穴住居	3 1 7	7 2	1		1					鉄滓1
SC935竪穴住居	4 1 4	2 7			1					
SC936竪穴住居	2 2 2	1 0								
SC937竪穴住居	1 3								2	
SC938竪穴住居	7 7	1								
SC939竪穴住居	2 7									
SC944竪穴住居	2 6	6								
SD010溝	2626	2			2				,	
SD016溝	3 7 3									
SD109溝	1 3 8									
SD123溝	1 4 3 3	1								
SD159溝	2 8									
SD080溝	1 2									
SD082溝	4 3 0									
SD083溝	184	1								
SD122溝	1 1 2 8				1					
SD217•218溝	2 0 8 2	2			3					
SD273溝	2 9				1					
SD903溝	6	3	3						3	
SD940溝	3 8	1								
SD942溝	5 0	2 2	1 5		1					鉄滓9
SD1065溝	1		9						2 7	

表 2 - 2 遺構別遺物出土量一覧

and the fact while a greater			JB 作用 // JJ				т			
遺構名 遺物の種類	弥生• 土師器	須恵器	陶•磁器	石岩	器	鉄	器	玉	瓦	その他の遺物
S X 0 1 2 遺構	3 0				\perp					
S X 0 1 4 遺構	8 0	11								
S X 0 3 4 遺構	7 0									
S X 0 6 3 遺構	3 8							1		
S X 0 6 7 遺構	4 3									
SX071焼成土坑	1 3 5									
S X 1 0 9 遺構	2 4 1	1								
SX121竪穴遺構	9 3 2	6	2						1	鉄滓22
S X 1 3 4 遺構	1 0 8									
S X 1 3 8 遺構	3 3									
S X 1 3 9 遺構	1 3 0			1						
S X 2 5 1 遺構	3 2									
SX270遺構	470									
S X 3 4 0 遺構	1 2 1									
S X 4 2 0 遺構	2 4 1	7								
S X 4 2 3 遺構	2 3 9									
SX427竪穴遺構	2 1 1	4								
S X 4 5 6 遺構	106									
S X 5 0 3 遺構									1 0 3	
S X 6 1 4 遺構	1 4 8						Î			
S X 6 5 1 遺構	4 2									
S X 6 5 2 遺構	3 2									
SX662遺構	2 3 3								1	
SX663遺構	3 2 0	6		1						
SX686遺構	6 6									
S X 6 8 7 遺構	8 8			1						
S X 7 0 0 遺構	3 4									
S X 7 4 8 遺構	3 8									
SX777遺構	3 5									
S X 7 8 4 遺構	3 2									
SX785遺構	7 2									
S X 7 9 5 遺構	3 3			, .						
S X 8 4 2 焼成土坑	1 9 9									鉄滓1
S X 8 6 7 遺構	8 5									
S X 8 8 3 遺構	1 3 8	6	1	1						THE ACTION AND ADDRESS OF THE ACTION ADDRESS OF THE ACTION AND ADDRESS OF THE ACTION ADDRESS OF THE ACTION AND ADDRESS OF THE ACTION AND ADDRESS OF
30点未満SX遺構合計	1 3 1 4	3 8	1 9	6				1	8 1	鉄滓27、銅銭1
表面採集	984	4 0	4 3	4				1 4	6 6	鉄滓12、石臼1
総合計	40969	2 6 7	9 3	4 7		1	2	3 4	2 8 4	鉄滓91、鋳型2他

^{*}破片数は原則として悉皆調査によっているが、細かな破片によっては数量にカウントしていないものもある。 *1遺構内から30点未満の出土遺物しかない場合には、一括して示している。 *実測図として採用しているものも含む。

また鉄淬の出土である。これらは弥生時代まで溯る可能性のある遺構からの出土は見られず、いずれも奈良時代以降と見られる遺構からのものであった。とくに竪穴遺構、焼成土坑などから比較的大量の鉄淬の破片が採集されている。恐らくこれから想定するのは困難かもしれないが、当該地域での製鉄、生産遺跡の存在が確定することが期待されるのだろう。

以下各遺構ごとの出土遺物について記述することにする。

2. 遺構別出土遺物各説

弥生土器、土師器、須恵器

竪穴住居

竪穴住居出土遺物

SC001

SC001竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器-

短頸壺-224 (図版25) 復元口径13.1cm、残存高8.8cmをはかる短頸壺である。口 頸基部は太く直立して上方にのびる。口縁部は短く、端部は丸い。体部最大径は 上位に求められ、底部は欠損。外面はハケ調整、内面はナデ調整を行う。

甕-225 (図版25) 残存高5.1cmをはかる甕底部の破片である。外面にはハケ、ナデ調整、内面にはナデ調整が見られる。226は同じく甕底部の破片であるが、丸みをわずかに有する。

壺-227 (図版25) 体部の突帯とその周辺の破片である。かなり大きな壺ないしは甕となる可能性が濃い。

支脚-74(図版13)残存高6.5cmをはかる支脚の上部の破片である。上面に径1.4cmの孔をうがっている。外面はナデ、体部はハケないしは指オサエ調整を行う。 内面には高杯の脚部に見られるようなシボリの痕跡も認められる。焼成良好、胎土はやや粗で $1\sim2$ mmの白色砂粒を含む。淡褐色を呈する。

SC060

SC060竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器 -

器台-151 (図版19) は口径16.6cm、器高24.8cm、底径19.0cmをはかる器台である。くびれ部が上位に認められ、外反してなだらかに開く台部と直線的に開く脚部をもつ。外面はハケ調整、内面は台部から脚部中位まではナデ調整、脚部下位から裾部にかけてはハケ調整を行なう。器表面の剥落が著しく、色調は淡茶褐色を呈する。胎土はやや粗で白色砂粒を含む。焼成良好である。また230も同じ形態の器台の底部である。

器台-152 (図版19) は口径10.4cm、底径14.2cmをはかる器台である。台部は大きく屈曲し、くびれ部を上位にもつ。台部端と端部下に稜を認める。外面は全体に上から下へのヘラオサエが確認できる。内面は台部と脚端部に左から右へのヘラオサエが行なわれ、くびれ部から脚部下位にかけては指ナデ調整が行なわれている。暗茶褐色を呈し、胎土はやや粗で、焼成良好である。

器台-155 (図版19) は復元口径18.8cm、残存高3.3cmをはかる器台の台部の破片で、全体の約1/8前後に相当する。台部は大きく外反し、端部は外傾する

面をなす。台部端はナデ調整、同じく下位には内外面ともにハケ調整の後、ナデ 調整が行われている。焼成は良好、胎土はやや粗で微小石粒が含まれている。外 面は暗茶褐色、内面は暗黄褐色を呈する。

高杯-153(図版19)は残存高9.1cmをはかる高杯脚部から杯部の破片である。脚基部は細く、端部にむかってなだらかに外反する。脚外面はヘラミガキ、内面はヘラ押さえの後へラによるナデ調整を行う。杯部は底部から大きく外反するが中位で欠損。杯部内外面ともにナデ調整を行う。なお器表面剥落が著しい。焼成良好、胎土は密である。外面及び杯部は明茶褐色、脚部内面は黒褐色を呈する。甕-56(図版12)は復元口径19.2cmをはかる甕口縁部の破片である。口縁部の屈曲は弱く、直線的に開く。また屈曲部には内外面とも不明瞭な稜を有する。胎土はやや粗雑で白色粒子を含む。

甕-156 (図版19) は復元口径24.2cm、残存高8.0cmをはかる甕口縁部の破片である。口縁部は「く」の字に直線的に開き、端部は丸く仕上げている。外面はナデ調整、体部上位はハケ調整の後ナデ調整を行う。内面は器壁の剥落のため不明である。焼成は良好、胎土はわずかに白色砂粒を含む。淡茶褐色を呈する。

獲-157(図版19)は復元口径23.8㎝、残存高9.1㎝をはかる甕口縁部の破片である。口縁部は「く」の字に直線的に開き、端部は丸く仕上げている。内外面はナデ調整、体部上位はハケ調整の後ナデ調整を行う。内面はハケ調整が行われている。器壁の剥落は著しい。焼成は甘く軟質、胎土はやや粗で白色砂粒を含む。茶褐色を呈する。

獲-158(図版19)は残存高8.2㎝をはかる甕口縁部および体部の破片である。 口縁端部、体部下位を欠損する。口縁部は「く」の字に大きく開き、体部はなだらかに下方に広がっている。体部外面にはハケ調整の後ナデ調整、口縁部内面にはハケ調整、体部内面にはナデ調整が行われている。焼成良好、胎土は密で、暗茶褐色を呈する。

底部破片-57 (図版12) 残存高3.6cmをはかる甕ないしは壷の底部の破片である。底は平らで体部は底から外反する。体部外面には縦方向のナデ調整、内面にもナデ調整を行う。焼成甘く軟質、胎土は粗で砂粒を多く含む。

底部破片-154(図版19)は、壷あるいは甕の底部の破片である。残存高6.3 cmをはかり、丸底をなす。外面はヘラ削り調整の後、ナデ調整を行う。内面は指オサエの後ナデ調整を行う。焼成良好、胎土は密で微小な砂粒を含む。外面は明橙色、内面は茶褐色を呈する。

底部破片-159(図版9)は、残存高2.1cm、復元底径6.3cmをはかる甕あるいは壷の底部で、わずかに丸みをもつ。内外面ともにナデ調整を行う。焼成良好、胎土は密で若干の微小な砂粒を含む。外面は淡黄褐色、内面は暗黄褐色を呈する。底部破片-160(図版19)は残存高2.8cm、復元底径7.0cmをはかる凸レンズ状の平底で安定性を欠く。体部は外反して大きく開く。外面はナデ調整を基調とするが、底部上位には縦方向のハケ調整が確認できる。内面は指オサエとナデ調整が行われている。焼成は良好、胎土はわずかな砂粒を含む。外面は黒褐色、底部下部は暗黄褐色、内面は淡赤褐色を呈する。

底部破片-163(図版19)は残存高7.4cmをはかる丸底の破片である。外面は へう削りの後、縦方向のヘラミガキを行う。内面にもヘラミガキを行っている。 焼成良好、胎土は密である。乳白色を呈する。

口縁部破片-161 (図版19) 復元口径32.8cm、残存高4.8cmをはかる甕の口縁部の破片である。口縁部は内彎気味に外反し、くびれ部に刻み目を入れた突帯をめぐらせている。内外面ともにナデ調整を行う。焼成良好、胎土は密で、明茶褐色を呈す。

SC074

SC074竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器 -

支脚-30 (図版11) 口径4.7cm、底径6.5cm、器高13.5cmをはかる支脚である。中央の穴は通じておらず、中心の軸がわずかにずれており、いびつな形状を呈する。内外面に指オサエの痕跡が明瞭に残る。焼成良好、胎土は密である。黄褐色を呈す。

支脚-31 (図版11) 口径6.2cm、底径9.2cm、器高11.7cmをはかる支脚である。中央の穴は細いが上部まで貫通している。外面は、ヘラ削りの後ナデ調整を行う。 焼成良好、胎土は密である。茶褐色を呈する。

支脚-49(図版12)口径3.5cm、底径5.2cm、器高7.7cmをはかる支脚である。中央の穴は細いが上部まで貫通している。外面はヘラ削りの後ナデ調整を行う。外面は指オサエおよびナデ調整、内面は縦方向のナデ調整を行う。焼成良好、胎土は密である。

底部破片-32 (図版11) 復元底径6.1cm、残存高3.6cmをはかる平底の破片で、 甕あるいは壷の底部と見られる。体部はやや内彎気味に立ち上がる。外面にはヘ ラ押さえ、内面には指オサエの後、横方向のナデ調整が見られる。

底部破片-33 (図版11) 復元底径7.4cm、残存高5.8cmをはかる平底の破片で、 甕あるいは壷の底部と見られる。体部は外反して立ち上がる。外面にはヘラナデ 調整、内面にはヘラナデと指オサエ調整が見られる。

底部破片-34 (図版11) 復元底径7.6cm、残存高1.1cmをはかる平底の破片で、 土師器甕あるいは壷の底部と見られる。非常に薄い器壁で、内外面ともにナデ調 整の痕跡が見られる。

底部破片-35 (図版11) 復元底径6.5cm、残存高2.7cmをはかる平底の破片で、 壷の底部と見られる。胎土に5mm以下の石英を含む。外面はヘラミガキ、内面は 指ナデ調整が行われている。

底部破片 - 3 9 (図版11) 復元底径10.0cm、残存高4.4cmをはかる平底の破片で、 甕または壷の底部と見られる。器壁は薄い作りで、体部は直線的に開き立ち上が る。底部端にはわずかにくびれを認める。凸レンズ状の平底である。内外面とも にナデ調整を行っている。

底部破片 - 5 0 (図版12) 残存高5.8㎝をはかる甕ないしは壷の底部の破片である。底は平らで体部は内彎気味に上外方にのびる。体部外面には縦方向のナデ調整、内面にも見られる。

器台-36 (図版11) 復元底径17.4cm、残存高3.8cmをはかる器台脚部である。 器壁は厚く、端部は丸く仕上げている。内外面ともに指オサエの痕跡が見られる。 焼成良好、胎土は密である。

器台-51 (図版12) 復元口径15.4cm、残存高6.9cmをはかる器台台部の口縁部の破片である。口縁部は中心部から外彎気味に上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。外面にはハケ調整が縦方向に施され、口縁端部は横方向にナデ調整が行われている。内面は上位に横方向のハケ調整、中位から下方には縦方向のナデ調整が行われている。焼成良好、胎土はやや粗である。

器台-52 (図版12) 復元底径12.8cm、残存高5.6cmをはかる器台の脚端部の破片である。脚部は基部から外反気味に上下外方に下がる。外面には指オサエおよびナデ調整が行われ、内面にはハケ調整の後、ナデ調整がおこなわれている。焼良好、胎土はやや粗である。

高杯-37 (図版11) 復元底径18.0㎝、残存高8.6㎝をはかる高杯脚部の破片である。器壁は薄く、基部から大きく外反し、端部内面に稜がめぐる。内外面ともに剥落が著しく、内面に一部ハケ調整の痕跡を残す。

高杯-38 (図版11) 残存高6.1cmをはかる高杯脚部の破片である。基部細く、外反して下がる。杯部は底部中央のみの遺存である。脚部外面にはタタキの後ナデ調整、内面には指オサエの痕跡が認められる。

壷−40 (図版11) 最大径22.8cmをはかる複合口縁壷の口縁部の破片である。外面にわずかにナデ調整の痕跡が認められる。

壷-41 (図版11) 復元頸部径20.1cm、残存高9.1cmをはかる複合口縁壷の頸部基部の上下部分の破片である。頸部外面に断面三角形の突帯をめぐらせている。 突帯の下にはハケ調整の後ナデ調整、突帯と頸部にはナデ調整が見られる。内面は剥落しており、わずかにナデ調整の痕跡が認められる。

壷-47 (図版12) 復元□径12.8cm、残存高6.1cmをはかる複合□縁壷の□縁部の破片である。□縁部は基部から直線的に外反した後、逆「く」の字に屈曲させて端部に至る。端部は内傾する面をなす。内外面ともナデ調整の痕跡が認められる。

甕-42 (図版11) 復元頸部径21.2㎝、残存高7.1㎝をはかる甕の頸部以下体部の破片である。口縁部は頸基部から外反して立ち上がり、頸部上面に1条の沈線をめぐらせる。体部外面にはハケ調整、口縁部にかけてはナデ調整が見られ、内面には横ナデ調整が行われている。

甕-43 (図版11) は復元口径49.4cm、残存高5.1cmをはかる大型甕の口縁部である。口縁部は外反して広がり、内面に段を認める。内外面共に剥落が著しく詳細は不明である。焼成甘く軟質、胎土はやや粗である。

甕-44 (図版11) 復元口径46.9㎝、残存高3.5㎝をはかる大型甕の口縁部の破片である。口縁部は肥大しており外反する。内外面共に剥落が著しく詳細は不明である。

甕-45 (図版11) 復元口径53.0cm、残存高4.7cmをはかる大型甕の口縁部の破片である。口縁部は外反して開く。外面は剥落しており、一部にナデ調整を認め

る他は不明である。内面にはハケ調整の後、横方向のナデ調整を行う。なお口縁 部外縁部分に線刻による鋸歯文が見られる。

甕-48 (図版12) 残存高14.9cmをはかる甕口縁部および体部の破片である。口縁部は基部太く外反して端部にいたるが、中位で欠損。外面はナデ、内面はハケ調整を行う。体部は最大径を上位に求める縦長の球体をなすが底部は欠損。体部外面にはハケ、内面にはナデ調整を行っている。焼成良好、胎土はやや粗である。高杯-1 (図版9) 復元口径29.8cm、残存高3.1cmをはかる高杯の杯部口縁部の破片である。杯部は屈曲した後外反して端部へといたる。口縁端部は丸い。外面にはナデ調整、内面には縦方向のヘラナデ調整が見られる。

高杯-2(図版9)復元口径28.0cm、残存高1.9cmをはかる高杯の杯部口縁部の破片である。杯部は屈曲した後外反して端部へといたる。口縁端部は丸い。外面にはナデ調整、内面にはハケ調整の後ナデ調整が見られる。

鉢-46 (図版12) 口径7.0cm、器高4.4cmをはかる小型の鉢である。底は平らで、体部は外反し端部は丸い。手ずくねによって作られており、内外面ともに指オサエ、ナデの痕跡が認められる。焼成良好、胎土はやや粗である。銅生産にかかわる小道具のひとつと見ることも可能である。

SC136 SC136竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器 -

甕-24 (図版10) 復元口径16.4cm、残存高6.3cmをはかる甕口縁部、体部の破片で、全体の1/6が残存する。口縁部は「く」の字に外反して開き、体部は頸基部からなだらかに内彎して下がる。内外面共にナデ調整、焼成良好、胎土は密で微小な砂粒を含む。外面淡黄褐色、内面は暗灰色を呈する。

甕-263 (図版27) 復元口径19.0cm、残存高9.1cmをはかる。口縁部は基部太く「く」の字に屈曲して端部にいたる。端部は丸い。体部最大径は中位に求められるが、上位で欠損。内外面にはハケ調整が明瞭に残る。焼成良好、胎土はやや粗である。

SC144 SC144 竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器-

高杯-25 (図版10) 残存高9.3㎝をはかる高杯杯部、脚部の破片である。脚基部細くなだらかに下がった後、大きく外反する。杯部は底部は平らで上外方にのびる。杯部内外面ともにナデ調整、脚部外面ハケ調整の後ナデ調整、胎土はやや粗で、わずかに砂粒を含む。

甕-26 (図版10) 残存高7.4㎝をはかる甕の体部及び口縁部の破片である。器表面は剥落が著しいが、一部にハケ調整が認められる。焼成良好、胎土はやや粗で砂粒を含む。外面は淡赤褐色、内面は淡黄褐色を呈する。

-須恵器-

器台-222 (図版24) 残存高7.5cmをはかる器台の台部である。外面には波状文平行叩きがみられ、内面には回転ナデ調整と円弧叩きがみられる。

SC176 SC176竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器-

高杯-243 (図版26) 復元口径33.6cm、残存高3.2cmをはかる高杯の杯部の破片である。口縁部からわずかに底部に移行する部分までで欠損。内外面ともにナデ調整、焼成甘く軟質、胎土はやや粗である。

高杯-246 (図版26) 残存高6 cmをはかる高杯の脚基部の上下の残存した破片である。内外ともにタテ方向のヘラナデ調整が見られる。焼成良好、胎土はやや粗である。248は脚基部の破片と見られる。

獲-245(図版26)口頸基部周辺の破片である。焼成良好、胎土は粗である。なお甕244は口頸基部外面に凸帯を巡らせている。247は底部の破片である。 支脚-249(図版26)は残存高4.3cmをはかる支脚の底部の破片である。端部で大きく内側に曲げている。内外面にナデ調整が見られる。

SC244 SC244 竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器 -

台付き鉢-255 (図版26) 残存高6.8㎝をはかる台付き鉢あるいは壺の台基部および台部の破片である。鉢底体部外面にはハケナデ調整が行われ、台部にも一部認められる。内面には横方向のハケ調整が見られる。焼成良好、胎土はやや粗である。

SC246 SC246竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器 -

甕-93(図版15)は復元口径20.4cm、残存高15.0cmをはかり、全体の1/4を残す。口縁部はゆるやかに外反して開き、胴部はなだらかに下がる。器面は内外面ともに剥落しているが、外面のみハケ調整の後ナデ調整が行われている。

甕-94 (図版15) は復元口径20.0㎝、残存高3.1㎝をはかり、全体の1/6の 残存である。口縁部は外反して開き、頸部内外面に稜をもつ。内外面ともナデ調整を行う。外面にはナデ調整、内面にはハケ調整の後ナデ消している。

甕-95 (図版15) は復元胴部径16.9cm、残存高10.4cmをはかる甕胴縁部破片である。やや丸みを持った胴部で、最大径は胴部中央に持つ。外面にナデが認められ、内面にはハケメの後ナデ消している。

大型甕-96(図版5)は復元口径37.4cm、残存高4.1cmをはかる甕の口縁部のみの遺存である。口縁部は肥大し直線的に外反している。口唇部は摘みあげている。外面にナデ調整が認められるが、内面は器表面剥落のため詳細は不明である。

大型甕-97 (図版15) は復元口径34.6㎝、残存高4.5㎝をはかる甕の口縁部のみの遺存である。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は肥大している。内外面ともに剥落のため詳細は不明である。

大型甕-108 (図版15) は残存高6.4cmをはかる大型甕の口縁部の破片である。 口縁部は大きく外反して開く。内外面ともに器表面は剥落しており、調整手法な どは不明である。 甕-251(図版26)残存高8.1㎝をはかる甕の体部および底部の破片である。 内面にはハケ調整、外面にはナデ調整が見られる。なお252、253もいずれ も甕の底部の破片である。

鉢-250 (図版26) 残存高7.8cmをはかる台付きの鉢の破片である。台は底部中央に貼付されているが基部から欠損。内面にはハケ調整、外面にはナデ調整が見られる。

壺-254 (図版26) 残存高6.2cmをはかる小型の壺の体部および底部の破片である。底部は平に近い。外面にはハケ調整が行われ、内面にはナデ調整が見られる。

器台-98 (図版15) は復元底径16.6cm、残存高9.9cmをはかり、全体の1/8 残存する。台部を欠損している。内外面ともにハケ調整を行っている。

器台-101(図版15)は残存高6.9cmをはかる台部、脚端部を欠損した破片である。外面はナデ、内面には指オサエの後、ナデ調整を行っている。

器台-102(図版15)復元口径14.4cm、現存1/4である。外面屈曲部に稜が みられる。外面はナデ、内面には指オサエの後、ナデ調整が施されている。

器台-103(図版15)は復元底210.9cm、残存高5.0cmをはかる脚部の破片である。脚体部は台部にむかって直線的にのびる。内外面ともに指オサエの後ナデ消している。104も器台で手法も近似する。

器台-105(図版15)は底径8.6cm、残存高5.0cmをはかり、全体の1/3の遺存である。内外面ともに指オサエとナデ調整が行なわれている。

壷-99 (図版15) 複合口縁壷の破片で、最大径21.4cm、残存高3.1cmをはかる。 屈曲部内外面ともに明瞭な稜が認められる。内外面ともに器表面の剥落が著しく 詳細は不明である。

壷-113 (図版15) 口径16.4cm、残存高3.1cmをはかる複合口縁の壷の破片である。口唇部はふくらみをもち、口縁部は内傾し、端部は内傾する面をなす。内外面ともに剥落が著しく詳細は明らかにできない。

高杯-100 (図版15) 残存高9.8㎝をはかる高杯の脚基部を中心とする3/5の破片である。杯部は丸みをもってのび、脚部は基部細く、直線的に外反する。脚部は全体に細く、外面にはハケ調整の後ナデ調整が見られる。杯部内面には不定方向のナデ調整が見られる。また脚部内面にはシボリの痕跡が見られる。

底部破片-106 (図版15) 復元底径5.0cmをはかる丸底の壷ないし甕の底部の破片である。器壁は厚く胴部にむかって丸みをもってたちあがっている。外面はナデ調整、内面には指オサエの後不定方向のナデ調整の痕跡が認められる。

底部破片-107(図版15)は復元底径5.8cmをはかる平底の底部である。器壁は薄く、胴部にむかって直線的に伸びる。外面にはハケ調整が行なわれる。内面は指オサエの後ナデ消している。

底部破片-111 (図版15) は復元底径9.8cmをはかる凸レンズ状の平底で、底部端にややくびれを認める。外面にはハケ調整の後ナデ調整が行なわれている。 内面は剥落により不明である。

底部破片-112(図版15)平底で復元底径8.6cmをはかる。体部はやや内彎気

味にのびる。外面にハケ調整、内面に指オサエの痕跡が見られる。

体部(胴部)破片-109(図版15)残存高9.8cmをはかる。体部最大径をはかる部位からかなり下がった部分に断面台形の突帯を貼付する。外面は剥落のため不明である。内面は横方向のハケ調整が見られる。

体部(胴部)破片-110(図版15)残存高6.7cmをはかる。体部最大径をはかる部位よりわずかに下がった部分に断面台形の突帯が貼付されている。なお突帯上には刻み目が見られる。外面にはハケ調整、内面は剥落のため不明である。

SC708

SC708竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器-

甕-175 (図版21) は復元口径23.8cm、残存高は12.6cmをはかり、全体の1/4が残存する。口縁部は直線的に伸びて、頸部内面には明瞭な稜線が認められる。外面は縦方向のハケによる調整が行われる。内面は剥落が著しく調整は不明である。外面は褐色、一部黒色で、内面は浅褐色を呈し白色砂粒を多く含む。

29.0cm、残存高7.7cmをはかり、全体の1/8が残存する。口縁部は直線的で頸部内面に明瞭な稜線を認める。外面はハケ調整の後ナデ調整、内面はナデ調整を行っている。暗褐色で白色砂粒を多く含む。

大型甕-182(図版21)は復元口径44.8cm、残存高23.0cmをはかり、全体の5/6が残存する。口縁部下端に三角凸帯がめぐる。凸帯はナデ調整の後刻み目が施されている。外面はハケ調整後ナデ調整、内面にはハケ調整が行われている。外面は淡黄褐色・内面は暗褐色で微小から3mmの石粒を若干含む。

21.1cm、残存高6.0cmをはかり、1/8残存する。口縁部は直線的で頸部内面の稜線は明瞭ではない。外面は剥落が著しく調整などは不明である。内面はハケによる調整を行う。明橙色で2mm以下の砂粒を含む。

甕-167 (図版20) は復元口径24.4cm、残存高11.3cmをはかり、全体の1/6が残されている。頸部内面には、明瞭な稜線が認められる。器表面は、内外面ともに剥落が著しく調整の観察はできない。浅黄橙色を呈し、白色石粒を多く含む。広口壷-176 (図版21) は復元口径22.0cm、残存高8.0cmをはかり、全体の1/4が残存する。口縁部は「く」の字に折れて外反する。口縁部下端には三角凸帯が貼付されている。器表面は内外面ともに剥落が著しく調整などは観察できない。浅黄橙色を呈する。

小型壷-164(図版20)は口径4.5cm、器高8.4cmをはかる。ほぼ球形を残す小型平底壷の完形品である。手づくねによって成形されたと考えられる。外面頸部はハケ調整の後にナデ調整で仕上げられている。浅黄橙色を呈し白色砂粒を多く含む。

鉢-179 (図版21) は復元口径27.2cmをはかり全体の1/7が残存する。体部は内彎してたちあがり、底部は凸レンズ状の平底を呈する。外面はハケ調整の後ナデ調整、内面はハケ調整をなす。明黄橙色で白色砂粒を多く含む。なお180は、復元口径21cm、残存高13.0cmをはかるやや小型の鉢で両側面に把手を貼付す

る。外面ハケ調整を内面ナデ調整を行う。

高杯-168 (図版20) 復元口径31.6cm、残存高4.7cmをはかり、全体の1/6 が残存する。杯部口縁は外反し、あまり湾曲せずに長く伸びる。外面はハケ調整の後ナデ調整、内面はナデ調整が施される。赤褐色を呈し、2 mm以下の砂粒を含む。

高杯-169(図版20)復元口径28.0cm、器高24.5cm、底径18.0cmをはかり、全体の2/3が残存する。杯部口縁部は不明瞭な段を有し、外反してあまり湾曲せずに長く伸びる。脚部は基部細く、なだらかに曲線を描きながら開き端部にいたる。また脚体部に透かし孔を穿っている。杯部は外面ハケ調整の後ナデ調整、内面ナデ調整を行う。脚部は外面ガケ調整の後ナデ調整、内面はケズリ調整の後ナデ調整を施す。黄橙色~赤褐色を呈する。白色石粒を多く含む。

高杯-174(図版20)は復元底径16.6cm、残存高14.3cmをはかり、全体の1/8が残存する。脚部は基部細く、なだらかに曲線を描きながら外反して端部に至る。なお脚体部に透かし孔を穿っている。器表面剥落が著しく調整手法などはわかりにくい。外面の一部に縦方向のハケ目調整が見られる。浅橙色で白色で砂粒を多く含む。

高杯-173(図版20)は残存高11.5cmをはかり、全体の1/4前後が残存する。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整を行う。浅橙色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。

高杯-172 (図版21) は復元底径18.4cm、残存高17.9cmをはかり、全体の1/4が残存する。脚部は基部比較的細く、体部はなだらかに開き端部へと至る。体部に透かし窓を穿っている。外面はケズリの後ナデ調整を行う。内面はナデ調整を行う。浅黄橙色を呈する。

高杯-181(図版21)は復元底216.6cm、残存高18.3cmをはかる。全体の1/2 強が残存する。脚部は基部細く、なだらかに曲線を描きながら外反して端部に至る。なお脚体部に透かし孔を穿っている。内外面はナデ調整、内面下方には横方向のハケ調整が見られる。黄橙色を呈する。

高杯-261 (図版27) 口径24.9cm、残存高13.1cmをはかる高杯である。杯部はなだらかに外反した口縁部が中位で屈曲して外彎気味に外方にのび端部は丸く仕上げられている。外面にはハケ調整の痕跡が杯部および脚部に見られる。脚基部は細くなだらかに外反するが、その屈曲部に近い部分から下位を欠損。焼成甘く、胎土はやや粗である。262も同じ形態の高杯の脚部の破片である。

器台-165 (図版20) 底径は13.6cm、残存高は8.0cmをはかる。脚部は基部太く、不明瞭に屈曲して開き、他の高杯に比し短脚を呈する。器表面は剥落が著しく、調整はわかりにくいが、外面に一部指ナデを確認できる。黄橙色で白色石粒を多く含む。

器台-177 (図版21) 支脚の可能性もある。復元底径11.6cm、残存高8.2cmをはかり、全体の2/3が残存する。体部はやや外反気味に開いている。外面はナデ調整、内面はハケ調整を行なう。外面は淡黄褐色、内面は赤味がかった暗黄褐色で微小から0.3cmの石粒を含む。 (出合)

SC865 SC865 竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器 -

高杯-84 (図版14) 残存高5.0cmをはかる高杯の杯部および脚部の破片である。 脚は短脚で基部細くなだらかに開き、さらに中位から大きく広がり端部へと至る。 端部は丸く仕上げている。脚部中位に円孔を穿っている。杯部は底が比較的丸く、 なだらかに内彎気味に上方にのびる。なお内外面ともにヘラミガキ調整を行う。 焼成良好、胎土はやや粗で砂粒を含む。赤褐色を呈する。

高杯-54(図版12)口径14.3cm、残存高7.4cmをはかる高杯あるいは台付き鉢の破片である。杯部は底が丸みをもち、なだらかに内彎気味に上外方にのびた後さらに端部近くで外方に曲げられ、端部は丸く仕上げられている。内外面ともにナデ調整が見られる。なお底部外面中央に基部の比較的細い脚の剥離した痕跡が残されており、当該遺物が脚を伴っていたことを証明している。焼成良好、胎土は密で1mm前後の白色砂粒が含まれている。

底部破片-85 (図版14) 残存高5.4cm。内外面ともミガキを施す。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。

壺-241 (図版25) 残存高6.5cmをはかる壺底部および体部の破片である。体部は底部から外反しており、底部は平に近い。内外面ともにナデ調整が見られる。 椀-242 (図版25) 口径7.5cm、器高4.5cmをはかる小型の椀である。口縁部は内彎して内上方にのび端部は丸い。外面にはナデ調整が見られる。焼成良好、胎土はやや粗である。

SC887 SC887竪穴住居出土

-須恵器-

甕破片-274(図版28)外面には平行叩き、内面には円弧叩きを伴う甕の体部の破片である。焼成良好堅緻、胎土はやや粗である。

SС931 SС931竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器 -

高杯-188 (図版22) は復元底口径6.6cmをはかる高杯脚部の破片である。器壁は薄い。基部は失われているが、脚体部はなだらかに外反して端部に至る。脚端部は丸く仕上げている。外面は横方向のナデ調整、内面はナデ調整が見られる。全体に摩耗が著しく、とくに底部付近が顕著である。焼成甘く軟質、胎土はやや粗で微小な砂粒を含む。外面は淡黄褐色、内面は暗黄褐色を呈する。

甑-189(図版22)は復元口径29.2㎝をはかる甑の口縁部および体部の破片である。体部及び口縁部はなだらかに外反した後、端部付近でさらに外反させて端部に至る。口縁端部は丸く仕上げている。内外面ともに剥落が著しく手法の観察は困難であるが、外面の一部にはハケ調整の後ナデ調整、内面はナデ調整の痕跡が見られる。焼成甘く軟質。外面淡黄褐色、内面淡茶褐色を呈する。

甑-190(図版22)は復元口径27.2cmをはかる甑の口縁部および体部の破片である。体部及び口縁部はなだらかに外反した後、端部付近でわずかに外反させて

端部に至る。口縁端部は丸く仕上げている。内外面ともに剥落が見られる。外面のにはハケ調整の後ナデ調整、内面はナデ調整の痕跡が見られる。焼成甘く軟質。外面淡黄褐色、内面茶褐色を呈する。

- 須恵器-

蓋杯-183(図版22)は口径13.4cm、器高4.0cmをはかる蓋杯の蓋である。天井部は比較的高く丸みをもち、口縁部との境には稜を残さない。口縁部はなだらかに下方に下がり、端部は内傾する段をなす。天井部の1/2 に回転へラ削り調整、ほかはいずれも回転ナデ調整を行う。ロクロの回転方向は右である。全体の1/3 を欠損。焼成良好堅緻で、胎土はやや粗で $1\sim5$ mの白色砂粒を含む。青灰色を呈する。時期は古墳時代後半の6世紀半ばから後半で、おそらくは地元の製品と見てよいだろう。

蓋杯-184(図版22)は残存高2.4cmをはかる蓋杯の蓋の破片である。天井部は平らに近く、外面2/3以上に回転へラ削り調整を行い、ほかはいずれも回転ナデ調整を行う。天井との境にわずかに段を認め、それが稜となっている。口縁部は外反して下がるが、中位以下を欠損する。焼成良好堅緻で胎土はやや粗で白色砂粒を含む。時期は古墳時代後半の6世紀半ばから後半で、おそらくは地元の製品と見てよいだろう。

蓋杯-186(図版22)復元口径11.1cm、残存高4.3cmをはかる杯身の破片である。たちあがりは内傾して端部に至り、端部は丸く仕上げられている。受部はほぼ水平に伸び丸い。底部は比較的深く丸い。底部外面2/3に回転へう削り調整、ほかはいずれも回転ナデ調整を施す。焼成良好堅緻で、胎土は粗である。おそらくは183、184に伴う杯身と考えられる。

蓋杯-187(図版22)復元口径11.1cm、器高4.1cmをはかる杯身の破片である。たちあがりは内傾して端部に至る。端部は丸く仕上げられている。受部はほぼ水平に伸び丸い。底部は比較的深く丸いが、底部中央を欠損。底部外面の1/2以上に回転へう削り調整、ほかはいずれも回転ナデ調整を行う。全体のほぼ1/5の残存である。焼成良好堅緻で、胎土は粗である。おそらくは183、184に伴う杯身の可能性が濃いが、やや新しい段階の杯身と見ることも不可能ではない。蓋杯(身)-266(図版28)復元口径12.1cm、残存高4.2cmをはかる。たちあがりは比較的高く内傾して内上方にのび端部は丸く仕上げている。底部1/2前後に回転へう削り調整、ほかは回転ナデ調整を行う。焼成良好堅緻、胎土はやや粗で、1.5mm前後の白色砂粒を含む。

蓋杯(身)-267(図版28)復元口径13.6cm、器高4.6cmをはかる。たちあがりは比較的高く内傾して端部に至る。端部は丸い。266よりわずかに口径が大きいが時期的には大きな差はないと見られる。底部外面2/3に回転へう削り調整、ほかはいずれも回転ナデ調整を行う。焼成良好堅緻、胎土はやや粗で、 $1\sim5$ mmの白色砂粒が見られる。

蓋杯(身)−268 (図版28) 口径12.4cm、器高4.6cmをはかる。たちあがりは 比較的高く内傾して内上方にのび端部は丸く仕上げている。底部2/3前後に回 転へラ削り調整、内面中央部にはナデ調整、ほかは回転ナデ調整を行う。焼成良 好堅緻、胎土はやや粗で、1.5mm前後の白色砂粒を含む。

蓋杯(身) -269(図版28)口径10.9cm、器高4.4cmをはかる。たちあがりは比較的高く内傾して内上方にのび端部は丸く仕上げている。底部1/2前後に回転へう削り調整、ほかは回転ナデ調整を行う。焼成良好堅緻、胎土は粗で、白色砂粒を含む。

甕破片としては、272、273、275、276、279が当該住居出土須恵器である。いずれも外面には平行叩き、内面には円弧叩きを伴う甕の体部の破片と見られる。

提瓶-191 (図版22) 最大径6.6cmをはかる提瓶の体部の破片である。外面には粗な回転カキ目調整が行われ、その上面には平行叩きの痕跡もわずかながら認められる。内面には円弧叩きが見られる。全体の規模は明らかにできないが、ごく普通の形態と見られる。焼成良好堅緻で、胎土は密である。

甕-192 (図版22) 最大径11.7cmをはかる甕体部の破片である。外面には細かな平行叩きの痕跡が見られるが、その上面には回転カキ目調整を行っている。内面には円弧および同心円叩きが明瞭に残されており、それらの上面には調整は行われていない。器壁および叩きの状況から、甕体部中位から下方の底部に近い部位の破片と考えられる。なお体部最大径は40cmを超える可能性が濃い。

甕-256 (図版22) 残存高8.1㎝をはかる甕口縁部の破片である。内外面の調整は不明であるが、257は両面ともにハケ調整が見られる。また258が体部の破片である。

把手-259 (図版26) 鍋または鉢に伴う把手のみの残存である。甑の可能性もあるが、これのみでは判断できない。

壺-260 (図版26) 残存高6.2cmをはかる壺の破片である。体部中央に最大径を求める形態であるが、それ以上は不明である。

SC935 SC935竪穴住居出土

- 弥生土器 • 土師器-

甑-89 (図版14) 復元口径24.8cm、残存高9.8cmをはかる甑の体部及び口縁部である。口縁部は直線的に外反し、端部は丸くナデて仕上げている。外面はハケ調整、ほかはナデ調整を行っている。淡黄橙色を呈する。

甕-90 (図版14) 復元口径17.4cmをはかる甕の口縁部と考えられる。口縁部は わずかに外反する。口縁端部は丸く仕上げている。器表面は剥落が著しく、詳細 は不明である。

13区採集 13区採集

-須恵器-

蓋杯-193 (図版23) 復元口径10.0㎝、残存高4.3㎝をはかる蓋の破片である。 天井部は比較的高く平らに近い。天井部外面2/3に回転へラ削り調整、天井部 内面中央ナデ調整を行う。他の各部分は回転ナデ調整を行う。口縁部は天井部と の境にわずかな稜を認め、わずかに外反して下がり、端部は丸く仕上げている。 焼成良好、胎土はやや粗である。

蓋杯-194 (図版23) 復元口径14.0cm、残存高3.8cmをはかる蓋の破片である。 天井は比較的高く丸みを持つが中央部を欠損。口縁部と天井部との境には明瞭な 稜が認められるが、かなり退化している。口縁部はなだらかに外反して下がり、 端部は丸く仕上げられている。内外面ともに回転ナデ調整を行う。焼成良好、胎 土は密である。

高杯-196(図版23)残存高4.6cmをはかる高杯の脚部の破片である。縦方向に台形の透かし窓を穿っているが、破片のためいくつの方向に窓が見られるのかは不明である。全体に回転ナデ調整を行う。

甕-202 (図版23) 残存最大径14.0㎝をはかる甕の体部の破片である。外面には平行叩き、内面には円弧叩きが各々見られる。焼成良好、胎土は密である。 甕-203 (図版23) 残存最大径5.7㎝前後をはかる甕体部の破片である。外面

には平行叩き、内面には円弧叩きが施されている。焼成良好、胎土は密である。

SC936

SC936竪穴住居出土

内面は暗茶褐色を呈する。

- 土師器-

甕-199(図版23)復元口径8.2cm、残存高9.0cmをはかる甕で、全体の3/4を欠損。口縁部は基部太く、外反して上外方にのび端部は丸い。体部は最大径を中位に求める縦長の球体をなす。体部には内外面ともにハケ調整の後にナデ調整を行う。胎土はやや粗で、0.1~3 mmの白色砂粒を含む。全体に黒色で部分的に茶褐色を呈する。

- 須恵器-

蓋杯-195 (図版23) 復元口径14.7cm、器高4.8cmをはかる蓋である。天井は比較的高く丸みを持つ。天井部外面1/2以上に回転へラ削り調整を行う。口縁部と天井との境の稜はわずかに屈曲部に残されているに過ぎない。口縁部はなだらかに下がり、端部は丸く仕上げられている。外面全体に自然釉が見られる。焼成良好堅緻である。

蓋杯(身) -270(図版28)復元口径12.0cm、器高4.7cmをはかる。たちあがりは比較的高く内傾して内上方にのび端部は丸く仕上げている。底部1/2前後に回転へう削り調整、ほかは回転ナデ調整を行う。焼成良好堅緻、胎土は粗で黒色砂粒を含む。

蓋杯(身)-271(図版28)復元口径15.2㎝、器高7.1㎝をはかる甕あるいは

広口壺の口縁部の破片である。口頸基部は太く、口径部は基部から外反してのび端部でわずかに段をなす。体部は外面に平行叩き、内面に円弧叩きを施す。焼成甘く軟質で胎土は粗である。

甕-204 (図版23) 残存最大径5.5㎝をはかる甕体部の破片である。外面には 平行叩きと回転カキ目調整が交互に行われている。内面には明瞭に円弧叩きが残 されている。焼成良好堅緻、胎土は密である。

SС939 SС939竪穴住居出土

-須恵器-

蓋杯-185(図版22)復元口径12.4cm、器高5.1cmをはかる杯身の破片である。たちあがりは内傾した後、直立して端部に至る。底部は比較的深く丸い。底部外面 1/2 以上に回転へう削り調整、内面底部中央にはナデ調整、ほかはいずれも回転ナデ調整を行う。全体の 1/5 強の残存である。焼成良好堅緻で、胎土は粗である。おそらくは 183、ないしは 184 に伴う杯身と考えられる。

SC994 SC944竪穴住居出土

- 須恵器-

蓋杯-209 (図版24) 復元口径13.5cm、残存高3.1cmをはかる蓋の破片である。 て天井部と口縁部の境からわずかに天井部よりで、中央部を欠損。口縁部との境 の稜はまったく残されていない。口縁部はなだらかに下外方に下がり、端部は内 傾する面をなす。内外面ともに回転ナデ調整を認める。

蓋杯-210(図版24)復元口径12.1cm、残存高4.1cmをはかる杯身である。たちあがりは内傾した後直立し端部は丸い。受部は平行にのび端部は丸い。底部は比較的深く丸い。底部中央を欠損するが、外面2/3に回転へう削り調整を行う。ほかはいずれも回転ナデ調整である。

甕-217 (図版24) 残存最大径6.0㎝をはかる甕体部の破片である。外面には平行叩き、内面には円弧叩きを行っている。焼成良好堅緻、胎土はやや粗である。甕-220 (図版24) 残存最大径10.1㎝をはかる甕体部の破片である。外面には平行叩き、内面には円弧叩きを行っている。焼成良好堅緻、胎土はやや粗である。

溝

溝出土物

SD010 SD010溝出土

- 弥生土器 • 土師器 -

甕

甕−59 (図版13) 残存高7.2cmをはかる甕口縁部周辺の破片である。口縁部は基部から「く」の字に外反し端部は丸い。外面にはハケ調整、内面にはナデ調整を行う。

甕-60 (図版13) 残存高3.6㎝をはかる甕口縁部周辺の破片である。口縁部は基部から「く」の字に外反し端部は外傾する凹面をなす。外面にはハケ調整、内面にはハケ調整の後、ナデ調整を行う。

甕-61(図版13)復元口径17.0㎝、残存高10.7㎝をはかる甕口縁部及び体部の

破片である。口縁部は基部太く、「く」の字状に外反して上外方にのび端部は外傾する面をなす。体部外面にはハケ調整、口縁部はナデ調整を行う。内面はナデ調整を行う。

甕-62 (図版13) 復元口径17.4cm、残存高9.4cmをはかる甕口縁部及び体部の破片である。口縁部は基部太く、「く」の字状に短く外反して上外方にのび端部は丸い。体部外面にはハケ調整、口縁部はナデ調整を行う。内面はナデ調整を行う。

甕-63 (図版13) 復元口径36.4cm、残存高5.0cmをはかる大型甕の口縁部の破片である。口縁部は基部太く外反して端部に至る。口縁端部は外傾する凹面をなす。外面はハケ調整の後ナデ調整を行う。内面はヘラミガキ調整を行う。

甕-64 (図版13) 復元口径22.8cm、残存高5.4cmをはかる甕口縁部及び体部の破片である。口縁部は基部太く、「く」の字状に短く外反して上外方にのび端部は丸い。体部外面は剥落のため不明。内面はハケ調整を行う。

甕-65 (図版13) 残存高11.3cmをはかる甕口縁部及び体部の破片である。口縁部は基部からわずかで欠損。体部は上位に最大径を求める球体をなす。剥落のため判別しにくいが、内外面ともにハケ調整を行っていることが確認できる。

甕-115 (図版16) 口径17.2cm、器高24.0cm、底径3.3cmをはかる甕で全体の約 1/3を欠損する。口縁部は「く」の字状に大きく外反する。体部は最大径を上位に求め、縦長の器形をなす。体部外面の大半は剥落している。体部内面も剥落しているが、ハケ調整が一部にみられる。焼成良好、胎土はやや粗である。

甕-116 (図版16) 残存高6.8cmをはかる甕または壷の体部および底部の破片である。底は平らで体部は直線的に外反する。中位より上が欠損。内外面共にナデ調整を行う。

甕-125 (図版16) 残存高12.9㎝、底径4.8㎝をはかる甕体部から底部の破片である。底は平底で体部は外反した後内彎気味に上方にのびる。外面にはヘラミガキが行われ、内面は不定方向のヘラミガキ調整が見られる。焼成良好、、全体に剥離しやすい状態である。内面には炭化物が付着する。

甕-126 (図版16) 残存高12.8cm、底径6.8cmをはかる甕体部から底部の破片である。底は凸レンズ状の平底で体部は外反した後内彎気味に上方にのびる。外面、内面にはハケ調整が見られる。全体に剥離しており観察は困難である。

獲-130 (図版17) 口径14.0cm、器高18.3cm、底径5.6cmをはかる甕で全体の約3/4を欠損する。口縁部は基部太く「く」の字状に外反し、端部は丸い。体部は最大径を上位に求める縦長の球体をなし、体部はなだらかで肩のはりを認めない。底は平底で比較的安定している。体部外面には下位までハケ調整の後、ナデ調整を行う。内面は口縁部から、大半ナデ調整を行う。

甕-310(図版17)復元口径17.5cmで、1/4が現存する。口縁部は丸みを帯びた「く」の字状口縁で胴部が大きく張る。外面は胴部にハケメ調整を行い、口縁部および内面については横ナデ調整を行う。内面は器表面の剥落が著しい。

甕-132 (図版17) 復元口径26.4cm、残存高11.7cmをはかる甕の上半部の破片である。口縁部は基部太く「く」の字状に外反し、端部は丸い。体部は最大径を

中位に求める縦長の球体をなし、体部はなだらかで肩のはりを認めない。底部は 欠損。体部外面にハケ調整の痕跡が見られるが大半は剥落している。口縁部周辺 はナデ調整を行う。

甕-133 (図版17) 復元口径26.4cm、残存高11.8cmをはかる甕の上半部の破片である。口縁部は基部太く「く」の字状に外反し、端部は丸い。体部は最大径を上位に求める縦長の球体をなし、体部はなだらかで肩のはりを認めない。底部は欠損。体部外面にハケ調整の痕跡が見られるが大半は剥落している。体部内面はヘラ削り調整の後ハケ調整を行う。口縁部周辺はナデ調整を行う。

甕-134 (図版17) 復元口径21.4cm、残存高7.5cmをはかる甕の中半部の破片である。口縁部は基部太く「く」の字状に外反し、端部は丸い。体部は最大径を上位に求める縦長の球体をなし、体部はなだらかで肩のはりを認めない。底部は欠損。体部外面の大半は剥落している。体部内面は剥落しているが、ハケ調整が見られる。口縁部周辺はハケ調整を行う。

20.3cm、器高19.7cmをはかる甕である。口縁部は基部太く「く」の字状に短く外反し端部は丸い。体部は最大径を上位に求める縦長の球体をなし、体部はなだらかで肩のはりを認めない。底部は平らである。外面体部の大半はハケ調整が見られる。口縁部および内面にはナデ調整を行うが、一部にハケ調整が見られる。なお全体に器表面は剥落が著しい。

甕-137 (図版17) 復元口径14.6cm、残存高6.4cmをはかる甕の中半部の破片である。口縁部は基部太く「く」の字状に短く外反し端部は丸い。体部は最大径を上位に求める縦長の球体をなし、体部はなだらかで肩のはりを認めない。底部は欠損。体部外面の大半は剥落している。体部内面は剥落しているが、一部にハケ調整の後ナデ調整が見られる。口縁部周辺はナデ調整を行う。

甕-138 (図版17) 復元口径14.8cm、残存高5.1cmをはかる甕の中半部の破片である。口縁部は基部太く「く」の字状にゆるやかに外反し端部は丸い。体部は最大径を上位に求める縦長の球体をなし、体部はなだらかで肩のはりを認めない。底部は欠損。体部外面の大半は剥落している。体部内面は剥落しているが、ハケ調整が見られる。口縁部周辺はナデ調整を行う。

甕-139(図版17)復元口径12.2㎝、残存高6.4㎝をはかる甕の中半部の破片である。口縁部は基部太く「く」の字状にゆるやかに外反し短く、端部は丸い。体部は最大径を上位に求める縦長の球体をなし、体部はなだらかで肩のはりを認めない。底部は欠損。体部外面の大半は剥落しているが、一部にハケ調整の後ナデ調整が見られる。体部内面はハケ調整の後ナデ調整を行う。口縁部内外面はナデ調整を行う。

底部破片-68(図版13)復元口径は7.2cmをはかり、1/4が現存する。底部はやや上底となっている。外面は器表面の剥落が著しく、調整は不明である。内面はナデ調整を行っている。

底部破片-118(図版16)残存高2.7cmをはかる2.7cmをはなる2.7cmをはなる2.7cmをはなる2.7cmをはなる2.7cmをはなる2.7cmをはなる2.7cmをはなる2.7cmをはなる2.7cmをはなる2.7cmをはなる2.7cmをなる2.7cm

底部破片-119(図版16)残存高5.4cmをはかる甕あるいは壷の底部の破片である。底は丸く、体部は外反して上外方にのびる。外面にはハケ調整ののちナデ調整、内面にはヘラナデ調整が見られる。

底部破片-120 (図版16) 残存高2.3cmをはかる甕あるいは壷の底部の破片である。底はわずかに丸く、体部は外反して上外方にのびる。内外面ともに剥落が著しく調整の観察はできない。

底部破片-121 (図版16) 残存高2.5cmをはかる甕あるいは壷の底部の破片である。底は平らで体部は外反する。内面にはナデ調整、底部はヘラ切りののちナデ調整が見られる。

底部破片-122 (図版16) 残存高5.1cmをはかる甕あるいは壷の底部の破片である。底は平らで体部は外反する。外面にはハケ調整の後ナデ調整を行う。内面はナデ調整、底部は未調整である。

底部破片-123 (図版16) 残存高4.5cmをはかる甕あるいは壷の底部の破片である。底は平らで体部は外反する。外面にはハケ調整の後ナデ調整を行う。内面はナデ調整、底部は未調整である。229 も同じ形態の底部片である。

底部破片-127 (図版16) 残存高2.3cmをはかる2である。底は平らで体部は外反する。内外面ともに剥落が著しく調整の観察はできない。

鉢-136 (図版17) 復元口径16.4cm、器高15.2cm、底部径6.6~5.8cmをはかる鉢である。やや丸みを持つ底部から口縁部は外反して上外方に内彎気味にのび端部は丸く仕上げている。外面はヘラ削りの後ナデ調整を行い、内面はヘラ削り及びナデ調整を行っている。また底部と体部との間には指オサエの痕跡も残されている。外面の一部には朱丹の塗布した痕跡が残されている。焼成良好堅緻で胎土はやや粗で白色砂粒を多く含む。

高杯-114 (図版16) 残存高10.0cmをはかる高杯の脚部の破片である。脚部は基部比較的太く外彎気味に下方に下がる。外面は縦方向のナデ調整、内面には指オサエの痕跡が見られる。杯部は底部のみの残存でわずかに丸みを持つ。底部内面にはナデ調整を行う。焼成良好、胎土はやや粗で0.1~1 mmの白色砂粒を含む。茶褐色を呈する。

壷-55 (図版12) 残存高13.6cmをはかる壷体部および底部の破片である。体部上位に最大径を求めることができる。外面には上下方向にハケ調整、内面にはハケ調整の後、ナデ調整を行う。底部外面には指オサエの痕跡が認められる。焼成良好、胎土は粗で2~3mmの砂粒を含む。

壷-58 (図版13) 復元口径16.0cm、残存高13.8cmをはかる二重口縁壷の口縁部の破片である。基部は比較的太く、外彎気味に外反する口縁部端部で大きく逆「く」の字に屈曲させており、端部は丸い。外面はハケ調整、ほかはナデ調整を行う。体部との境には凸帯をめぐらせている。焼成良好、胎土はやや粗でわずかに砂粒を含む。228も同じ形態の口縁である。

 は丸い。体部最大径は中位に求められる縦長の器形である。底部は平で、内外面にはハケ調整を行う。焼成良好、胎土はやや粗である。なお264は甕底部の破片である。

壷-124 (図版16) 残存高13.3㎝をはかる壷の体部および底部の破片である。 底は平らに近く体部は内彎気味に外反する。体部最大径は中位に求められる。外 面ハケ調整の後ナデ調整を行う。内面底部についてはハケ調整の後、ナデ調整を 行っている。

壷-129 (図版16) 残存高16.0㎝をはかる大型の壺である。口縁基部太く体部は内彎気味に外方に下がる。体部最大径は中位に求められると考えるが、すでにそれまでに欠損している。体部外面にはハケ調整が行われており、内面にはヘラ削り調整が認められる。

器台-69(図版13)復元底径15.1cm、残存高7.6cmをはかる器台の底部破片である。脚部はゆるやかに外反し、接地面からはナデ調整、その上方にはヘラ削り調整を行う。焼成良好、胎土は密である。外面明黄橙色、内面は黄橙色を呈する。器台-128(図版16)復元底径9.6cm、残存高11.8cmをはかる器台の底部破片である。脚部はゆるやかに外反し、くびれ部からは大きく外反して開く。外面には叩き調整を行った後、ナデ調整を行っている。内面はヘラ削り、ナデ調整を行っている。赤褐色を呈する。

境-66(図版13)口径6.0cm、器高4.2cmをはかる小型の境である。手づくねによって作られており、内外に指オサエの痕跡が明瞭に残されている。焼成良好、胎土はやや粗である。製銅作業に関連する土器の可能性が濃いと考えられる。境-67(図版13)口径9.4cm、器高4.7cmをはかる小型の境である。手づくねによって作られており、内外に指ナデ調整及び指オサエの痕跡が明瞭に残されている。焼成良好、胎土はやや粗である。先の66と同様、大きさから見て通常の生活用品と考えるより、製銅作業に関連する土器の可能性が濃いと考えられる。

SD016

SD016溝出土

- 弥生土器 • 土師器 -

壷-3(図版9)復元□径22.8㎝、残存高6.2㎝をはかる二重□縁壷の□縁部の破片である。基部は比較的太く、外彎気味に外反する□縁部端部で大きく逆「く」の字に屈曲させており、端部は丸い。外面はハケ調整の後、横方向のナデ調整を行う。ほかはナデ調整を行う。体部はすべて欠損。焼成良好、胎土はやや粗でわずかに砂粒を含む。

壷-8 (図版9) 残存高8.3㎝をはかる壷の口縁部および体部の破片である。口縁部は基部太く、外反して端部へ至る。端部は欠損するが、二重口縁となっている可能性が濃い。基部外面に凸帯をめぐらせている外面にはハケ調整、内面はハケ調整及びナデ調整を行う。

底部破片-9(図版9)底径8.0cm、残存高5.8cmの器壁が薄い平底である。底から胴部に向かってゆるやかに立ち上がる。外面調整はハケメの後、横方向のナデ、底部端に指ナデが認められる。内面には、ハケメ、内底部にはナデが認められる。

色調は淡黄褐色を呈する。

底部破片-10(図版9)残存高4.3cmをはかる2である。底はわずかに丸みを持ち、体部は外反して上外方にのびる。外面はヘラ削り、内面はハケ調整を行っている。

甕-13 (図版9) 復元口径24.6cm、残存高8.9cmをはかる甕の口縁部の破片である。基部から口縁部は「く」の字に外反し端部は丸い。体部は基部から内彎気味に外下方に開く。剥落が著しいが、外面のナデ調整、ヘラ削り調整の痕跡は認められる。焼成甘く軟質、胎土はやや粗で白色砂粒を含む。

器台-7(図版9)底径8.0cm、残存高5.8cmの器壁が薄い平底である。底部から 胴部に向かってゆるやかに立ち上がる。外面調整はハケメの後、横方向のナデ、 底部端に指ナデが認められる。内面にはハケメ、内底部にはナデが認められる。 色調は淡黄褐色を呈する。

SD019 SD019溝出土

- 弥生土器 • 土師器 -

器台-4(図版9)口径7.1cm、器高9.1cmをはかる器台である。内外面ともに剥落が著しく詳細は不明であるが、わずかに外面の指オサエ、内面にはナデ調整が認められる。台部のみ褐色を呈し、火の使用の可能性がある。

甕-5 (図版9) 残存高11.4cmをはかる甕の体部を中心とする破片である。基部は比較的太く外反する口縁部は中位で欠損。体部は基部からなだらかに内彎気味に開いている。外面にはハケ調整、内面にはハケ調整及びナデ調整が見られる。外面淡黄褐色、内面暗黄褐色を呈する。

SD023 SD023溝出土

- 弥生土器・土師器 -

高杯-140 (図版18) 残存高9.2cmをはかる高杯の脚部の破片である。基部は細く外彎気味に開く。脚端部近くに円を穿っている。内外面ともにナデ調整を行う。

高杯-141 (図版18) 残存高3.8cm、復元底径18.5cmをはかる高杯の脚部の破片である。脚は大きく外反して端部に至り、端部は丸い。内外面ともに剥離のため不明。

甑-144 (図版18) 復元□径23.3cm、残存高9.5cmをはかる甑の□縁部及び体部の破片である。体部から□縁端部へはなだらかに外反した後さらに端部近くでわずかに外反させている。端部は丸い。体部外面にはハケ調整を行う。内面にはナデ調整が見られる。

甕-142 (図版18) 復元口径26.9cm、残存高6.4cmをはかる甕の口縁部の破片である。基部から口縁部は「く」の字に外反する。体部は基部から外下方に開く。

剥落が著しいが、内外面に横、斜め方向のナデ調整の痕跡が認められる。

甕-143 (図版18) 復元口径26.9cm、残存高6.4cmをはかる甕の口縁部の破片である。基部からから口縁部は「く」の字に外反する。体部は基部から外下方に開く。剥落が著しいが、内外面に横方向のナデ調整の痕跡が認められる。

甕-145 (図版18) 復元口径22.0cm、残存高7.1cmをはかる甕の口縁部の破片である。基部から口縁部はゆるやかに「く」の字に外反する。体部は基部から外下方に外反して開く。外面にハケ調整、内面にはヘラ調整およびナデ調整が認められる。

甕-146 (図版18) 復元口径20.2cm、残存高9.9cmをはかる甕の口縁部の破片である。基部から口縁部はなだらかに「く」の字に外反する。体部は基部から外下方に内彎して開く。外面にヘラ調整、内面にはヘラ調整およびナデ調整が認められる。

甕-149(図版18)復元口径32.7cm、残存高25.7cmをはかる甕の口縁部および体部の破片である。口縁部は基部太く、「く」の字に外反する。体部は基部から外下方に内彎して開く。体部最大径は中位に求められる。内外面にハケ調整、内面にはハケ調整およびナデ調整が認められる。また基部外面には凸帯がめぐる。甕-150(図版18)残存高11.6cmをはかる甕ないしは壷の体部から底部の破片である。底は平らに近く、体部は内彎気味に上方に開き、最大径を中位に求める。外面にはハケ調整、ナデ調整が行われ、ほかはナデ調整を行う。

口縁部破片-6 (図版9) 非常に小片のため口径その他法量は不明である。外面 にヘラナデが見られるが、大部分は剥落しており詳細は不明である。

口縁部破片-11(図版9)小片のため法量は不明である。外面にはハケメ、ナデがみられる。内面は剥落のため、調整その他は不明である。

底部破片-147 (図版18) 残存高2.9cmをはかる底部の破片である。体部は平底から外反する。剥落のため詳細は不明である。

底部破片-148 (図版18) 残存高2.1cmをはかる底部の破片である。体部は平底から外反する。内外面にナデ調整を行う。

SD122 SD122溝出土

- 弥生土器 • 土師器 -

器台-20 (図版10) 残存高10.5cm、復元口径15.2cmをはかる器台の破片である。 口縁部は体部から大きく屈曲する。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハ ケ調整およびナデ調整が認められる。浅黄橙色を呈し、胎土はやや粗で白色砂粒 を含む。

器台-22 (図版10) 復元口径14.6cm、残存高8.0cmをはかり、全体の1/5が残存する。体部は直線的に伸びる。外面はナデ調整がみられ、内面はヘラ調整後、ナデ調整が認められる。赤褐色を呈し、微少3mmの砂粒を含む。

壷-21 (図版10) 復元口径23.2cm、残存高7.9cmをはかる二重口縁の壷の口縁 部の破片である。外面にはハケ調整、内面はハケ調整の後ナデ調整を行う。淡い 黄褐色を呈する。 高杯-23 (図版10) 残存高4.8㎝をはかる高杯の破片である。脚部は細い基部から外反する。杯部は底のみの残存で丸みを持つ。脚部、杯部ともにヘラミガキを行っている。

SD217 218 SD217・218溝出土

- 弥生土器 • 土師器 -

甕-231 (図版25) 復元口径13.0cm、残存高4.8cmをはかる甕の口縁部の破片である。内部にはハケ調整、外面にはナデ調整が見られる。なお232も甕の口縁部の破片である。

甕-234 (図版25) 残存高4.1cmをはかる甕底部の破片である。同じく236・237・239・240はいずれも底部の破片である。

器台-233 (図版25) 復元口径15.2cm、残存高4.9cmをはかる器台上部の破片である。口縁部は大きく外反し端部は太く丸い。内面にはハケ調整、内面にはナデ調整を行う。なお235も器台上部の破片である。

SD940

SD940溝出土

- 土師器-

把手付き甕-206 (図版23) 口径31.5cm、器高26.5cmをはかる把手付き甕である。底部は丸く、体部は内彎気味に上方に開き、端部付近でさらに外方に屈曲させる。口縁端部は丸い。体部中位外面に把手を貼付する。把手は手ずくねによっている。外面にはハケ調整、内面にはナデ、削り調整を行う。

把手付き甕-207 (図版23) 残存最大径7.0cmをはかる把手のみの遺存である。 206と同じものと見られる。

SD942

SD942溝出土

- 須恵器-

蓋-208 (図版24) は、復元口径13.2 cm、残存高2.9 cmをはかる蓋杯の蓋である。口縁部はなだらかに下がり、稜は認めない。口縁端部は内傾する段をなす。 天井部の大半を欠損。焼成良好、胎土は密である。

甕-216、218、219 (図版24) はいずれも甕体部の破片である。内面には円弧叩き、外面には平行叩きが認められる。焼成はいずれも良好。胎土は、218が粗であるほかはいずれも密である。

その他の遺構

その他の遺構出土物

ST270

ST270甕棺墓

甕-265 (図版27) 口径16.5cm、器33.3cmをはかる甕というよりは直口壺とするほうがよいのかもしれない。口頸基部は比較的広く、口径部は直立してのび端部は丸い。口頸基部外面に凸帯がめぐっている。体部最大径は上位に求められる球体をなし底部は丸く安定を欠く。体部下位にも1条凸帯が巡らされている。外面には斜め方向のハケ調整が行われ、内面にも同じくハケ調整が認められる。焼

成良好、胎土はやや粗である。

SX071 SX071 焼成土坑出土

- 弥生土器 • 土師器 -

底部破片-12(図版9)底径10.0cm、残存高6.3cmの凸レンズ状の平底である。 胴部は底部から緩やかに立ち上がる。外面調整はナデ、内面は剥落しているが、 わずかにヘラナデが認められる。色調は外面淡黄褐色、内面黄褐色を呈する。

SX121 SX121竪穴遺構出土

-弥牛土器•土師器-

壷-15 (図版10) 復元口径15.2cm、残存高6.3cmをはかる複合口縁壺の口縁部の破片である。口縁部は基部太く外反した後逆「く」の字に屈曲させて端部に至る。端部は丸い。口縁部外面にはハケ調整の後ナデ調整、内面はナデ調整が行われている。甘く軟質。胎土はやや粗で微小~0.5mmの白色砂粒を含む。淡橙色を呈する。

把手-16 (図版10) 残存高5.8cmをはかる把手の破片である。手づくねによって成形され、とくにヘラ削りによって調整されている。鉢ないしは甑の体部に貼付されていたものと考えられる。焼成甘く、胎土はやや粗である。

把手-17(図版10)残存高10.4cmをはかる把手の破片である。手づくねによって成形され、とくにヘラ削りによって調整されている。鉢ないしは甑の体部に貼付されていたものと考えられる。焼成甘く、胎土はやや粗で、 $1\sim5$ mmの白色砂粒を含む。

底部破片-18 (図版10) 残存高3.4cmをはかる甕あるいは壷の底部の破片である。体部はなだらかに外反して上方に開く。表面は剥離が著しく調整は不明。外面には一部ナデ調整が見られる。焼成甘く、軟質、胎土はやや粗である。淡茶褐色を呈する。

底部破片-19(図版10)残存高2.4cmをはかる甕あるいは壷の底部の破片である。体部はなだらかに外反して上方に開く。表面は剥離が著しく調整は不明。外面には一部ナデ調整が見られる。焼成甘く、軟質、胎土はやや粗である。白灰色。 m-73(図版13)復元口径4cm、器高1.9cmをはかるmである。口縁部は短く外反し端部は丸い。器表面は剥落のため不明。内面にはナデ調整が見られる。全体の1/4が残存する。白灰色を呈する。焼成甘く、胎土はやや粗である。

- 須恵器-

蓋杯-211 (図版24) 復元口径12.1cm、残存高2.6cmをはかる杯である。たちあがりは短く内傾したのち端部で直立する。端部は丸く仕上げられている。受部は短く上外方の伸びる。底部は大半を欠損。焼成良好、胎土は密である。Ⅱ型式相当と見られる。

甕-211 (図版24) 6 cm×3.1cmをはかる甕の破片である。外面にはカキ目状の痕跡が見られ、内面には円弧叩きの痕跡が見られる。全体の状況は不明。焼成良好、胎土はやや粗である。

SX022 SX022遺構出土

- 弥生土器 • 土師器-

壷-53 (図版12) 復元口径16.1cm、残存高16.7cmをはかる広口の壷の上半部の破片である。口縁部は基部太く、外反して端部に至る。口縁端部は丸く仕上げている。体部は最大径を中位から下位に求める球体をなす。体部外面には斜め方向のハケ調整が行われ、口縁部にはナデ調整、体部内面にはハケ調整の後ナデ調整、また口縁部内面にはナデ調整が行われている。焼成甘い。胎土はやや粗である。

SX427 SX427竪穴遺構出土

- 弥生土器 • 土師器 -

境-70 (図版13) 復元底径6.4㎝、残存高2.0㎝をはかる椀である。底部には高台が貼付されており、口縁部は底部からわずかに上方で欠損。口縁部外面はナデ、底部内面は不定方向のナデ、ほかはいずれもナデ調整を行う。焼成良好、胎土は密である。胎土中に白雲母を含む。淡褐色を呈する。

境-71 (図版13) 復元底径8.6㎝、残存高4.0㎝をはかる椀である。底部には比較的高い高台が「ハ」の字に貼付されており、口縁部は底部から内彎気味に上方にのび、中位で欠損。口縁部外面はナデ、底部内面は不定方向のナデ、ほかはいずれもナデ調整を行う。焼成良好、胎土はやや粗で白色砂粒を含む。淡褐色を呈する。

城-72 (図版13) 復元底径7.4cm、残存高4.0cmをはかる椀である。底部には短く断面三角形の高台が貼付されており、口縁部は底部からわずかに上方で欠損。 口縁部外面はナデ、底部内面は不定方向のナデ、ほかはいずれもナデ調整を行う。 焼成良好、胎土は密で白色砂粒を含む。また胎土中に白雲母を多く含む。淡褐色を呈する。

- 須恵器-

蓋-214 (図版25) 口径15.1cm、器高3.2cmをはかる蓋である。天井部中央につまみを貼付する。天井部はなだらかに下がり端部で大きく内側に屈曲させている。天井外面三分の二に回転へラ削り調整を行い、内面中央にはナデ調整を行う。焼成良好、胎土はやや粗である。陶邑編年Ⅱ型式段階に相当するものと見られるが、同じ時期のものは地元牛頸窯でも生産されている。

SX150 SX150遺構出土

- 弥生土器 • 土師器-

壷-27 (図版10) 復元口径11.2cm、器高10.5cm。底径4.5cmをはかる小型の壷(坩)である。底は平らで安定しており、体部はなだらかに内彎気味に上方へ広がる。口縁部は基部太く外反して開き、端部は丸く仕上げている。口縁部外面に

は斜め方向のハケ、体部外面には斜め方向のハケ、およびナデ調整が行われている。内面はいずれもナデ調整である。全体の1/2が残存する。焼成良好、胎土はやや粗で2mm以上の砂粒を含む。

SX401 SX401遺構出土

- 弥生土器 • 土師器-

甕-278 (図版28) 外面には平行叩き、内面には円弧叩きを伴う甕の体部の破片である。焼成やや甘く、胎土は密である。

SX420 SX420遺構出土

- 弥生土器 • 土師器 -

高杯-79(図版14)残存高5.3cmをはかる高杯脚部の破片である。脚体部は細い基部から下がり、さらに大きく開くが、そこから先は欠損。杯部は基部で欠損。脚体部外面には縦方向のハケおよびナデ調整を行う。焼成良好、胎土は密である。赤褐色を呈する

SX423 SX423遺構出土

- 弥生土器 • 土師器 -

甕-75 (図版14) 復元口径18.2cm、残存高4.0cmをはかる甕の口縁部および体部上部の破片である。口縁部は太い基部から「く」の字に外反して端部に至る。 体部は基部から外反して開く。外面にはハケ、ナデ調整を行い、内面にはナデ調整を行う。焼成良好、胎土は密である。淡黄褐色を呈する。

甕-76 (図版14) 復元口径18.2cm、残存高6.5cmをはかる甕の口縁部および体部上部の破片である。口縁部は太い基部から「く」の字に外反して端部に至る。甕75と比較してやや保存状態が良好である。体部は基部からゆるやかに外反して開く。外面にはハケ、ナデ調整を行い、内面にはナデ調整を行う。焼成良好、胎土は密である。暗灰褐色を呈する。

底部破片-77 (図版14) 残存高4.7cm、復元底径11.0cmをはかる。やや大型の 甕ないしは壷の底部の破片である。器表面は剥落のため不明。内面にはナデ調整 を行う。焼成甘い。淡灰褐色を呈する。

SX553 SX553遺構出土

- 須恵器-

甕体部片-205 (図版23) 残存最大径4.1cmをはかる体部の破片である。外面には平行叩きの後、回転カキ目調整が行われている。内面には円弧叩きが認められる。焼成良好堅緻で胎土はやや粗である。

SX651 SX651遺構出土

- 弥生土器 • 土師器 -

器台-78(図版14)残存高6.9cm、復元口径10.4cmをはかる器台の上部の破片

である。台部はやや内彎気味に開く。外面は剥落のため不明。台部内面はヘラ削り、脚部にナデ調整を行う。焼成甘く、胎土やや粗である。暗黄褐色を呈する。

SX662 SX662遺構出土

- 弥生土器 • 土師器 -

壷-87 (図版14) 復元口径17.4cm、残存高6.1cmをはかる複合口縁壷の口縁部の破片である。口縁部は大きく逆「く」の字の屈曲させられており、調整は内外面ともにナデ、ハケ調整を行う。焼成甘く、胎土はやや粗である。

SX748 SX748遺構出土

- 弥生土器 • 土師器 -

壷-81 (図版14) 復元口径5.3cm、器高8.0cmをはかる無頸壷である。全体の3 /4が残存しており、比較的良好な状態である。平底で内彎する体部をもつ。内 外面ともにハケ調整を行う。また一部にはナデ調整も行っている。黄褐色を呈する。

SX770 SX770遺構出土

- 弥生土器 • 土師器 -

底部破片-80(図版14)残存高5.4cmをはかる底部の破片である。底は丸く安定が悪い。内外面ともに横方向のハケ調整の後、縦方向にもハケ調整を行う。またその後ナデ調整を加えている部分もある。

SX801 SX801遺構出土

- 弥生土器・土師器-

甕-82 (図版14) 復元口径18.0㎝をはかる甕の口縁部および体部の破片である。 口縁部は基部太く、外反して上方に開く。体部は内彎気味に開き上位で欠損する。 体部外面にはハケ調整、さらにナデ調整を加える。焼成甘く胎土はやや粗で、1 ㎜前後の砂粒を含む。淡黄白色を呈する。

SX837 SX837遺構出土

- 弥生土器 • 土師器 -

杯-86 (図版14) 口径12.8cm、器高4.3cm、底径8.5cmをはかる杯である。底は平らで、口縁部はほぼ直線的に外反してのび、端部は丸く仕上げられている。内外面ともに回転ナデ調整、底部付近は回転へラ削りないしはヘラ切り調整が行われている。焼成甘く、胎土はやや粗である。須恵器に同じ器形があり、あるいは須恵器の焼成の甘いものの可能性もある。

SX842 SX842遺構出土

- 弥生土器 • 土師器 -

甕-88 (図版14) 復元口径68.0cm、残存高11.2cmをはかる甕の口縁部の破片である。口縁部は基部太く、外反して端部に至る。端部は外傾する面をなす。頸部外面には比較的幅のある突帯がめぐらされている。口縁端部に刻み目を認める。

外面はハケ調整の後、ナデ調整を行う。焼成甘く、胎土はやや粗で微小な砂粒を 含む。

甕-92 (図版14) 復元口径17.4cm、残存高8.5cmをはかる甕の口縁部および体部の破片である。口縁部は基部太く、外反して端部に至る。端部は外傾する面をなす。体部は基部から内彎気味に下がり中位で欠損。体部外面、および口縁部外面にはハケ調整、外面はハケ調整の後、ナデ調整を行う。焼成甘く、胎土はやや粗で微小な砂粒を含む。

底部破片-91 (図版14) 残存高2.0cm、復元底形7.6cmをはかる甕あるいは壷の破片である。器表面剥落のため詳細は不明。

SX867 SX867遺構出土

- 弥生土器 • 土師器-

器台-83 (図版14) 復元口径16.2cm、残存高14.5cmをはかる器台の下部を欠損する破片である。屈曲部を上位に認める。台部はくびれ部から大きく外反して開き、端部は外傾する面をなす。脚部はくびれ部からなだらかに外反して開く。脚部外面にはハケ調整をわずかに認めるが、内外ともに剥落が著しく詳細は不明とせざるを得ない。焼成甘く、胎土はやや粗である。

SX874 SX874遺構出土

- 須恵器-

甕体部片-201 (図版23) 残存最大径6.5cmをはかる体部の破片である。外面には平行叩きの後、回転カキ目調整が交互に行われている。内面には円弧叩きの後ナデ調整が認められる。焼成良好堅緻で胎土は密である。

SX883 SX883遺構出土

- 須恵器 -

甕-200 (図版23) 残存最大径6.0㎝をはかる甕体部の破片である。外面には 平行叩きと回転カキ目調整が交互に行われている。内面には明瞭に円弧叩きが残 されているる。焼成良好堅緻、胎土は密である。

蓋杯-212 (図版24) 復元口径12.7cm、残存高2.8cmをはかる蓋である。天井部のほとんどを欠損。口縁部はなだらかに下がり、端部は丸く仕上げている。内外面ともに回転ナデ調整を行う。焼成良好、胎土はやや粗である。

蓋杯-213 (図版24) 復元口径12.2cm、残存高3.0cmをはかる杯身である。たちあがりは著しく短く内傾した後直立する。端部は丸い。受部は短く断面三角形を呈する。底部は浅く丸みを持つ。底部外面2/3に回転へラ削り調整を行う。焼成良好堅緻、胎土はやや粗である。時期的には7世紀半ば前後に分類されるものであり、地元の製品の可能性が濃いと見られる。

16区表面採集 16区表面採集

- 弥生土器 • 土師器 -

甕-14(図版9)復元口径36.0㎝、現存1/9の甕口縁部である。口縁部はやや外反して開く。口唇部は丸みを持つ。器表面は内外面とも剥落が著しく調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

東側斜面表面採集 東側斜面表面採集

- 須恵器-

甕-223 (図版24) 5.3cm×4.5cmをはかる甕体部の破片である。内面には円弧叩き、外面には平行叩きが認められる。焼成良好、胎土は密である。

表面採集 表面採集

- 弥生土器 • 土師器-

支脚-29(図版10)口径7.5cm、器高11.4cm、復元底径14.5cmをはかり、1/3 強が現存する。外面はナデ、内面はハケメがみられる。黄橙色で白色石粒を多く含む。

排土中 排土中

- 弥生土器 • 土師器 -

高杯-28 (図版10) 残存高8.0cmをはかる高杯の脚部の破片である。基部は細く外反して開く。器表面は剥落が著しく調整手法の観察はできないが、一部にハケ調整が見られる。焼成良好、胎土はやや粗で、0.8~1 mmの砂粒を含む。

3. 石 器

石庖丁

• 石庖丁(301~308、343) 調査区内で9点検出された。

301は、7区SС 0 0 1 竪穴住居で出土した。残存長10.8cm、幅4.0cmをはかり、背部両端がやや丸みを帯びた外彎刃半月形を呈する。図右端が欠損しているので、本来の長さはさらに1 cmほど長いものであろう。断面は丸みを帯びており、刃部寄りが最も厚くて0.75cmをはかる。刃部はやや幅の広い両刃で、図左側がより直線的なのは使い減りしたものであろうか。2 孔とも両面穿孔であるが、軸が傾き上下がズレている。全体に斜めの研磨痕が、わずかに残る。石材は、緑灰色の凝灰質シルト岩である。

302は、9区の表採資料である。長さ10.8cm、幅4.3cmの外彎刃半月形を基調とするが、背部両端もやや外彎している。断面は比較的直線的で、最大厚0.65cmの背部側から緩やかに薄くなっている。刃部は両刃であるが、丸みを帯び、稜がはっきりしない。2孔とも両面穿孔である。所々に細かい研磨痕が残り、背部寄りは背部と垂直方向、中央部は並行方向、刃部寄りは刃部と垂直方向がそれぞれ主である。背部端及び刃部の図右側が、使用により欠損・摩耗している。石材は、暗赤灰褐色の凝灰質シルト岩である。

303は、15区SC136竪穴住居より出土した。刃部両端が使用により欠損し

ているものの、ほぼ完形に近く、全長9.2cm、幅4.3cmをはかる。背部が刃部と対称的に丸みを帯びて杏仁形(紡錘形)に近いが、両端が尖らない楕円形タイプのものである。断面は直線的で、厚さ0.6cmの背部から刃部にかけて緩やかに薄くなっている。刃部は両刃で比較的鋭く研ぎ出され、両端が使用により欠損している。2 孔とも両面穿孔であるが、図下側の面では、浅く広い窪みを穿ってからのち本格的に穿孔を行っている。所々に不整方向の研磨痕や、使用による擦痕がみられる。石材は、黒色針状物質と径 $0.2 \sim 1$ mmの赤褐色粒をやや多く含む明灰褐色のもので、変成岩の一種であろうか。

304は、9区SC074竪穴住居より遺物No.73としてとりあげたものである。 背部端部がやや丸みを帯びた外彎刃半月形を呈し、図右側の穿孔部より左を欠損 している。残存長は5.9cm、幅4.6cmで、穿孔部の位置から推定すると、全長は13 cmを超す可能性もある。断面はやや丸みを帯び、最大で厚さ0.7cmをはかる。端 部は、敲打に使用されたかのように細かく欠損している。刃部は片刃に近く、図 下側の面が7~8mm研ぎ出されているのに対して、上側は2mmほどしかない。研 磨痕は僅かに残り、背部に並行方向のものが主体である。石材は、明黄褐色の細 粒砂岩である。

305は、16区SX679遺構覆土内から出土している。図右側の穿孔部より折れて左側を欠損しており、残存長4.1cm、残存幅3.6cmをはかる。平面形は外湾刃半月形で、断面は丸みを帯び最大厚0.7cmをはかる。刃部は両刃であるが、稜は甘くはっきりしない。2か所に僅かな刃こぼれがみられる。図下側の面には、背部に垂直方向へ粗めの研磨痕が多く残り、上側の面には、垂直方向の研磨後さらに並行方向への擦痕がついている。石材は、暗赤灰褐色の細粒凝灰岩で、いわゆる立岩製石包丁(笠置山産輝緑凝灰岩)にあたるものである。

306は、7区SD273溝から遺物No.14としてとりあげたものである。図左側を大きく欠損し、穿孔部は残存していない。平面形は、やや刃部が角ばった外彎刃半月形で、残存長5.3cm、幅4.4cmをはかる。断面は丸みを帯び、最も厚い背部より0.9cmをはかる。背部は全体に細かく破損しており、破損後も長期に渡って使用されたかのような状態を呈している。刃部は両刃であるが、研ぎ出しが甘くて稜がはっきりせず、また刃部と並行方向に石材による縞層が浮き出ている。体部には、斜め方向の研磨痕が僅かに残っている。石材は、黄褐色がかった細粒紫色凝灰岩で、305と同様、小豆色の笠置山産と思われるものである。

307は、21区SX741遺構より遺物No.1としてとりあげたものである。図左側穿孔部より大きく破損し、右側端部も欠損しているため、残存長は6.1㎝ほどである。残存する背部は直線的で外湾刃半月形を呈するが、長さに比べ幅が5.5㎝と広く、頑強な感じを与える。断面はやや丸みを帯びてるもののおおむね直線的で、最大幅は0.8㎝と厚く、平面形と同様に強度を重視する傾向がみられる。刃部は両刃で、比較的鋭くつけられている。穿孔は、2孔とも両面からである。研磨痕がまばらに残るが、背部に対して垂直方向のものがほとんどである。石材は黒色針状物質・赤褐色粒をやや多く含み、303と全く同種のものである。

308は、SD217・218溝より出土した小片で、残存長3.2cmをはかる。穿

石庖丁

孔部から大きく欠損して刃部は不明であるが、背部が直線的なことから、外湾刃半月形のものと推測される。穿孔は両面からで、体部には不整方向の研磨痕が多く残されている。石材は、表面が燻されたような暗黒褐色を呈する灰色凝灰岩である。さらに庖丁の両端を切除した破片343もSC136竪穴住居から出土している。

石庖丁未成品

石庖丁未成品(309・310・312) は9区SC135住居址内の土坑から、3点が重なるようにして検出された。いずれも、石材は暗赤灰褐色の細粒砂岩質凝灰岩で、笠置山産出のものと思われる。

312は、遺物No.1 としてとりあげたものである。平面形は不整な楕円形を呈し、全長10.5cm、幅7.2cmをはかる。厚さは中央部で1.4cmをはかり、端部にいくほど薄くなっている。体部は全体の 1/3ほどが自然面で、残りは一応の剥離面とみられるが、必ずしも人工的な剥離ばかりではないようである。端部には一部に重複する剥離痕もみられるが、いまだ背部と刃部がはっきりと区別されるには至っていない。三日月形に加工する荒割りの、初期段階に着手したばかりのものであるうか。

310は、遺物No.2としたもので、全長13.4cm、幅8.0cmの不整な楕円形を呈する。厚さは、図左寄りの最大部で1.9cmをはかり、やはり端部に行くほど薄くなっている。体部のほとんどは自然面で、図下側の面の左上に大きな剥離面を持つに過ぎない。端部には、さらに剥離痕がみられる。

309は、遺物No.3としたもので、全長12.9cm、幅8.2cmをはかり、309・312と同様に楕円形を呈している。図下側の面はほとんどが平らな自然面で、端部に多少の剥離痕がみられる。上側の面は一部を大きく剥離させて中央が稜状に厚くなっており、最大厚1.7cmをはかる。端部は、ほとんど加工されていない。

この他SX627遺構出土未成品342、SC135竪穴住居出土未成品344 がある。

砥石

砥石(313~322) 313~315・320の手持ち砥と、置砥・その他に大別される。 313は、2区SD010溝から遺物No.50としてとりあげたものである。全長8.2cm、幅3.0cm、厚さ1.8cmをはかる直方体状であるが、図中段の下側の面が使い減りして窪んでいるため、やや弓なりを呈している。断面は、方形の2長辺に山形の溝が刻まれた様になっている。図右側が破損しているが、その後も利用されたらしく、欠損面に擦痕がついている。他の4面は共に平滑で、特に図の上・下段の面には長軸方向の細かい研ぎ痕が無数に残っている。山形の溝は深さ4~6 mmで、二段に落ち込みながら深くなるほど幅が狭くなっており、面は平滑で擦痕が残っている。砥石における砥面の形状と加工物の形状は相互に転移し合う関係にあることから、この溝に使用される加工物は極めて薄く鋭利な刃部を持つものと推定される。通常、磨製石器をここまで薄くして利用することはないので、鎌などの鉄器の刃部に使用した可能性が高いだろう。石材は暗黒褐色の泥岩で、仕上げに用いられる細砥であろうか。

314は、9区SD217溝より出土した。全長9.5cm、幅3.2cm、厚さ3.1cmをはかる不整な多面体で、断面はほぼ台形を呈する。図右側は欠損しており、左側の

先端には一部に自然面が残存している。図下側の最も広い平滑な面が主たる砥面で、長軸方向への擦痕が無数に残っており、数か所に硬質なエッジなどによる傷がついている。図上側の両側面にもかなりの擦痕がみられ、手持ち砥として臨機応変に利用された様子が伺える。石材は泥岩で、細砥にあたるものであろうか。

315は、21区SC709竪穴住居跡から出土した。全長10.2cm、幅5.5cm、厚さ3.0cmの不整形な多面体である。図左側が、欠損している。図中段の面が主たる低面になり、ほぼ平滑で全面に不整方向の擦痕が残っている。側面および裏面も研磨に利用されたらしく、僅かな擦痕がみられた。石材は青灰褐色を呈する泥岩で、細砥と思われる。

316は、21区SX741遺構より遺物No.4としてとりあげたものである。割板石を利用した置砥で、全長18.3cm、幅11.2cm、厚さ1.7~2.2cmをはかる。図右側の面は主に対角線方向への擦痕が残り、中央部が使い減りして凹んでいる。左側の面は周縁部に多くの自然面を残し、長軸方向の擦痕が多い。側面は、図中央の1面を除いて自然面のままである。石材は細粒砂岩で、仕上げ用の細砥と思われる。

317は、8区SC246竪穴住居跡から出土している。全長3.7㎝、幅0.6㎝、厚さ0.6㎝をはかる直方体状で、一面は使い減りしてやや弓なりに反っている。断面は方形に近い6面体であるが、研磨面は3面のみで、本来さらに大きい砥石のコーナー部が分離した剥片と思われる。図の上下も欠損した状態である。石材は、泥岩である。

318は、8区SD122溝から遺物No.3としてとりあげたものである。全長10.7cm、幅4.8cm、厚さ4.8cmをはかる直方体状で、図の左・下・裏の3面は欠損している。さらに大型の置砥から分離したものであろう。残る3面のうち、図の右側の面は自然面で加工されておらず、平滑な研磨面は2面に過ぎない。この研磨面にはほとんど擦痕がみられないことから、欠損後使用されることなく投棄されたと思われる。石材は明黄褐色の中粒砂岩で、中砥にあたるものであろうか。

319は、SC060-2竪穴住居跡の貼床下の土坑内から検出された。ほぼ直方体状で、全長7.4cm、幅5.9cm、厚さ4.6cmをはかる。表面に細かい亀裂が走るが、投棄後に生じたものである。図中央が破損面となっているが、欠損後もそのまま利用されて、新たに図左下に丸く窪んだ研磨面を形成している。棒状の加工物を研磨した痕であろうか。他の5面はほぼ平滑で、程度の差こそあれ不整方向の擦痕が残り、全面が使用の対象となっている。石材は灰褐色の泥岩で、細砥と考えられる。

320は、13区SX883遺構より遺物No.8としてとりあげたものである。全長9.6cm、幅3.6cm、厚さ2.9cmをはかる不整な多面体であるが、断面はおよそ方形を呈している。全体に広い平滑面がみられず、擦痕も疎らなことから、砥石としての実用にはほとんど供されることがなかったものと思われる。手持ち砥の、素材になるものであろうか。石材は、暗灰褐色の泥岩である。

321は、16区SX687遺構より出土した。全長5.8cm、幅3.0cm、厚さ0.9cmをはかる。図の上・下・右側および裏面を欠損しており、より大きい砥石のコーナー

部が分離したものである。研磨面は3面認められ、大きく残存する2面には共に 縦横の擦痕が残っている。灰褐色を呈する。

他に、9区SC074竪穴住居跡から遺物No.69としてとり上げた置砥が出土している。全体に自然面の多く、不整な石枕形を呈し、全長11.0cm、幅12.8cm、厚さ3.2cmをはかる。研磨面として利用されているのは、上下両面とも中央から一方向にかけてで、摩滅して中窪みになっている。石材は淡黄褐色の中粒砂岩で、荒砥または中砥として使用するものであろう。

磨製石斧

・磨製石斧(322) SC246-1竪穴住居跡の床下から出土したものである。 図右側と、刃部の裏側および図の上側が欠損しており、片刃か両刃か判然としない。残存部は縦5.7cm、横3.5cm、厚さ1.6cmをはかる。刃部のある面は極めて平滑に仕上げられており、横方向の研磨痕が僅かにみられる。また、刃部に近い部分から刃部にかけては連続する縦方向の研磨痕がみられ、そのためか、境の稜はやや甘くはっきりしない。このことは断面からもうかがえ、前主面から刃部にかけては、緩やかに丸みを帯びた曲線を描いている。左側面は、平らであるが比較的粗く仕上げてあり、不整方向の研磨痕がみられるものの、敲打の凹凸を残している。側面の断面は中膨れを呈している。石材が黄灰褐色の細粒砂岩であることから、特に強度が必要とされる太型蛤刃石斧とは考えられないが、扁平片刃石斧にしては厚く、石斧と断定しきれない要素もある。

石錘

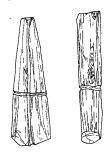
• 石錘(300•338•339) 小形の有溝石錘が3点出土している。

338は、13区SC935住居跡より遺物N0.2としてとり上げたものである。両端に小さな平坦部を持つ紡錘形で、断面は円形をなし、全長6.9cm、直径1.9cm (中央部) \sim 0.9cm(端部)、重さ31.6gをはかる。体部長軸方向の全体に面取り状の研磨が施され、5mm前後の間隔で稜を残している。長・短軸ともに幅約2mmの V字溝が一周し、中央で十字に交わっている。石材は、rクチノ閃石岩との教示をうけた。滑石よりやや硬い感じのものである。

339は、 $8 \boxtimes S C 0 6 0 - 2$ 竪穴住居跡の床面上から出土した。全長5.6cm、直径1.4cm(中央部)~1.0cm(端部)、重さ15.08の両端に平坦部を持つ紡錘形で、断面は円形をなしている。体部長軸方向には、ヘラ状工具でのケズリ成形による面取り状の稜が残っている。溝は、短軸中央に浅く幅広く一周する1条と、長軸にやや深くV字状に彫り込まれた1条が十字に交わるもので、前者が先に刻まれている。中央付近には、径3mmほどの鉄製品の一部が錆化して付着しているが、漁具の一部であろうか。石材は、338と同様にp0+7月石岩との教示をうけたが、軟質でいわゆる滑石様のものである。

ほかに同種の遺物としてSD273溝より石錘300が出土しており、長さ6.6cm、重量25.2gをはかる。

• 凹石(340•341) 調査区内から2点出土している。 340は、19区SC931竪穴住居跡より遺物No.8として



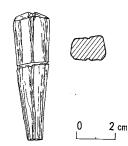


図58 SD273出土 石錘300遺物実測図

凹石

とり上げたものである。全体は楕円形に近い方形で、長さ12.0cm、幅6.2cm、厚さ5.2cmをはかる。上面および両側面に敲打による窪みが残り、上面で4.0×5.0cm、深さ0.3cmほどの凹みになっている。石材は、中粒砂岩である。

341は、22区から表採されたものである。全体に雑な仕上げで、不整な直方体状を呈しており、長さ7.8cm、幅9.7cm、厚さ4.7cmをはかる。上下両面に使用による敲打痕が残り、上面で径4.0cm、深さ0.4cmほどの窪みになっている。石材は黄褐色の礫質砂岩で、極めて粗い表面をなしている。

•打製石鏃(330·331) 出土した2点とも、石材は黒耀石である。

330は、8区SX054遺構セクション・ベルト内から検出された。凹基の無茎鏃で片方の基部端が欠損している。長さ1.6cm、残存幅1.7cm、重量0.5gをはかり、推定最大幅を約2.0cmとすれば、長さと幅の比は1:1.2ほどになる。刃部の形成はやや雑で、敲打による剥離範囲が大きく、やや鋸歯状になっている。

331は、8区のSC246竪穴住居跡の床下から出土している。片方の基部端と切先を欠くが平基の無茎鏃で、残存長1.9cm、残存幅1.7cm、重量1.15gをはかる。外から身中央にかけて丁寧に敲打調整を行い、直線的な刃部を形成している。本来の長さと幅の比は、ほぼ1:1を示すものと思われる。

・剥片・その他($323\sim329\cdot332\sim337$) ここには、第 2 次剥離による調整加工が明確にみられないものを挙げた。黒耀石が10点、サヌカイトが 3 点出土している。

323~327・329・332・334・335・337は黒耀石のフレイクである。326は13区採集、327は21区SC708竪穴住居跡東西ベルト東側上層より、329はSC060竪穴住居跡から検出された。22区SX796土坑出土の337は、他に比べ石材が低質である。323~325・332・334・335には一部に原石の自然面が残っており、323はSX073遺構、324はSC865-1竪穴住居跡床面直上、325は7区SC001住居跡、332は8区SC246竪穴住居跡、334は15区SC144-1竪穴住居跡、335は15区SC136竪穴住居跡セクションベルト3層から検出されている。332・334・335は一部に第2次剥離がみられ、調整加工の行われた可能性があるものだが、何に加工しようとしたのかは定かではない。

 $328 \cdot 333 \cdot 336$ はサヌカイト製である。328は22区S X 7 9 3 遺構から出土したもので、 4.3×3.5 cm をはかる。 4.3×3.5 cm をはかる。図左側の面は、中央に大きく自然面を残したまま下方に雑な調整剥離を施し、主要剥離面にあたる右側の面も、下方にやや細かい調整剥離を施している。両刃のスクレイパーを作ろうとしたものと思われるが、未成品の段階となっている。336 は、16区S X 6 6 3 遺構から出土したフレイクである。 (余語琢磨)

4. 鉄 器

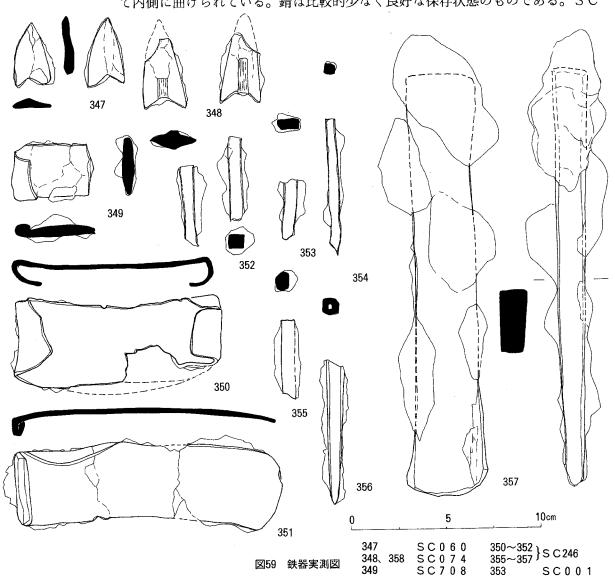
鉄器および鉄滓がこれに該当する。今回の調査では、明らかに鉄器という製品

石鏃

剥片

となっているものの出土は少なく、また材料段階である鉄滓についても、59件 121点となる。この数量が多いのか少ないのか、また製鉄滓であるのか鍛冶滓であるのかも今後の問題となるだろう。以下、各遺物について簡単に記述しておく。 - 鉄器- (図版99、100、及び図59参照)

- ・鉄鏃 3 4 7 全長3.0cm、最大幅2.0cm、厚さ0.5cmを各々はかる。茎を欠いた形状で、錆は比較的少ない。SC060竪穴住居出土。
- ・鉄鏃348-全長3.3㎝、最大幅2.3㎝、厚さ0.7㎝を各々はかる。茎部分には木質の痕跡が明瞭に残されている。矢の先端部は失われているが、先の鏃347に比較して、やや長く鋭い印象を受ける。9区SC074竪穴住居出土。
- ・鉄鎌 3 4 9 残存長4.5cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmをはかる鍛造製品である。基部の屈曲部分はかろうじて残されているが、先端部分は失われている。SC 7 0 8 竪穴住居出土。
- ・鉄鎌351-全長14.2cm、幅4.1cm、厚さ0.3cmをはかる鍛造製品である。基部 先端部は大きく屈曲させており、さらに上(背)部も基部先端から5.4cmにわたっ て内側に曲げられている。錆は比較的少なく良好な保存状態のものである。SC



- 2 4 6 竪穴住居出土。
- ・鉄やりがんな352 残存長4.5cm、幅0.6cmをはかる断面正方形の鉄器である。 先端部わずかに屈曲し、さらに尖っていることから、やりがんなの可能性の濃い 製品と見られる。SC246 竪穴住居出土。
- ・鉄やりがんな353-残存長3.6cm、幅1.3cmをはかる断面長方形の鉄器である。 両先端部が失われているため何であるかは明らかにできないが、鏃ないしはやり がんなが、その候補としてあげられる。SC001竪穴住居出土。
- ・鉄やりがんな354 残存長7.2cm、幅0.6cmをはかる断面長方形の鉄器である。 先端部がわずかに屈曲し、さらに尖っていることから、やりがんなの可能性の濃い製品と見られる。SC074 竪穴住居出土。
- ・鉄やりがんな3.5.5 —残存長4.2cm、幅0.8cmをはかる断面隅丸方形の鉄器である。両先端部が失われているため何であるかは明らかにできないが、鏃ないしはやりがんなが、その候補としてあげられる。SC24.6 竪穴住居出土。
- ・鉄やりがんな356 残存長7.6cm、幅1.0cmをはかる中央部が中空の断面隅丸方形の鉄器である。一方の先端部が失われいるため何であるかは明らかにできないが、鏃ないしはやりがんなが、その候補としてあげられる。SC246 竪穴住居出土。
- ・鉄鋤先350 残存長4.2cm、幅9.9cmをはかる鋤先である。両先端部を内側に折り曲げており、刃と見られる部分は欠損しており、かなりの使用があったことを考えさせる。SC246竪穴住居出土。
- ・鉄斧 3 5 7 全長24.3cm、幅4.3cm、厚さ1.5cmの斧状の鉄器である。断面は長方形で鍛造品とみられる。SC246竪穴住居出土。

5. その他の鉄関係遺物

・鉄滓-すでに紹介したように今回の調査では、大小あわせて59件121点の塊が採集されている。それらの重量は、SC074竪穴住居出土のものが324.0g、306gなどと大きいものが目立つほかは、50g~15g前後のものが多く見られるようである。出土遺構としてはSX427、SD942、SC074、SC865などが比較的多いようである。なお今回は時間的な制約から細かな分析は実施していない。内容を調査したに過ぎない。

・ふいご羽口286

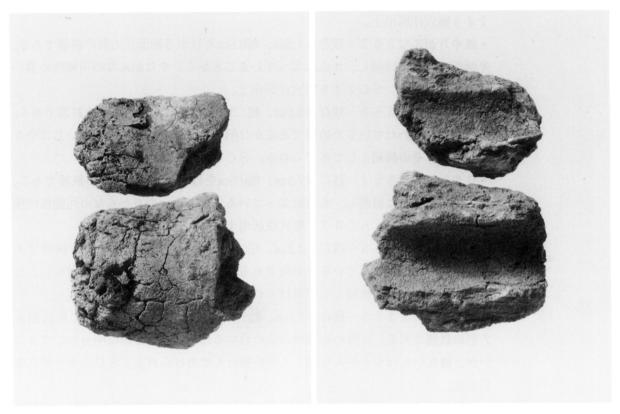


図60 ふいご羽口286遺物写真

表3 鉄滓の重量

1 SC074 324.0 g 2 SC074 324.0 g 3 SC074 296.8 g 4 SC074 306.8 g 5 SC074 47.2 g 6 SC246 86.8 g 7 SC246 132.2 g 8 SC246 134 g 9 SC246 床下 15.2 g 10 SC246-3 西側土坑 143.4 g 11 SC865-1 9.8 g 12 SC865-1 9.8 g 13 SC865-1 9.8 g 14 SC931-1 185.6 g 15 SX121 D層 14.6 g 16 SX121 D層 14.6 g 17 SX121 D層 117.6 g 19 SX121 D層 12.2 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 122.4 g 22 SX427 最下層 1.2 g 23 SX427 最下層 1.2 g 23 SX427 最下層 1.2 g 23 SX427 B層 187.0 g			
3 SC 0 7 4 296.8 g 4 SC 0 7 4 306.8 g 5 SC 0 7 4 47.2 g 6 SC 2 4 6 86.8 g 7 SC 2 4 6 132.2 g 8 SC 2 4 6 13.4 g 9 SC 2 4 6	1	SC074	6.6 g
4 SC074 306.8 g 5 SC074 47.2 g 6 SC246 86.8 g 7 SC246 132.2 g 8 SC246 134 g 9 SC246 床下 15.2 g 10 SC246 末下 15.2 g 11 SC865-1 27.2 g 12 SC865-1 9.8 g 13 SC865-1 9.8 g 14 SC931-1 185.6 g 15 SX121 D層 14.6 g 16 SX121 D層 117.6 g 17 SX121 D層 117.6 g 18 SX121 D層 154.4 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 最下層 1.2 g 22 SX427 最下層 1.2 g 23 SX427 最下層 1.2 g 24 SX427 B層 187.0 g 25 SX427 119.0 g 26 SX460 26.2 g 27 SX842 7 119.0 g 28 SD942 146.8 g 30 SD942 11.8 g 33 SD942 11.8 g	2	S C 0 7 4	324.0 g
5 SC074 47.2 g 6 SC246 86.8 g 7 SC246 132.2 g 8 SC246 13.4 g 9 SC246 床下 15.2 g 10 SC2465-1 27.2 g 11 SC865-1 9.8 g 13 SC865-1 9.8 g 13 SC865-1 9.8 g 14 SC931-1 185.6 g 15 SX121 D層 14.6 g 16 SX121 D層 117.6 g 17 SX121 D層 117.6 g 18 SX121 D層 154.4 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 最下層 22 SX427 最下層 23 SX427 最下層 24 SX427 B層 25 SX427 119.0 g 26 SX466 36.8 g <	3	S C 0 7 4	296.8 g
	4	SC074	306.8 g
7 SC 2 4 6 132.2 g 8 SC 2 4 6 13.4 g 9 SC 2 4 6 床下 15.2 g 10 SC 2 4 6 - 3 西側土坑 143.4 g 11 SC 8 6 5 - 1 27.2 g 12 SC 8 6 5 - 1 9.8 g 13 SC 8 6 5 - 1 9.8 g 14 SC 9 3 1 - 1 185.6 g 15 SX 1 2 1 D層 14.6 g 16 SX 1 2 1 D層 14.6 g 17 SX 1 2 1 D層 117.6 g 18 SX 1 2 1 D層 117.6 g 19 SX 1 2 1 D層 154.4 g 20 SX 4 0 1 66.6 g 21 SX 4 2 7 最下層 1.2 g 22 SX 4 2 7 母層 385.8 g 24 SX 4 2 7 母層 385.8 g 24 SX 4 2 7 母層 187.0 g 25 SX 4 2 7 日月 119.0 g 26 SX 4 6 0 26.2 g 27 SX 8 4 2 88.6 g 28 SD 9 4 2 38.6 g 29 SD 9 4 2 38.6 g 30 SD 9 4 2 152.2 g 31 SD 9 4 2 146.8 g 32 SD 9 4 2 11.8 g 33 SD 9 4 2 11.8 g 33 SD 9 4 2 11.8 g 33 SD 9 4 2 62.2 g 31 SD 9 4 2 11.8 g 33 SD 9 4 2 62.2 g 31 SD 9 4 2 11.8 g 33 SD 9 4 2 62.2 g 31 SD 9 4 2 11.8 g 33 SD 9 4 2 62.2 g 34 SD 9 4 2 62.2 g 35 SD 9 4 2 62.2 g 36 SD 9 4 2 62.2 g 37 SD 9 4 2 62.2 g 38 SD 9 4 2 62.2 g 39 SD 9 4 2 64.8 g 30 SD 9 4 2 64.8 g 31 SD 9 4 2 64.8 g 32 SD 9 4 2 64.8 g 33 SD 9 4 2 64.8 g 34 SD 9 4 2 64.8 g 35 SD 9 4 2 64.8 g 36 SD 9 4 2 64.8 g 37 SD 9 4 2 64.8 g 38 SD 9 4 2 64.8 g 39 SD 9 4 2 64.8 g 30 SD 9 4 2 64.8 g 30 SD 9 4 2 64.8 g 31 SD 9 4 2 64.8 g 32 SD 9 4 2 64.8 g 33 SD 9 4 2 64.8 g 34 SD 9 4 2 64.8 g 35 SD 9 4 2 64.8 g 36 SD 9 4 2 64.8 g 37 SD 9 4 2 64.8 g 38 SD 9 4 2 64.8 g 39 SD 9 4 2 64.8 g 30 SD 9 4 2 64.8 g	5	S C 0 7 4	47.2 g
8 SC246	6	S C 2 4 6	86.8 g
9 SC246 床下 15.2 g 10 SC246-3 西側土坑 143.4 g 11 SC865-1 27.2 g 12 SC865-1 9.8 g 13 SC865-1 9.8 g 14 SC931-1 185.6 g 15 SX121 D層 14.6 g 16 SX121 D層 18.6 g 17 SX121 D層 117.6 g 19 SX121 D層 154.4 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 122.4 g 22 SX427 最下層 1.2 g 23 SX427 4層 385.8 g 24 SX427 B層 187.0 g 25 SX427 119.0 g 26 SX460 26.2 g 27 SX842 88.6 g 28 SD942 38.6 g 30 SD942 11.8 g 33 SD942 11.8 g 33 SD942 11.8 g 33 SD942 11.8 g 33 SD942 11.8 g	7	S C 2 4 6	132.2 g
10 S C 2 4 6 - 3 西側土坑 143.4 g 11 S C 8 6 5 - 1 27.2 g 12 S C 8 6 5 - 1 9.8 g 13 S C 8 6 5 - 1 9.8 g 14 S C 9 3 1 - 1 185.6 g 15 S X 1 2 1 D層 14.6 g 16 S X 1 2 1 D層 118.6 g 17 S X 1 2 1 D層 117.6 g 19 S X 1 2 1 D層 154.4 g 20 S X 4 0 1 66.6 g 21 S X 4 2 7 最下層 1.2 g 23 S X 4 2 7 最下層 1.2 g 23 S X 4 2 7 B層 187.0 g 25 S X 4 2 7 B層 187.0 g 25 S X 4 2 7 B層 19.0 g 26 S X 4 2 7 B層 186.6 g 27 S X 8 4 2 S 88.6 g 28 S D 9 4 2 38.6 g 29 S D 9 4 2 38.6 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	8	S C 2 4 6	13.4 g
11 SC865-1 27.2 g 12 SC865-1 9.8 g 13 SC865-1 9.8 g 14 SC931-1 185.6 g 15 SX121 D層 14.6 g 16 SX121 D層 118.6 g 17 SX121 D層 117.6 g 19 SX121 D層 154.4 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 122.4 g 22 SX427 122.4 g 23 SX427 基下層 1.2 g 23 SX427 B層 187.0 g 25 SX427 119.0 g 26 SX460 26.2 g 27 SX842 88.6 g 28 SD942 38.6 g 29 SD942 64.8 g 30 SD942 152.2 g 31 SD942 146.8 g 32 SD942 11.8 g 33 SD942 62.2 g	9		15.2 g
12 SC865-1 9.8 g 13 SC865-1 9.8 g 14 SC931-1 185.6 g 15 SX121 D層 14.6 g 16 SX121 D層 43.4 g 17 SX121 D層 117.6 g 18 SX121 D層 154.4 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 122.4 g 22 SX427 最下層 1.2 g 23 SX427 母層 385.8 g 24 SX427 B層 187.0 g 25 SX427 119.0 g 26 SX460 26.2 g 27 SX842 88.6 g 28 SD942 38.6 g 29 SD942 64.8 g 30 SD942 146.8 g 31 SD942 11.8 g 33 SD942 6.2 g	10	SC246-3 西側土坑	143.4 g
13 SC865-1 9.8 g 14 SC931-1 185.6 g 15 SX121 D層 14.6 g 16 SX121 D層 43.4 g 17 SX121 D層 118.6 g 18 SX121 D層 117.6 g 19 SX121 D層 154.4 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 122.4 g 22 SX427 122.4 g 23 SX427 B層 187.0 g 24 SX427 B層 187.0 g 25 SX427 119.0 g 26 SX460 26.2 g 27 SX842 88.6 g 28 SD942 38.6 g 29 SD942 64.8 g 30 SD942 152.2 g 31 SD942 146.8 g 32 SD942 11.8 g 33 SD942 6.2 g	11	SC865-1	27.2 g
14 SC931-1 185.6 g 15 SX121 D層 14.6 g 16 SX121 D層 43.4 g 17 SX121 D層 118.6 g 18 SX121 D層 117.6 g 19 SX121 D層 154.4 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 122.4 g 22 SX427 最下層 1.2 g 23 SX427 母層 385.8 g 24 SX427 B層 187.0 g 25 SX427 B層 119.0 g 26 SX460 26.2 g 27 SX842 88.6 g 28 SD942 64.8 g 30 SD942 152.2 g 31 SD942 146.8 g 32 SD942 6.2 g	12	SC865-1	9.8 g
15	13	SC865-1	9.8 g
16 SX121 D層 43.4 g 17 SX121 6層 118.6 g 18 SX121 D層 117.6 g 19 SX121 D層 154.4 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 122.4 g 22 SX427 最下層 1.2 g 23 SX427 4層 385.8 g 24 SX427 B層 187.0 g 25 SX427 119.0 g 26 SX460 26.2 g 27 SX842 88.6 g 28 SD942 38.6 g 30 SD942 64.8 g 31 SD942 146.8 g 32 SD942 11.8 g 33 SD942 6.2 g	14	SC931-1	185.6 g
17 SX1216層 118.6 g 18 SX121D層 117.6 g 19 SX121D層 154.4 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 122.4 g 22 SX427 最下層 1.2 g 23 SX4274層 385.8 g 24 SX427 B層 187.0 g 25 SX427 119.0 g 26 SX460 26.2 g 27 SX842 88.6 g 28 SD942 38.6 g 29 SD942 64.8 g 30 SD942 152.2 g 31 SD942 146.8 g 32 SD942 11.8 g 33 SD942 6.2 g	15	S X 1 2 1 D層	14.6 g
18	16	S X 1 2 1 D層	43.4 g
19 SX121 D層 154.4 g 20 SX401 66.6 g 21 SX427 122.4 g 22 SX427 最下層 1.2 g 23 SX427 4層 385.8 g 24 SX427 B層 187.0 g 25 SX427 119.0 g 26 SX460 26.2 g 27 SX842 88.6 g 28 SD942 38.6 g 29 SD942 64.8 g 30 SD942 152.2 g 31 SD942 146.8 g 32 SD942 11.8 g 33 SD942 6.2 g	17	SX121 6層	118.6 g
20 S X 4 0 1 66.6 g 21 S X 4 2 7 122.4 g 22 S X 4 2 7 最下層 1.2 g 23 S X 4 2 7 4層 385.8 g 24 S X 4 2 7 B層 187.0 g 25 S X 4 2 7 19.0 g 119.0 g 26 S X 4 6 0 26.2 g 26.2 g 27 S X 8 4 2 88.6 g 28 S D 9 4 2 38.6 g 29 S D 9 4 2 64.8 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	18	S X 1 2 1 D層	117.6 g
21 S X 4 2 7 122.4 g 22 S X 4 2 7 最下層 1.2 g 23 S X 4 2 7 4層 385.8 g 24 S X 4 2 7 B層 187.0 g 25 S X 4 2 7 119.0 g 26 S X 4 6 0 26.2 g 27 S X 8 4 2 88.6 g 28 S D 9 4 2 38.6 g 29 S D 9 4 2 64.8 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	19	S X 1 2 1 D層	154.4 g
22 S X 4 2 7 最下層 1.2 g 23 S X 4 2 7 4層 385.8 g 24 S X 4 2 7 B層 187.0 g 25 S X 4 2 7 19.0 g 119.0 g 26 S X 4 6 0 26.2 g 26.2 g 27 S X 8 4 2 88.6 g 28 88.6 g 28 S D 9 4 2 38.6 g 38.6 g 29 S D 9 4 2 64.8 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g 6.2 g	20	S X 4 0 1	66.6 g
23 S X 4 2 7 4層 385.8 g 24 S X 4 2 7 B層 187.0 g 25 S X 4 2 7 119.0 g 26 S X 4 6 0 26.2 g 27 S X 8 4 2 88.6 g 28 S D 9 4 2 38.6 g 29 S D 9 4 2 64.8 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	21	S X 4 2 7	122.4 g
24 S X 4 2 7 B層 187.0 g 25 S X 4 2 7 119.0 g 26 S X 4 6 0 26.2 g 27 S X 8 4 2 88.6 g 28 S D 9 4 2 38.6 g 29 S D 9 4 2 64.8 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	22	SX427 最下層	1.2 g
25 S X 4 2 7 119.0 g 26 S X 4 6 0 26.2 g 27 S X 8 4 2 88.6 g 28 S D 9 4 2 38.6 g 29 S D 9 4 2 64.8 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	23	SX427 4層	385.8 g
26 S X 4 6 0 26.2 g 27 S X 8 4 2 88.6 g 28 S D 9 4 2 38.6 g 29 S D 9 4 2 64.8 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	24	S X 4 2 7 B層	187.0 g
27 S X 8 4 2 88.6 g 28 S D 9 4 2 38.6 g 29 S D 9 4 2 64.8 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	25		119.0 g
28 S D 9 4 2 38.6 g 29 S D 9 4 2 64.8 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	26		
29 S D 9 4 2 64.8 g 30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	27	S X 8 4 2	88.6 g
30 S D 9 4 2 152.2 g 31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	-		38.6 g
31 S D 9 4 2 146.8 g 32 S D 9 4 2 11.8 g 33 S D 9 4 2 6.2 g	29	S D 9 4 2	
32 SD942 11.8 g 33 SD942 6.2 g	30	SD942	
33 S D 9 4 2 6.2 g	31	S D 9 4 2	146.8 g
	32	SD942	11.8 g
34 SD 9 4 2 0.8 g		S D 9 4 2	6.2 g
	34	S D 9 4 2	0.8 g

尚、鉄滓は統一の遺物番号は付していないのでいずれも鉄滓のみの番号である。

• 陶磁器

当該調査範囲の中央部にかつて所在したといわれる祠に関連したものと見られるものである。大半のものは図化しなかったが、いずれも花器ないしは供物を載せる台となる皿などである。



図61 SD942溝出土陶磁器

図に示した皿 280 が口径10cm、器高2.55cmをはかる小型の陶器製の皿である。底部には高台を巡らせており、上半部分に釉薬を行っている。12区SD942溝出土。

• 瓦

先の陶磁器と同じく、当該調査地域に所在したという祠に関連するものである。 大半の瓦は平瓦で、丸瓦はほとんど見られなかった。わずかに桟瓦の軒先部分が 認められ、そこに梅鉢文様が施されており、当該地域に所在していたという祠の 性格が、天神信仰に関わるものであったことがうかがえる。なお桟瓦281は、丸 部分の直径8.4cm、残存幅は14.4cmをはかる。

さらに桟瓦282は、丸部分のみの残存である。このほか軒先に用いられたと見られる菊の花弁文様の丸瓦283がある。なおこの直径は9.5cmを測り、他の遺構では

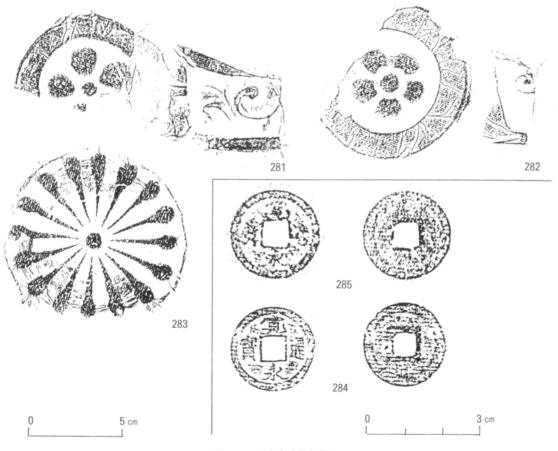


図62 14区出土遺物拓影

土塀や、棟の部分に用いられる。

銭貨

貨幣に関する出土は、いずれも近世以降に関わるものである。いずれも14区からのもので、寛永通宝284は、径2.25cm、重量は2.2gである。ほかの寛永通宝285は径2.4cm、重量は2.4gをはかる。

玉類

今回の調査で出土した玉はいずれも小型のビーズ玉あるいはガラス玉というのがよいかもしれないものである。

遺構別に見た場合は、SC060竪穴住居、SC074竪穴住居、SC017 竪穴住居、SC246竪穴住居、SC708 竪穴住居のいずれも住居跡内部からのものである。このほか場所不明としたものが多く見られるが、これらは、排出土砂の内部から採集されたものであり、可能性としては、SC060 竪穴住居および SC246 竪穴住居から出土したという可能性が濃いと見られる。

なお遺構が明らかなものについても、出土地点が例えばSС060竪穴住居では土坑内部と床面下層というように一定していない場合が大半である。大きさは、 $5 \, \mathrm{mm}$ 前後のものと $3.5 \, \mathrm{mm} \sim 4 \, \mathrm{mm}$ 前後のものの $2 \, \mathrm{am}$ 種類のものがある。色調は青色、紺色、水色、淡黄褐色がある。このうち紺色及び水色が多くみられる。なお淡黄褐色については、SС246竪穴住居から $1 \, \mathrm{点}$ のみ採集されている。

時期的には、いずれの住居からも須恵器が出土しておらないことを考えあわせると弥生時代から古墳時代前半に、その時期を求めることができるだろう。また製作手法については、明確には判断し得ないが、おそらくは管玉状のものを切っていった可能性が濃いものも見られる。さらに重量については、 $0.05 \, \mathrm{g} \sim 0.5 \, \mathrm{g}$ までのものが認められるが、これらのうちで $0.05 \, \mathrm{g}$ のものが最も多く見られるも

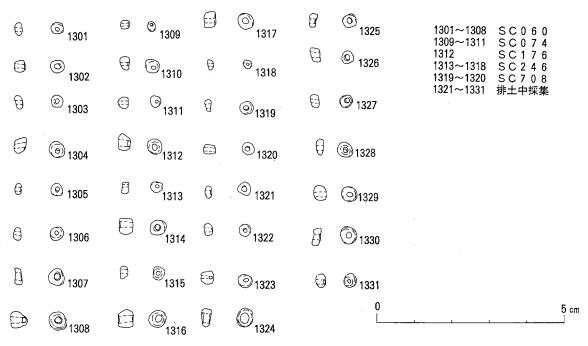


図63 ビーズ玉遺物実測図

のである。なお図化したすべての玉についての計測値は表4のごとくである。

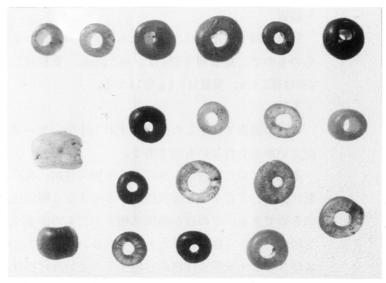


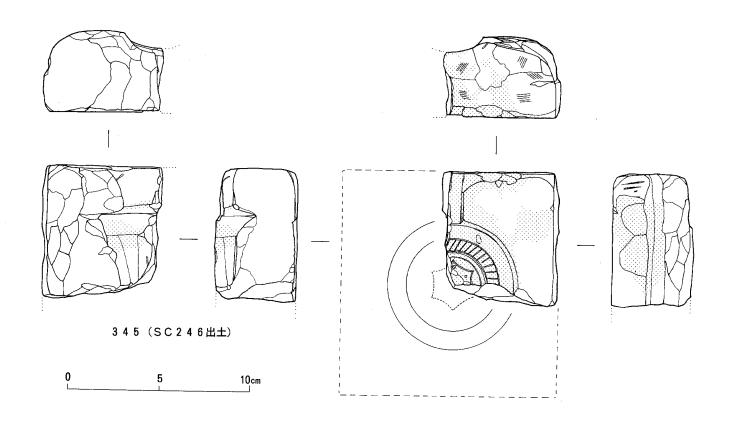
図64 ビーズ玉写真

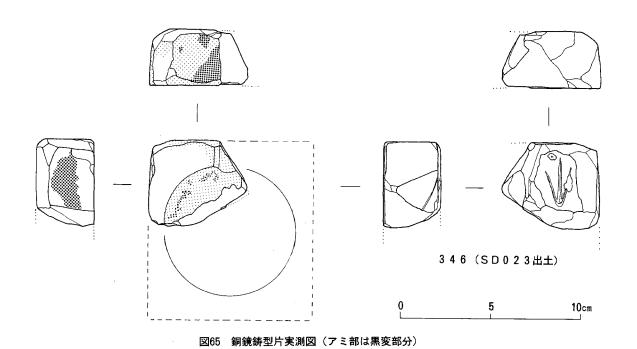
鋳型

鋳型には2点があり、ともに石英-長石斑岩石材(註1)を利用している。 3 4 5 はSC2 4 6 住居跡から床面に密着して出土し、3 4 6 はSD2 3 溝状遺 構からの採集品で、ともに破損している。

3 4 5 は現存法量最大値で縦7.4cm、横6.5cm、厚さ4.5cm、重量約340 g を計る。正面観ほぼ正方形、側面観長方形状を呈し、正方形面の両面にそれぞれ鏡と矛が彫り込まれている。鏡の鋳型面は溶解銅を流し込む湯口と鏡背面文様の1/4ほどが観察される。湯口は現存部で幅9m、鋳型上端からの長さ2.7cm、深さ1.5mmを計る。紐の位置との関係からみて、湯口の幅は現存部よりも幾分大きくなる程度と推測される。彫り込まれた鏡背面部分は外側から平縁、斜行櫛歯文帯、圏線、内行花文帯と乳状突起が認められ、その内側に鈕と鈕穴を鋳出すための中子を渡し掛けるための窪みと思われる部分が観察される。平縁幅は8mm、斜行櫛歯文帯幅7mmほどで、内行花文は6弧に復元される。鏡背文様の彫り込みの深さは平縁部分で2mm、斜櫛歯文帯や内行花文帯で1mmほどで、乳状突起部分は2mm、中央の鈕部分はよく観察できないが、7mm程となる。残存部分から鋳型鏡径は7.2cmほどの方形平面を持っていたと考えられる。湯口および鏡背文様彫り込み面は黒く変化しており、実際に使用されたことがうかがわれる。また、文様の構成からこの鋳型から製作される鏡の鏡式は重圏文日光鏡系仿製鏡と考えられ、高倉洋彰氏による小型仿製鏡の分類(註 2)では II a 類に相当する。

反対面に彫り込まれた矛は、湯口部分と矛の袋部半分が残り、やはり実際の使用によって黒く変化している部分が見られる。湯口の上端部は現存部分で、幅3 cm、深さ最大部1.2cmを計り、上端部から矛袋部端までの長さ2.6cmほどである。 鋳型面はかなり欠損しているため、現況での計測値はこの鋳型から鋳出された矛の形状を正確に反映しないと考えられるが、袋部分の最大測定値は幅6 cm、厚さ





— 107 **—**

4.5cmほどになると考えられる。本来、この袋部の外側に突線部が彫り込まれていたものと推察されるが、突線部の形状その他については鋳型石材の欠損によってはっきりしない。しかし、少なくとも袋部の形状から、この鋳型から鋳出された矛の型式は広形銅矛(註3)と推察される。鏡、矛ともに湯口の方向は同一であり、鋳型の残存状況から見て、矛鋳型としての使用破損後、鏡鋳型に転用され、さらに砥石として利用されたものと考えられる。

3 4 6 は変形四角形状を呈し、現存最大測定値は幅5.4cm、縦4.9cm、厚さ3.2cmを計る。かなり欠けているが、平坦面2面に鋳型らしき細工の痕跡が認められる。一面は鏡面と思われ、湯口と鏡面の一部が残る。湯口部分は黒変しており、現存部分で幅1.3cm、鋳込み面から鏡面までの長さ1.5cm、彫りの深さ1mmを計る。鏡面は鏡縁を明確にする造作がなくはっきりしないが、水平面に据えると現存部で1mmほどの緩やかな窪みが見られ、そこを中心として黒変していることから、鏡面と判断した。湯口部分との関係や窪みと黒変の範囲からして、面径7.0~7.5cm前後の鏡鋳型と推測される。鋳出された鏡の大きさは1とほぼ同様であるが、現存部分で観察する限り鏡面周辺の余白部分が狭く、復元される鋳型石材の大きさは1に比べてふた周りほど小さい9cm四方の正方形状となる。鏡面のため、この鋳型から製作された鏡の鏡式は不詳である。

鏡鋳型面の裏面には、長さ2.7cmほどの矢印状彫り込みが見られ、これも鋳型かと推測される。しかし、鋳型石材の周辺が欠けていること、全体に黒変していないことなどもあって、断定はできない。あるいは作業の際の目印的な役割を果たすことも考えられる。また、もし鋳型とすれば、形状からみて鏃に類するものと考えられる。

- 註1 唐木田芳文氏の同定による。附論参照。
- 註 2 高倉洋彰「弥生時代小型仿製鏡について」『考古学雑誌』58巻 3 号1972 同 「弥生時代小型仿製鏡について(承前)」『考古学雑誌』70巻 3 号 1985
- 註3 岩永省三「弥生時代青銅器型式分類編年再考」『九州考古学』55 1980

表 4 ビーズ玉計測値一覧

記録番号		日付	А	В	С	g (重量)	
1 3 0 1	SC060-2 土坑内		0.45	0.2	0.2	0.05	紺
1 3 0 2	SC060-2 土坑内		0.4	0.3	0.15	0.05	紺
1 3 0 3	SC060-2 土坑内		0.4	0.25	0.15	0.05	紺
1 3 0 4	SC060 貼床下	4 / 9	0.45	0.3	0.2	0.1	水色
1 3 0 5	SC060 土坑内		0.4	0.25	0.15	0.05	水色
1 3 0 6	SC060 土坑内		0.4	0.3	0.15	0.05	水色
1 3 0 7	SC060 土坑内		0.5	0.3	0.2	0.05	水色
1 3 0 8	SC060-2 貼床下	4 /10	0.6	0.4	0.25	0.05	水色
1 3 0 9	SC074 P-11	3 / 19	0.3	0.3	0.1	0.05	紺
1 3 1 0	SC074-1		0.5	0.3	0.15	0.1	紺
1 3 1 1	SC074-1		0.35	0.35	0.1	0.05	水色
1 3 1 2	SC176 覆土	3 /11	0.5	0.4	0.2	0.1	紺
1 3 1 3	SC246 床下		0.4	0.2	0.1	0.05	紺
1 3 1 4	SC246 床下		0.5	0.45	0.15	0.15	紺
1 3 1 5	SC246-1	3 / 19	0.4	0.2	0.15	0.05	紺
1 3 1 6	SC246 床下		0.5	0.4	0.2	0.15	水色
1 3 1 7	S C 2 4 6		0.5	0.35	0.2	0.1	淡黄褐色
1 3 1 8	S X 4 6 9		0.35	0.2	0.1	0.05	青
1 3 1 9	SC708 東西ベルト	3 / 15	0.4	0.2	0.2	0.05	水色
1 3 2 0	SC708 東西ベルト	3 / 18	0.5	0.3	0.2	0.05	水色
1 3 2 1	廃土中		0.35	0.2	0.15	0.05	紺
1 3 2 2	廃土中		0.35	0.3	0.1	0.05	紺
1 3 2 3	廃土中		0.45	0.35	0.1	0.1	紺
1 3 2 4	廃土中		0.5	0.25	0.25	0.05	青
1 3 2 5	廃土中		0.35	0.2	0.2	0.05	水色
1 3 2 6	廃土中		0.4	0.25	0.15	0.05	水色
1 3 2 7	廃土中		0.4	0.25	0.15	0.05	水色
1 3 2 8	廃土中		0.5	0.2	0.1	0.05	水色
1 3 2 9	廃土中		0.5	0.4	0.15	0.1	水色
1 3 3 0	廃土中		0.5	0.2	0.15	0.05	水色
1 3 3 1	廃土中		0.4	0.25	0.1	0.05	紺

第4章 考 察

1. 遺 構

(1) 弥生時代~庄内式平行期の遺構について

弥生時代~庄内平行期の遺構には住居跡と溝状遺構があった。

住居跡

住居跡は南から北に向けて緩やかに突き出した丘陵の西側から北側の斜面にわたって分布しており、計28軒確認された。これらの住居跡は基本的に $2\sim4$ 軒が重なりあった状態で検出しており、同一地点における住居の立て替えがかなりの頻度で行われたことが知れる。しかし、丘陵斜面を選んで構築しているため、住居の遺存状態は悪く、ほとんどの住居跡において斜面下方側が残っていない。住居はほぼ方形か幾分長方形の平面観を持つものと考えられるが、規模は一辺3 m ~6 m程度まであり、ばらつきが認められる。これには住居が重なり合ったり、斜面によって一部しか観察できないことなどによって、計測を阻害する要因がいろいろと存在することも一因している。これらの住居跡はSC001や246で観察されたように、基本的には中央に2本の主柱を配する構造であったと考えられ、中にはベッド状遺構を作り付けるものもある。また、屋内に炉や貯蔵穴を持つものもあるが、床面が完全に把握できた住居はないため、住居跡全体での割合は明確にできない。

住居の主軸方向は地形によって規制されていたものと考えられ、全体に等高線に沿って構築されている傾向が強い。28軒の住居の存続期間は後述する出土土器の検討によって、弥生後期中頃~庄内式平行期までにわたるが、個々の住居の時間的な位置付けや本遺構での組み合わせの推移については明確にできなかった。住居跡の重なり合いを勘案すれば、最大で11軒程度が同時に存続していたことも考えられるが、実際にはもっと少数であった可能性が高い。集落規模としてはそれほど大きな集落であったとは言い難い規模である。

SC246

鋳型が出土した住居はSC246であり、北側斜面に位置し、3軒が重なった 状態で確認されている。鋳型は3軒の中で最も後出する住居の床面に密着して出 土している。住居の北半分は残っていないが、一辺3.9m四方のこの時期に一般 的な住居である。現存部分の住居西側に70×90㎝ほどの焼土坑があり、さらに床 面から焼土や炭化物とともに銅成分が検出されるなど、青銅器製作に関係すると 考えられる情報が得られている。しかし、これらの検出状況と具体的な青銅器製 作工程との係わりについては確認できなかった。また、本遺跡内の弥生時代住居 群において、他の住居に比べて、本住居に対する構造や施設の上での特別な配慮 があった形跡も見受けられない。この点においては、代表的な弥生時代青銅器生 産遺跡である春日市須玖永田遺跡の工房跡が掘立柱建物群からなることとは異なっ ている。住居跡からは弥生後期中頃~終末にかけての土器片がかなり出土してい るが、鋳型に伴って床面から出土した土器がないため、その中での年代的な限定 はできない。ただ、重複して検出された3軒の中で、最も先行する住居跡の床面に接して、袋状口縁壺の口縁部(図版17-113)が出土しており、これがこの住居跡の年代を示すものと考えれば、鋳型出土住居跡はこれよりも後出する弥生後期後半以降に位置付けられることとなる。

弥生時代の溝状遺構は主に北側斜面に分布する住居跡の上下に、等高線に添うようにして掘削されている。一見住居跡を区画するようにも見えるが、断続的にしか検出されておらず、全体の配置などについては不詳である。溝の幅は確認面で1m以内の部分が多く、溝の両側に柵列などの施設を設けた痕跡は認められない。出土遺物には土器をはじめ、鋳型石材、鉄器破片などがある。溝から出土した土器の編年的な位置付けは弥生後期中頃~庄内式平行期までにわたっており、これを踏まえた上でそれぞれの溝の年代を特定するにはいたっていない。

(2) 古墳時代後半以降の遺構について

すでに見たように弥生時代の後半から末期に形成された当該集落遺跡は、古墳時代の前半に入り、やや時期をおいてから再び住居がつくられるようになっている。本稿の対象とする時期は、この再び形成された段階の遺構群である。さらに個々の遺構については、すでに記述してきたはずであるので、ここでは当該時期遺構の飯倉D遺跡全体の総括を行っておきたいと思う。

集落

まず集落すなわち住居跡では、東側斜面に集中する傾向をもつ。とくに1件の住居に対して重複する数が多く見られるという傾向は、弥生時代以来の特徴でもあったが、その傾向はより顕著に現れている場合もある。例えばSC935、936、937、938、939の各住居は、一括して把握される範囲内に集中して確認されている。またSC931についても931-1、931-2という複数の住居が重複していた。時期的には古墳時代末に近く、これら一連の住居のなかでは最も新しい。なおSC953~939の時期的な関係は、SC937が最も古く、次に938、939と続き、935と936は重複関係がないので両者が平行して建てられていたことも考えられる。SC935については内部から木炭が大量に採集され、当該建物が焼失した可能性が濃いことを物語っていた。その焼失の時期は、すでに報告者は記述するように、生活が行われなくなった段階と見ることが可能であろう。

竪穴遺構焼成土坑

このほかにはSC936とSC944の重複関係がある。SC936の方が新 しいことが切り合い関係からもわかる。この時期は、一連の東側住居の存続期間 の中間に位置するもので、7C初頭頃が考えられる。

このほかの遺構としては、SX121、SX427竪穴遺構、さらにはSX071、274、423、460、842、843、864 の各焼成土坑が注目されよう。いずれも800度以上の高温によって内部、および周囲が赤く焼けており、内部から木炭の痕跡も多く検出されている。明らかに当該遺構内部で焼成作業が行われたことは確かであるが、その作業が何であったのかは不明とせざるを得ない。

また時期的には、SX427から出土している須恵器から、奈良時代後半と見られる。同様にSX121からも須恵器が出土しているが、時期の推定は困難で

あるが、少なくとも古墳時代までは遡らないと見られる。

鉄滓

しかしすでに見たように鉄滓をはじめとして多数の鉄関係の遺物が見られることから、当該遺構が鉄生産に関わる遺構であったと考えたいと思うがいかかであろうか。また竪穴遺構については、報告者が九州地域の類例をあげているが、いずれにしても用途は明らかではない。わずかに調査中、SX427竪穴遺構の壁面に焼土の痕跡が認められており、当該遺構内部での焼成作業も可能性として残されている。また鉄滓の出土もSX427及びSX121では多く認められており、鉄に関係する遺構の可能性が濃いということを指摘しておきたい。

以上のように、まず集落が構成された段階に青銅器に関する生産作業が行われていたことが、当該集落遺跡の先ず特徴とすれば、第二段階の集落の形成時期には鉄関係の生産が重要な当該遺跡の産業あるいは生業としていたことが想定される。なお鉄関係の遺構、遺物は量的にはまだまだ少ないといわざるを得ず、近接地域での当該関連遺跡の確認が待たれる。

2. 遺物

弥生土器

(1) 弥生、庄内式平行期の土器について

本遺跡から出土した弥生土器には、甕、壺、鉢、高杯、器台、支柱などがある。これらの土器は住居跡や溝状遺構の覆土や丘陵斜面に堆積した包含層などから検出されており、およそ4万点にも上る。しかし、土器の共伴関係などについて検討できる遺構毎の良好な資料の抽出は困難であった。しかし、なかにはSC708住居内の南東隅で検出された土器溜りからの出土資料など、高杯を中心とした一括性の高い資料もある。SC708土器溜りの場合、出土遺構が住居内に掘り込まれた土坑であることや高杯が多いことなど、祭祀に係わる可能性があるものと推察される。これらの土器群は高杯などの形態的な特徴から弥生時代後期終末に位置付けられる。

その他の住居跡や溝状遺構などから出土した土器は壺や甕、鉢の底部や口縁部の形状、高杯の形態変化などの検討から、概ね弥生時代後期中頃から後期終末を経て、一部いわゆる庄内式併行期のものが認められる(註1)。したがって、本遺跡はこの間に存続していたものと理解されるが、先述したように遺構毎の遺物の組み合わせを明確にできる資料が少なく、各時期毎の遺構の変遷をたどることは難しい。この中で、弥生後期中頃の土器は溝状遺構から出土することが多く、住居跡からは比較的後出する時期のものが多い。これは住居において最も新しい段階の遺物が残り易いことに係わるものであろう。

青銅器製作所

なお、これらの土器の組み合わせは他の一般的な遺跡における組み合わせと変わることはない。したがって、土器の形態や組み合わせの上から、鋳型の出土によって明らかとなった青銅器製作遺跡としての性格を特徴付けることは難しい。これが青銅器製作遺跡に普遍的なものかどうかについては、青銅器製作遺跡の調査事例が少ないこともあり、今後の資料の増加に期待したい。

註1 北部九州の弥生後期~古墳時代前期土器の編年観については、次の論考を参照した。

柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982年

田崎博之「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』120号 1983年 常松幹雄「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢Ⅲ』1990年

(2) 須恵器について

須恵器

今回の調査では多数の遺物が出土している。これらのうち遺構別に見た場合は、SC144、931、SC874、944 竪穴住居およびSD942溝、SX121、427 竪穴遺構SX120、883 遺構、13 区採集からのものが図化可能なものである。特に量的に多いのは、SC931-1、2、936、944 竪穴住居である。

獲

器種としては、甕の体部の破片が最も多く、ついで蓋杯がある。蓋杯では、ごく一般的な形状で、蓋の口縁部はなだらかにさがり、中に鈍い稜が巡っており、口縁端部は内斜する凹面をなす。天井部外面の 3分の 2以上に回転へう削り調整が行われている。内面には丁寧なナデ調整が行われている。これらは蓋194、195、184にみられるもので陶邑編編ではII形式 2-3 段階に相当するものと考えられ、今回の須恵器の中でも最も時期的に遡る。次に蓋194、183がある。先の蓋に比較してやや造作が雑となっているが、時期的にはすぐ後に続くと考えられる。これらに伴う杯は、前者に対応するものが見られず、後者では杯185、186があげられよう。これらは、陶邑編年II型式 3 段階に相当する。また蓋 208、209は、杯 210、211などに対応するもので、時期的にはさらに 1 段階新しい。

蓋杯

さらに蓋212は、杯213とセット関係を持っていたとしても不思議ではないものである。このほか器種的には、提瓶191、216があり、いずれも細かな破片であり、時期の特定は困難であるが、ほぼ蓋杯と同じ時期、段階に相当すると考えてよいだろう。高杯196は、脚の一部であり、全体の状態によって判断が異なるが、比較的古い段階の特徴を持つ。伴出している蓋などと同じ時期と見てよいだろう。このほか器台の台部の破片が見られる。器台222である。SС144竪穴住居からのものであるが、その出土状態から床面直上ではなさそうであり、あるいは混入品の可能性もある。当該器種は、日常生活であまり用いないものであり、古墳の副葬品によくみられるものである。近接して当該遺構が存在した可能性もあるが、今回の調査からでは明らかにしえない。またSX121竪穴遺構からの長頸壺あるいは聴の破片215についても、222と似たものであり、他の須恵器とは大きく時期を異にしている。図化できなかったもののなかに当該蓋とセット関係をなす杯もみられたことから、当該時期にもこの遺跡には居住者があったということになろう。

器台

最も量的に多い甕では、時期の判断が困難であるが、192、201、200、204、220のいずれもは近似する手法が用いられており、時期的には近いも

のであろう。また221、223、218などは、あまり通常では見られない文様の叩きを用いている。いずれも焼成は、良好であり、胎土はやや粗で白色砂粒を含む。

牛頸窯

これら全体の須恵器については、先に和泉陶邑窯と比較して時期的相関関係を示したが、これらの胎土や手法、形状の特徴などから推定して、地元産の可能性が濃いとみられる。とくに後にも分析結果が示されるように、自然科学分析でも、地元九州地区、春日付近とされている。当該地域は九州最大の牛頚須恵器窯跡群ケ所在するところであり、そこからの提給品であると考えるのがもっとも妥当である。

(3) 石器について

飯倉D遺跡から出土した石器は、石包丁9点、石斧1点、砥石10点、石錘3点、凹石2点、石鏃2点、剥片・その他が13点、あわせて40点に及んだ。その他、石庖丁未成品5点、加工痕を持つ大型の石材が数点出土している。うち大多数は、弥生時代の遺物としてとらえられるもので、これは確認された遺構、特に住居跡の大部分が弥生時代後期と考えられることからも首肯できる。しかしその一方で、編年に適する土器が出土していない遺構もあり、また検出状況からも共伴遺物による細かい時期比定の難しい石器が多い。そこで、当該遺跡出土石器に関して、石器そのものによる編年観や、気がついた二・三の問題点について言及しておきたい。

石庖丁

中~後期

立岩遺跡

未成品

石庖丁の形状はバラエティーに富んでいるが、背部両端がやや下がり気味で、 計量的には長さ10㎝前後・厚さ0.6㎝以上の小振りで器肉の厚いものが多く、9 点ともどちらか一方、又は両方の特徴を有している。これは下條信行氏の編年弥 生Ⅱ~Ⅲ型1)にあたり、弥生中~後期の様相ととらえられる。石材も多種類に及 ぶが、明らかに笠置山産の輝緑凝灰岩とわかるものがSD273溝・SX679 土坑覆土内出土の2点、さらに可能性のあるものが1点表採されており、飯塚市 立岩遺跡との関連が注目される。立岩製石包丁の交易は、中期初頭に北部九州の 各平野との間で開始されて中期一杯まで継続し、その範囲は半径45kmに及んだ とされている。ところが、今回の調査でSC135住居跡内のピットから、笠置 山産輝緑凝灰岩の石庖丁未成品が一括で検出された。この3点は、いずれも製品 に比べ大型で自然面も多く残り、笠置山麓で採集した手頃な石塊をそのまま持ち 込んだものと思われる。とすれば、製品のみならず素材の移動も行われたわけで、 上記の出土製品の中には、当該遺跡で加工・製作されたものが含まれている可能 性も出てきた。ここで問題となるSC135住居跡の時期比定は別項弥生土器の 考察にゆずるが、ほぼ中期の内となれば、製品の他に素材の交易もありえたこと を示唆する。また素材・製品ともに後期ということになれば、生産力の落ちた立 岩製石包丁に頼らず、直線距離にして約35km離れた笠置山から直接・間接に耐 久力のある優良な素材を入手し、自己消費的に石包丁生産を行っていた様子を伺 うことができる。当該遺跡からは、石器製作を積極的に裏付ける遺構や穿孔具な どは検出されなかったが、立岩出土石包丁との形態・技法の詳細な比較を含め、

慎重な検討を行う必要があろう。

砥石

鉄器の調整

金属器生産

砥石は、手持ち砥が4点、置砥が2点、中間的なものおよび残欠が4点となっている。石器の総数に対して出土量が多いように思われるが、これはSD10溝出土の有溝砥石から推測されるように、鉄器の刃先調整用に使われたと考えれば理解し易い。事実、調査区内からは鉄鎌をはじめとした数点の鉄製品の出土をみており、弥生後期以降の鉄器の増大に対応するものであろう。また、当該遺跡からは青銅製品の鋳型を伴う住居跡や製鉄炉状の焼成土坑も検出されており、これらの金属器生産と関連するものも含まれている可能性が高い。

SС60、SС935から検出された2点の石錘は、下條氏の提唱する「九州型石錘」 2)にあたるものである。いずれも滑石様の素材に十字の溝をつけた長さ6cm前後の紡錘形で、氏の小形A2.型に分類できる。小形A2.型は玄界灘沿岸を中心に広く分布し、弥生時代中期後半にあらわれ古墳時代前期に衰徴するとされており、検出されたSC60・935住居跡時期に一致している。量の僅少性から、漁網錘とするよりも釣漁の沈子用と考えられ、近隣の河海における漁撈に利用されたものであろう。

(余語琢磨)

- 1) 下條信行「東アジアにおける外湾刃石庖丁の展開」『鏡山猛先生古稀記念古 文化論攷』、1980
- 2) 下條信行「弥生・古墳時代の九州型石錘について」『九州文化史研究所紀要』 第29号、1984

(4) その他の遺物

その他の遺物

本遺跡で得られた土器以外の遺物には、青銅器鋳型をはじめとして、石器、鉄器、ガラス小玉などがあった。

鋳型

このうち、鋳型の2点はともに破損して検出された。1点は鏡背面と矛、もう1点は鏡面の鋳型である。鏡背面と矛が掘り込まれた鋳型は、矛としての使用後、鏡背面鋳型として用いられたものと考えられる。この鋳型から製作された矛の型式は広形銅矛、鏡は高倉氏分類による小型仿製鏡 II a 類に相当する。この小型仿製鏡 II a 類について、高倉氏は a 1 から a 5 類までに細分されているが、本鋳型から製作された製品は櫛歯文帯と内行花文帯の間にめぐらされた圏線と、内行花文帯の内側に配置されるS字状文や蕨手状文、乳状突起の関係などの点で、これら細分された鏡式のどれとも微妙な違いが認められる。本鋳型によって製作された製品の探索とともに、これらの点については今後の課題である。

なお、この鋳型から製作された製品の法量については、矛の場合欠損部分が多く、細かい寸法については明確にできない。鏡については面径 $7.2\,\mathrm{cm}$ ほどに復元される。この鏡背鋳型で製作された鏡の法量について、本報告書の刊行以前の紹介記事(註1)では復元面径 $6.3\,\mathrm{cm}$ 、復元内行花文数 $7\,\mathrm{m}$ としていたが、ここでそれぞれ $7.2\,\mathrm{cm}$ 、 $6\,\mathrm{m}$ に訂正しておきたい。

もう1点の鏡面鋳型は管見に及ぶ限りこれまでに出土例がなく、はじめての出 土例と考えられる。鏡面は鏡背面と異なり、何ら図柄をもたないため、鋳口と黒 変部分、さらに極めて緩やかな窪みによって、鏡面と判断された。しかし、現存部分で見る限り、鏡縁部がはっきりしない。このため、本鋳型から鋳出された製品の鏡式や法量は明確にできないが、鋳口部分と黒変部分の範囲からの推測を述べれば、面径7.0~7.5cm前後の製品を製作していたものと考えられる。

これらの2例の鋳型はそれぞれ出土した遺構を異にする。しかしながら、それぞれ鏡面と鏡背面の鋳型であり、同一遺跡からの出土したことや面径の推定値などを踏まえれば、あるいは同一製品を製作した雄型と雌型である可能性も考えられる。ただ、もし同一製品の鋳型であるならば、復元される鋳型の全体形にかなりの違いがある雄型と雌型を組み合わせて、鏡の製作にあたっていたこととなる。鋳型の構造上、理論的には不可能ではないと考えられるが、これを積極的に肯定する論拠もない。これらについては、他に比較する資料もないため、その可能性を指摘するに留めておきたい。

使用年代

なお、これらの鋳型の使用年代については、先の土器の検討によって導かれた 弥生時代後期後半以降庄内式伴行期までの間に位置付けられる。高倉氏の鏡式分 類と編年において、II a 類は主に弥生後期中頃から後半にかけて製作されたとさ れており、本遺跡例はこれよりもやや幅を持たせた年代観の中に含まれることと なる。

次に、石器には石庖丁ならびに石庖丁未製品、石鏃および剥片石材があった。 石庖丁は住居内から埋置された状態で検出されたSC135の例もあり、弥生後期中頃以降になっても使用されていたことが明らかである。弥生後期後半段階にはかなりの割合で鉄器が普及していたものと想定されるが、このような石庖丁の出土は弥生時代における利器の鉄器化が器種によってかなり異なっていたことを示すとも考えられる。あるいは、本遺跡における石鏃や剥片石材の存在もこれに通じるのかもしれない。

鉄器

その鉄器であるが、本遺跡では弥生時代の鉄器として、斧、鎌、鋤先などが検 出されている。鉄器は素材の腐食や弥生時代の遺構の性格などによって、住居後 や溝などからは比較的出土しづらい。本遺跡出土例もかなり腐食しており、現状 から製品の原形をかろうじて確認できるのみである。

ガラス小玉

ガラス小玉は弥生時代住居内覆土および張り床土の中から出土した。いずれも管状ガラスを切断して製作されたものと考えられ、径5 mm、幅2 mm、孔径2 mm余りを計る。これらのガラス玉は調査中の掘り下げ段階で確認できたものもあるが、ほとんどは覆土や張り床土を取り置いて水洗いした結果、確認された。これにより弥生後期の住居後からはガラス小玉の採取される可能性がかなり高いことが知られ、今後の注意が喚起される。

(註)

1. 中村 浩・池田榮史・田尻義了「弥生後期の生産遺跡-福岡市飯倉D遺跡」 『季刊考古学』第48号 1994年

付論1 飯倉D遺跡出土の鋳型について

東京国立博物館 井 上 洋 一

鋳型 小型仿製鏡 矛 鋳型の現法量は、7.4×6.5×4.5cmである。鋳型面は表裏両面につくられ、A面にはいわゆる「小型仿製鏡」が、B面には「矛」が彫り込まれている。両者は同時に使用されたものではなく、おそらくは、B面の矛が鋳造された後、この鋳型が壊れ、その一部(末端部)を鏡の鋳型として再利用したものと考えられる。全体は淡茶褐色を呈すが、湯口の周辺部および節帯部付近には黒変した箇所が認められる。

B面

ここではB面に彫り込まれた矛について若干のコメントを加えることとする。

湯口

B面に残されているのは、矛の湯口から節帯部までであり、以下は欠損している。湯口は立面観は半月形に、側面観は緩やかに外反するラッパ形に彫り込まれている。丁度この中央部にあたる位置に、現存長0.52cm、幅0.11cmの縦方向の沈線が確認できる。そしてこの湯口に続き、銅矛の袋端部(節帯部)が強く外反したラッパ形に、より深く彫り込まれている。ただし、鋳型の合わせ目面の表面が剥離し、かつ磨耗していることからすれば、これらの彫り込み面はもう少し上にあったと考えられる。こうした点を考慮し、製品を復元してみると、袋端部はおよそ長径8cm、短径6cm前後で、甲張り転用突線が鰭状化した「広形銅矛」を想定することができる。また、全体の長さはおよそ85cm前後に復元することが可能である。

広形銅矛

湯道の痕跡

銅矛

一般に、広形銅矛をみると、袋端部の厚みは均一ではなく、対角線の位置、4 箇所が瘤状に突出しているものが多い。これらは明らかに湯道の痕跡であり、この瘤状の部分に切断痕がみられるものもある。また、このことは福岡県朝倉郡夜須町ならびに福岡県春日市須玖坂本などから出土した銅矛の中子の形態からも裏付けられる。これらの中子は断面が楕円形に近い円錐状を成すが、この頭部は棍棒頭のように一回り大きくつくられ、そこには縦方向に四条の溝がつくられている。その立面観は丁度、四葉形を成している。この頭部が鋳型の湯口の部分に組み合わされ、この溝が湯道となって銅矛が鋳造されたと考えられる。したがって、先に指摘した湯口の中央部にみられた沈線は、この湯道を刻んだものと考えることが可能である。

本鋳型でもう一つ注目されるのは、鋳型の一側面中央部に一条の溝が彫り込まれている点である。その部分の損傷は著しいが、明らかに溝が走っていることが確認できる。鋳型の側面にこうした溝をもつ例は、福岡県筑紫野市仮塚南遺跡出土の銅戈鋳型・福岡市東区多田羅遺跡出土の銅釧鋳型・京都府向日市鶏冠井遺跡出土の銅鐸鋳型などをあげることができる。また、二つの石材をつなぎ合わせ完形の銅矛鋳型とする福岡県春日市須玖出土の鋳型(熊野神社所蔵)には、その二つの接合面に溝が彫り込まれている。特に、本例は湯口や節帯部のつくりがこの

須玖出土鋳型ときわめて似通っており、ここに本鋳型の原形をみるようでもある。 この溝の性格については、二つに鋳型をつなぎ完成品とする須玖出土鋳型など から考えると、複数の鋳型をつなぎ合わせ縄紐等で緊縛する際の紐掛け溝の一種 ではないかと思われる。また、こうした鋳型の接続面は当然の結果として製品に 反映される。広形銅矛には、その接合部が明確に鋳出されているものが存在する ことも知られている。

石型で如何にすれば大型品を鋳造することが可能であるかを追求した人々の知 恵をみるようでもある。

出土土器からもこの鋳型の時期は、弥生時代後期後半に位置づけられる。この時期、近畿地方ではすでに1mを超す大型銅鐸の製作を土型を用いることで可能にしている。こうした土型を用いる技術は、おそらく九州にも存在していたに違いない。にもかかわらず、九州ではかたくなに石型で鋳造が行われていたようである。青銅器鋳造にみる九州の伝統とでも言うべきであろうか。いずれにせよ、本鋳型は断片資料であるが、銅矛の鋳造技法を解明する上できわめて重要であるとともに広形銅矛ならびに小型仿製鏡の年代を計り知ることができる貴重な資料である。そして、なによりもこの地でこうした青銅器の鋳造が行われていたことを積極的に窺わせる発見の事実こそが、北部九州の弥生時代後期の社会状況を考える上に、きわめて重要な資料を提示したことになろう。

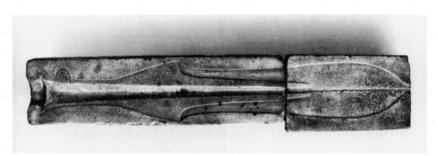


図66 春日市須玖出土銅矛鋳型

付論 2 飯倉 D 遺跡出土の遺物岩石

西南学院大学名誉教授 唐木田 芳 文

飯倉D遺跡出土の遺物岩石のうち、偏光顕微鏡によって検鏡・鑑定したのは次の4点である。

- 1)940401(銅鏡•矛鋳型):石英長石斑岩
- 2)940221:角閃石(オパサイト)単斜輝石かんらん石玄武岩
- 3)940321:単斜輝石かんらん石角閃石(オパサイト)玄武岩
- 4)940225: 黑雲母含有普通角閃石安山岩

I. 石材の岩石学的性質

1)940401(銅鏡•矛鋳型):石英長石斑岩

肉眼による観察

緻密、灰白色で、微細な板状絹雲母が岩石全体に散在する。斑晶はきわめて少ないが、ときに、長さ $1 \sim 1.5$ mmの卓状斜長石とそれと同程度の大きさで丸みを帯びた石英の斑晶が認められる。

この種の、斑晶の少ない細粒の石英長石斑岩は珪長岩とも呼ばれる。

偏光顕微鏡による観察 (図67、1・2・3・4)

主成分鉱物は石英・カリ長石・ソーダ質斜長石・絹雲母(微細な白雲母) からなる。

石英・長石は、 $0.01\sim0.1$ mm大の不規則な粒状結晶をなして組み合っている。ときどき両者は放射状に集合して、 ${\rm 40.2}\sim1$ mmの球顆構造(図67、3・4)をつくり、この岩石の特徴となっている。斜長石は、斑晶と石基の微粒結晶との中間的な大きさ(長さ0.4mm前後)の微斑晶に成長していることがある(図67、 $1\cdot2$)。カリ長石もときに、長さ $0.1\sim0.4$ mmの矩形断面を示す大きい結晶に成長し、あるものには微斜長石構造やカールスバッド双晶が見られる(図67、3)。絹雲母は ${\rm 40.02}\sim0.15$ mmの板状結晶をなし、石基に散在するほか、斑晶斜長石中にも多数包有されている(図67、 $1\cdot2$)。

2)940221:角閃石(オパサイト)単斜輝石かんらん石玄武岩

肉眼による観察

ねずみ色の緻密な石基中に、一般に長さ1mm以下の黒色斑晶(主にかんらん石)が散在する。

偏光顕微鏡による観察 (図68、1・2)

斑晶は多い順に、かんらん石・黒色鉄鉱・オパサイト・単斜輝石からなり、 石基には斜長石・単斜輝石・黒色鉄鉱のほか金雲母・燐灰石・アノーソクレー スが含まれる。拍子木状の斜長石が平行配列してつくるピロタキシティック 組織(図68、2)を示し、斜長石の粒間を単斜輝石が埋めている。

かんらん石はときに長さ約2mmに達する。一般に丸みを帯びた矩形断面を示し、ときに両端がピラミッド形に尖った自形結晶のこともある。割れ目や周縁にそって、褐色のイディングス石に変質することがある。単斜輝石は斑晶としてはまれで、主に石基を構成する。石基のものは、長さ0.05~0.15mmの粒状~短柱状で、淡緑褐色を呈し、チタン普通輝石質である。黒色鉄鉱の斑晶・微斑晶は径0.1~1mmで、不規則~四角、矩形断面を示し、石基のものは径0.02mm前後の粒状をなす。

斜長石は長さ0.1~0.2mmの拍子木状をなし、細晶を取り巻くように、ゆるく波うって平行に配列する。ほとんどの結晶は双晶と累帯構造を示す。斜長石の粒間にはアノーソクレースがまれに見られる。金雲母は斜長石と単斜輝石との粒間を埋めてわずかに現れる。不規則板状結晶で、淡黄色~赤褐色に強い多色性を示す。オパサイトは微粒の黒色鉄鉱と単斜輝石の集合体(図68、1)で、角閃石からの分解生成物である。丸みを帯びた柱状~菱形をなし、長さは最大で約4mmに達する。

3)940321:単斜輝石かんらん石角閃石(オパサイト)玄武岩

肉眼による観察

褐灰色の緻密石基中に、長さが最大で4mmに達する黒色柱状の角閃石(オパサイト)斑晶を多数含む。

偏光顕微鏡による観察

顕微鏡下の性質は940221の角閃石(オパサイト)単斜輝石かんらん石玄武岩と類似している。主な相違点は、①オパサイトがより多いこと、②金雲母を含まないことである。

4)940225: 黑雲母含有普通角閃石安山岩

肉眼による観察

石基は灰白色、緻密で、長さが最大で4mmに達する黒色、針状の角閃石が、 板状の節理面に平行に散在する。

偏光顕微鏡による観察 (図68、3・4)

斑晶は普通角閃石と斜長石、石基は斜長石・黒色鉄鉱・普通角閃石・黒雲母・ガラス・燐灰石からなる。普通角閃石・斜長石結晶は平行な配列傾向を示す。

普通角閃石は斑晶をなし、長柱状で、Z=褐緑色、Y=緑褐色、X=淡緑黄色の多色性を示す。ときどき双晶や累帯構造が見られる。黒雲母は、径最大約0.2mmの薄い板状結晶をなし、普通角閃石斑晶の周囲に付随して現れる。石基中に単独で出現することはまれである。緑褐色~淡緑黄色の多色性を示す。微粒の黒雲母の黒色鉄鉱の集合体が普通角閃石結晶の周囲をコロナ状に取り囲むことが多い。これは角閃石のオパサイト化作用の初期状態に相当する。黒色鉄鉱は不規則~矩形断面を示し、0.02~0.1mm大が普通であるが、ときに0.5mm大に達するものもある。

斜長石は、長さ2~3㎜の斑晶をなすこともあるが、多くは石基を構成し、

長さ0.1~1 mmの厚い卓状結晶をなす。斑晶状の大きい結晶以外は、一般に 顕著な累帯構造は示さず、結晶の周縁部が多少ソーダ質になるだけである。 双晶も少ない。

Ⅱ. 石材の出所

1)940401の石英長石斑岩

北部九州においては春日市をはじめ早良・福岡平野とそれに続く佐賀平野の各地から、銅鐸、銅剣などをはじめ弥生時代の青銅器鋳型が多数出土している。その鋳型石材の大部分は細粒の石英長石斑岩である(唐木田、1993)。弥生時代後期中頃の飯倉D遺跡から出土した銅鏡・矛鋳型が、春日市などから出土した鋳型石材とやはり同類の石英長石斑岩でつくられていることは、当時の青銅器製作が職業的に大規模に行われていたことを示唆しており、興味深い。現在のところ、その石材の出所・産地については不明である。

2)・3)940221・940321の玄武岩

山陰から北西部九州にかけての沿岸地域には、新生代のアルカリ玄武岩を主とする各種の火山岩類が分布し、古くから環日本海アルカリ岩石区と呼ばれている。その中で北九州-福岡地域には、東から六連島、黒埼(城山・妙見山)、津屋崎、相ノ島、玄界島、能古島、毘沙門山、今山、芥屋大門、可也山、姫島などにアルカリ玄武岩類が、小規模ではあるが広く分布している。(Ôji, 1961;松本ほか, 1962)

松本ほか(1962)は、この地域のアルカリ岩系の玄武岩類の岩型として、かんらん石玄武岩・単斜輝石かんらん石玄武岩・かんらん石角閃石玄武岩・単斜輝石かんらん石角閃石玄武岩の4つを識別し、その分布と性質を記載している。それによると、飯倉D遺跡の940221・940321と同類のオパサイトを含む単斜輝石かんらん石角閃石玄武岩は能古島と相ノ島に分布する。したがって地理的にみて、飯倉D遺跡の玄武岩は能古島から運ばれてきた可能性が最も高い。

4)940225の黒雲母含有普通角閃石安山岩

北部九州における安山岩類の分布を見ると、脊振山地からその北東側の三郡山地・福智山地には見られず、福岡・大分県境の英彦山の北西山麓を通って、ほぼ南西に延びる線より南東側の大分・熊本県に広く分布している(唐木田ほか、1992など)。早良・福岡平野から地理的に最も近い安山岩分布域は、筑後川中流の杷木町・浮羽町あたりである。しかし、この安山岩分布域には、新第三紀中新世から現在に至る長期間に噴出した多種類の安山岩類が各所に分布しており、飯倉D遺跡から出土した940225の黒雲母含有普通角閃石安山岩に相当する岩石がもたらされた産出場所を特定することは、現在のところ困難である。

引用文献

唐木田芳文(1993)弥生時代青銅器の鋳型石材考。蟻塔、共立出版、vol.39, p.1-5.

唐木田芳文・早坂祥三・長谷義隆編著(1992)日本の地質 9、九州地方。共立出版、371p.

松本徰夫・山縣茂樹・板谷徹丸(1962)北部九州および下関市産玄武岩類の K-Ar年代と主化学成分。松本徰夫教授記念論文集、p.247-264.

Õji, Y. (1961) Petrology of the Cenozoic basaltic rocks of western San-in and North Kyushu, Japan. *Bull. Fukuoka Gakugei Univ.*, special vol., no.1, p.1-89.

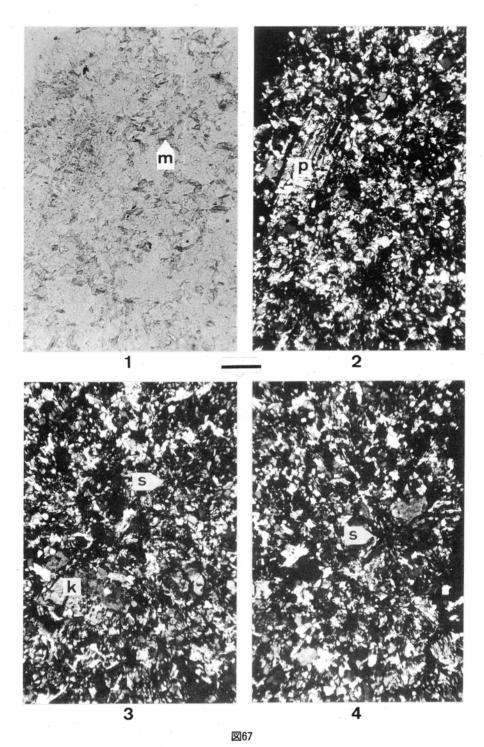


写真 1 (平行ニコル) 写真 2 · 3 · 4 (十字ニコル): 940401 (銅鏡·矛鋳型) の石英長石斑岩 P: 斜長石、k: カリ長石、m: 絹雲母、s: 球顆、スケールバー: 0.2mm

写真1における単色部は、複雑に組み合った石英と長石からなる。絹雲母(濃い灰色の部分)は、石基と斜長石微斑晶中に多数散在して見られる。

写真2の斜長石微斑晶はアルバイト双晶を示す。

写真3ではカールスバッド双晶を示すカリ長石と石英・長石が放射状に組み合った球顆 構造が見られる。

写真4はやや大形の球顆を含む。

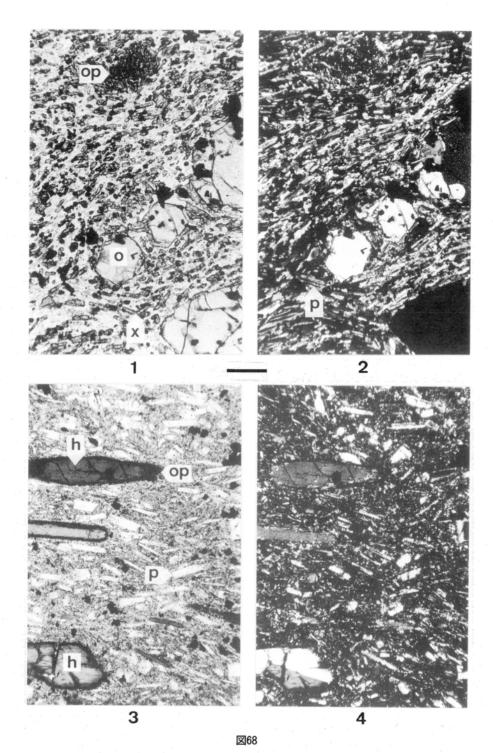


写真 1 (平行ニコル)・写真 2 (十字ニコル): 940221の角閃石(オパサイト) 単斜輝石かんらん石玄武岩 ○:かんらん石、x:単斜輝石、P:拍子木状斜長石、○P:オパサイト スケールバー: 0.2mm

写真1では、かんらん石とオパサイトの斑晶ならびに石基の単斜輝石がよく見られる。 写真2には、拍子木状斜長石がかんらん石斑晶の周りに平行に配列したピロタキシティッ ク組織がよく示されている。

写真 3 (平行ニコル)・写真 4 (十字ニコル): 940225の黒雲母含有普通角閃石安山岩

h:普通角閃石、P:斜長石、OP:オパサイト

スケールバー: 0.2mm 写真 3 では、普通角閃石を取り囲むオパサイト・バンドがよく見られる。普通角閃石と 斜長石はほぼ平行に配列している。

写真4の普通角閃石斑晶には双晶が認められる。

付論 3 飯倉 D 遺跡の花粉化石

1. 試料と分析方法

試料は、SC074、SC136、SC144、SC246、SC782、SC865、SC935の7試料である(付論4飯倉D遺跡のプラント・オパールの図71を参照)。これら7試料について、SC074(住居跡床面直上)は黄褐色のローム質土で、径5㎜前後のレキが多量に含まれている。また、7~8㎜の根跡があり、明黄褐色ロームや黒褐色土壌がその跡を埋めている。SC136(住居跡床面直上)は暗黄褐色ローム質土で、砂レキが多量に含まれ、細い根が認められる。SC144(床面直上)は暗黄褐色のローム質土で、レキが多量に含まれ、炭片が認められる。SC246(床面直上)は明黄褐色のローム質土で、レキが多量に含まれ、炭片が認められる。SC782(覆土)は赤褐色のローム質土で、砂レキが含まれ、細い根が認められる。SC865(1棟 床面直上)は明黄褐色のローム質土で、砂レキが含まれ、炭片が認められる。SC865 の 1棟 床面直上)は明黄褐色のローム質土で、砂レキが含まれ、炭片が認められる。SC865 の 1棟 床面直上)は明黄褐色のローム質土で、砂レキが含まれ、炭片が認められる。SC935(第2層)は黒黄色のローム質土で、砂レキが多量に認められる。

これら7 試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。なお、SC144, SC246, SC935の3 試料については併せてプラント・オパール分析も行われている。

試料(湿重約15g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加えて20分間 湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて 粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、 比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を 回収する。この浮遊物について水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処 理(無水酢酸9:1 濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残 渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作 成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

2. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉24、草本花粉16、形態分類で示したシダ植物胞子2の計42である。これら花粉・胞子の一覧を表 5 に示したが、表中のハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。なお、樹木花粉の検出数が少なく、分布図として示すことはできなかった。

検鏡の結果、樹木花粉に比べ草本花粉の占める割合が高く、特にイネ科やヨモギ属花粉が多く得られている。少ない樹木花粉のなかでは、コナラ属アカガシ亜属が最も多く得られ、次いでコナラ属コナラ亜属が多く観察されている。その他、マツ属複維管束亜属(アカマツやクロマツなどのニヨウマツ類)やスギ属、シイノキ属ーマテバシイ属、ニレ属ーケヤキ属、ウルシ属などが検出されている。

表 5 飯倉 D遺跡産出花粉化石一覧表

和名	学名	SC	SC	SC	SC	SC	SC	SC
	, ₁₄	074	136	144	246	782	865	
			100					333
樹木								
マキ属	Podocarpus	1	-	-	_	-	-	_
ツガ属	Tsuga	-	-	1	-	1	_	1
マツ属複維管東亜属	Pinus subgen. Diploxylon	-	3	3	1	1	_	_
マツ属(不明)	Pinus (Unknown)	1	1	4	1	-	_	_
コウヤマキ属	Sciadopitys	1	-	2	_	-	_	-
スギ属	Cryptomeria	-	_	4	-	-	_	1
ヤマモモ属	Myrica	1	-	-	-	-	_	-
クルミ属	Juglans	-	-	-	1	_	_	-
クマシデ属-アサダ属	Carpinus - Ostrya	-	_	1	_	_	-	_
ハシバミ属	Corylus	1	_	2	_	_		_
カバノキ属	Betula	-	_	1	2	-	_	_
ハンノキ属	Alnus	1	_	1	-	_	_	_
ブナ属	Fagus	_	-	_	_	2	_	_
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	10	_	3	2	4	_	_
コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	22	2	30	8	4	· -	3
シイノキ属-マテバシイ属	Castanopsis - Pasania	1	2	1	_	3	_	_
ニレ属ーケヤキ属	Ulmus - Zelkova	_	1	3	_	_	_	_
ウルシ属	Rhus	_	2	_	1	_	_	_
モチノキ属	Ilex	_	_	_	_	2	_	_
ツタ属	Parthenocissus	_	_	_	_	1	_	_
ウコギ科	Araliaceae	_	_	_	_	5	_	_
ツツジ科	Ericaceae	_	1	_	_	1	_	_
ハイノキ属	Symplocos	1	_		1	_	_	
イボタノキ属	Ligustrum	1	_	1	_	_	_	_
ガマズミ属	Viburnum	_	_	_	1	_	_	_
草本	a .							
イネ科	Gramineae	122	13	99	8	6	-	67
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	-	1	-	-	-	-
クワ科サナスタニ体・ウェゼルよう体・	Moraceae	3	-		-	-	-	1
リノエグテ郎・リアキツガミ即 1	Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon	-	_	-	-	-	-	1
ソバ属	Fagopyrum	- ,	-	-	1	-	-	-
アカザ科ーヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	1	1	-	-	-	4
ナデシコ科	Caryophyllaceae	3	1	5	1	1	-	5
カラマツソウ属	Thalictrum	-	-	-	-	-		1
他のキンポウゲ科 アブラナ科	other Ranunculaceae	-	1	2	-	1	-	-
. , .	Cruciferae	3	2	14	3	1	-	5
バラ科	Rosaceae	1	-	1	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	5	2	3	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	7	-	1	1	-	_	1
ヨモギ属	Artemisia	51	5	59	12	2	-	74
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	1	_	-	-	_	3
タンポポ亜科	Liguliflorae	8	_	3	1	1	-	-
シダ植物								
単条型胞子	Monolete spore	102	8	0	1.4	4		^
三条型胞子	Trilete spore			8	14	4	-	3
	spore	6	27	10	4	1	_	3
樹木花粉	Arboreal pollen	41	10		10			
草本花粉	Nonarboreal pollen	41	12	57	18	24	0	5
シダ植物胞子	Spores	205	26	189	27	12	0	162
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	108	35	18	18	5	0	6
A THE PROPERTY OF THE PARTY OF	rotal rollen & Spores	354	73	264	63	41	0	173
不明花粉	Unknown pollen	35	15	33	20	6	0	21
	-							

草本類では先にも記したようにイネ科が多く得られており(SC865を除く 6 試料より)、SC074,SC144,SC935の 3 試料では全花粉胞子総数の $3 \sim 4$ 割を占めている。同試料においてヨモギ属も多く得られており、特にSC935では最も多く産出している。またナデシコ科やアブラナ科も、イネ科やヨモギ属同様SC865を除く 6 試料より得られている。その他、アカザ科ーヒユ科やセリ科、タンポポ亜科などが多くの試料から産出している。また、壊れているがソバ属花粉(図70参照)が 1 点だけSC246より検出されている。

3. 遺跡周辺の古植生

検出花粉数が少なく、特に樹木花粉は少なく、古植生について考察することは 難しいが、その傾向について少し記すこととした。

遺跡周辺は、多く検出されているイネ科やヨモギ属、およびアカザ科ーヒュ科、ナデシコ科、アブラナ科、セリ科、タンポポ亜科などの雑草類が多く生育していたと推測される。プラント・オパール分析でもネザサ節やウシクサ族(ススキやチガヤなど)などが生育する開けた陽地的な環境が予想されており、遺跡周辺はこれらが分布する草地が広がっていたとみられる。

一方、樹木類は草地の周辺に分布していたと予想され、アカガシ亜属やシイノキ属ーマテバシイ属を主体とした照葉樹林が成立していたと予想される。また、ニョウマツ類やコナラ亜属も比較的検出されており、炭化材樹種同定においてはシイノキ属やクスノキなどが認められる。このことは、シイノキ属やクスノキ、あるいは今回は認められなかったがアカガシ亜属といった照葉樹林要素が燃料材として使われ、その跡地にニョウマツ類やコナラ亜属が二次林として侵入した結果と推測される。

4. 栽培植物について

多く検出されているイネ科花粉の中にイネ属とみられる花粉化石が認められ、また、プラント・オパール分析においてイネのプラント・オパールが多くの試料より検出されている。こうしたことから、飯倉D遺跡においては少なくとも弥生時代後期頃にはイネが存在しており、付近において稲作が営まれていたとみられる。

また、1点だけであるがソバ属花粉が得られており、ソバについても遺跡周辺において栽培されていた可能性が考えられる。

5. まとめ

銅鏡の鋳造を行っていたと推測される住居跡などが検出された飯倉D遺跡周辺の古植生は以下のようであったと推測される。

遺跡周辺ではイネやソバが栽培され、その周辺や住居の周りにはネザサ類やウシクサ族(ススキやチガヤなど)などのイネ科やヨモギ属、アブラナ科、タンポポ亜科などの雑草類が生育し、草地的な景観が広がっていた。

こうした草地の周辺に、アカガシ亜属やシイノキ属ーマテバシイ属を主体とし

た照葉樹林が成立していた。しかしながら、銅鏡の鋳造などの燃料材としてこれらの木材が使われ、照葉樹林の一部は破壊され、その跡地にニョウマツ類やコナラ亜属が二次林として侵入した。

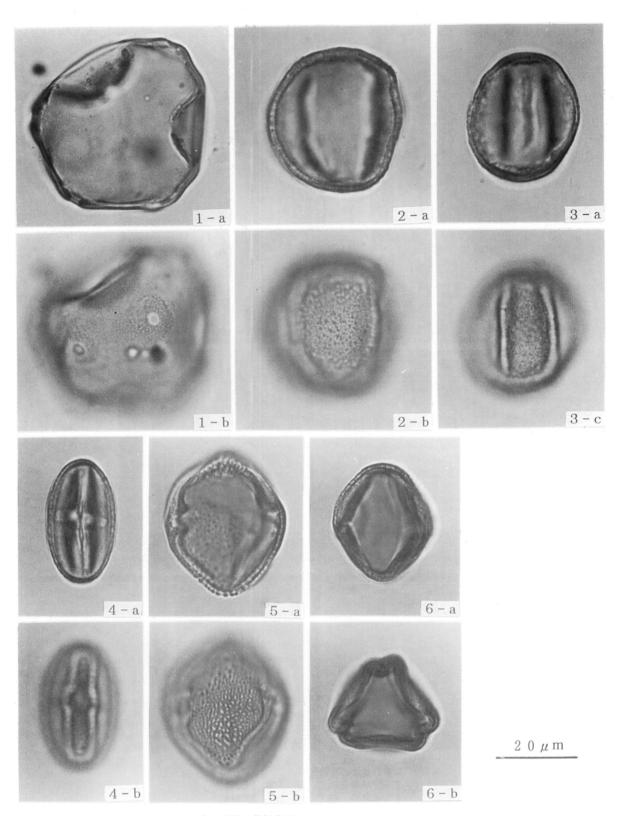


図69

飯倉D遺跡の花粉化石 1:クルミ属 PLC. SS 1509 SC246 2:コナラ属コナラ亜属 PLC. SS 1505 SC782 3:コナラ属アカガシ属 PLC. SS 1507 SC782

4:シイノキ属ーマテバシイ属 PLC. SS 1506 SC782 5:ウルシ属 PLC. SS 1512 SC136 6:ウコギ科 PLC. SS 1513 SC782

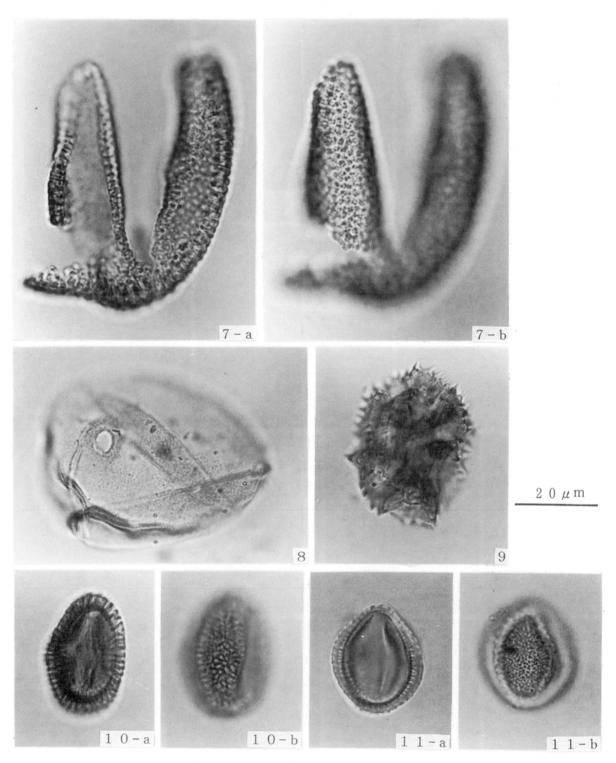


図70 飯倉 D遺跡の花粉化石 7:ソバ属 PLC. SS 1508 SC246 8:イネ科 PLC. SS 1511 SC144 9:タンポポ亜科 PLC. SS 1510 SC144 10:アブラナ科 PLC. SS 1514 SC074 11:ヨモギ属 PLC. SS 1515 SC074

付論 4 飯倉 D遺跡のプラント・オパール

福岡市城南区七隅3丁目に所在する飯倉D遺跡において、弥生時代後期の溝や住居跡などが検出されている。また、この住居跡からは鏡の鋳型や焼土も検出されており、銅鏡の鋳造を行っていた工房跡であることが推定されている。

以下に示すプラント・オパールは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの(機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など)が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原(1978など)によってイネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進んでいる。こうしたことから、飯倉D遺跡における鋳造の際の燃料材、住居の屋根葺材、あるいはイネなどの食料源について検討をする目的でプラント・オパール分析を試みた。なお、ムギ類などは機動細胞珪酸体が形成されないことが知られており、単細胞珪酸体など機動細胞珪酸体以外についても観察した。また、併せて花粉分析や炭化材樹種同定、炭化種実同定が実施されており、弥生時代後期頃の遺跡周辺の古植生や燃料材の検討などが行われている。

1. 試料と分析方法

プラント・オパール分析に供した試料は、SC144、SC246、SC708、SC935、SX121、ST270、SX427の7試料である(図71)。試料の簡単な記載を記すと、SC144は床面直上より採取された暗黄褐色のローム質土で、炭片がみられ、レキが多量に認められる。SC246も床面直上より採取された明黄褐色のローム質土で、炭片がみられ、レキが多量に認められる。SC708は赤褐色のローム質土で、細い根がはいり、レキも含まれる。SC935(第2層)は黒黄色のローム質土で、砂レキが多量に認められる。SX121はベルト第8層より採取された暗黄褐色のローム質土で、砂レキが多く、細い根も認められる。ST270は甕棺外の地山より採取された明黄褐色のローム質の砂レキである。SX427はベルト第5層より採取された明黄褐色のローム質土である。これら7試料について以下のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。なお、SC144、SC246、SC935の3試料については併せて花粉分析も行われている。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約18 (秤量)をトールビーカーにとり、約0.028のガラスビーズ(直径約40 μ m)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により1 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

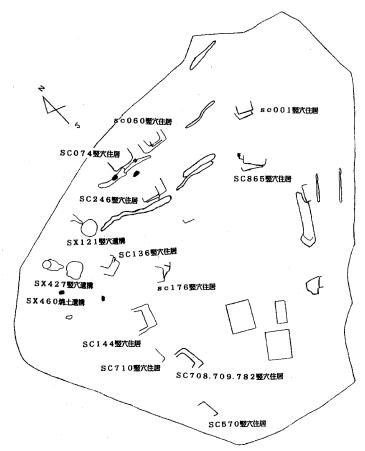


図71 飯倉 D遺跡全体図 (飯倉 D遺跡資料より)

2. 分析結果

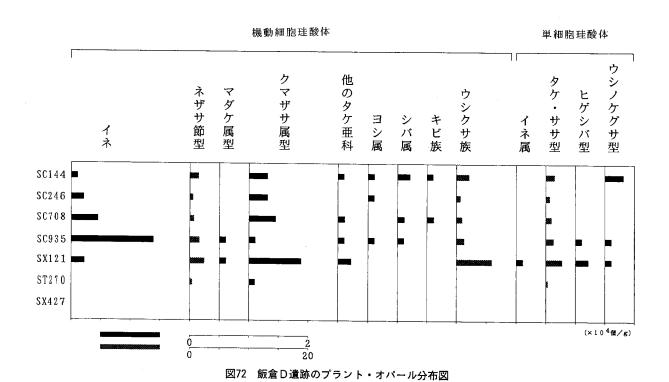
同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(表6)、またそれらの分布を図72に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

分析の結果、機動細胞珪酸体ではST270(甕棺外地山)およびSX427(ベルト第5層)の2試料を除く5試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数としては1,000~4,500であるが、SC935(第2層)では約14,000と突出して検出されている。また、単細胞珪酸体ではSX121(ベルト第8層)よりイネ属が少し認められているだけである。イネが検出されなかったSX427(ベルト第5層)はテフラ層(二次堆積?)ともみられるような土相で、プラント・オパールはほとんど検出されていない。また、ST270(甕棺外地山)も砂レキで、ネザサ節型やクマザサ属型などがわずかにみられるだけである。これら2試料を除く5試料において最も多く検出されたのはウシクサ族で、約6,000~60,000個である。ネザサ節型も10,000個前後得られており、クマザサ属型は3,000個前後で、その他ョシ属やキビ族などが産出している。単細胞珪酸体ではタケ・ササ型が最も多く、ネザサ節型と同様の出現傾向が認められる。次いでキビ型が多く得られている。

表6 試料1g当りのプラント・オパール個数

				機	動細胞珪	酸体				
試料番号	イネ	ネザサ節型	マダケ属型	クマザサ属型	他のタケ亜科	ヨシ属	シバ属	キビ族	ウシクサ族	不明
	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)
S C 1 4 4	1,000	14,600	0	3,100	1,000	1,000	2,100	1,000	20,900	13,600
S C 2 4 6	2,100	5,200	0	3,100	0	1,000	0	0	6,300	9,400
S C 7 0 8	4,500	6,800	0	4,500	1,100	0	1,100	1,100	9,000	10,200
S C 9 3 5	13,900	16,100	1100	1,100	1,100	1,100	1,100	0	12,900	18,200
S X 1 2 1	2,200	24,100	1100	8,800	2,200	0	0	0	59,200	9,900
ST270	0	3,900	0	1,000	0	0	0	0	0	1,000
S X 4 2 7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,200

	単細 胞 珪 酸 体					
試料番号	イネ属	タケ・ササ型	キビ型	ヒゲシバ型	ウシノケグサ型	不明
`	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)
S C 1 4 4	0	14,600	7,300	0	3,100	2,100
S C 2 4 6	0	6,300	2,100	0	0	0
S C 7 0 8	0	9,000	3,400	0	0	0
S C 9 3 5	0	12,900	0	1,100	1,100	0
S X 1 2 1	1,100	27,400	12,100	2,200	1,100	0
ST270	. 0	2,900	0	0	0	0
S X 4 2 7	0	0	0	0	0	0



3. 住居跡とプラント・オパール

以上のような結果から、飯倉D遺跡における住居跡とイネ科植物の係わりについて若干の考察を試みた。

最も多く検出されたウシクサ族にはススキやチガヤといった分類群が含まれ、 これらは現在は少なくなったが萱葺屋根の屋根葺材として使われている。これら にイネやヨシなどを含めたものが竪穴住居の屋根葺材として使われ、そうしたこ とで床面や周辺土層よりそれらのプラント・オパールが検出されたことが考えら れよう。

また、遺跡資料によると、SC246-3 住居跡では銅鏡の鋳型が検出され、床面上に炭灰や焼土の散布が認められている。このように本遺跡は鏡の鋳造をしていた可能性があり、イネやタケ・ササ類、ウシクサ族(ススキやチガヤなど)などがその燃料材として使われていたことが推測される。床面や周辺土層よりそれらのプラント・オパールが検出されたことは、焼かれた後の灰が散らばったことによることが考えられよう。なお、SC246では炭化材の樹種同定が行われており、シキミと同定されている。SC246-3 住居跡では炭灰が検出されており、この灰試料についてプラント・オパール分析を行うことにより、イネ科植物に限られるが、草本性の燃料材についても直接的な資料が得られることが期待される。

4. 遺跡周辺のイネ科植物

ST270(甕棺外地山)およびSX427(ベルト第 5 層)の 2 試料を除く他の 5 試料よりイネのプラント・オパールが検出されている。このことから、弥生時代後期頃の飯倉 D 遺跡ではイネが存在しており、遺跡周辺において稲作が行われていたことが推測される。

また、先にも記したがウシクサ族が最も多く、ネザサ節型も多く検出されている。これらネザサ節やウシクサ族は開けた陽地的なところに生育する分類群であり、遺跡周辺では稲作地と共に、ネザサ類やススキなどが生育する開けた陽地的な草地が広がっていたことが考えられる。そして屋根葺材やあるいは燃料材として上記イネ科植物をこの草地より調達したのであろう。

引用文献

藤原宏志(1978)プラント・オパール分析法の基礎的研究(2)ーイネ(Oryza) 属植物における機動細胞珪酸体の形状ー. 考古学と自然科学, 11, P.9-20.

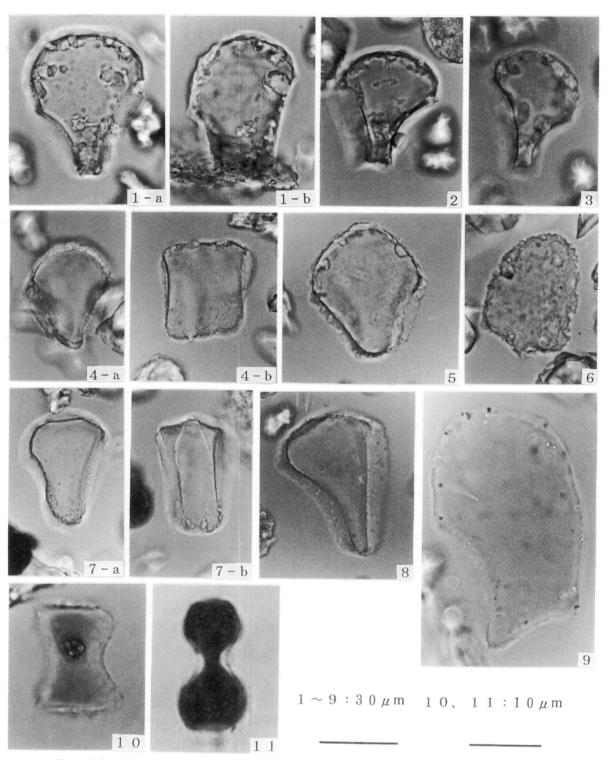


図73 飯倉D遺跡のプラント・オパール

1~9:機動細胞珪酸体

10、11: 単細胞

1~3:イネ(1-a、2、3:断面、1-b:側面)1:S X 1 2 1、2:S C 2 4 6、3:S C 9 3 5

4:ネザサ節型 (4-a:断面、4-b:側面) ST270 5:マダケ属型(断面) SC935

6: クマザサ属型 (断面) SC144

7、8:ウシクサ族(7 - a、8:断面、 7 - b:側面) 7: S X 1 2 1、 8: S C 9 3 5

9:ヨシ属(断面) SC246

10: タケ・ササ型 SC144 11: キビ型 SC144

付論 5 飯倉D遺跡出土炭化材の樹種同定

1. 方法と記載

試料は、実体顕微鏡下で横断面について観察し、同定できる試料と同定できない試料とに分類する。これら同定できない試料と同定される典型試料は、片刃カミソリなどを用いて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(柾目と同義)の3断面について作成し、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡(日本電子㈱製 JSM T-100型)で観察する。表7にその結果を示す。以下に、標本の記載と同定の根拠を示す。

	遺構名	_	樹種
16	SX71		シイノキ属、エノキ属、散孔材
17	SC74	1 棟最下層	クスノキ
18	SX232		シキミ
19	SC246	床下	"
20	SX336		シイノキ属
21	SX339		ユズリハ属
22	SC865	1棟	シイノキ属
23	SC873		クスノキ科
24	SC931		シイノキ属
25	SC935		<i>"</i>

表7 出土炭化材の樹種

シイノキ属 Castanopsis ブナ科、図74 la~lc.

年輪のはじめにやや大型の管孔が2~4個程度集合し、そこから薄壁で角張った 小型の管孔が放射方向に火炎状に配列する環孔材である(横断面)。放射組織は、 柔細胞で単列同性で、2~16細胞高で、集合組織も見られる(接線断面)。道管の せん孔は単一である(放射断面)。

以上の形質から、ブナ科シイノキ属の材と同定される。シイノキ属の樹種には、ツブラジイ(C. cuspidata)と変種のスダジイ(C. cuspidata var. sieboldii)とがある。樹木は、スダジイは本州(福島・新潟県以南)・四国・九州などの沿岸地の丘陵あるいは山野、ツブラジイは本州(関東地方以南)・四国・九州などの内陸部に、いずれも暖帯に分布する樹高25m、幹径70cmに達する常緑広葉樹である。

エノキ属 Celtis ニレ科 図74 2a~2c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部では多数集合して斜め方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は

単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~11細胞幅、3~38細胞高で、鞘細胞をもつ(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のエノキ属の材と同定される。エノキ属には、本州以南の暖帯から亜熱帯に分布するエノキ(\underline{C} . $\underline{sinensis}$)や、温帯に分布するエゾエノキ(\underline{C} . $\underline{jessoensis}$)などがある。エノキは樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

シキミ Illicium anisatum L. シキミ科 図74 3a~3c.

小型の管孔が単独あるいは2~3個程度接線方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、82本の横棒からなる階段状せん孔である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、2~14細胞高で、端部および端列部は方形細胞である(接線断面)。

以上の形質から、シキミ科のシキミの材と同定される。シキミは、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高3m程度の常緑広葉樹で、葉や樹皮は香として用い、枝は仏前や墓前に供える。また、アニサチンを含み有毒で、特に果実は猛毒である。

クスノキ Cinnamomum camphora Presl クスノキ科 図75 4a~4c.

中型の管孔が単独ないしは2~4個放射方向に複合して散在する散孔材で、木部 柔細胞は周囲状である(横断面)。道管のせん孔は、単一せん孔である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、1~21細胞高で、油細胞が見られる(接線断面)。

以上の形質から、クスノキ科ニッケイ属のクスノキの材と同定される。クスノキは、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25m、幹径80cmに達する常緑広葉樹である。

クスノキ科 Lauraceae 図75 5a~5c.

中型の管孔が単独ないしは2~4個放射方向に複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は周囲状である(横断面)。道管のせん孔は、複数本の横棒からなる階段状あるいは単一せん孔である(放射断面)。放射組織は、異性で1~2細胞幅、1~19細胞高で、油細胞が見られる(接線断面)。

以上の形質から、クスノキ科の材と同定される。クスノキ科は、前述のニッケイ属のクスノキをはじめ、タブノキ属、クロモジ属あるいはシロダモ属などがある。

ユズリハ属 Daphniphyllum ユズリハ科 図75 6a~6c.

丸い小型の管孔がほぼ均一、かつ密に分布する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性で1~3 細胞幅、6~53細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ユズリハ科のユズリハ属の材と同定される。ユズリハ属の樹

木には、ユズリハ(<u>D. macropodum</u>)とヒメユズリハ(<u>D. teijsmannii</u>)の 2 種があり、いずれも本州中部以南の暖帯に分布する常緑広葉樹である。

散孔材 図76 7a~7c.

中型の菅孔が単独あるいは2個複合する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は多数の横棒からなる階段状で、横に並ぶ(放射断面)。放射組織は、異性1~5細胞幅、3~50細胞高からなる。

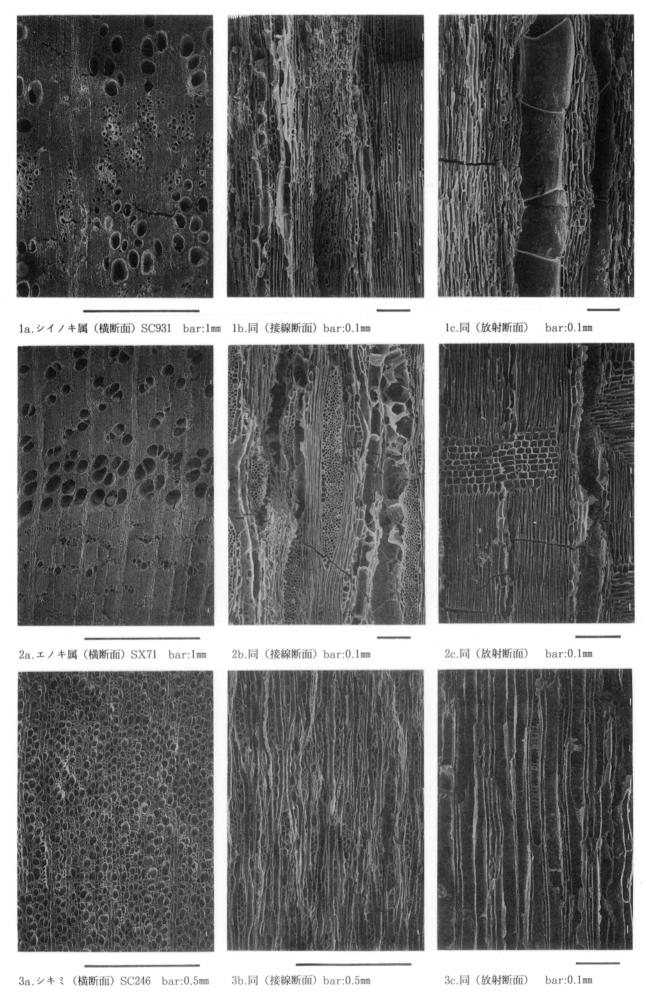
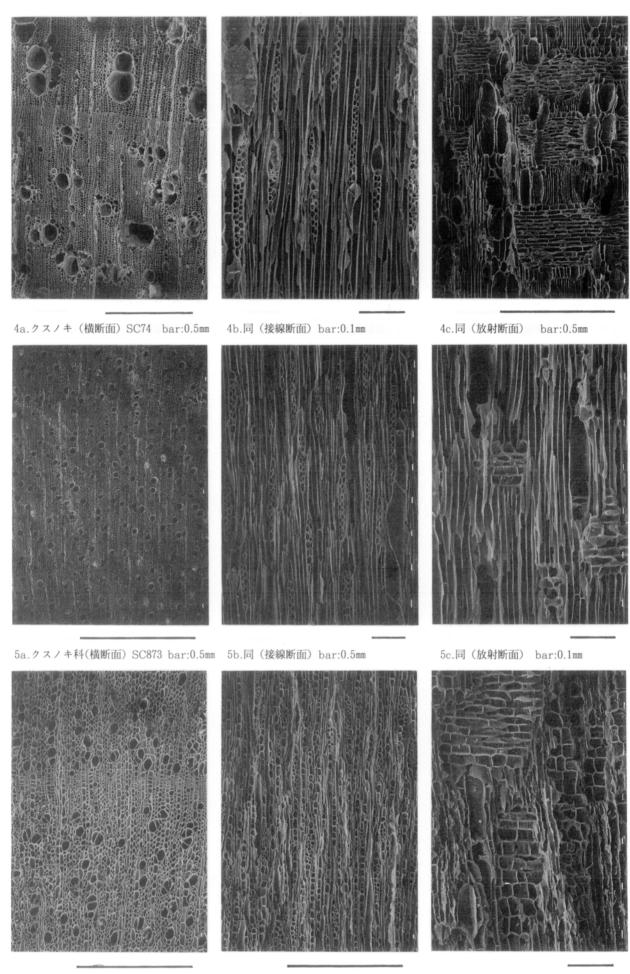


図74 飯倉 D 遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡写真



6a.ユズリハ属 (横断面) SX339 bar:1mm 6b.同 (接線断面) bar:0.1mm

6c.同(放射断面) bar:0.1mm

図75 飯倉D遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡写真







7a.散孔材(横断面)SX71 bar:0.5mm

7b.同 (接線断面) bar:0.5mm

7c.同(放射断面) bar:0.5mm

図76 飯倉D遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡写真

付論 6 飯倉D遺跡の炭化種実

飯倉D遺跡から出土した4試料の種実の検討を行った。以下に同定結果と種実の特徴記載を示す。なお、試料はいずれも炭化した状態であった。

	、料	分類群	部 位		
S C 7 4	1棟址 P-11(1)層	コナラ属 (Quercus)	子葉	破片	7
S C 2 4 6	床下	不明			1
S C 7 4	貼床内	コナラ属近似種	子葉	破片	5
		(cf.Quercus)			
S C 2 4 6 - 3	南西角 焼土内	コナラ属(Quercus)	子葉	破片	2

結果は、SC74 & SC246-302 試料がコナラ属、SC74 試料がコナラ属近似種、SC246 は不明である。SC74 & SC246-3 試料は、楕円球の子葉がまん中で2つに割れる構造をもち、最上部に主根痕の穴が認められることからコナラ属に同定される。一方、SC74 (貼床内)の種実は、割れた構造が明瞭でないこと、主根が確認できないためコナラ属と同定できない。したがって、コナラ属近似種としたが、他の可能性としてはエゴノキ属(Styrax)などがある。



図77 飯倉 D遺跡より出土した炭化種実 1・2 コナラ属 (Quercus)、SC74 1 棟址P-11 (1) 層 (スケールは1mm)

付論7 飯倉D遺跡の土壌の蛍光 X 線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

1) はじめに

遺跡の土壌を分析した例はあまり報告されていない。遺跡内の各地点で採取した土壌を分析することによって、化学特性を示す各因子が遺跡内でどの程度にばらつくものなのかがわかる。さらに、もし、遺跡内に金属を治金した工房が残っておれば、どの金属を取り扱っていた工房跡なのかの確認ができる。その場合に、工房跡焼土と比較対照にされるのが遺跡の土壌である。このような考え方にもとづいて、飯倉D遺跡の土壌と遺跡内に残る工房跡の焼土の蛍光X線分析が行われた。本項ではその結果について報告する。

2) 実験法

遺跡で採取された土壌は湿っているので、電気乾燥器で150 $^{\circ}$ で数時間乾燥した。乾燥土壌試料と焼土試料はタングステンカーバイド製乳鉢の中で100 $^{\circ}$ $^{\circ}$ 以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして13 $^{\circ}$ $^$

蛍光 X線分析には波長分散型の蛍光 X線分析装置(理学電機製3270型機)を使用した。この装置に同時に48個の試料が装填できる自動試料交換機が連結されている。通常、このなかの1点は必ず、岩石標準試料 JG-1である。JG-1は定量分析のための標準試料であるとともに、自動分析が定常状態で進行したことをチェックするモニターとしての役割も併せもつ。そのため、分析値は JG-1の各元素の蛍光 X線強度を使って標準化した値で表示された。

3)分析結果

土壌と工房内焼土の分析値は表8にまとめられている。 これらの生データを分布図にプロットして、分析結果を説明する。

図78にはRb-Sr分布図を示す。この分布図は各地の須恵器の地域差を有効に表示する分布図として知られる。図78には一例として遺跡の3、5、9、11区画から採取した土壌をプロットしてあるが、よくまとまって分布していることがわかる。他の区画の土壌試料もほとんどがここに描いた土壌領域に分布した。その結果、飯倉D遺跡の土壌はほとんどがこの土壌領域に分布することがわかった。Rb、Sr因子は飯倉D遺跡の広さの中ではこの程度によくまとまることを示して

いる。したがって、この領域が飯倉D遺跡のRb、Sr特性といえよう。

図79にはK-Ca分布図を示す。この分布図でも、飯倉D遺跡の土壌試料はよくまとまって分布し、明確な化学特性を示した。Ca量が極めて少ないという特異性を持つことが判明した。

図80にはFe、Naの分析結果を示してある。FeはFe値が2付近を中心にして、かなり広くばらついていることがわかる。土器や粘土試料でも一般に、Fe因子は明確に地域差を示さない場合が多い。他の地域の土壌や粘土、土器を分析しても、図80の飯倉D遺跡の土壌が分布した領域に分布する場合が多い。これはFeは雲母、角閃石、輝石、かんらん石などの複数の有色鉱物中に共通して含有されるためである。例えば、雲母類が少なくて角閃石が多い場合でも、逆に、雲母類が多くて角閃石が少なくても、全鉄含有量には大差がないのである。しかし、同じ地域内で焼成した中世陶器(甕、壷)と山茶碗で、また、同一窯内で焼成した須恵器甕と須恵器杯でFe量が異なる例があり、Fe因子は同一地域内での小さな地域差を表示する可能性もあり、注意を要する。

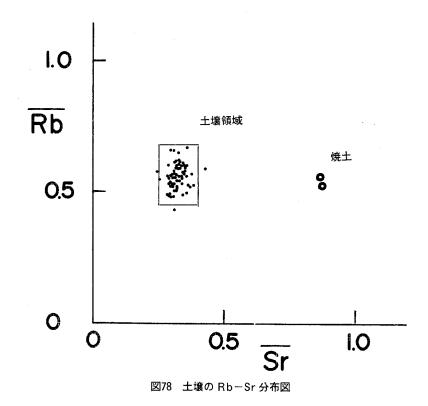
Na因子では土壌試料が狭い領域に密集して分布し、図が描けなかったので、 短い棒線で分布領域を示しておいた。飯倉D遺跡の土壌はNa量が極めて少ない という特異性をもつことがわかる。

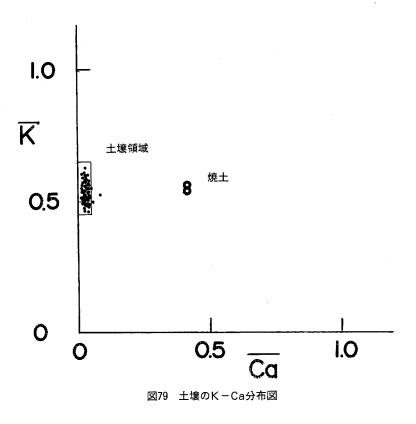
他方、工房内焼土の化学特性をみてみよう。 K、Rb量は土壌と同程度であるが、Ca、Sr、Na量は全く異なっており、さらに、Fe因子でも異なることがわかる。しかも、2点の焼土A、Bは全く同じ化学特性をもつ。この結果は工房で高温で焼成されたため化学特性が変質したのではなく、工房内の焼土が遺跡内の土壌とは異なる土であると考えた方が自然であろう。つまり、この焼土(工具か?)は他の場所から飯倉D遺跡の工房へ持ち込まれて使用されたものと考えられる。

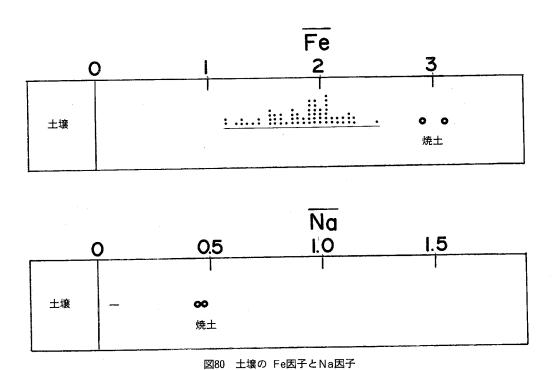
次に、焼土に残存する金属種が何であるかを調べてみた。筆者のところには現在、エネルギー分散型の蛍光 X線分析装置がないので、全スペクトルを示すことはできないが、Cuのスペクトルを図81に比較してある。図81-aは焼土のCuスペクトルであり、図81-bは比較対照としての土壌のCuスペクトルである。明らかに、焼土のCuのピークは土壌に比べて高い。ピーク面積をきちんと計算した結果、焼土のCuの蛍光 X線強度は土壌に比べて、2.5倍も強いことがわかった。したがって、この焼土には銅(Cu)が残存しているといえる。つまり、この工房では銅を取り扱っていたと推定される。

表 8 土壌の分析値

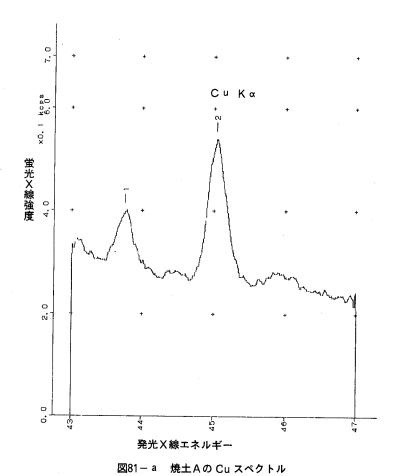
		K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	I		K	Са	Fe	Rb	Sr	Na
焼 土	Α	0.556	0.414	3.09	0.559	0.857	0.444	5区画	ЕШ	0.508	0.027	2.16	0.656	0.302	0.057
"	В	0.551	0.410	2.90	0.526	0.866	0.469		ΕIV	0.489	0.046	2.26	0.587	0.316	0.073
3区画	ВІ	0.546	0.032	1.40	0.511	0.316	0.053		ΕV	0.532	0.034	1.90	0.592	0.320	0.058
	ВП	0.584	0.022	1.25	0.519	0.367	0.053	9 区画	AI	0.538	0.030	2.02	0.591	0.331	0.058
	В Ш	0.576	0.026	1.56	0.534	0.344	0.060		ΑП	0.469	0.027	2.31	0.545	0.251	0.046
	BIV	0.627	0.026	1.18	0.531	0.385	0.060		АШ	0.478	0.030	1.88	0.489	0.281	0.051
	CI	0.515	0.029	1.93	0.569	0.312	0.055		A IV	0.458	0.025	2.49	0.577	0.246	0.040
	СП	0.520	0.030	2.06	0.581	0.313	0.045		ΑV	0.520	0.035	1.75	0.544	0.322	0.054
	СШ	0.560	0.033	2.08	0.601	0.339	0.057		ВІ	0.525	0.027	1.80	0.529	0.296	0.058
	CIV	0.518	0.033	2.08	0.600	0.321	0.057		ВП	0.499	0.028	2.04	0.555	0.291	0.051
	CV	0.507	0.042	2.07	0.533	0.301	0.061		ВШ	0.514	0.026	2.25	0.559	0.291	0.048
	DΙ	0.543	0.030	2.10	0.609	0.338	0.056		BIV	0.492	0.030	1.90	0.534	0.290	0.056
	DΠ	0.520	0.029	2.13	0.615	0.310	0.054		ВV	0.513	0.027	1.94	0.570	0.306	0.055
	DЩ	0.512	0.036	2.20	0.556	0.314	0.058		CI	0.564	0.031	1.57	0.555	0.359	0.069
	DIV	0.549	0.039	1.88	0.597	0.356	0.061		СП	0.735	0.023	1.30	0.591	0.427	0.072
	DV	0.595	0.037	1.95	0.605	0.326	0.076		СШ	0.544	0.030	1.44	0.494	0.344	0.066
	ΕI	0.499	0.030	2.26	0.604	0.287	0.052		CIV	0.526	0.093	2.06	0.525	0.364	0.086
	EΠ	0.496	0.032	2.07	0.566	0.287	0.054		CV	0.611	0.019	1.16	0.495	0.356	0.056
	ЕЩ	0.556	0.031	2.00	0.556	0.329	0.056		DI	0.507	0.026	1.56	0.481	0.297	0.058
	ΕW	0.461	0.034	1.80	0.519	0.295	0.058		DΠ	0.568	0.044	1.64	0.570	0.378	0.095
	ΕV	0.507	0.033	1.60	0.524	0.322	0.067		DШ	0.541	0.027	1.38	0.480	0.298	0.063
5区画	CI	0.612	0.021	1.94	0.580	0.347	0.054		DIV	0.483	0.031	1.53	0.493	0.293	0.058
	СП	0.553	0.017	2.01	0.571	0.313	0.047		DV	0.588	0.017	1.28	0.434	0.311	0.053
	СШ	0.567	0.022	2.03	0.606	0.334	0.048		ΕI	0.551	0.037	1.73	0.570	0.347	0.065
	CIV	0.567	0.026	2.09	0.618	0.326	0.053		ЕΠ	0.525	0.017	1.60	0.494	0.287	0.048
	CV	0.563	0.034	1.96	0.667	0.358	0.070		ЕШ	0.539	0.026	1.43	0.509	0.320	0.062
	DI	0.591	0.026	1.79	0.589	0.350	0.060		$\mathrm{E}\mathbf{IV}$	0.528	0.032	1.70	0.508	0.319	0.059
	DΠ	0.563	0.033	1.96	0.603	0.354	0.063		$\mathbf{E}\mathbf{V}$	0.545	0.028	1.67	0.547	0.330	0.061
	DЩ	0.517	0.032	2.32	0.661	0.305	0.058	11区画	ΑI	0.560	0.032	1.83	0.554	0.331	0.063
	DIV	0.601	0.026	1.92	0.650	0.328	0.062		ΑП	0.583	0.032	1.60	0.558	0.332	0.062
	DV	0.539	0.039	1.90	0.573	0.308	0.073		АШ	0.560	0.030	1.77	0.619	0.327	0.061
	ΕI	0.544	0.031	1.75	0.535	0.295	0.061		AIV	0.494	0.052	2.19	0.575	0.338	0.076
	Е П	0.521	0.034	1.91	0.529	0.312	0.068		ΑV	0.482	0.042	1.63	0.563	0.322	0.076







-



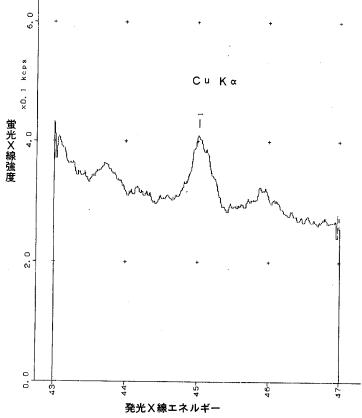


図81-b 土壌の Cu のスペクトル

付論8 飯倉D遺跡に堆積する粘土の化学特性

奈良教育大学 三 辻 利 一

1) はじめに

粘土はどこにでもあるものである。遺跡内から粘土が出土することも多い。土壌から土器は作れないが、粘土からは土器を作ることができる。したがって、遺跡に出土する粘土の化学特性を土器の化学特性と比較することによって、この粘土を素材として遺跡内で製作した土器であるかどうかがわかる。さらに、この粘土と土壌の化学特性を比較することによって、この粘土と土壌が同じ母岩から由来したものかどうかについての手掛かりを得ることができる。このような考え方で、飯倉D遺跡から出土した粘土の蛍光 X 線分析を行った結果について報告する。

2) 実験法

試料処理法、分析法、データ表示法は土壌の場合と同じである。

3)分析結果

分析値は表 9 にまとめている。全分析値は岩石標準試料 J G-1 による標準化値で表示してある。

図82にはRb-Sr分布図を示す。比較のために土壌領域も示してある。粘土は土壌に比べてばらつきが大きいことがわかる。とくに、土壌領域に対して、Rb量もSr量も少なくなる方向へずれている粘土試料が多いことが注目される。土壌に比べて粘土はさらに風化が進行した材質と考えられるので、Rb量もSr量も減少する方向へ変動したと考えられる。

図83にはK-Caの分布図を示す。粘土試料もCa量が極めて少ないという特徴をもっていることがわかる。さらに、土壌領域に対してK量が減少する方向に分布する試料が多い。このことも粘土は土壌よりもさらに風化が進行した材質であることを示していると考えられる。

図84にはFe因子とNa因子について、粘土と土壌を比較してある。Fe因子は土壌の場合と同様に、かなり広がって分布する。しかも、土壌との違いは余りない。これはFe因子を含む黒雲母や角閃石が比較的風化し難い鉱物であることに原因があるものと考えられる。

これに対して、Na量は土壌に比べて、粘土ではさらに減少していることがわかる。

このように、Ca、Na量が少ないという土壌の化学特性が粘土にも共通して表

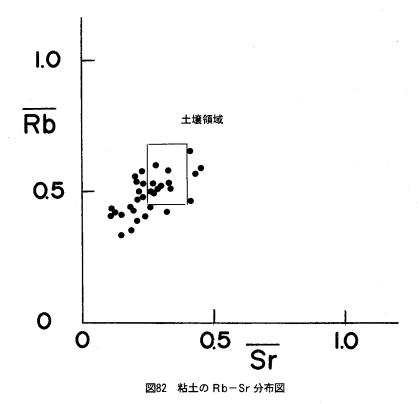
れるという点は注目される。そして、風化の遅いFe因子では土壌と粘土では同じであるという点が第2の注目される点である。これらのことは土壌と粘土の母岩は共通の岩石であるということを示唆している。

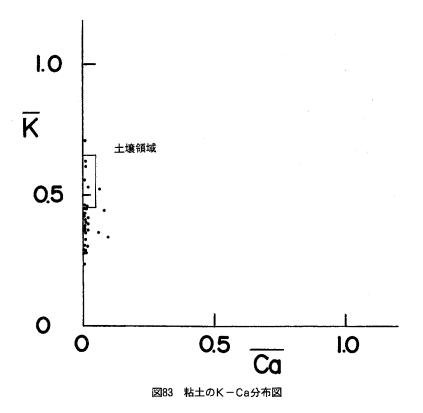
土壌は飯倉D遺跡一帯の土台となる岩石が風化して生成したものであろう。そうすると粘土がこの土壌と共通した化学特性をもつということは、粘土もこの岩石から由来したものと考えるのが常識であろう。つまり、この粘土は遠くから流されて飯倉D遺跡付近に堆積した漂積粘土(二次粘土)ではなく、飯倉D遺跡一帯の土台を作る岩石がそのまま風化して生成した残留粘土(一次粘土)であると推定される。弥生土器の化学特性が、この粘土の化学特性と同じであれば、弥生土器は遺跡内で製作された土器であり、同じでなければ、遺跡外で製作され飯倉D遺跡へ持ち込まれた弥生土器であると推定することができる。

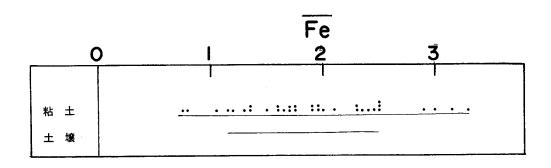
また、土壌と同様、粘土中にもCuが汚染していないことが確認された。

表 9 粘土の分析値

	k	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
プレハブ前	0.431	0.010	1.97	0.519	0.304	0.016
"	0.368	0.003	1.60	0.495	0.215	0.013
"	0.296	0.005	2.35	0.350	0.194	0.013
"	0.301	0.011	1.15	0.418	0.225	0.027
南プレハブ寄り	0.380	0.006	1.915	0.441	0.262	0.015
南側	0.275	0.009	1.611	0.410	0.148	0.015
南側斜面	0.518	0.063	1.664	0.655	0.411	0.126
//	0.360	0.006	2.901	0.441	0.179	0.013
"	0.537	0.078	1.374	0.591	0.454	0.156
南側斜面	0.367	0.021	3.137	0.392	0.208	0.015
"	0.445	0.008	1.297	0.532	0.269	0.019
西側斜面	0,234	0.005	1.488	0.331	0.146	0.015
"	0.610	0.009	1,731	0.460	0.412	0.032
北東斜面	0.280	0.006	2.486	0.421	0.122	0.011
"	0.355	0.06	2.506	0.434	0.192	0.018
SC001カクラン内	0.290	0.004	2.436	0.432	0.113	0.012
"	0.283	0.003	2.287	0.411	0.105	0.011
SX898	0.528	0.018	2.008	0.596	0.281	0.038
SX397内	0.708	0.005	1,705	0.581	0.331	0.033
SC136	0.448	0.006	3.023	0.499	0.264	0.019
"	0.426	0.005	1.067	0.502	0.262	0.022
SC144トレンチ内	0.399	0.006	1.702	0.579	0.230	0.017
"	0.372	0.008	1.751	0.561	0.201	0.017
SC708	0.413	0.019	2.298	0.530	0.233	0.035
	0.394	0.010	2.485	0.538	0.204	0.026
SC865-4	0.632	0.007	0.790	0.572	0.427	0.039
南東部土坑内	0.330	0.010	1.961	0.404	0.237	0.010
"	0.451	0.005	3.279	0.478	0.227	0.020
SC931壁溝内	0.393	0.012	2.419	0.469	0.212	0.015
クレーター横	0.462	0.015	2.074	0.510	0.286	0.026
"	0.556	0.004	1.247	0.528	0.334	0.030
SC176	0.328	0.097	1.928	0.508	0.336	0.129
SC710	0.489	0.125	1.379	0.559	0.723	0.204
"	0.602	0.005	0.771	0.546	0.390	0.038







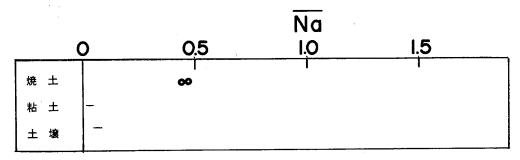


図84 粘土の Fe 因子と Na 因子

付論 9 飯倉 D 遺跡出土弥生土器、土師器、 須恵器の蛍光 X 線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

1) はじめに

土器の胎土分析の最大の目的は産地問題の解明にあるが、胎土分析の結果はその他の点でも、考古学に有意な情報を提供することができる。

産地問題の研究ではまず、生産地側の製品の化学特性の整理が必要である。そのために、全国各地の窯跡出土須恵器が分析された。その結果、K、Ca、Rb、Srの4因子がとくに有効に地域差を表示することが判明した。この地域差は人為的なものに原因があるのではなく、粘土の母岩となった岩石を構成する鉱物に関連があるので、地質的なものに原因がある訳である。したがって、これらの因子は窯跡が残っていない土師器や弥生土器が同じ素材粘土から作られたものかどうかを見きわめる上に役立つはずである。

土器の産地問題の研究では生産地側の土器の分析から作業がはじめられたが、素材粘土が同じかどうかを見分ける上には、住居址などの遺跡側の土器から分析をはじめても構わない。とくに、複合遺跡では同一遺跡から弥生土器、土師器、須恵器などが出土する。これらの土器胎土が同質であるかどうかをK、Ca、Rb、Srの4因子を使って見分けることができる。さらに、遺跡内で出土する粘土を分析し、この粘土を素材として製作した土器、つまり、遺跡内製作土器か、それとも、遺跡外で作られ、持ち込まれた土器かを探ることもできる。

本報告では、飯倉D遺跡から出土した弥生土器、土師器、須恵器の蛍光X線分析した結果を遺跡内出土粘土の化学特性と対比した結果について報告する。

2) 実験法

土器試料の処理法は従来どおりであり、分析法も土壌、粘土の場合と同様である。

3) 分析結果

土器の分析値は表10にまとめられている。これらの分析値を使って分布図を作成し、土器胎土の化学特性を比較した。

図85には須恵器のRb-Sr分布図を示す。大部分の須恵器を包含するようにして須恵器領域を描き、土壌領域と比較した。明らかに、須恵器胎土は土壌とは異なる化学特性をもつことがわかる。

図86にはK-Ca分布図を示す。この図でも大部分の須恵器を包含するようにして須恵器領域を描いてある。No.4の須恵器はRb-Sr分布図でも、K-Ca分布図でも他の須恵器から離れて分布し、胎土が異なる可能性を示唆している。また、K-Ca分布図でも須恵器胎土は土壌と異なる化学特性をもつことがわかる。さて、この大部分の須恵器の産地であるが、Rb-Sr分布図での分布位置よりみて、春日市周辺の須恵器胎土と類似する。したがって、遺跡内に出土する粘土の化学特性とも類似しないので、飯倉D遺跡内で作られたものではないが、遺跡からそんなに遠くない福岡市南部から春日市にかけての地域で製作されたものと推定される。なお、No.4はCa、Sr、Na因子で他の須恵器胎土と異なっており、Rb-Sr分布図での分布位置より、牛頸群内で作られた製品である可能性をもつ。

図87、88には、それぞれ土師器のRb-Sr分布図、K-Ca分布図を示す。これらの図でも比較のため、須恵器領域と土壌領域を示してある。両図の比較から、何種類かの胎土があることがわかる。No.15、17、19、20、21、22は1群を形成するが、No.13、14、16、18は散在して分布し、胎土が異なることを示す。1群を形成する土師器はRb-Sr分布図でも、K-Ca分布図でも須恵器領域に分布し、須恵器と同じ胎土である可能性を示唆している。No.13、14、16、18もRb-Sr分布図での分布位置からみて、春日市を中心とした地域で作られた可能性がある。

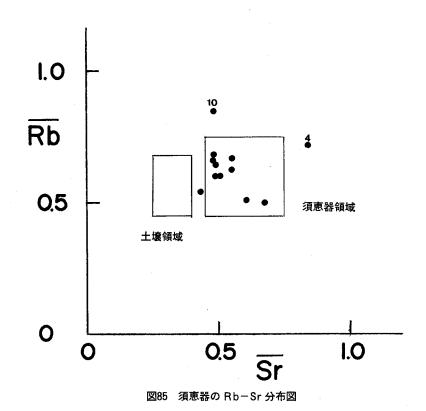
図89、90には弥生土器のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示す。大部分の弥生 土器も須恵器領域に分布し、類似した胎土をもつことがわかる。

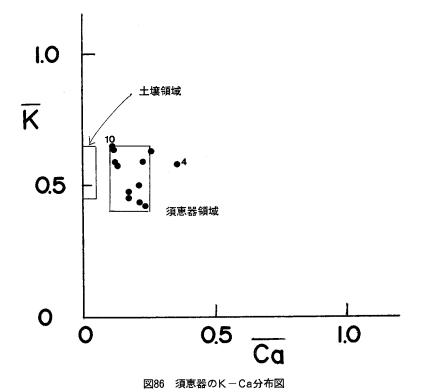
このように、K、Ca、Rb、Sr特性で須恵器、土師器、弥生土器は類似していることがわかったので、最後に、図91にFe因子とNa因子についても対比してみた。まず、Fe因子では須恵器、土師器、弥生土器は全く区別ができない位、類似していることがわかる。次に、Na因子でも、須恵器、土師器、弥生土器の間にはほとんど差異がないことがわかる。

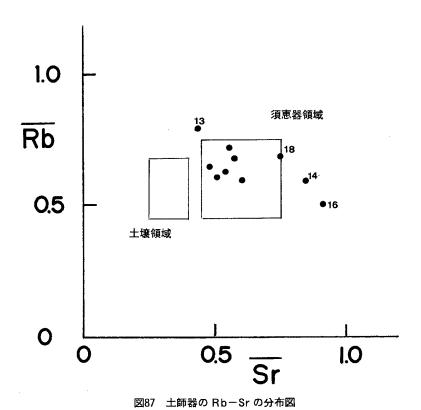
以上の結果、全因子で大部分の須恵器、土師器、弥生土器の胎土は類似していることが示された訳である。しかも、何れの土器胎土も遺跡内の粘土には対応しない。このことから、これらの土器は遺跡から余り遠くないところで作られ、飯倉D遺跡へ持ち込まれたものとみられる。

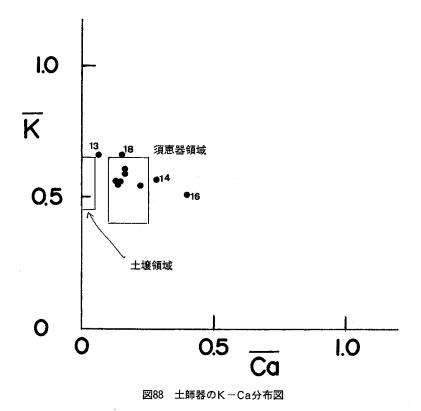
表10 飯倉 D遺跡出土土器の分析値

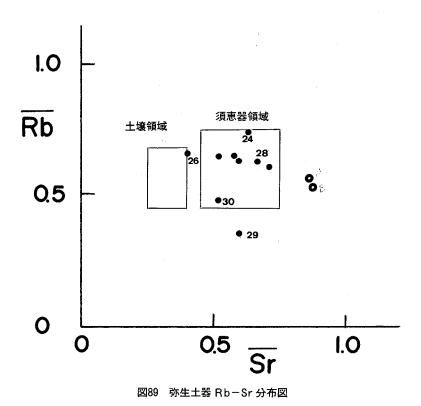
			K	Са	Fe	Rb	Sr	Na
S X 7 4 2	No. 1	須恵器	0.497	0.209	2.94	0.601	0.490	0.262
SC936	2	"	0.631	1.255	2.84	0.674	0.548	0.390
S X 6 1 4	3	"	0.415	0.239	2.51	0.504	0.680	0.293
S X 8 8 3	4	"	0.583	0.356	2.22	0.724	0.840	0.527
S X 8 8 3	5	"	0.434	0.215	2.69	0.505	0.612	0.239
表採 A	6	"	0.638	0.108	1.79	0.675	0.484	0.203
表採 B	7	"	0.592	0.120	1.73	0.637	0.493	0.193
S C 9 3 1	8	"	0.472	0.166	2.61	0.602	0.497	0.192
SC944	9	"	0.588	0.220	3.12	0.664	0.482	0.341
	10	"	0649	0.112	1.12	0.851	0.478	0.355
	11	"	0.453	0.165	3.28	0.544	0.428	0.214
	12	"	0.580	0.132	2.17	0.628	0.549	0.174
SC246-1下	13	土師器	0.661	0.058	1.30	0.788	0.425	0.155
SC246ベルト西	14	"	0.568	0.281	1.89	0.591	0.843	0.362
SC246-3-2	15	"	0.542	0.222	2.75	0.594	0.604	0.313
SC246-3-2	16	"	0.507	0.403	3.30	0.500	0.907	0.358
SC246-1 床下	17	"	0.554	03133	1.35	0.964	0.574	0.198
SC246-3-2	18	"	0.660	0.154	1.05	0.686	0.748	0.222
SC246ベルト西	19	"	0.560	0.138	1.96	0.646	0.478	0.198
SC246-3 No.1	20	"	0.555	0.126	1.43	0.605	0.511	0.177
SC246-3 床下	21	"	0.598	0.159	1.51	0.626	0.536	0.226
SC246ブロック3	22	"	0.587	0.159	1.50	0.717	0.554	0.230
SC246 東側	23	弥生土器	0.582	0.209	1.64	0.614	0.711	0.273
SC 6 0 A	24	"	0.635	0.136	1.37	0.740	0.631	0.255
SC 6 0 B	25	土師器	0.534	0.153	1.59	0.631	0.592	0.242
SX614 ベルト内	26	弥生土器	0.562	0.101	2.93	0.662	0.403	0.121
S C 7 4	27	"	0.603	0.125	1.29	0.650	0.583	0.230
SC144 A	28	"	0.738	0.149	1.40	0.634	0.674	0.237
SD16	29	"	0.448	0.208	2.87	0.352	0.602	0.255
SC144 B	30	"	0.578	0.126	1.60	0.476	0.517	0.185
SC708	31	"	0.619	0.079	0.960	0.646	0.523	0.172

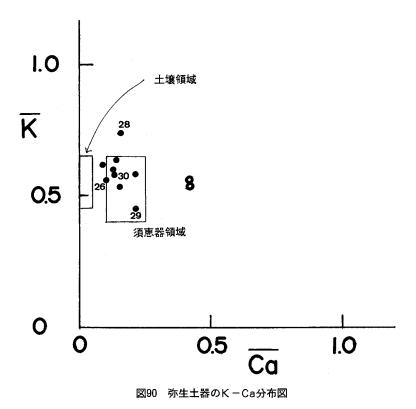


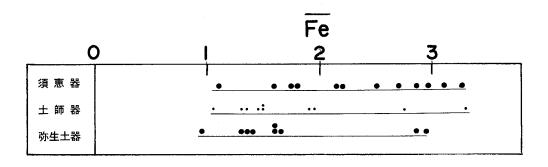












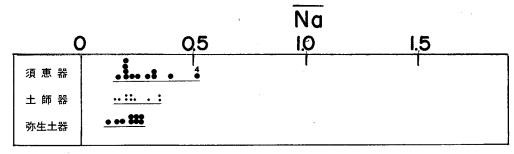


図91 Fe 因子 Na 因子の比較

付論10 飯倉D遺跡における 考古地磁気年代推定

株式会社 夏 原 技 研

福岡市城南区飯倉D遺跡で発掘調査された遺構の焼土から、考古地磁気年代推定用の試料を、平成6年4月2日、8日に採取した。その熱残留磁気測定結果および年代推定の結果について報告する。

[1] 考古地磁気年代推定の原理

磁石は北を指す。地磁気(地球磁場)が存在するためである。地磁気はベクトル量で、ある地点における地磁気を記述するには、方向(偏角と伏角)と大きさ(全磁力)が必要である。一般に、磁気コンパスが北として示す方向(磁北)は、真北(地図の経線方向)からずれている。この磁北と真北の間の角度が偏角である。磁針をその重心で支え、磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面の下になるように傾く。この傾斜角が伏角である。福岡市の現在の偏角は約6.2°Wで、伏角は約47°である。また、全磁力は、約0.40ェルステッドである。これら地磁気の三要素(偏角・伏角・全磁力)は観測する地点によって異なる値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いたときにできる磁場分布に近似される。この棒磁石の軸方向は、自転軸から約11.5度傾いている。この磁軸と地表との交点が地磁気北(南)極である。

地磁気は絶えず変動し、時代と共にその地磁気北極の位置を変える。従って、 ある地点で観測される偏角・伏角の値も時代と共に変化する。方向だけではなく、 大きさ(全磁力)も変化する。この変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

歴史時代の地磁気永年変化は、岩石や焼土の残留磁化の測定を基礎とする考古 地磁気測定によって明らかにすることができる。どんな物質でも、ある(強)磁 場中に置かれると磁気を帯び、そして磁場が取り除かれると、普通の物質からは 磁気が消える。しかし、強磁性物質(磁石になれる物質)では、外部磁場が消え ても磁気が残る。これが残留磁気である。残留磁気の強さや安定性は、磁場中に 置かれた時の状態によって異なる。残留磁気はその獲得方法の違いによっていろ いろな名前で呼ばれる。考古地磁気学で地磁気の化石として最もよく利用するの は、熱残留磁気である。岩石には小量の強磁性粒子(赤鉄鉱や磁鉄鉱などの鉄の 酸化物)が含まれている。火成岩では、高温のマグマの状態から冷えて岩石にな る過程で、強磁性粒子がその時の地磁気によって磁気を帯び、冷えてからはその 残留磁気を保持し続ける。これが熱残留磁気である。土も焼かれると、冷却の過 程で同様の熱残留磁気を獲得する。熱残留磁気の性質を簡単にまとめると、次の ようになる。岩石の誕生時または土が焼かれた時の地磁気方向を記録していて、その大きさは地磁気の大きさに比例し、何億年もの長い期間でも変質しないということになる。これらの性質によって、地磁気の化石として利用が可能なのである。広岡(1977)によって遺跡の焼土の熱残留磁気測定から得られた、過去2000年間の西南日本での、偏角-伏角の変化を図91に示す。偏角は 20° Wから 15° E,伏角は 35° から 60° の間で変化している。

年代がよく分かっている遺跡の焼土や火山岩などの熱残留磁気測定から、図92のような地磁気永年変化の標準曲線が得られると、逆に、年代の確かでない遺跡の焼土の残留磁気を測定し、永年変化曲線と比較することで、その年代の推定を行うことができる。これが考古地磁気による年代推定である。この方法は、「C法やフィッション・トラック法のように、それだけで独立して年代が決定できるものではない。偏角と伏角の値から年代が独立に一つだけ決定されるということはないのである。普通、偏角と伏角の組合せで永年変化曲線から二つか三つの年代が出てくる。そのうちの何れを取るかは、考古学的推定に頼ることになる。

「Ⅱ〕試料の採取と測定

A. 試料の採取と整形

各遺構の焼土からの熱残留磁気測定用試料を、次の様な手順で採取した。

- ①一辺数cmの立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーを用いて、試料のまわりに溝を掘る。
- ②薄く溶いた石膏を、試料全体にかけ試料表面を補強する。
- ③やや堅め(練りハミガキ程度)の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5cmの 正方形のアルミ板を押しつけ、石膏が固まるまで放置する。
- ④石膏が固まった後、アルミ板をはずし、その平面の最大傾斜の方位と傾斜角を磁気コンパス(考古地磁気用に改良したクリノメータ)で測定し、方位を記録すると同時に、試料上面に方位を示すマークと試料番号を記入する。
- ⑤試料を掘り起こした後、試料の底面にも石膏をつけて補強し、研究室に持帰る。 ⑥持帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて、冷却水をかけながら一辺 3.5cmの立方体に切断する。切断面が崩れないように、一面ごとに石膏で補強し、 しっかりした試料をつくる。

B. 熱残留磁気測定とデータ整理

試料の熱残留磁気の測定には、リング・コア型スピナー磁力計(SMM-85)を使用した。

測定結果として得られるデータは、試料に設定した座標に対するものなので、 試料を遺構のもとの位置に戻した時の真北を基準方向とする座標に対するものに 変換しなければならない。そのためには、試料が残留磁気を獲得した時の位置 (地理的緯度,経度)、および方位(試料の一つの基準面の走向,傾斜)が必要で ある。位置については、2万5千分の1程度の縮尺の地形図から、その遺構の緯度, 経度を読み取ればいい。方位は、上の④の作業で磁気コンパスを使って測定して いる。磁気コンパスの方位は、磁北に対するものなので、真北に対する方位に直 すために、試料採取地点の現在の偏角分を補正する必要がある。現在の地磁気偏 角は、国土地理院の偏角分布の実験式から求めることができる。

測定にはいろいろな要因での誤差がつきものであるため、一つの遺構から8~10個程度の試料を採取している。これらの試料の個々の測定で得られた偏角(Di)、伏角(Ii)から平均値(Dm, Im)を求める。ここで用いる統計学的方法はFisherによって確立されたものである。各試料の測定値を、方向(Di, Ii)の単位ベクトルとして取り扱う。

まず、n組の(Di, Ii)より

 $N = \Sigma \cos Ii \cdot \cos Di$ (北向きの成分)

 $E = \Sigma \cos Ii \cdot \sin Di$ (東向きの成分)

 $Z = \Sigma \sin Ii$ (鉛直の成分)を求めると、

合ベクトルの大きさR, およびDm, Imは、

 $R = (Z^2 + N^2 + E^2)^{1/2}$

 $Dm = tan^{-1}E/N$

 $Im = sin^{-1}Z/R$ で与えられる。

このとき、信頼度係数kは、

k = (n-1) / (n-R) となる。kが大きいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では100以上の値になる。

誤差角α %は、危険率5%として

 $\alpha_{95} = \cos^{-1} [1-(n-R) \{(20)^{2/(n-1)}-1\} / R]$ で与えられる。 α_{95} が小さいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数度以内になる。

これよりDm, Imのそれぞれの誤差の幅として、

 $\delta D = \alpha_{95} / COS I m (偏角誤差)$

 $\delta I = \alpha_{95}$ (伏角誤差)

が求められる。

以上のようにして得られた計算結果を、一つの遺構を代表する考古地磁気データとしている。

なお、考古地磁気年代推定の原理や測定方法については、中島・夏原(1981) に詳しく解説されている。

「Ⅲ〕熱残留磁気測定結果

発掘調査された10遺構の焼土から計90個の考古地磁気用の定方位試料を採取した。試料の運搬や整形時に2個破損したため、88個の試料について、その熱残留磁気を測定した。熱残留磁気測定結果を表11、表12、図93にまとめた。試料の方位を磁気コンパスで測定しているため、残留磁化測定で得られる偏角は、磁北に対する角度である。これを真北に対する角度に補正するには、試料採集地点の現在の地磁気偏角を知ることが必要である。今回は、国土地理院の1990年の磁気偏

角図から読取った6.2°Wを使用した。表11と表12偏角は、補正後の値である。

表11は、個々の試料の熱残留磁気測定結果(偏角: Di, 伏角: Ii, 磁化強度)を示した。表12に、各遺構についての、磁気方向の平均値(平均偏角: Dm, 平均伏角: Im), 統計値(誤差角: α₉₅と信頼度係数: k) および平均磁気強度を示した。同じ遺構の他の試料と比べて、方向が大きく異なる試料のデータは、平均磁化方向(Dm, Im)の計算には含めていない。表12の試料数nは平均磁化方向を計算した試料数で、括弧内の数字は全測定試料数である。

残留磁化強度は、 $10^{-2} \sim 10^{-4}$ emu程度であり、遺構の焼土の試料としては、標準的な試料であった。

通常我々は、誤差角 α ₅が3度以上の場合には信頼性に欠けるため年代推定を行わないことにしている。今回は信頼性が低いが可能なかぎり推定を試みた。 ①SC931, ②SC246, ⑤SC74- Π の3遺構については、誤差角 α ₅が10度以上と大きいため推定は行わなかった。これらの試料はあまり焼けていない部分、或いは発掘調査の時に床面からはずれてしまった部分から採集したものと考えられる。

残りの7遺構の測定結果と広岡(1977)の永年変化曲線とを比較してみた。図94 は永年変化曲線に測定結果(Dm, Im)をプロットしたものである。点線は西 南日本の永年変化曲線で、□印とそれを結ぶ実線は大野城市牛頸ハセムシ窯跡群 で中島他(1981)により得られた7 C末から8 C後期の変化曲線である。

黒丸は測定結果の平均磁化方向を示し、それを囲む実線の楕円が誤差角 α ₈₅の範囲である。この中あるいは、これに一番近い永年変化曲線の部分が考古地磁気学的に推定される年代である。⑥SC74-Iと⑧SX460の測定結果は広岡曲線と非常によく一致しており、牛頸の結果とを考慮して

- ⑥ SC74-I 600±30年
- 8 SX460 620±20年 となる。

他の測定結果の信頼度は低いがその他の遺構の推定時期は

- ③ SX274 700 ± 50 年
- ④ SX71 2~5世紀または13~14世紀
- ⑦ SX427 7世紀頃
- ⑩ SC144 180±100年または1200±100年となる。
- ⑨ SX423は伏角が深く曲線から外れるため推定は行わなかった。この伏角が深くなった原因は現在のところ不明である。表13に推定年代をまとめた。

ここにでている推定年代の±の年代幅は、推定年代がこの幅の中に必ず入ることを意味しているのではなく、この年代幅の中ならどの年代をとってもおかしくない範囲を示しており、これをこえる可能性も充分あることを意味していることに注意していただきたい。

引用文献

- 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向. 第四紀研究, 15, 200-203.
- 中島正志・夏原信義(1981)考古地磁気年代推定法. ニュー・サイエンス社, 95p. Shibuya, H. (1980) Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文, 54p.
- 中島正志・長谷川千恵・三田村憲一・夏原信義(1988) 牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定,大谷女子大学資料館報告書,第 18冊(牛頸),75-81
- 中島正志・谷崎有里・林 昌代・夏原信義(1989) 牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定-その2,大谷女子大学資料館報 告書,第23冊(牛頸II),126-136

表11-1 熱残留磁気測定結果

① SC931

<u> </u>	1		
番号	偏角	伏 角	磁化強度
No.	(° E)	(°)	×10 ⁻⁴
FI-1	-54.1	65.6	6.33
FI-2	-17.8	52.5	6.86
FI-3	-29.0	57.3	11.0
FI-4	-5.2	49.0	13.1
FI-5	-20.7	40.5	21.3
FI-6	161.5	77.9	6.50
FI-7	-5.3	64.7	4.07
FI-8	-76.3	46.8	8.70
FI-9	-27.2	79.9	11.5

4 SX71

9	~ ~			
	番 号	偏角	伏 角	磁化強度
	No.	(° E)	(°)	×10 ⁻³
	-			
	FI-31	-28.0	50.8	3.14
1	FI-32	-18.8	55.1	3.93
	FI-33	-16.0	46.1	5.16
	FI-34	5.7	55.8	2.74
	FI-35	10.2	50.6	10.5
	FI-36	17.1	53.2	13.4
	FI-37	11.9	55.5	5.94
	FI-38	19.9	55.5	1.82
	FI-39	48.9	51.2	3.42
	FI-40	24.5	31.9	1.38
	FI-40A	32.6	45.9	1.40
Ł			<u> </u>	

②SC246

<u>23040</u>			
番号	偏 角	伏 角	磁化強度
No.	(° E)	(°)	×10 ⁻³
FI-11	21.3	72.0	1.38
FI-12	-3.8	55.1	3.61
FI-13	-19.2	57.9	2.09
FI-14	12.1	35.6	4.63
FI-15	-7.6	20.6	10.0
FI-16	3.2	54.4	1.97
FI-17	3.8	58.2	7.37

⑤ SC74-II

番号	偏角	伏 角	磁化強度
No.	(° E)	(°)	×10 ⁻³
FI-41	-16.3	72.9	2.60
FI-42	-17.7	63.4	4.23
FI-43	-29.8	63.4	1.53
FI-44	-62.2	31.2	1.28
FI-45	-28.3	47.9	2.63
FI-46	-4.5	56.9	2.87
FI-47	-27.2	73.3	1.62

③ SX274

<u> </u>	4		
番号	偏 角	伏 角	磁化強度
No.	(° E)	(°)	×10 ⁻⁴
FI-21	-7.4	53.1	59.2
FI-22	-1.6	53.9	13.7
FI-23	-2.4	54.7	20.1
FI-24	67.6	61.7	1.41
FI-25	-4.1	63.3	2.90
FI-26	10.0	64.0	3.10
FI-28	-14.2	64.2	2.93
FI-29	-19.7	60.7	11.0
FI-30	-18.4	67.5	16.3

⑥ SC74-I

=				
	番号	偏角	伏 角	磁化強度
	No.	(° E)	(°)	×10 ⁻²
	FI-51	-25.8	54.1	0.86
	FI-52	-26.3	63.1	0.33
	FI-53	-10.2	54.9	1.95
FI-54		-18.8	54.2	2.12
	FI-55	-9.8	56.8	1.67
	FI-56	-15.4	51.9	2.78
	FI-57	-16.9	53.7	2.54
	FI-58	-16.9	58.0	0.91
	FI-59	-18.6	55.0	2.19
	FI-60	-19.0	51.8	2.23
	FI-60A	-20.9	54.9	2.56

表11-2 熱残留磁気測定結果

⑦SX427

U	$J \supset \Lambda + L I$			
	番号	偏角	伏 角	磁化強度
	No.	(° E)	(°)	$\times 10^{-3}$
	FI-61	-27.8	62.2	5.49
	FI-62	-25.4	61.0	4.35
	FI-63	-22.0	73.1	0.18
	FI-64	-34.2	64.6	3.64
	FI-66	-15.3	58.3	0.82
	FI-67	-20.0	55.8	2.68

10 S C 1 4 4

_	90011						
	番号	偏角	伏 角	磁化強度			
	No.	(° E)	(°)	$\times 10^{-3}$			
	FI-91	44.1	61.7	1.18			
	FI-92	-117.8	34.8	0.49			
	FI-93	36.2	84.3	0.56			
	FI-94	-3.9	60.6	1.06			
	FI-95	13.5	49.7	1.46			
	FI-96	10.5	46.1	1.33			
	FI-97	-15.0	57.5	1.83			
	FI-98	21.7	59.1	1.07			
	FI-99	7.7	60.5	1.40			
	FI-100	8.3	57.2	2.29			

8 S X 4 6 0

93 X 4 0 0						
番号偏角		伏 角	磁化強度			
No.	(° E)	(°)	$\times 10^{-3}$			
FI-71	-12.8	55.5	2.82			
FI-72	-16.8	58.8	3.53			
FI-73	-12.0	57.2	4.46			
FI-74	-18.5	59.2	4.24			
FI-75	-13.8	54.7	4.65			
FI-76	-12.2	53.2	4.86			
FI-77	-14.4	57.9	9.79			
FI-78	-21.0	54.2	7.71			
FI-79	-29.2	60.3	4.79			
FI-80	-16.0	61.4	3.46			

9 S X 4 2 3

番号	偏 角	伏 角	磁化強度
No.	(° E)	(°)	×10 ⁻³
FI-81	76.2	59.9	0.84
FI-82	43.5	70.7	1.07
FI-83	-3.7	64.3	2.92
FI-84	-1.8	61.4	6.92
FI-85	7.0	64.3	4.40
FI-86	-8.6	66.5	3.43
FI-87	5.9	62.7	1.69
FI-88	4.4	79.4	1.28
	1		

表12 考古地磁気測定結果

	遺構名	試料数	D	m I	m α ₉₅	k	平均磁化強度
		n	(°	E) (°	(°)		$\times 10^{-3} \mathrm{emu}$
1	SC931	9	-29.7	63.9	13.3	13.3	0.99
2	SC246	7	0.2	51.2	14.1	19.4	4.44
3,	SX274	8 (9)	-6.8	60.5	5.0	125.2	1.45
4	SX71	10(11)	6.8	51.7	9.0	29.8	4.81
⑤	SC74-II	7	-30.3	60.0	14.0	19.7	2.39
6	SC74- I	11	-17.9	55.4	2.4	355.0	18.3
7	SX427	6	-23.8	62.6	5.6	143.8	2.86
8	SX460	10	-16.5	57.3	2.3	426.2	5.03
9	SX423	6 (8)	0.3	66.5	5.8	133.1	2.26
10	SC144	7 (10)	6.6	56.3	6.5	87.6	1.27

表13 考古地磁気年代推定結果

			ST. O THE MANUAL PROPERTY.
遺構名		遺構名	考古地磁気推定年代(A. D.)
	① SC931		推定不能 (α ωが大きく、曲線より外れる)
	2	SC246	推定不能(αωが大き過ぎる)
	3	SX274	700±50年
	4	SX71	2~5世紀または13~14世紀
	⑤	SC74- ∏	推定不能 (α ωが大き過ぎる)
	6	SC74- I	600±30年
	1	SX427	7世紀頃
	8	SX460	6 2 0 ± 2 0 年
	9	SX423	推定不能(伏角が深く、曲線より外れる)
	10	SC144	180±100年または1200±100年

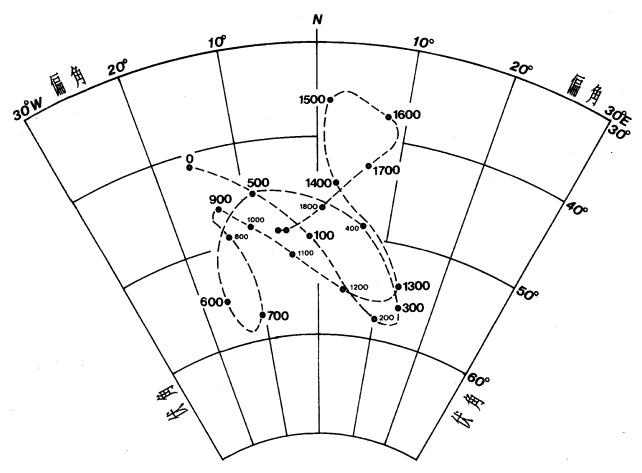


図92 広岡(1977)により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の地磁気永年変化曲線。

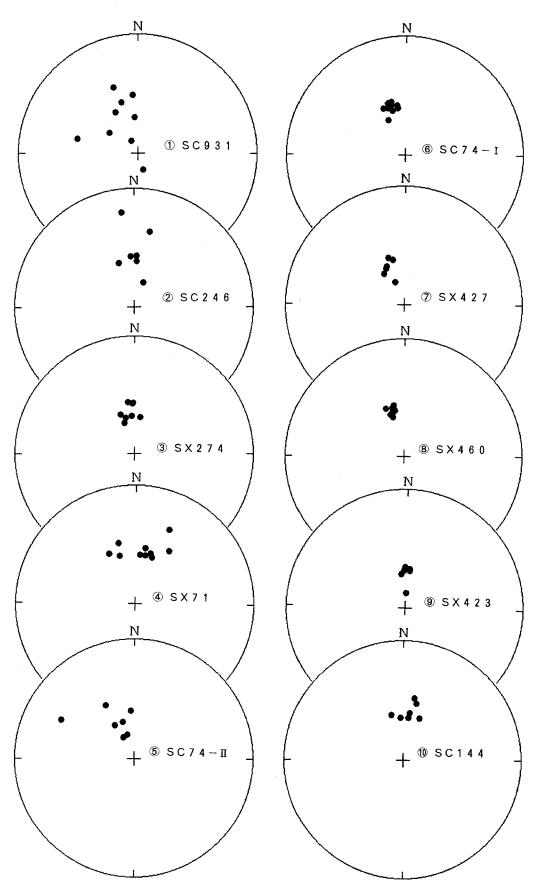


図93 各遺構ごとの各試料の残留磁化方向の等面積投影図。

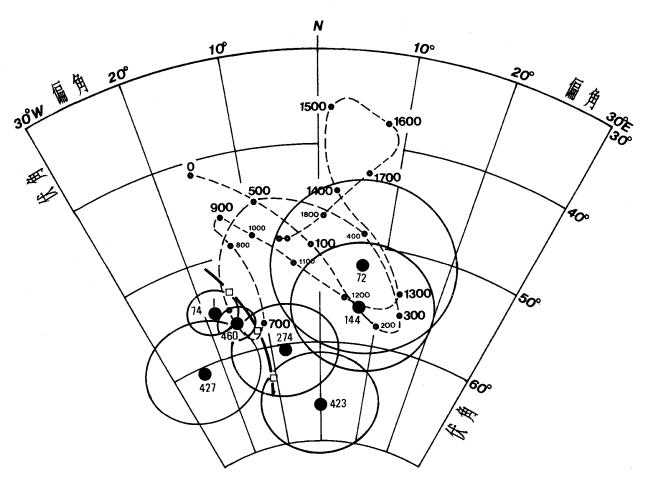


図94 地磁気永年変化曲線と各遺構の平均磁化方向(黒丸)。楕円は誤差角の範囲を示す。

付論11 飯倉D遺跡出土の銅鏡鋳型をめぐって

西南学院大学文学部 高 倉 洋 彰

春日市須玖遺跡群における小銅鏡の生産 弥生時代小形仿製鏡の鋳型はこれまでに3例が知られており、今回の飯倉D遺跡の鋳型は4例目になる。4例の銅鏡鋳型はいずれも内行花文(連弧文)を鏡背文様の主題としているところに共通性をもつが、しかし形式的にはそれぞれ異なる。ことに春日市出土例とそれ以外では内容がおおいに異なっている。そこでまず春日市出土の2例をみておこう。

①春日市須玖坂本鋳型 石英一長石斑岩を素材とする鋳型で完形の例だが、後に砥石として再利用されたため、内区の文様が朦朧となっているのが惜しい。それでもわずかな手掛かりから鏡背文様がうかがえる。鋳型には面径7.5㎝ほどに復原できる銅鏡が彫り込まれ、約1㎝と幅広の平縁、8弧に復原できる半円形浮彫状の内行花文帯、そして鈕からなることがわかる。内行花文帯と鈕の間には間があり、なんらかの図文を配する余裕があるが、幅広縁の例には図文は認められない。鈕には鈕の中子を置くための彫り込みが見られる。このような特徴は、坂本鋳型から筆者の分類する内行花文日光鏡系仿製鏡第Ⅱ型 a 類鏡が鋳出されたことを物語る。こうした幅広の平縁と8弧をもつ実例は春日市須玖岡本鏡(面径7.8㎝)、筑紫野市八隈鏡(面径7.6㎝)などがある。

坂本遺跡では周囲に溝をめぐらす掘立柱建物が並ぶように数棟配されていた。 各種の青銅器鋳型は溝の中から集中的に検出されており、これらの建物はおそら く工房であろう。

②春日市永田鋳型 坂本遺跡よりもやや遅れる弥生時代後期後半~末の春日市 須玖永田遺跡からは、内行花文日光鏡系仿製鏡第II型り類の鋳型が出土している。 永田遺跡でも溝をめぐらした掘立柱建物が1棟検出されていて、鏡鋳型を含む青 銅器生産関係の遺物はこの周囲に集中しているから、おそらくこれが青銅器鋳造 のための工房であろう。

鏡鋳型は同一個体と判断できる2片からなり、鏡背文様の一部を残すにすぎないが、この手の鏡としては幅の狭い平縁の内側に、櫛歯文帯および双線で表現され6弧からなる内行花文帯をうかがえる。約8㎝の面径と文様の特徴から、竹田市小園遺跡出土鏡をイメージできる。

内行花文日光鏡系仿製鏡第 II 型は北部九州でもっとも多く製作される種類の鏡である。その a ・ b 類の鋳型が、後期における青銅器生産の中枢である須玖遺跡群から出土したことは、仿製鏡生産の中心もまた須玖にあることを示唆している。 ヒルハタ遺跡および飯倉 D遺跡における小銅鏡の生産 権威を象徴する遺物の例に中広銅矛があるが、これは厳しく生産が管理されていて、中広段階ではほぼ福岡平野(須玖岡本遺跡)がその生産を掌握しており、広形銅矛の段階になって他の平野でも鋳造が開始される。銅鏡は銅矛以上に権威を象徴するからその生産は

須玖岡本遺跡が掌握していると考えていた。この視点からすれば、須玖遺跡とは 平野を異にする朝倉郡ヒルハタ遺跡と、今回の福岡市飯倉D遺跡からの鏡鋳型の 出土は予想外のことであった。そこで両例を検討しておこう。

③福岡県朝倉郡夜須町ヒルハタ鋳型 きわめて残りの良い鋳型で、6面のうち 5 面に各種銅器の型が彫り込まれている。銅鏡は面径9.3cmのもので、幅広の平 縁から内側に櫛歯文帯、図文帯、内行花文帯、鈕の順に配された鏡背文様も完全 に残っている。これは筆者が内行花文日光鏡系仿製鏡第II'型としているもので、通例の第II'型とは全体の印象は良く似ているものの、図文帯と内行花文帯が逆 転し先祖返りしている点で大きく異なる。製品の実例に佐賀県神埼郡二塚山出土 の二塚山 I 鏡がある。両者は製品の二塚山 I 鏡のほうがやや大きく、鋳型と製品 の関係にはならないが、文様の酷似からみて二塚山 I 鏡はヒルハタ工房の作例であろう。

④福岡市城南区飯倉D鋳型湯口部を含む4分の1ほどの破片が残されているが、内行花文日光鏡系仿製鏡第Ⅱ型 a 類の特徴をよく伝えている。7.2㎝ほどの面径に復原できる銅鏡で、幅広の平縁、これもまた幅広の目の粗い櫛歯文帯、6 弧に復原できる内行花文帯、鈕からなる。そして本鏡の最大の特徴は内行花文の連接部に見える小さな珠文と、幅広く印象深く配される櫛歯文である。こうした鏡背文様は、全体のイメージでたとえば佐賀県佐賀郡大和町惣座遺跡の弥生時代後期後半~末の包含層から出土した惣座Ⅵ鏡、珠文配置では朦朧とした内区に4 弧と思われる内行花文の連接部に珠文を置く長崎県壱岐郡勝本町若島鏡にあるが、しかし適切な類例を欠いている。すなわち本鋳型のもつ条件を満たす製品はこれまで出土していないのである。この既知の仿製鏡に見られない特徴はむしろ古墳時代の仿製内行花文鏡を思わせるものがある。

このように、ヒルハタ遺跡および飯倉D遺跡から出土した鋳型で製作されたであろう銅鏡は類例の稀少な鏡背文様の例である。

北部九州の鏡生産 北部九州では紹介した4種類の内行花文日光鏡系仿製鏡の鋳型が出土している。このうち須玖遺跡群出土の2例は同様の鏡背文様をもつ製品の例が少なからず出土していて、須玖遺跡群のもつ弥生時代における青銅器生産センター的性格が銅鏡においてもいえることを実証している。他の2例、朝倉平野に面するヒルハタ遺跡や早良平野を控える飯倉D遺跡はいずれも青銅器生産に積極的にかかわってきた地域ではないだけに判断に苦しむところがある。両遺跡は平野を異にするとはいえ須玖遺跡から10~20㎞しか離れておらず、須玖の影響下での製作を考えておきたいが、鏡背文様の相違の大きさが気になる。

それにしても飯倉D遺跡の鏡鋳型は注目すべき特徴を備えている。それはこれまで知られていた北部九州の内行花文日光鏡系仿製鏡第 II型 b 類は第 III型はもとより、古墳時代の仿製内行花文鏡と鏡背文様の特徴が隔絶していたが、この鋳型の出現によって北部九州においても第 II型からスムースに古墳時代内行花文鏡を導きだし得るようになったことである。この点が本鋳型のもつ最大の特徴といえ、今後の類鏡の出土が望まれる。